

# 今泉遺跡

1. 遺跡名 今泉遺跡(略号1175)
2. 所在地 岩手県水沢市佐野
3. 調査主体 岩手県教育委員会・日本道路公団
4. 調査担当 岩手県教育委員会
5. 調査期間 昭和50年6月9日～9月12日
6. 調査対象面積 約1935㎡
7. 発掘調査面積 約1809㎡

第1圖 今泉遺跡地形図 1:1000



## I 遺跡の立地と層序

### (1) 遺跡の立地

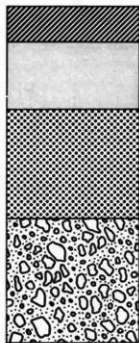
本遺跡は水沢市の北端、水沢市佐野に所在する。水沢段丘の北縁に位置し、胆沢川を眼下に見下す段丘崖上の平坦面に形成されている。尚、胆沢川は東流して北上川に注ぐ。海拔約54～55mで、現河床との比高は約4～5mとなっている。

段丘崖は、胆沢川そのものの水力によりかなり侵蝕されている。また、水沢段丘の北縁は、大勢としては胆沢川の流れに沿って北東方向に張り出す形となるが、本遺跡周辺では開田事業などでかなり原地形とは異なっている様子である。

土地利用の現状は畑地であるが、土地の人によれば、かつては宅地・墓地があり、また遺跡の南半は水田であったとのことである。

### (2) 遺跡の層序

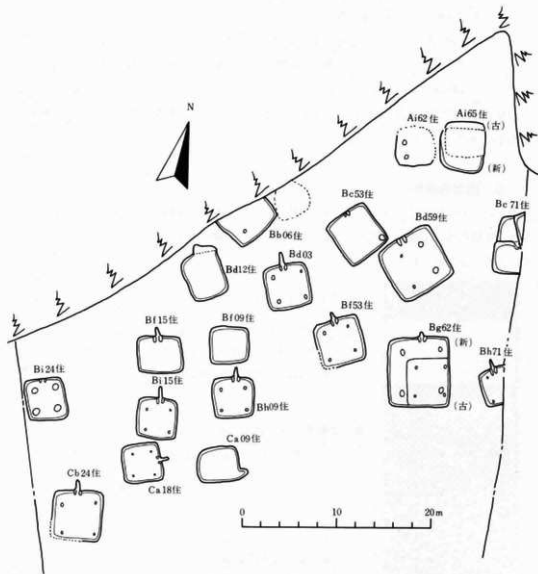
表土から基盤の礫層に至るまで4層に大別される。表土下のII層とした上面が遺構検出面であり、遺構の多くはIII層上面にまで達している。段丘崖縁の遺構は、水力の侵蝕によりその大半を失っている例もある。



- I. 茶色のシルト質土。耕作土。12～14cm。
- II. 暗褐色シルト質土。表面は茶がかかる。湿気のある場合にはやや粘性・縮まりあり。乾燥時にはクラックが入る。北側で25cm。南側で60～80cm。遺構検出面。
- III. 黄褐色シルト質土。粘性弱で乾燥するとサラサラしている。南側で1.4～1.5mの厚さ。
- IV. 基盤の段丘礫層。砂粒中に人頭大の礫が存在。最底でも3m以上はある。

第2図 今泉遺跡・層序概念図

第3図 遺構配置図

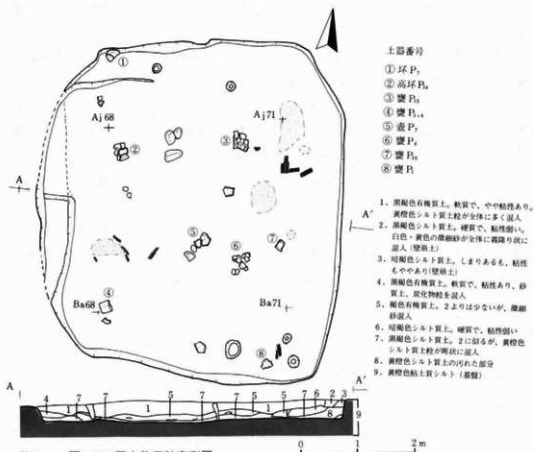




以下については、概念図を示して土性を註記する。

## II 発見された遺構と遺物

### Ai65 竪穴住居跡 (第4図・第1表)



第4-1図 Ai65竪穴住居跡実測図

遺跡の西北隅の現在の段丘崖直下に位置。耕作土直下の暗褐色シルト質土層上面(本遺跡の遺構検出面はすべてこれと同一であるので、以下の説明では、それには特に触れないこととする)に検出。

西方に隣接するAi62住居跡と一部重複し、またAi65(以下には住居跡は省略する)自体に於いても、新・旧の重複が見られる。図中の竪穴住居床面上に、北辺・西辺が一部2本見られるのがそれであり、新期のものは旧のものよりやや南方と、南へずれた位置で重複している。

重複関係その他の理由で平面形は判然とはしないが、前述の一部残存の壁からすると、少な

くとも新期のものは一辺4.5m (推定)・床面積20.25㎡ (推定)程の正方形となるようである。住居中軸線 (推定される北壁と南壁の midpoint を結んだ線) の方向は、ほぼ磁北に一致する。

遺構内に堆積している層は、大別して三層になる。

第1層 黒褐色有機質土層。軟質でやや粘性がある。壁際に一部壁の崩土と思われるブロックがある。

第2層 褐色有機質土層。締まりがあってやや硬質。粘性は弱い。新期の住居跡内にもみ分布する。

第3層 黒褐色シルト質土層。締まりがあってやや硬質。粘性は弱い。この層の上面がある時期の生活面と思われ、土器片他に同一のレベルに分布する。

床面は比較的平坦面が多い。床面上 (ある時期の生活面) に5箇所の焼土塊と炭化材7個がみられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、ほぼ24cm前後 (遺構検出面まで。以下壁高については同じである) の壁高となる。他に5箇所 (うち1個は旧のもの) の浅いピットがある。

それらの各ピットはいずれも浅く、位置も不整で、柱穴と認めるべき積極的な根拠を示すものはない。

カマドと明確に認め得るものは存在しない。新期住居跡の北東隅一帯と、南東隅の一部に焼土の分布がみられたが、何れも7層の上ののり床面は焼けておらず、カマド・炉とは認め難い。

その他周溝・貯蔵穴など特記すべき施設は存在しない。

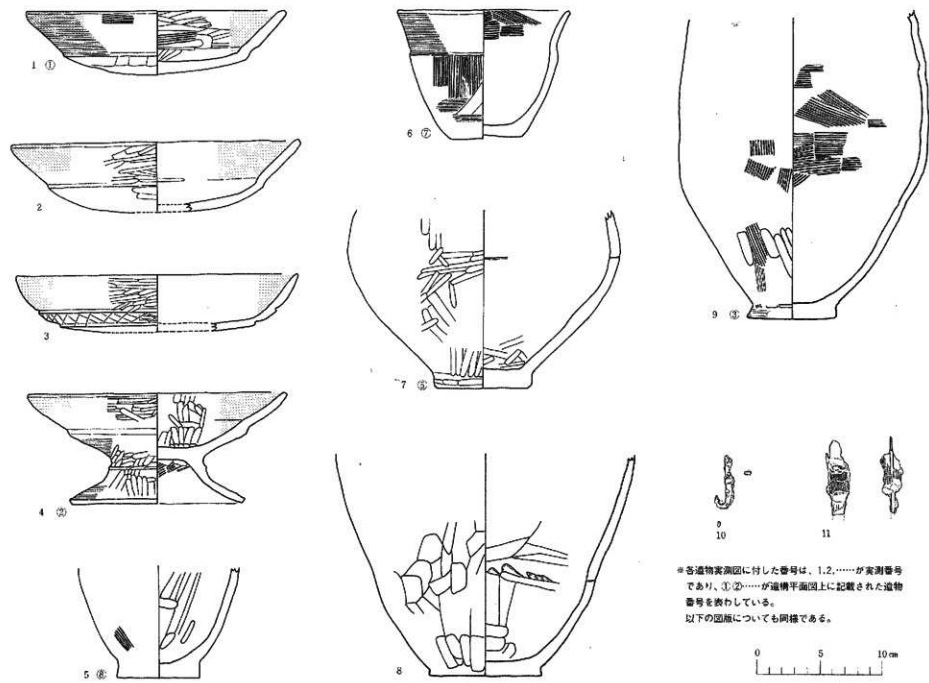
年代決定に資するものとしては、新・旧の床面上出土の土師器類が挙げられる。

## (遺 物)

### I 土 師 器 (第4-2図 1~9)

第1表

分類	土器番号上の 実測図番号	調 整								器 高	口 径	底 径	備 考			
		口 縁 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部								
		内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面							
甕	①	6	刷毛目	横ナテ	刷毛目のち とガキ	刷毛目	刷毛目のち とガキ	刷毛目 部分ナテ	十	テ	ヘラズリ	10.2	13.8	5.8		
		8	欠 欠	欠 欠	欠 欠	欠 欠	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ				9.0	
	②	5	欠 欠	欠 欠	欠 欠	欠 欠	ヘラミガキ	刷毛目	ヘラミガキ	ヘラズリ(?)					6.7	
	③	9	欠 欠	欠 欠	欠 欠	欠 欠	刷毛目	刷毛目のち とガキ	刷毛目	ミガキ(?)					7.0	
壺	④	7	欠 欠	欠 欠	欠 欠	欠 欠	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ					7.8	
坏		3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキの ちとガキ 部分ナテ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.6 ±	22.6	15.6		内黒
	①	1	ヘラミガキ	横ナテ	ヘラミガキ	横ナテ	ヘラミガキ	ヘラズリ	ヘラミガキ	ヘラズリ		5.1	20.3			内黒
		2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.6	23.2			内黒
高坏	②	4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	刷毛目のち とガキ(?)	ヘラミガキ	横ナテ	8	8.8	20.8	14.0		内黒



※各遺物実測図に付した番号は、1, 2, ……が実測番号であり、①, ②……が透視平面図上に記載された遺物番号を替わっている。  
以下の図版についても同様である。

第4-2図 Ai65竪穴住居跡出土遺物実測図

## II 鉄 器

**釣針形** (同10) : 逆刺様の突出部まで備えているので、釣針と断言できるであろう。正確な断面形は錆などのために判然としないが、やや薄手で長方形ないし長楕円形を呈するように見える。上端部を欠失しているので、糸との連結部分の形状は知り得ない。

**刀子形** (同11) : 断面形が楔形をなし、柄と思われる木質も残存しているので、刀子と推定した。比較的良好な残存状態である。柄と接する部分の身の上部に棒状の鉄の部分があるが、何らかの特別な工夫かもしれない。

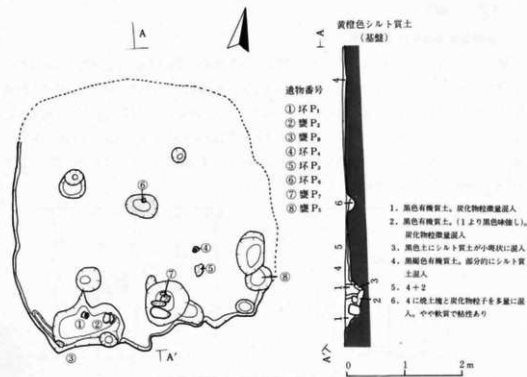
### Ai62竪穴住居跡 (第5図)

前述のAi65の西隣に検出。残存状況が非常に悪く、特に北半にそれが著しい。東端部付近で一部Ai65と重複。その他、増・改築等の事実はみられない。

平面形は特に北・東両辺が不明のため判然とはしないが、残存両辺からすると一辺4 m (推定) 前後、床面積16㎡ (推定) のやや中央部の膨らんだ方形になるものようである。中軸線  
の方向は、磁北からやや西に偏する。

遺構内に堆積した土層は、大略二層からなる。

第1層 黒褐色有機質土層。遺構全体にみられ、本来的な遺構覆土であったと思われる。



第5-1図 Ai62竪穴住居跡実測図

第2層 黒色有機質土層。床面上にうがたれたピットの覆土である。

床面は、南壁沿いの部分に多くピット類がうがたれている他は、比較的平坦部分が多く、北半にそれが著しい。壁高は、南壁の一部では10cm前後、北半部では判然としない程非常に浅い。床面上に大小11個のピットが存在する。

そのうち壁際を離れ中央部に寄っている3個は、平均径40cm、平均深さ（床面から）20cmを測り、柱穴となる可能性がある。南東部にはそれがみられない。尚、西北のものには、掘り方・柱あたりも一応見て取れる。配置は大略対角線上にのるといってよい。

カマドと明らかに見做し得るものはないが、床面ほぼ中央に50×30cm、深さ10cmの楕円形の浅い掘り込みがあり、その中に焼土が充填していたので、あるいはこれが炉として用いられた可能性がある。

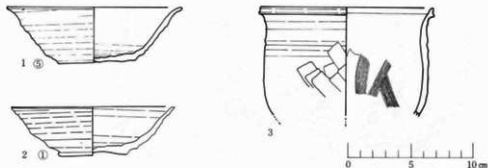
床面上にみられるその他の施設としては、南壁の中央付近に長楕円形ないし長方形の、西南隅付近にはほぼ円形の掘り込みがあり、その中に前者には土器片、後者には土器片と長大な礫が入っていた。これら両者は、一応貯蔵穴的なものと考えておく。尚、東南隅にも円形等の掘り込みがあり、貯蔵穴とも考えられるが、遺物等もないので性格不明としておく。

当遺構の年代推定に資するものは、床面上出土の環と貯蔵穴中出土の甕の各土器類である。

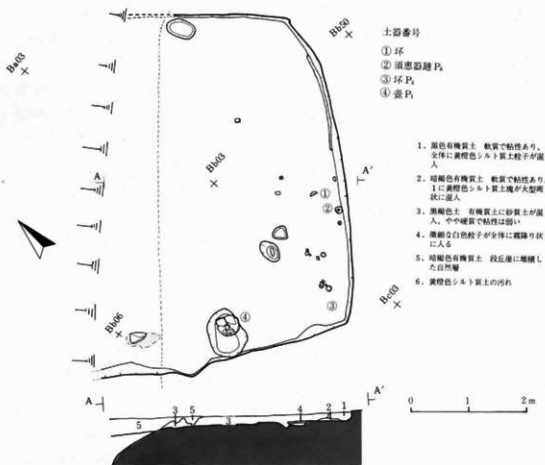
## (遺物)

### I 土器器質のロクロ成形土器

環1・2（第5-2図1・2）：ロクロ成形。回転糸切による切離しで、調整はみられない。両者共に体部は底部からやや外反気味に立ち上がる。器表面には内外共にロクロ成形時の凹凸がみられる。内面には篋ミガキ調整や、黒色処理等はみられない。（尚本土器のように、成形にロクロを使用したことが明らかで、しかも色調が須恵器のそのような所謂「焼べ色」を呈しないものを、いかなる範疇に含めればいいかについては種々議論のあるところなので、ここでは一応標記のような名称を与えておいた。）



第5-2図 Ai62壁穴住居跡出土遺物実測図



第6-1図 Bb06竪穴住居跡実測図

竪 (同3) : 所謂「長胴形」までいかない中型の竪。成形にロクロを使用。体下半部にやや膨らみを持つ。口縁は緩く外反するが、口唇部には直立した窄帯を繞らし、ロクロ成形のものにみられる強く屈曲する口縁を印象づけている。体部上半外面には横走するロクロ成形痕、下半には縦方向の篋削り調整痕がみられる。内面上半は外面に同じ、下半には縦・斜方向の篋ナデ様の調整痕がみられる。

以上は一括遺物と見做されてよいであろう。

#### Bb06竪穴住居跡 (第6図 第2表)

遺跡敷地の北縁中央部に検出した。現在の段丘崖に臨み、その北半は胆沢川の侵蝕のため削

り取られ欠失している。

他の住居跡との重複関係や増改築の事実は認められないが、東南辺の一部はロクロ土師器・須恵器等を若干量出土する焼土を伴うピットに隣接する。

既述の通り侵蝕により北半を欠くので正確な平面形は不明であるが、残存する東・西壁と南壁からすると、一辺5～5.5m(推定) 前後、床面積25～30.25㎡(推定) 程度の、中央にやや膨らみを持つ方形になるように思われる。住居の中軸線の方向は、磁北から約50°西に偏している。

遺構内に堆積した土層は大別して二層からなる。

第1層 黒色有機質土層。軟質で粘性を持つ。藪の根等の作用であろう。

第2層 黒褐色土層。有機質土に砂質土が混じりやや硬い。遺構の主たる覆土である。尚、北端の段丘崖へと落ち込む部分には、草木根による有機質土や、基盤の黄橙色シルト質土の崩れ等の土層がみられる。

床面には一部凹凸もみられるが、おおむね平坦である。凹凸部の一部に黄橙色粘土質シルトを貼った部分もみられるが、全面を貼り床にはしていない。

壁の立ち上がりは急であるが、自然力による削平のためか壁高は深く20cm前後と比較的浅い。床面上には大小4個のピットがある。それらのうち、配置からみて柱穴の可能性のあるものは西南部のものであるが、それとても浅いものであり、積極的には主張し難い。

カマドないし炉と認めてよいものは残っていないが、西壁の中央部付近の床面に焼土が堆積し、その上に礫がのっている。後述の貯蔵穴様のものとの位置関係を考え合わせると、あるいはこれがカマドの痕跡とも考えられるが、袖部などの痕跡は全くみられないため、それも積極的に主張し難い。ここでは侵蝕により削り取られた可能性の方が大きいであろう。

その他西壁直下中央やや南に楕円形の掘り込みがあり、その中に大形の壺型土器が据えられていた。これが所謂「貯蔵穴」の典型的なものであろう。これと正反対の東壁中央部にも楕円形の掘り込みがあるが、これには遺物もなく、貯蔵穴とする積極的証拠に欠ける。

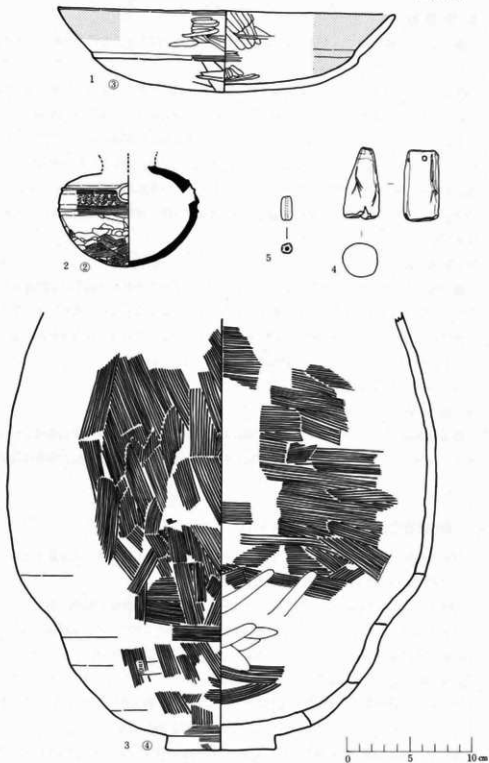
さらに南壁直下東半部に周溝状の凹みが一部みられる。その他特記すべき遺構はない。

遺構の年代推定の資料としては、床面上出土の土師器環、貯蔵穴出土の土師器壺等があり、問題はあがるが床面出土の須恵器壺もそれに加える。

### (遺物)

I 土師器 (第6-2図・1・3) 第2表

分類	土師器番号	平面図上の位置	番実測号	測 量								器 口 底	備 考			
				口 縁 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部						
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面					
壺	④	3		磨毛目	磨毛目	磨毛目	磨毛目	磨毛目	磨毛目	磨毛目	磨毛目	磨毛目	磨毛目	25+*	8.9	
環	③	1		へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	6.5	26.9	内黒口縁
				へらしガキ	へらしガキ							へらしガキ	へらしガキ	6.5	26.9	
				へらしガキ	へらしガキ							へらしガキ	へらしガキ			



第 6 - 2 图 Bb06 竖穴住居跡出土遺物実測図



## II 須恵器

甕(同2)：南壁中央直下の床面上に検出した。頸部を欠くが、それは恐らくあまり高く(長く)なるものではないであろう。

胎土の質・焼成ともに良好で、緻密で硬い。色調は濃い灰色で、典型的な燻べ色。

肩部にはロクロ成形痕が残存し、肩部直下から体部中央までに文様帯が区画される。文様帯の上下限は、その両側を沈線状に凹めることによって強調される隆線状のものによって区切られる。従って上下限ともに、隆線状のもの両側には、工具でなでた痕跡が顕著に残存している。文様帯内部には横走する飾描波状文が施される。また上限の隆線は、そのまま注口部周縁の隆帯へと連続する。体部下半から底部にかけては、篋削り調整が入念に施され、丸底に仕上げられる。

## III 石製品

錘(同4)：適当な名称を知らないのここの呼ぶ。棒秤りのおもり状ないし釣鐘状の形状を有し、上端から下方へ1孔、それと直交する形でもう1孔がうがたれ、逆T字状となり、都合3個の孔口を有する。下底面中央に溝状の刻み目がつけられている。表面は全面入念に研磨され、光沢を有する。記号風の刻み目もあるが、定かではない。

ちなみに重量は51.5gである。

## IV 装飾品

管玉状製品(同5)：土製である。表面は研磨され、土師器内面の黒色処理と同様の漆黒を呈し、光沢がある。縦断面は長楕円形に近い長方形をなす。彩色その他の事実は認められない。

### Bc53竪穴住居跡(第7図・第3表)

遺跡敷地中央やや北寄りに検出。耕作によりかなり削平されており、表土除去後直ちに床面上に位置する遺物の上端が露出した程であった。

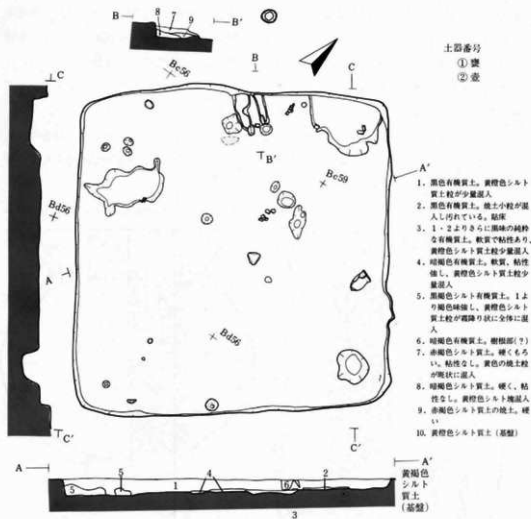
他の遺構との重複関係あるいは増改築の何れも認められない単独の遺構である。

平面形は攪乱を受けずかなりきれいに残存し、端正な正方形をなす。規模は一辺5m、床面積25㎡程度になろう。住居の中軸線の方向は、磁北から48°西に振れる。

遺構内に堆積した土層は大別して二層となる。

第1層 主要覆土である黒色有機質土。ベースはシルト質土であったのだろうが、有機質土化しており、粘性も強い。基盤の黄橙色シルト質土粒が少量混入。

第2層 床面に接する数量からなり、恐らくは貼床的なものであろう。焼土粒混入の黒色有機質土、暗褐色有機質土等があり、何れも粘性が強い。



第7-1図 Bc53竪穴住居跡実測図

床面の状況は、担当者の不注意から遺構東半のそれを3cm程掘り下げ過ぎたので正確は期し難いが、あまり凹凸は無いことだけは確かで、比較的平坦面が広がったといえよう。壁は残存部は良好な状態を示しており、垂直に近く立ち上がり、壁高は前記の通り削平を受けたために浅く14~20cm前後である。床面上には大小13個のビット類がある。

そのうち柱穴と明らかに解し得るものは東南部の1個のみで、痕跡かと思われるものは西北部の1個である。前者は径50cm、深さ30cm程で、柱あたりは判明しなかった。その他のビットには、少なくとも主柱穴と見做し得るものはない。

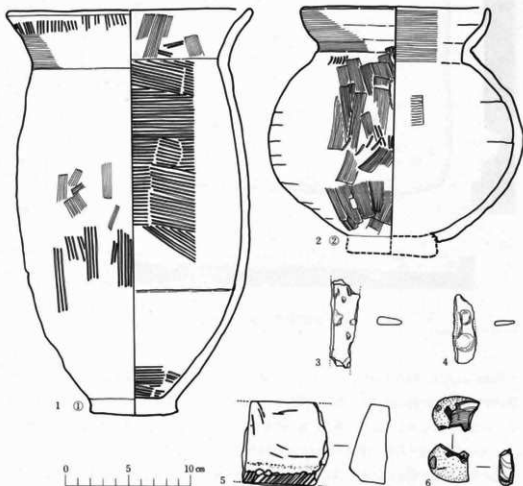
カマドは北壁中央に構築されている。壁に接して黄色粘土質シルトを2列土手状に南へ70cm

程延ばして袖部となし、袖部南端には河原石を門の字状に立てて芯とする。その場合の礎相互の間口35～40cm、深さは25～30cm。火床はやや掘り凹めてあり、そこは全面焼けている。支脚やその機能を果たすべき礎などは火床上にはみられないが、土師器製片が1個存在した。

煙道は入念に調査したが検出できなかったので、これは本遺構のカマドには土中をうがって構築するような煙道はなかったというべきなのであろう。

その他の施設としては、北東隅に不整形で浅い掘り込みがあり、その底面から土師器片を若干量検出した。これだけでは積極的証左とはいえないが、カマドとの位置関係を考慮して、貯蔵的な機能を想定したい。

その他には、床面ほぼ中央部に人頭大の礎がみられるが、その周囲には何らの異常も認めら



第7-2図 Bc53竪穴住居跡出土遺物実測図

れず、性格不明としておく。

周溝はない。

最後に、東壁中央やや南部が外方に張り出しているが、これは本遺構のように少なくとも平面形の残存状況の良好なものに於いては、そこに何らかの意味があるような気がしてならない。

遺構年代推定の手掛りとしては、床面出土の土師器甕と、鉄製品等がある。

## (遺物)

### I 土師器 (第7-2図・1・2) 第3表

分類	土師器番号 上の	実測図番号	器 形								器高	口径	底径	備考
			口縁部		体部上半		体部下半		底 部					
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面				
甕	①	1	刷毛目のみ へうなげ	刷毛目のみ 横ナゲ	刷毛目	刷毛目のみ へうなげ	刷毛目のみ へうなげ	刷毛目	刷毛目	へうなげ	32.5	19.6	6.9	
壺	②	2	横ナゲ	横ナゲ	へうなげ		へうなげ	へうなげ	欠	欠	20.0	15.2	7.5	
坏														須恵器

### II 石製品

砥石(同5); 床面出土の破損品。三面を研磨している。一面には原石を切り出すか、周縁の形を整える際につけられたと思われるノミ痕状の平行する凹みが見られる。材質は流紋岩質凝灰岩である。

III 鉄器(同3・4); 覆土出土であるが参考のために掲げた。断面形をなし、刀子的なものであろうか。時代不明。

IV 黒曜石片(同6); これも覆土出土。黒曜石原石をほぼ半割し、その断面をあたかも搔器ないし削器の刃部のように作り出している。一部緑片には使用痕とも見做し得る細かい破砕部がある。

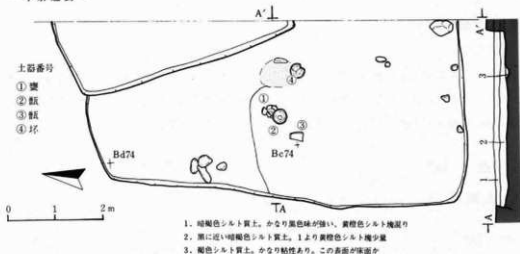
### Bc71竪穴住居跡 (第8図・第4表)

遺跡敷地東辺部中央やや北に検出。耕作により削平され残存状況は不良。東半は高速道路用地外にわたるので、その部分は未調査である。

二棟の住居跡が重複しており、東に偏するものが新期のものである。

平面形は両者ともに不明としか言えないが、強いて述べると、新期のものは一辺3.5m(推定)床面積12.25㎡(推定)前後の規模の方形になるのではないかと思われ、その中軸線は磁北から25°程西に偏するようである。

旧期のものも同様に推定すると、一辺3.4m、床面積11.56㎡程の方形をなすと思われる。遺構中軸線の方向は、磁北にはほぼ一致し、約5°西に振れるのみである。



第8-1図 Bc71竪穴住居跡実測図

遺構内に堆積した土層はすべてで三層である。

第1層 暗褐色シルト質土層。かなり黒色味が強い。締まりがあり、粘性はあまりない。黄褐色シルト質土塊の混じり具合の差が新田岡遺構の区別の手掛りであって、前者の方がやや多い。

第2層 黒色に近い暗褐色シルト質土。第1層より黄褐色シルト質土塊量がやや少ない。以上が遺構内覆土である。

第3層 褐色シルト質土。基盤の黄褐色シルト質土の汚れたものであろう。かなり粘性がある。この層の上面がある時期の生活面であろう。

床面形状は両者ともに大略平面をなし、ピット類その他はない。壁高は残存状態が良くないので浅く、平均14cmを測るのみ。

Bc71住 第4表

分類	土器番号	平面図上	実測号区	測								器高	口徑	底徑	備考		
				口縁部		体部上半		体部下半		底部							
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面						
甕				横ナリワ	横ナリワ	へらナリワ	刷毛目										
				横ナテ	横ナテ	へらナリワ	刷毛目										
①	3			横ナリワ	横ナリワ	刷毛目のうち?	刷毛目のうち?	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	15.5	
坏	④	1		へらナリワ	横ナリワ	へらナリワ	横ナテ	へらナリワ	へらナリワ	へらナリワ	へらナリワ	へらナリワ	へらナリワ	へらナリワ	5	17.5	内黒
瓶	②	2		へらナリワのうち	刷毛目のうち	刷毛目のうち	刷毛目	へらナリワ	刷毛目					14	19 16.5	7.5	
	③											へらナリワ	へらナリワ				

従って、柱穴を想定させるものはない。

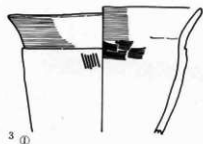
炉ないしカマドと見做し得るものは存在しないが、旧期住居跡北辺のほぼ中央と思われる部分に焼土の集積がみられ、その上に礎がのり、しかもその周辺に遺物が多くみられる。あるいはこれがカマドの痕跡かもしれぬ。

その他の施設は特にない。

年代推定の資料となし得るものは、新期には皆無、旧期では床面上出土の土師器甕・瓶・坏などである。

### (遺物)

#### I 土師器 (第8-2図・1・2・3)

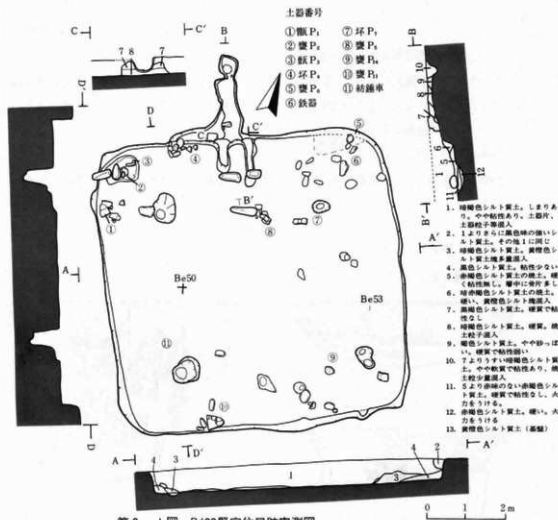


第8-2図 Bc71竪穴住居跡出土遺物実測図

#### Bd03竪穴住居跡 (第9図・第5表)

遺跡敷地内には中央やや北寄り、既述のBb06の南隣に検出。本調査の最初に検出した遺構である。他の遺構との重複関係・遺構内での増改築の事実は何れもなく、一部の掘り過ぎを除けば保存状態の良好な単一の遺構である。

遺構の平面形は、四隅にやや丸味を持つきれいな正方形をなし、その規模は南北4.7m×東西4.7m、床面積22.09m<sup>2</sup>程度になる。住居の中軸線(北壁中央にあるカマドの中心点と南壁の中心点を結ぶ線)は、磁北より約24°西に振れる。



遺構内に堆積した土層は単純で、大別して二層からなる。

第1層 暗褐色シルト質土層。覆土の大半を占め、本遺跡の覆土に最も多くみられるものの一つ。縮まりがあるが、粘性もややあり、土器片・土器粒子・炭化物粒等が混入。

第2層 暗ないし黒褐色シルト質土層。床面に接して堆積しているが、壁際に多いという特徴もある。黄褐色シルト質土塊もみられ、壁の崩土でもあろう。床面直上にみられるものは生活による汚れであって、貼床とまではいえないと思われる。

床面の残存状況は非常に良好で、殆んど平坦である。壁の残存状況も良く、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30~35cmである。床面上に大小8個のピット・掘り込み類があり、他には25個の礫と北東隅壁直下の焼土集積部がみられる。

前記のピット・掘り込み類のうち、少なくとも主柱穴と認め得るものは、ほぼ対角線上にのる形で分布しているやや大きめのピット4個であろう。特に西半(西北隅と西南隅)の2個は掘り方・柱あたりの両者を認めることができ、良好な残存状態を示している。それによると、

掘り方はほぼ円形をなし、その径30~40cm、柱あたりの径20cm前後、深さ40~50cm程である。

カマドは、他の多くの例と同一で、正確に北壁の中央に構築される。黄色粘土質シルトを袖部構築用に用いること、焚口部に長大な川原石を「門の字」状に作り出すことも同様である。但し現状では水平に架せられる礎はその部位に存在しなかったが、焚口南部床面上にある礎がそれであろう。焚口間口60cm・高さ25cm、カマド奥行70cmの規模である。

煙道は本遺構に於いては存在し、北壁中央部から北に基盤を掘り込んで作ってある。カマド火床が住居壁とぶつかる部分で一段(15cm)高くなり、それから煙道としてやや浅めになりながら、そのまま北方へ1m延びる。その先端部には煙出しが作られ、円形で上径20cm・下底径10cm・深さ20cmの規模である。

床面上のその他の施設としては、西北隅に楕円形の掘り込みがあり、その中に礎・土師器等がみられた。恐らく貯蔵穴と見做してよいのであろう。反対側の東北隅の床面に焼土があり、その上に礎が3個のっていたが、床面は焼けておらず、性格不明の焼土としておく。

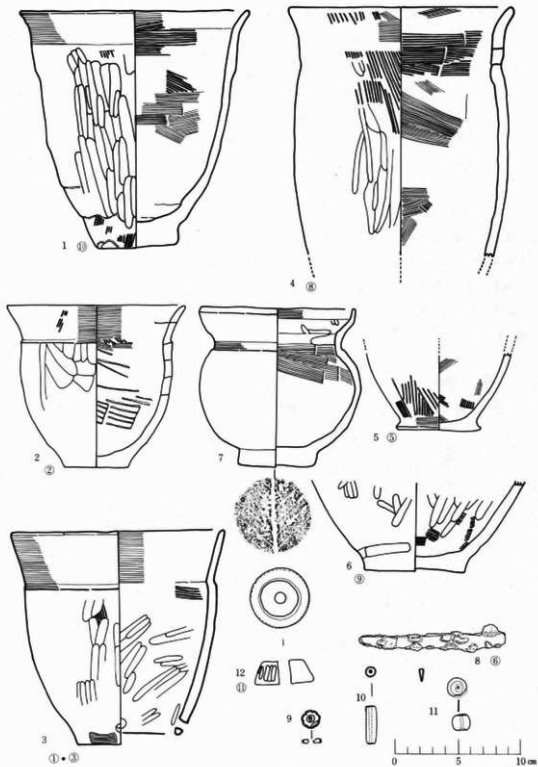
年代決定の資料としては、床面上・貯蔵穴中出土の土師群がある。尚、本住居跡には須恵器の出土はみなかった。

## (遺物)

I 土師器 (第9-2図・1~7) 第5表

分類	土師器 番号	実測 図番号	測 整								器 高	口 径	底 径	備 考	
			口 縁 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 面						
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面					
罍	㊸	2	刷毛目 <small>のち</small> へらナデ	刷毛目 <small>のち</small> へらナデ	刷毛目 <small>のち</small> へらナデ	へらナデ	刷毛目 <small>のち</small> へらナデ	へらナデ	刷毛目		12.9	12.14	5.1 (7)		
	㊹	6	欠 欠	欠 欠	欠 欠	欠 欠	刷毛目 <small>のち</small> へらミガキ	へらミガキ	へらミガキ or 刷毛目	へらナデ or へらミガキ			8.0		
	㊺	5	欠 欠	欠 欠	欠 欠	欠 欠	刷毛目 <small>のち</small> ?	刷毛目	へらナデ or へらナデ	刷毛目 or 木葉状			6.7		
			へらナデ	へらナデ	へらナデ	刷毛目									
			へらナデ	へらナデ											
	㊻	1	刷毛目 <small>のち</small> へらナデ	刷毛目 <small>のち</small> へらナデ	刷毛目	刷毛目 <small>のち</small> へらミガキ	へらナデ	刷毛目 <small>のち</small> へらミガキ	へらナデ	へらミガキ or へらナデ	へらミガキ or 木葉状	19.0	18.4	6.3	
															須恵器
㊼	4	刷毛目 <small>のち</small> へらナデ	刷毛目 <small>のち</small> へらナデ	刷毛目 <small>のち</small> へらナデ	刷毛目 <small>のち</small> へらナデ	刷毛目 <small>のち</small> へらナデ	へらミガキ (はらミガキ)	刷毛目 <small>のち</small> へらナデ	へらミガキ	欠 欠	欠 欠	19.8	18.0		
壺	7	へらナデ その下 へらミガキ	へらナデ	へらナデ	へらミガキ or へらナデ	へらナデ	へらミガキ or へらナデ	へらナデ	へらミガキ		12.6	12.3	6		
瓶	㊽・㊾	3	へらナデ	へらナデ	刷毛目 <small>のち</small> へらミガキ	刷毛目 <small>のち</small> へらミガキ	へらミガキ	へらミガキ へらナデ			17.0	16.8	8.1		
														多孔式	





第9-2図 Bd03竪穴住居跡出土遺物実測図

## II 鉄 器

刀子形製品（同8）：一側縁が薄くなり、断面形態が楔形をなすものである。比較的良好な残存状態。

## III 装 飾 品

覆土出土のものであるが、一括して取り扱った。

花卉形製品（同9）：覆土出土の石製品。両面と周縁を入念に研磨した後、周縁の7箇所に刻み目を入れる如く細く研磨して、都合7弁の花弁状に作り出している。中央に孔がうがたれるが、それは両面からなされたもので、中心部が最も細くなり、またその両面に於ける中心部がずれている。これは、石器時代の石器にみられる特徴に一致するもので、穿孔に金属器を用いなかった可能性がある。従って、その所属年代にはかなり疑問が生ずるが、一応ここに掲げておく。

管玉状製品（同10）：床面出土の土製品。縦断面形はほぼ長方形をなす。表面は入念に研磨され、さらにあたかも土師器坯に於けると同様に黒色処理されたかのような漆黒色をなし、光沢を持つ。彩色等は認められない。

トボ玉状製品（同11）：覆土出土の土製品。縦断面形は正方形に近いが、やはり本来的には球形であろう。管玉状製品程には筧ミガキが施されず、光沢もない。また、黒色処理様の色調・光沢もともにない。破損部からすると、胎土は黒味がかかった灰色である。彩色の痕は認められない。

## IV 土 製 品

紡錘車（同12）：全面入念に筧ミガキで仕上げている。全体的に稜にやや丸味をおびる。中心の孔の周縁は鋭角的である。ちなみに重量は46gである。

### Bd12竪穴住居跡（第10図・第6表）

遺跡敷地はほぼ中央の北端部、現在の段丘崖に直近の位置にあり、既述のBb06の西隣にあたる。北端部に於いて二棟が重複していることが微かに認められるが、増・改築等の事実は認められない。

平面形は、旧期住居跡については不明。新期住居跡については、北壁中央部がやや乱れているが、大略長方形をなし、その規模は長辺（南北方向）5m（推定）、短辺（東西方向）4m、床面積20㎡程となろう。住居中軸線の方向は、磁北から約33°西に振れる。

旧期住居跡内に堆積した土層は、段丘崖直近の北端部に微かに残存しているのみであるが、二層からなる。

第1層 暗褐色シルト質土層。硬質で粘性が弱く、やや砂っぽい。

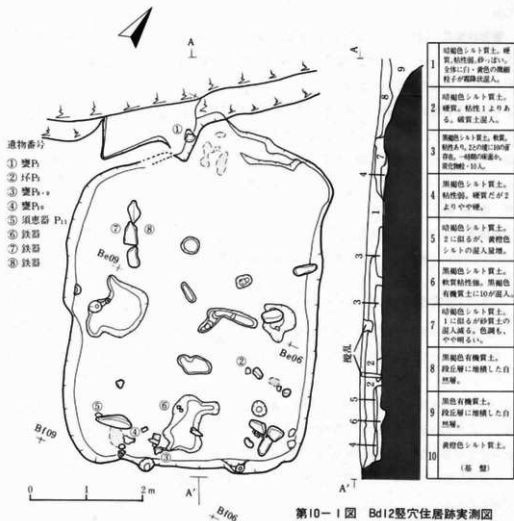
第2層 床面直上に堆積した黒褐色シルト質土層。硬質で粘性は弱い。その上面に焼土がのり、一時期の生活面ないし何らかの施設の痕跡を示すものであろう。

新时期住居跡内の堆積土層は大別し三層からなる。

第1層 暗褐色シルト質土。硬質で粘性弱く砂っぽい。

第2層 暗褐色シルト質土。砂質で第1層よりは粘性が強い。以上の二層が主体的な遺構覆土である。

第3層、床面直上に堆積した土層。この上面が一時期の生活面である。粘床と主張できる程には全面に分布しないし、締まりもない。黒褐色あるいは暗褐色のシルト質土で、おおむね軟質で粘性が強い。炭化物粒その他が混じる。



第10-1図 Bd12竪穴住居跡実測図

床面の状況は、旧期住居跡については不明。新期住居跡は、他例に比しビット類・礫・焼土等が多く変化に富む。壁高は旧期住居跡については不明であるが、焼土のある部分で遺構検出面から測ると30cm程になる。新期住居跡は南壁で測ると40cm程である。床面上や壁直下に合計14個のビット・掘り込みがあり、別に5箇所に礫の分布がみられる。

それらのうち、何らかの形で柱穴に関連すると思われるものは5個あり、うち3個は床面上に、2個は壁直下に存在する。それらの平均径は24cm、深さは5～10cm。現状で規則的な配置を明らかに示すものは壁直下の2個のみであるが、床面上のものもそれに礫の分布を加味して考える（礫がそれぞれ四隅に近く分布する点）と、少なくとも支柱穴は大略対角線にのるような形で、四隅に1本ずつあったと推定できる（後述のB124などに於いて、柱穴掘り方中に礫が存在する例がある）。また、南壁直下の2個のものは、上家構造ないし出入口等の推定に資料を提供できるものと思われる。

炉ないしカマドについては、旧期住居跡では不明であるが、焼土が一部残存し、その部分の床面が浅く凹んでいることを把えると、あるいはカマド火床の痕跡かとも思われる。とすると、その設置位置は、少なくとも北壁のいづこかということになる。

新期住居跡については、西南隅と東南隅に焼土塊がみられるが、何れもカマドないしがと見做すことはできない。

床面上のその他の施設については、まず周溝はみられないし、貯蔵穴と見做し得るものもない。ただ床面中央部に長楕円形の掘り込みがみられるが、現状では性格不明としかいえない。同様に、床面上に分布する礫についても、その周辺に何らの異常も認められないので、作業台その他の機能を推定することもできず、性格不明である。それより既述したように柱穴関連のものを見做した方がよいのであろう。但し、西北隅の3個が一列に配列されたような印象を与えることは、やや人為的なものを感じさせる。

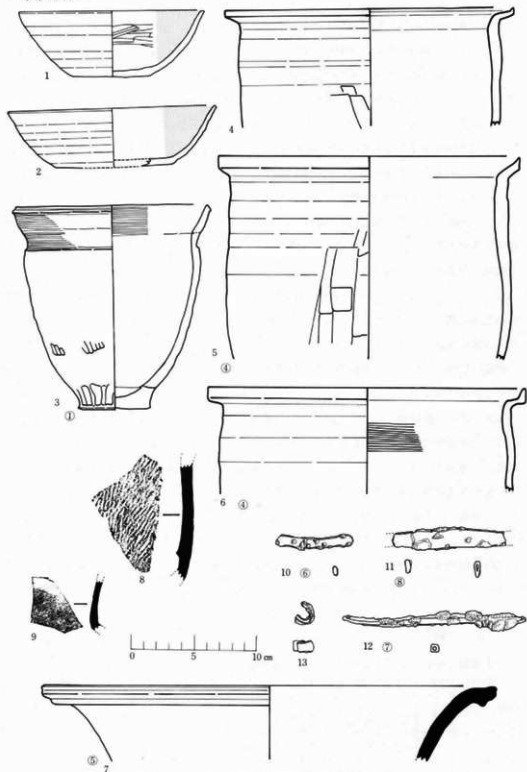
遺構の年代推定の手掛りとしては、旧期住居跡については焼土西隅出土の土師器甕が、新期住居跡については床面出土の土師器甕・坏・須恵器甕が挙げられる。

## （遺物）

### I 土師器（第10-2図・1～6）

第6表

分類	土師器 図上 の 番号	実測 図 番号	調 査								器 高	口 径	底 径	備 考
			口 縁 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部					
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面				
甕	①	3	横ナテ	横ナテ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	凹凸あり	ミガキ(?) 木製蓋(?)	16.3	15.8	5.8	
	⑤	7	ロクロ成形	ロクロ成形	欠 失	欠 失	欠 失	欠 失	欠 失			36.2		須恵器



第10-2图 Bd12竖穴住居跡出土遺物実測図

壘	④	5	ロクロ水挽痕	ロクロ水挽痕	ロクロ水挽痕	ロクロ水挽痕	ロクロ水挽痕	ヘラナズリ	欠	欠	欠	欠	23.9		
		4	ロクロ水挽痕	ロクロ水挽痕	ロクロ水挽痕	ロクロ水挽痕	ヘラナズリ						23.0		
	④	6	ロクロ水挽痕	ロクロ水挽痕		ロクロ水挽痕							25.3		
壘						ロクロ									須恵器
環		1	ヘラミガキ					ロクロ水挽のちヘラナズリ	ヘラミガキ	回転糸切のちヘラミガキ	5.6	19.7	5.7		
		2	ヘラミガキ	磨 減	ヘラミガキ	ロクロ水挽痕	ヘラミガキ		ヘラミガキ(?)	回転糸切のちヘラナズリ(?)	5.3	15.6 (磨)	5.8 (磨)		
						ロクロ			ヘラミガキ	ヘラナズリ(?)	5				
				ヘラナナ		ヘラナズリ									
										回転糸切					
						ロクロ成形									
				ヘラミガキ	ロクロ水挽	ヘラミガキ	ロクロ水挽	ヘラミガキ	ロクロ水挽	ヘラミガキ	回転糸切のちヘラナズリ(?)				

## II 須 恵 器

壘 (同7)；黒味があった紫色を呈す大型品。口縁部のみである。外反する口縁の端部が肥厚しているが、これは本来はもっと強く屈曲し、しかも鋭い稜を持つ口縁が変形し、丸味を帯びたものであろう。

その他に覆土出土のものも参考までに掲げた。

## III 鉄 器

刀子形製品 1・2 (同10・11)；刃部と思われる部分の断面形が楔形をなし、それ以外の部分の断面は長方形をなすものをこれとした。1の断面は中空状をなし、あるいは鍛造品か。

釘形製品 (同12)；断面が方形をなす長大なものをこう名付けた。

鏃形製品 (同13)；偏平な断面を持ち、恐らくは楕円形の形状をなすと思われるものをこう呼んだ。刃物の柄の端にはめ、刃物と柄の装着を確実にするような機能を持つのであろうか。

### Bd59 竪穴住居跡 (第11図・第7表)

遺跡敷地中央やや東寄りに検出。他の遺構との重複あるいは遺構内での増改築の事実は認められず、保存の良好な単一の遺構である。

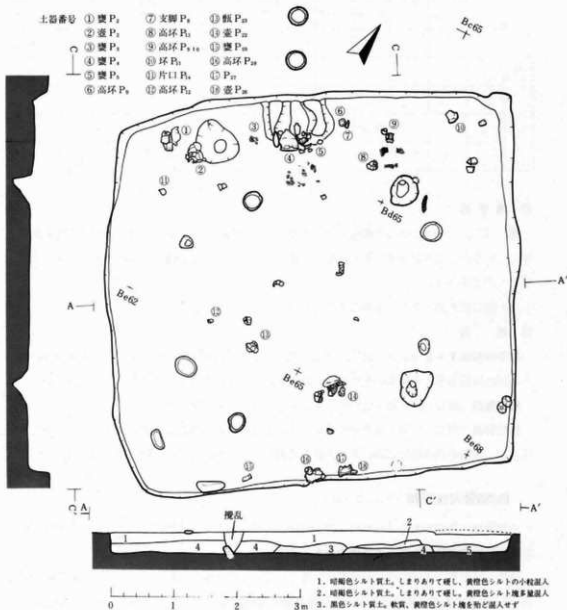
遺構の平面形は比較的端正な正方形に近く。その規模は南北6.2m×東西6.5m、床面積約40.30㎡程度である。本遺跡の竪穴住居跡群中ではBg62に次ぎ第二位の規模であり、最大級のクラスに入る。住居の中軸線(カマドの中心に一致する北壁の midpoint と南壁の midpoint を結ぶ線)は、

磁北より約42°西に振れる。

遺構内に堆積した土層は大略二層からなる。

第一層 明褐色シルト質土層。かなり締まりがあって硬く、粘性はあまりない。本遺跡に最も多くみられる遺構覆土である。

第二層 床面に接して堆積した暗褐色ないし黒色のシルト質土層群を一括した。何れも1層に比し軟質で粘性がある。炭化物粒等が混じる。数枚の層に分かれ、その堆積ぶりにやや不自然



1. 明褐色シルト質土。しまりありて硬し、黄褐色シルトの小粒混入
2. 明褐色シルト質土。しまりありて硬し、黄褐色シルト塊多量混入
3. 黒色シルト質土。軟質、黄褐色シルト塊を殆ど混入せず
4. 明褐色シルト質土。やや軟質で、粘性あり。2より黄褐色シルト塊の量少ない
5. 明褐色シルト質土。4に物と同じであるが黒味がやや強い

然なものがあるが、意図的なものかどうかは判然とし難い。

床面の残存状況は非常に良好で、殆んど平坦である。壁の状況も同様に非常に良好で、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30～40cmである。床面上に大小12個のビット・掘り込み類がある。

そのうち少なくとも主柱穴と認めてよいものは、ほぼ対角線上にのる位置関係にある4個であろうか。特に東半の2個（東北隅と東南隅）のものからは、掘り方・柱あたりの両者をも窺うことができる。それによると、ほぼ円形の掘り方径50cm前後、柱あたり径15～20cm、深さ30cm前後である。尚掘り方壁の何れかの半分が垂直をなさず、傾斜を持つものもある事実も認められ、柱を建てる際あるいは抜き取る際の有様を推測させる資料となろう。

カマドは正確に北壁の中央部に構築されている。他の例と同様に、黄色粘土質シルトによって壁から2本の土手状の袖部を南へ作り出す。袖部の南端焚口部には、やはり同様に長大な礎を「門の字」状に構築する。推定されるカマドの規模は間口50cm、奥行70cm、高さ30cm前後である。火床部はこれも同様に多少掘り凹めてある。明白に土中に構築された煙道と認められるものは入念に調査したにもかかわらず、検出し得なかった。しかし、カマドの北隣にビットが存在することを考え合わせると、やはり何らかの形式の煙道が存在したのであろう。あるいは後述のCa18にみられたトンネル式の煙道を見落した可能性もなくはない。

床面上のその他の施設としては、カマド左隣にほぼ円形の掘り込みがあり、その周縁に土師器が置かれていた。これは貯蔵穴と見做されてよいものであろう。周溝は認められない。尚、南壁中央やや西（西南隅付近）の壁直下に礎があるが、これもあるいは住居の構造に何らかの関連を有するものかもしれない。

その他特殊例ではあるが、カマド焚口前とその右隣の床面に炭化した植物繊維の広がり部分が部分的にみられた。現場での観察によると、編んだような繊維の交叉がみられた。従ってあるいは床面上に何らかの植物質の敷物が存在した可能性もある。

年代推定の資料としては、カマド中・カマド周辺・床面上等出土の土師器群がある。

## (遺 物)

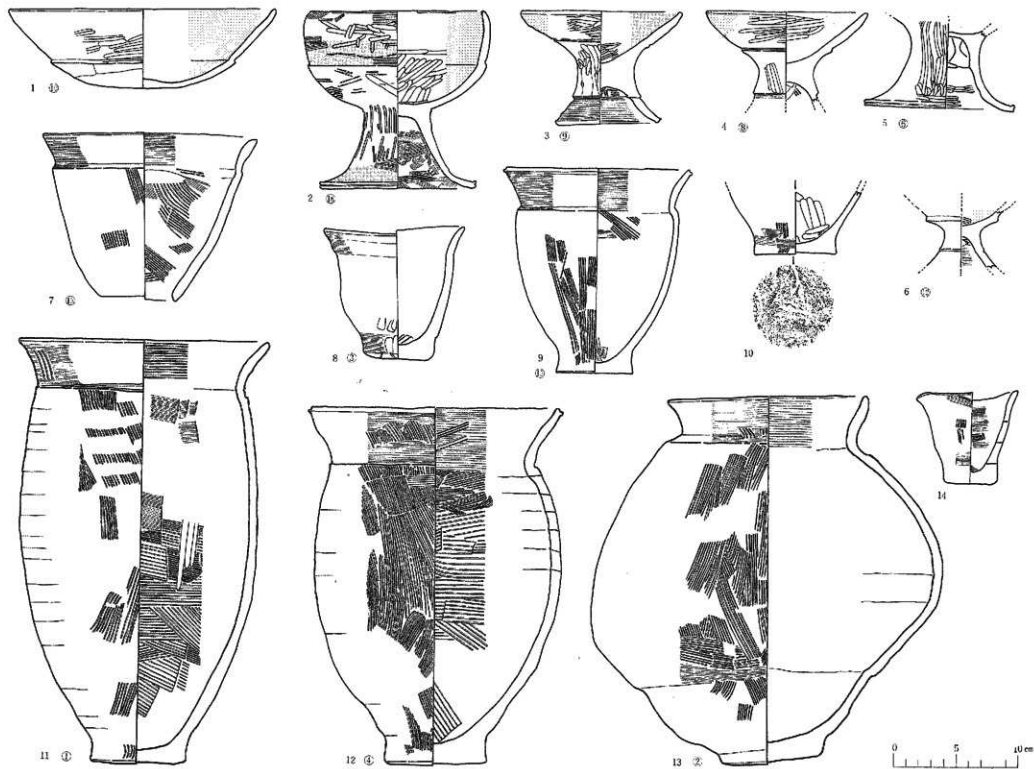
### I 土 師 器 (第11-2・3・図1-19) 第7表

分類	土器番号 土器図上 の番号	実測図番号	調 整								器 高	口 径	底 径	備 考	
			口 縁 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部						
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面					
罍	①	11	刷毛目	刷毛目 のち 横ナテ	刷毛目 のち へうナテ	刷毛目	刷毛目 のち 部分的に へうナテ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	33.8	20.0	7.6	
	④	12	刷毛目 のち 横ナテ	刷毛目 のち 横ナテ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目 へうナテ	28.6	20.2	8.2	
	⑤	18	刷毛目 のち 横ナテ	刷毛目 のち 横ナテ	刷毛目	刷毛目 のち へうナテ	欠 失	欠 失	欠 失	欠 失	欠 失	?	19.2		

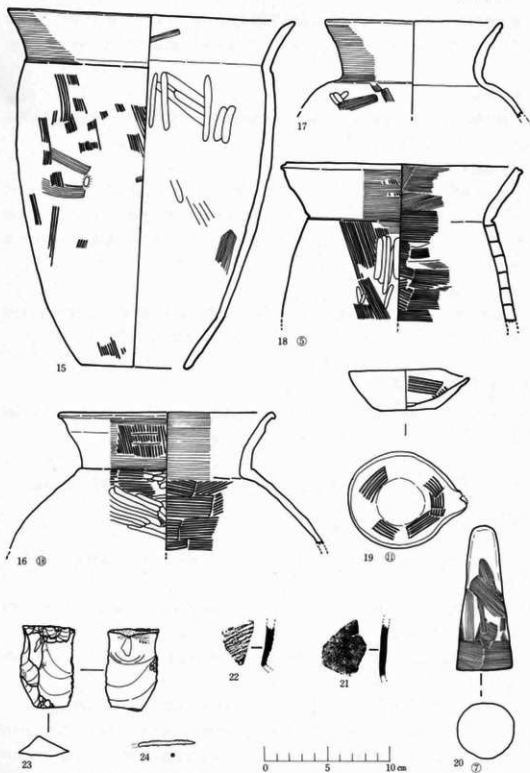


一 今泉遺跡一

遺		14	網毛目 のち 横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	水築版	7.5	8.1	3.4	埋跡	
	②	19	横ナテ	横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	ヘウケ板	16.3	5.1	6.1		
		17	横ナテ	横ナテ	不明	ヘウナテ	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失		14.0			
											網毛目	網毛目 木築版			6.6		
											網毛目	水築版			8		
			10	欠失	欠失	欠失	欠失	網毛目 のち 横ナテ	網毛目	ヘウナテ	網毛目 木築版				6.6		
	③	8	横ナテ	横ナテ	横ナテ	ヘウケ板	横ナテ	ヘウナテ	ナテツケ	水築版		10.7	11.3	5.8			
										水築版				8			
遺	②	13	横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	網毛目	網毛目	網毛目 ヘウケ板	網毛目	ヘウケ板	水築版	29.6	15.9	8.2				
	③	16	横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	網毛目	網毛目 のち 横ナテ	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失			16.4			
											水築版			8.5			
																埋跡	
				不明	不明	不明	不明	不明	不明	欠失	欠失						埋跡
環	⑩	1	ヘウケ板	ヘウケ板 (上ナテ)	ヘウケ板	ヘウケ板	ヘウケ板	ヘウケ板	網毛目 のち 横ナテ	ヘウケ板	ヘウケスリ のち ヘウケ板	6.3	20.9			内環 丸底 付環	
			ヘウケ板	横ナテ					ヘウケ板	ヘウケスリ							
			ヘウケ板	ヘウケ板					ヘウケ板	ヘウケ板							
			ヘウケ板	ヘウケ板					ヘウケ板	ヘウケ板							
			ヘウケ板	ヘウケ板					ヘウケ板	ヘウケ板							
					ヘウケ板												
				ヘウケ板						ヘウケ板							
高 環	⑨	2	ヘウケ板	ヘウケ板 (上ナテ)			ヘウケ板	ヘウケスリ のち 横ナテ	網毛目 のち 横ナテ	ヘウケ板	14.1	14.0	脚柱 12.5			内環 黒色	
	⑩	3	ヘウケ板	ヘウケ板	ヘウケ板	ヘウケ板	ヘウケ板	ヘウケ板	横ナテ ヘウケ板	ヘウケ板 下 ヘウケ板	9.1	13.0	8.2			口縁・内環	
	⑪	4	ヘウケ板	ヘウケ板	ヘウケ板	ヘウケ板	ヘウケ板	ヘウケ板	ナテツケ	ヘウケ板	8 (厚)	12.8 (脚柱)				内環	
	⑫	5	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失	ヘウケ板 (ナテツケ)	ヘウケ板	7.7			12.0		内環	
	⑬	6	ヘウケ板	ヘウケ板			ヘウケ板	横ナテ	ヘウケ板 ナテツケ	ヘウケ板 ヘウケ板				1.7		内環	
瓶	⑭	7	横ナテ	横ナテ	網毛目	網毛目	網毛目	網毛目					13 (厚)	16.8	5.5		
		15	ヘウケ板 (ナテツケ)	網毛目 のち 横ナテ	ヘウケ板	網毛目 部分的 ヘウケ板	ヘウケ板	網毛目					28.1	22.6	8.4		
片口	⑮	19	ヘウケ板 (上ナテ)	ヘウケ板 (上ナテ)	網毛目				ナテツケ	ヘウケ板 のち ヘウケ板	3.5	長10 短8	4.2				



第11—2 图 Ba59竖穴住居出土土器实物图



第11-3图 Bd59竖穴住居跡出土遺物実測図

II 須恵器 (同21・22)；破片ではあるが、床面上から2個出土したので掲げておく。22は表面に叩き目の縄目が顕著にみられるが、表面には特に何もみられない。21は、あるいは長頸の何らかの器形になるものであるかもしれない。

### III 鉄器

針状製品 (同24)；釘とするには細すぎると思われる、断面形が円形のを一応こう呼んだ。

### IV 土製品

カマド支脚 (同20)；カマド火床上ではなく、カマド外の右隣に検出した。とすると、この種の支脚は、カマド火床に固定される(礎を火床に埋め込み、直立させるなどの例あり)ものではなく、使用に際してカマドに着脱するものなのであろうか。表面には刷毛目様調整痕や横ナデ調整の痕がみられ、比較的入念に作ってある。

### V 石器

剃片 (同23)；覆土出土であるが、参考までに掲げた。頁岩製の縦長剃片で、打撃面・打撃瘤・フィッシャー・リング等が良好にみられる。縄文時代晩期のものであろうか。

## Bf09竪穴住居跡 (第12図・第8表)

遺跡敷地はほぼ中央部に検出。他の遺構との重複関係はない。遺構内での増改築の痕は一部疑問箇所はあるが、はっきりとそれと見做し得るものはない。保存状態は不良。

平面形は四隅に丸味があり、中央部が弧状に微かに膨らむ大略方形をなし、その規模は南北3.9m×東西4.1m、床面積15.99㎡程度となる。住居中軸線方向(南北両壁の midpoint を結ぶ線)は、磁北から約11°45'西に振れる。

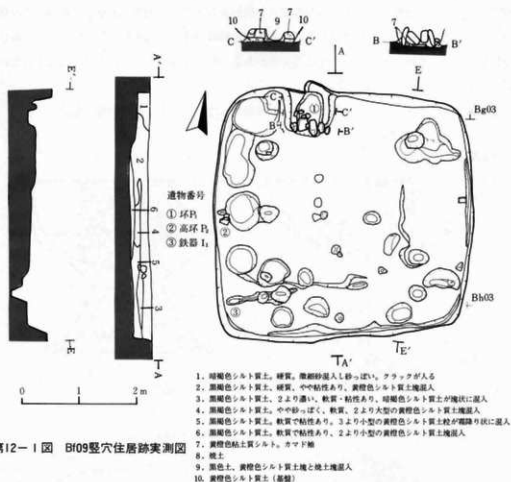
遺構内に堆積した土層は大略三層をなす。

第1層 暗乃至黒褐色のシルト質土層。締まりがあつて硬いが、粘性もややある。覆土上半の大部分を占める。

第2層 黒褐色シルト質土層。数層からなるが、基盤の黄褐色シルト質土塊を混入する点に特徴がある。第一層に比し、やや軟質で粘性が強い。

第3層 黒褐色シルト質土層。軟質で粘性もある。床面直上に堆積したものであるが、粘性的なものとは考えられない。

床面の状況は、今泉遺跡内では珍らしくピット類・掘り込み類が多くあり、凹凸が激しい。その中には、床面がほぼ方形に低くなる部分なども含まれる。それが、南壁と東壁には併行することから、あたかも増改築があったかのような印象を与えるのであるが、土層・柱穴等の観察からしてその痕跡とは認められず、もともとこのような凹みの部分を有する住居であると



第12-1図 Bf09竪穴住居跡実測図

理解した。壁高は30cm前後である。

床面上のピット類のうち、少なくとも主柱穴と認めてよいと思われるものは、ほぼ対角線上にのる4個であろう。円形で、平均径31cm、平均深さ19cmである。

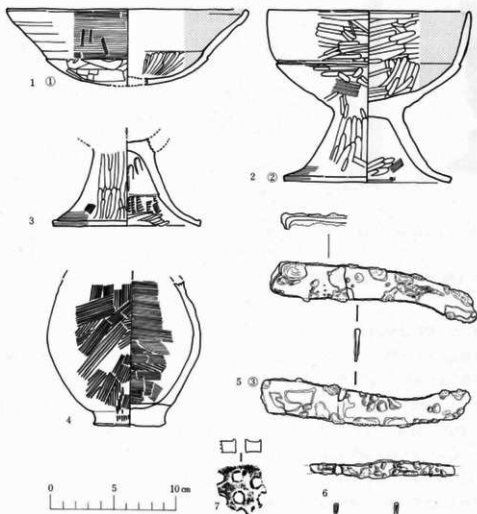
カマドは他例の多くと同様に北壁に構築されるが、その中央部ではなくやや左方（西方）に寄った部分に構築されている点が例外的である。煙道の痕跡は土中には殆んど認められず、カマドの北端が少々外方に張り出した程度のものである。その他の点は他例に共通する点が多いので、詳細な説明は省略する。焚口部の「門の字」状の礎のうち、上に架せられるものは半折し床面上に落ちている。焚口の開口75cm・高さ30cm、袖部奥行60cmである。火床部はやや凹みその支脚その他の施設は認められない。

床面上のその他の施設としては、まず西北隅に方形に近い掘り込みがある。やや浅めで、しかも遺物その他の出土がみられないが、カマドとの位置関係からして貯蔵穴の可能性もある。周溝と思われるものは、東壁直下の中央部分と南壁直下のほぼ全域にみられる。さらに、特に

西壁と南壁に沿う床面には、浅い円形のピット列がみられる。遺物等の出土をみないので性格は不明であるが、そのうち南壁側にみられる2個の位置関係は整然としたものであり、あるいは住居に関連する何らかの遺構となる可能性がある。但し、浅いので支柱穴などにはならないのであろう。

年代推定の資料としては、少ないながらも床面から出土した土師器その他がある。

(遺物)



第12-2図 Bf09竪穴住居跡出土遺物実測図

I 土師器 (第12-2図・1~4・7)

第8表

分類	土器 番号の 上の	実測 区番号	調						器 高	口 径	底 径	備 考		
			口 縁 部		体 部 上 半		体 部 下 半						底 部	
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面					内 面	外 面
甕												須恵器		
壺		4			へらミガキ 又はへらナデ	へらミガキ	へらミガキ							
杯	①	1	へらミガキ	横ナデ	へらミガキ	横ナデ	へらミガキ	へらナズリ	へらミガキ	へらナズリ	6.2	19.3		
高 杯	②	2	へらミガキ	へらミガキ	へらミガキ	へらミガキ	へらミガキ	へらミガキ	へらミガキ	へらミガキ	13.7	16.0	13.2	
	3	欠 欠 欠 欠 欠 欠 欠 欠 欠 欠									6.0	4.8	11.8	環状部 内黒
瓶		7												多孔式

## II 鉄 器

鎌形製品（同5）；ほぼ完全な、床面出土のもの。全体的に薄手で、形状はブーメラン形に湾曲している。一端が折り返してあり、他端はやや細くなっている。断面形は薄い楔形をなす。

刀子形製品（同6）；床面出土の破損品。薄手で断面形が楔形をなす部分と、長方形をなす部分とからなるもので、前者を刃部、後者を柄に差し込む部分と想定した。断面には何れにも中空部がみられる。

### Bf15竪穴住居跡（第13図）

遺跡敷地中央やや西寄りの、現段丘崖北縁から南にやや南下した地点に検出した。

他の遺構との重複関係・遺構内での増改築の相方ともに認められない。しかし遺構の残存状況は概して不良である。

平面形は遺存状況が不良であるので正確は期し難いが、調査結果によると横長の長方形をなし、その規模は東西4.7m×南北3.7m（推定）、床面積17.39㎡（推定）程になるようである。住居中軸線方向（北壁中央のカマドの中心と南壁の midpoint を結ぶ線）は、磁北から約13°30′西に振れる。

住居内に堆積した土層は、大略二層である。

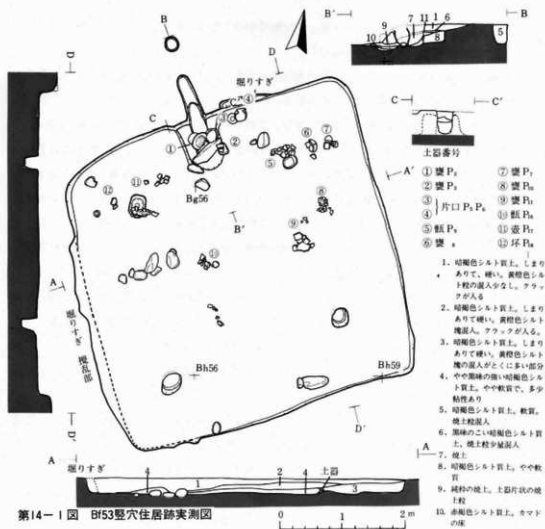
第1層 黒褐色シルト質土層。砂っぽくてもろく、粘性もあまりない。

第2層 黒褐色シルト質土層。第1層よりは砂っぽくなく、有機物量が増加する。しかし比較的硬質で、粘性もそれ程ない。炭化物粒少量が混入。その他の層はカマド周辺に数層が認められただけで、非常に単純である。

床面はほぼ平坦であり、傾斜は殆んどない。現壁高は21cmとやや浅めである。床面上に10個のピット・掘り込み類と、2個の礎が存在した。







**Bf53竪穴住居跡** (第14図・第9表)

調査区域のはほぼ中央、やや東寄りに検出した。他の遺構との重複関係、遺構内での増改築の事実、何れも認められない。

遺構の平面形は、四隅に微かに丸味のつくやや不整な正方形をなし、その規模は東西4.8 m (推定) × 南北4.9 m、床面積23.52 m<sup>2</sup> (推定) となろう。西壁の大部分と西南隅・北壁のカマドの両側の一部は、調査時に於ける掘り過ぎと、樹根による攪乱でやや乱れている。住居の中軸線 (北壁中央にあるカマドの中心と南壁の midpoint を結ぶ線) は、磁北から約30°西に振れている。

遺構内に堆積した土層は、大別して二層からなる。

第1層 暗褐色シルト質土層。比較的締まりがあって硬い。乾燥するとクラックが入る。覆土の上半を占める。尚、人為的に投入されたと思われる人頭大の礫が多く存在する部分もあった。

第2層 黒乃至暗褐色シルト質土層。やや粘性が強くなり、黄橙色シルト質土塊・遺物等の混入量が増加する。貼床は認められない。

床面はほぼ平坦といってよく、遺存状態は良好である。壁高は30cm前後。床面上には合計4個のピットと、4箇所の礎の分布がみられる。

上記4個のピットは、ほぼ対角線上に並び、そのすべてを支柱穴と認めてよいものであろう。形状は円形で、平均径25～30cm・平均深さ25～30cmをなす。尚、南半の2個はやや傾斜を持つ。

カマドは既述の通り、正確に北壁の中央部に取り付けられる。カマド本体の構築方法は、黄橙色粘土質シルトを用いて袖部を構築する点・焚口部に「門の字」状に礎を配置する点・燃焼部床がやや凹む点等々、多くの例にほぼ共通する特徴で示される。焚口部の間口60cm・高さ20cm、袖部奥行70cm程である。本体中には、土師器甕2個が遺存していた。煙道は顕著に発達し北壁から北に70cm程延びる。燃焼部床と同じレベルをなす部分が、北壁から30cm延びた所で15cm程高くなり、その先の50cmは徐々に浅くなって自然に終結する。その端部より北40cmの所に径20cm・深さ30cm程の円形ピットがある。位置的には正に煙出しに相当するが、煙道部とトンネル状に連結する事実は認められない。しかし覆土に若干の焼土粒を混入しているの、一応煙出しの可能性が大きいものと見做しておく。本例は今泉遺跡中で、カマド遺存状況が最良のものの一つに数えられる。

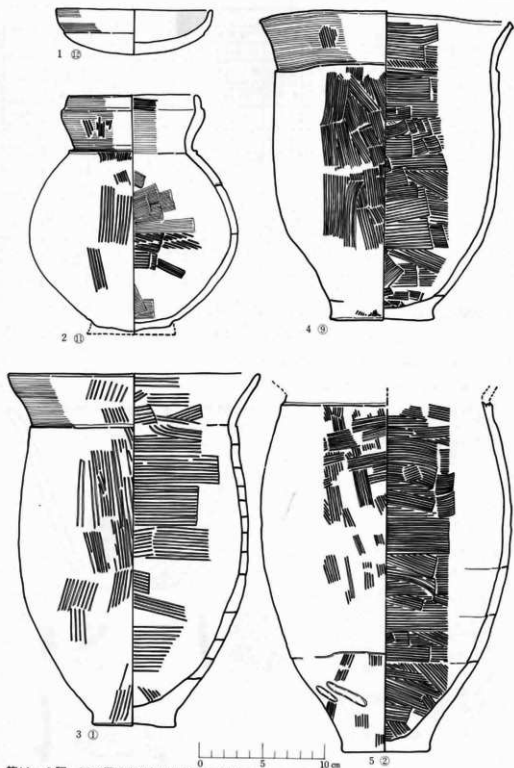
床面上のその他の施設としては、ピット・掘り込み類がみられないことは既に述べたが、その他のものとしては礎がある。うち2個はカマドに比較的近い位置にあり、そこに何らかの意味がありそうである。西半部にみられる7個の集積部分も、人為的な配置と見做せないこともなく、何か意味がありそうであるが、周囲に特記すべき現象は認められない。南壁直下の大小2個は、あるいは建物の構造に何らかの関連を有するものかもしれない。

年代推定の資料としては、カマド本体中・床面上に検出された土師器群他がある。

## (遺物)

I 土師器 (第14-2・3図・1～8) 第9表

分類	土器 図番 上号	実測 図番 号	調 査								器 高	口 径	底 径	備 考	
			口 縁 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部						
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面					
竈	①	3	刷毛目	刷毛目のち 黄ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目 へうけズリ	28.1	20.1	6.7	
				黄ナデ		刷毛目									
					刷毛目のち へうけズリ	刷毛目									
									刷毛目	へうけズリ 木葉板					
②	5		欠 欠 欠 欠	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目のち へうけズリ	刷毛目	木葉板	28*		7.0			



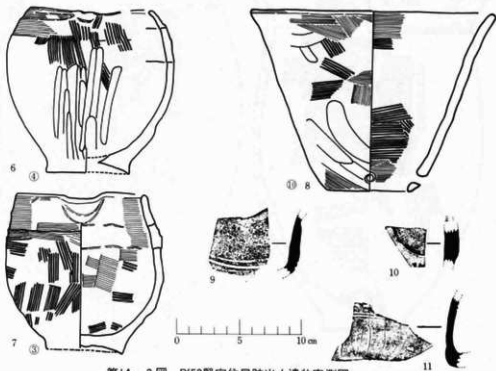
第14-2图 Bf53竖穴住居跡出土遺物実測図

分類	平面図上の土器番号	実測図番号	調 整								器 高	口 径	底 径	備 考	
			口 縁 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部						
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面					
甕	⑩	4	刷毛目 のち 横ナナ	刷毛目 のち 横ナナ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	木蓋板	24.7	20.2	8.4	
壺	⑪	2	刷毛目 のち 横ナナ	刷毛目 のち 横ナナ	横ナナ (刷毛目)	刷毛目	刷毛目 のち 横ナナ	刷毛目	横ナナ	刷 漆		19.0	10	6.7	須恵器
杯	⑫	1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	毛 刷 (ヘラミガキ)	ヘラミガキ	ヘラミガキ		3.6	12.5		内 蓋
瓶							刷毛目 のち ヘラミガキ								
							刷毛目	刷毛目							
				横ナナ	横ナナ	刷毛目	刷毛目								
	⑬	8	横ナナ	横ナナ	刷毛目	刷毛目 ヘラミガキ	刷毛目	刷毛目 のち ヘラミガキ				14.2	19.6	6.8	
片口	⑭	7	横ナナ	刷毛目 のち 横ナナ	刷毛目 のち ヘラミガキ	刷毛目	刷毛目 のち ヘラミガキ	刷毛目	ナデツケ	欠 欠		12.7	高口 10.6	6.1	
	⑮	6	刷毛目 のち 横ナナ	刷毛目 のち 横ナナ	横ナナ (刷毛目)	刷毛目	横ナナ (刷毛目)	刷毛目 のち ヘラミガキ	刷 漆	刷 漆		12.5 1.1	9.7	6-7	

II 須恵器 (同 9・10・11) ; 何れも破片であり、器種も不明であるが、一応掲げた。

9・10は、あるいは壺類似の器種になるとも考えられる。9には筥による削り調整、10には緑色の釉類似の被膜がみられる。壺の肩部であろうか。

11は、長頸の何らかの器種の頭部らしい。



第14—3図 Bf53竪穴住居跡出土遺物実測図

### 新期Bg62竪穴住居跡 (第15図・第10表)

調査地の中央やや東南部寄りに検出した。

東壁と南壁を共通する形で旧期Bg62住居跡と重複している。これはやや問題はあがあるが、旧期Bg62の拡張と見做すよりは、完全な新築と見做した方がよいであろう(後述するように旧期Bg62の部分の凹みをほぼ完全に埋めてしまっていること・そこから遺物の出土が見られないこと・旧のカマドがこわされていること等から、上のように推定した)。全体的な遺存状態は非常に良好である。

平面上は、西壁の中央付近が樹根のため一部乱れているが、全体的には形の整った、しかも隅の角ばった長方形をなし、その規模は東西6.4m×南北7.3m、床面積46.72㎡程である。今泉遺跡中では最大級の規模である。住居中軸線(北壁と南壁のそれぞれ中点を結ぶ線)は、磁北から14°17'西に振れている。

遺構内に堆積した土層は大略二層からなる。

第1層 暗褐色シルト質土層。それをベースとして、全般的に微細砂も混じり、また黄橙色シルト質土塊も混入する。硬質で粘性はあまり無く、乾燥するとクラックが入る。ただし西端部の一部には樹根の影響によると思われる有機質土層もみられ、当然のことながら軟質で粘性に富む。

第2層 暗褐色シルト質土層。第1層にみられた黄橙色シルト質土塊はそれほど顕著には認められない。硬質で粘性はあまり無い。

第3層 黄褐色シルト質土層。基盤の黄褐色シルト質土を、一段低い凹みとして残った、旧期Bg62住居跡の床面上に敷きつめ、床面のレベルをそろえたもの。その意味では貼り床的な性格もあろう。やはり軟質で粘性がみられる。

床面の状況は傾斜もみられずほぼ平坦である。西壁の中央部以外は壁もしっかりしており、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は35cm程度である。床面上には大小8個のビット類があり、また床面中央からやや南に偏して礫の分布がみられる。

床面上のビット類のうち、やや大きめで、ほぼ対角線にのる位置関係にある4個が、少なくとも支柱穴であろう。うち西方の2個には、一応掘り方と柱あたりの部分を指摘できる。それらによると、掘り方の形状は楕円形ないし長方形に近く、長径約55cm・短径45cm・深さ35cm程度、柱あたりはほぼ円形で径約15~20cm・深さ40cmである。西南隅の柱あたりのように、掘り方の北半に寄った部分に位置する例もある。また東北隅の柱穴は、やや傾斜して穿たれている。

カマドは北壁に取りつけられる。他の多くの例とは異なり、北壁の中央からやや東寄り(カマドの中心が北壁の中点から東方へ35cmずれており、カマド左袖の上端の線が大略北壁の中央にあたる)に構築されている。袖部の構築法・形態・焚口部の「門の字」様の礎の状況、燃焼

部底の凹み等、カマド本体の特徴は他の多くの例に共通する。焚口部開口60cm・高さ30cm、袖部奥行80cmである。カマドの遺存状態は最良の部類に入り、さらにまたその内部・周辺の遺物の残存状況も非常に良好で当時の生活相復元の為の良好な資料となる。短いながらも煙道も備えられる。北壁から北に40cm程度。燃焼部底が北壁と接する部分が20cm程高くなり、煙道部底はそのレベルのまま北へ延びる。この形式は後述のBh71・Ca18等にもみられるものである。明確にそれと見做しうる煙出しは土中には検出できなかった。また燃焼部底には礎・支脚その他の施設は認められなかった。

床面上のその他の施設としては、カマド西隣に径50cm程度の掘り込みがあり、その縁に壺型土器が位置していた。これは貯蔵穴と見做されてよいものであろう。周溝類似のものは北壁東半・西南隅・南壁中央部等に認められたが、幅も狭くかつ浅く・あまり顕著ではない。なお西壁直下の周溝に連続する形で、不整形の掘り込みがあり、その中に小型の壺その他の土器器類がみられるが、あるいはこれも貯蔵穴様の機能を推定してもよいのかもしれない。さらにカマド焚口の南に浅い円形の凹みがみられるが、これはカマドの使用時に関連する何らかの痕跡である可能性がある。最後に床面上に散見できる礎群は、その周辺に土器類を多く検出できたがその他の特異な状況を看取できなかったので、一応性格不明としておく。出入口等を推測させるものは認められなかった。

年代推定の資料としては、今泉遺跡内で一・二を争うほど良好な状態で床面上、カマド中出土の大量の土師器類と若干の須恵器片その他があげられる。

## (遺物)

### I 土師器 (第15-2・3・図2~20)

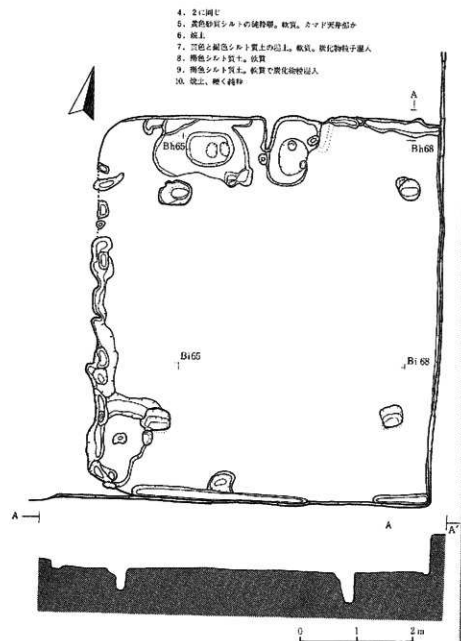
#### II 須恵器

**壺型** (同1)；破片ではあるが床面出土。体下半底部と思われる部分のみであるが、やや丸味をもつ底部の壺型ないしそれ類似の器形となるようである。体部中央にあたると思われる部分に沈線が繞る。内面には凹凸がありロクロ成形痕を留めるが、外面はほぼ全面に篋削り調整が加えられている。底部外面のほぼ中央部が「へソ状」に凹む。

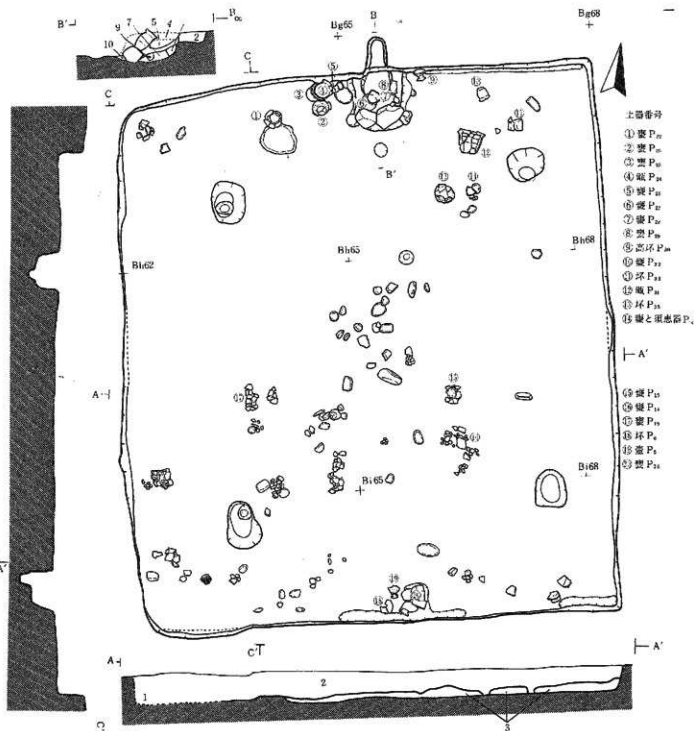
#### III 鉄器

**刀子形製品** (同21)；比較的保存状態の良好な小型品。刃部と思われる部分が偏平で、しかも木質部も残存していることから、刀子と推定した。なお木質部の端部には輪状の金具がはめ込まれている。

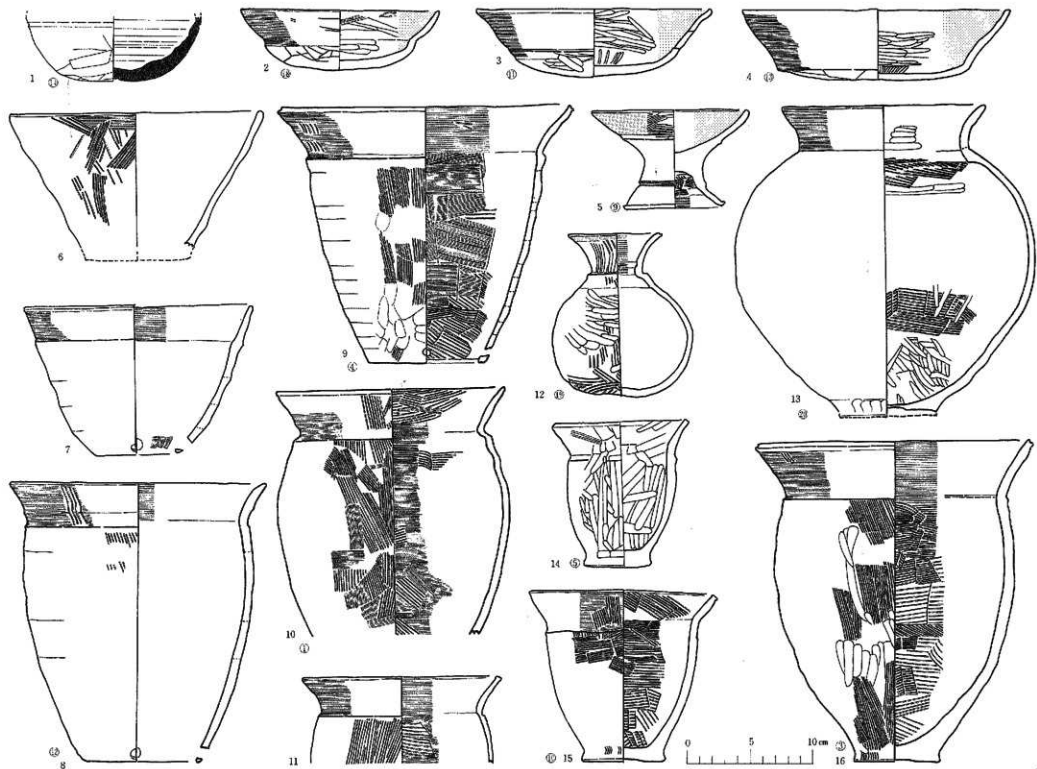
**針状製品** (同22)；釘ほどには太くなく、断面形が円形を呈すものをこう呼んだ。断片である。



第15-1図 Bg62型穴住居跡実測図 (上・旧測図(436) 右・新測図(436))

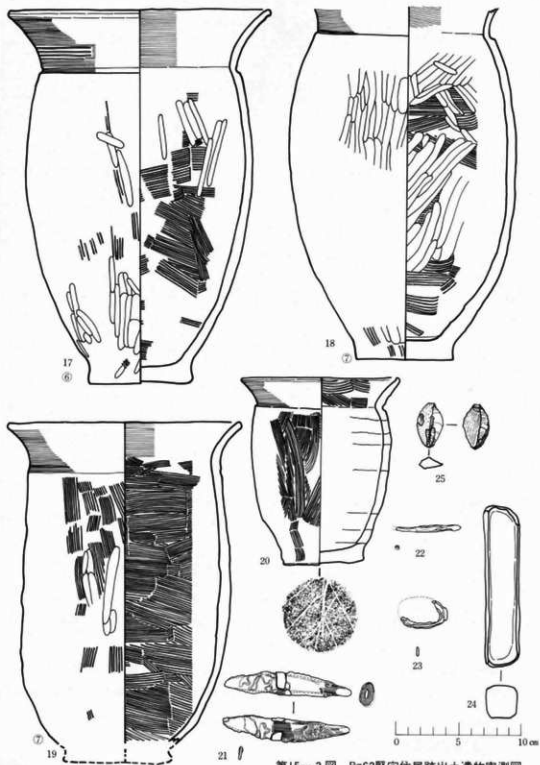


1. 褐色シルト質上に地層物と高砂色シルトの混在に入る。ぬい
2. 褐色シルト質上 微細砂混入。かたく粘り変し
3. 褐色シルトを層状にしきつたもの。ぬかく。粘りあり。Bg62 (10) 位の部分の隅みにしきつたもの



第15-2图 Beigou竖穴住居出土文物实测图





第15-3图 Bg62竖穴住居跡出土遺物実測図

第10表

分類	土器の 番号	平面図上 の位置	番実測 号図	調 査								器 高	口 径	底 径	備 考		
				口 縁 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部							
				内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面						
罌	⑤	14	横ナデor ヘラシガキ	横ナデor ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	11.7	11.0	5.3	
		20	刷毛目	横ナデ	ヘラシガキ	刷毛目	ヘラシガキ	刷毛目or ヘラシガキ	ヘラシガキ	木葉痕	木葉痕	木葉痕	木葉痕	15.1	12.7	6.7	
	⑥	17	横ナデor 刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	25.9	20.6	8.3	
	⑦	19	刷毛目	横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	27.4	18.4	11	
	⑧	16	横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	25.6	22.1	6.8	
	⑨	15	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	13.8	15.0	6.8	
	⑦	18	横ナデ ヘラシガキ	横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	28.8	15.6	7.6	
壺	①	10	横ナデ ヘラシガキ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	25.0	18.3	(7)	
	②	12	横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	13.1	7.5	5.5	
	③	13	横ナデor ヘラシガキ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	24.8	16.4	7.7	
坪	①	3	ヘラシガキ	横ナデ	ヘラシガキ	横ナデ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	5.4	18.6		内黒 丸底or蓋
	②	2	ヘラシガキ	横ナデ	ヘラシガキ	横ナデ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	4.7	15.9		内黒
	③	4	ヘラシガキ	横ナデ	ヘラシガキ	横ナデ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	5.6	21.4	15.2	内黒
高坪	⑤	5	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	7.8	12.6	8	内黒 彩色(外面)	
瓶	④	9	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	20.3	23.6	9.2		
		7	横ナデ	横ナデ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	12.0	18.3	6.4	2 孔	
	⑤	8	横ナデ	横ナデ	ヘラシガキ	刷毛目	ヘラシガキ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	22.4	20.6	8.8	2 孔	

罌状製品(同23);用途不明であるが、断面形が扁平な長方形をなし、おそらくはリング状の全体形をなすと思われるものをこう呼んだ。21の柄の端部にみられるようなものであろうか。

#### IV 石 器

砥石(同24);床面出土の太鼓の撥状の石であり、表面が平滑に研磨されているように思われるので、一応砥石として掲げた。しかし通例の砥石とは石材が異なり、研磨による擦りヘリ方もまた異なるので、あるいは自然礫かもしれず、その場合にはむしろカマド関連のものとして解した方がよいのかもしれない。

黒輝石破片(同25);覆土出土品であるが参考のために掲げた。おそらく剥片であろうが一部に表皮を残す。特別な細部加工は認められないが、断面の一部に使用痕らしき細かい破砕部がみられ、それが使用痕であるとすれば搔器的な機能を推定すべきであろうか。

#### 旧期Bg62竪穴住居跡(第15-1図)

既述のとおり東壁と南壁を新期Bg62住居跡と共有する形で重複して検出されたもの。新住居

跡の床面清掃後にその輪郭が現われた。

平面形は大体長方形をなし、その規模東西4.6m(推定)×南北5.1m、床面積23.46㎡(推定)程となろう。西壁がやや乱れている。住居中軸線(北壁と南壁のそれぞれの中点を結ぶ線)は磁北より約13°西に振れている。新・旧の振れの差は約1°であり、殆ど同じと見做してよい。

遺構内に堆積した旧住居跡本来の覆土は残存しておらず、新住居跡に帰属せしめるべき既往の第2層のみみられるだけである。

床面には殆ど傾斜も無く、ほぼ平坦である。壁高は、新住居跡の検出面までを測ると約50cmとなる。床面上には大小22のピット、掘り込み、溝類がある。

それらのうち、少なくとも主柱穴と見做してよいものは、ほぼ対角線上にのる形で配置され円形ないし長方形をなす4個であろう。平均深さ40cmである。東半の2個には掘り方と柱あたり様の部分を区別でき柱あたり径は約15cm程である。

カマドは痕跡程度にしか残っていないが、北壁に取りつけられたらしい。新住居跡例と同様に中心からやや東にずれた位置である。その他の構造等は一切不明だが、表面が焼けた楕円形の凹みがある点(カマド燃床部底か)；凹みの中央に円礫がある点(「門の字」の焚口部礫の抜き取り痕か)；凹みの西北端部にやや火力をうけた黄色粘土質シルトがある点(袖部か)等々から、他の多くの例に類似する構造であったと推定できる。推定される焚口間口70cm・カマド本体奥行90cmである。煙道部・煙出し部についても不明であるが、少なくとも土中に溝状に構築されるような形式の煙道部は認められない。

床面上のその他の施設としては、カマド左隣に不整な長方形の掘り込みがあり、位置的にみて貯蔵穴と見做しうる可能性がある。西南隅にも類似のものがある。周溝は痕跡的にはあるが、東壁以外の各壁直下に残存している。西壁の長楕円形の小ピット列は、周溝の痕跡と見做すべきであろう。

年代決定の資料となる遺物は全く出土せず、既往の第2層の存在とも考えあわせると、新住居を構築する際に除去された可能性が強い。したがって年代は遺構の特徴等から推定する他は無いが、いずれにしても新・旧間には、時間的にあまり大きな隔りはないものと思われる。

#### Bh09 竪穴住居跡 (第16図・第11表)

遺跡敷地中央やや西寄りに、既往のBf09の南に接して検出した。他の遺構との重複関係も遺構内での増改築の事実もともに認められず単一の遺構である。焼失により廃絶された家屋と考えられ、その結果として逆に各種の遺存状況が非常に良好なものとなっている。

遺構の平面形は、四隅にやや丸味をもつ正方形をなし、その規模は東西4.3m×南北4.3m、床面積18.49㎡となる。住居中軸線(南北壁のそれぞれ中点を結ぶ線)は、磁北から約14°15'

西に振れている。

遺構内に堆積した土層は大別して二層になる。

第1層 黒褐色シルト質土層。やや硬質で、粘性もそれほど強いとはいえない。黄褐色シルト質土塊・有機質土塊・炭化物塊等を混入し、覆土の大半をなす。

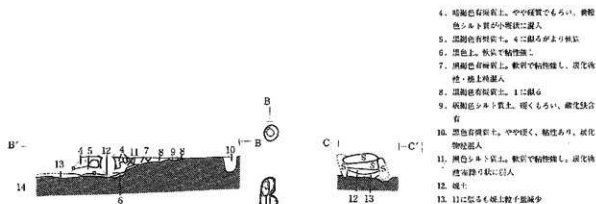
第2層 暗褐色有機質土層。軟質で粘性も強い。黄褐色シルト質土塊が斑状に混じる。後述のような床面上に一度つくられた掘り込み部分の凹みの覆土である。

若干の焼土の分布が見られる生活時の床面と思われる面の状況はほぼ平坦であり、その上に炭化材・遺物等がある。住居の構築法上他例には見られない特徴をもつ。それは住居の床面をつくる過程で、住居床面の中央が島状に高く残るように各壁に沿って巾80～100cm・深さ10～15cm程の掘り込みをつくる点である。この掘り込みを一旦つくっておいて、直ちにそれを前記の第2層でもって埋め戻して中央部の床面のレベルと同一にしている。したがって実際に生活を営んだであろう床面は平坦になることは既に述べた。この作業の目的は不明といわざるを得ないが、しかし、後述する4本の支柱穴と思われるもののすべてやカマドが、この掘り込みの中におさまることからすると、この掘り込みは支柱穴やカマド等の施設を築くさいの一種の「掘り方」的な意味を、さらに罫溝類似の用途をもっているのではないかと推定できる。壁高はこの掘り込み底からは35～40cm、生活時の床面からは25～30cmとなる。床面上には大小13個のピット掘り込み類がある。

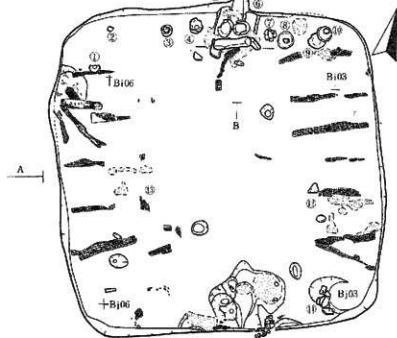
それらのうちで少なくとも支柱穴と見做し得るものは、ほぼ対角線上にのるように配置され前記掘り込み内に収まる円形の4個であろう。平均径27cm・平均深さ24cmである。尚支柱穴中には遺存した柱脚等は認められず、黒褐色の有機質土のみが存在した。

カマドは北壁に取りつけられているが、中心からやや東方へずれている。カマド本体の構築法・焚口部の「門の字」状の礎の使用（本例では完全な形で遺存している）等、他の例に共通する特徴をもつ。焚口部の間口70cm・高さ35cm、本体奥行60cmの規模である。本例には煙道部も煙出し部も備わっている。燃焼部底が北壁と連結する部分はやや高くなり、それを底面とする煙道部が北方へ80cm程延び、徐々に浅くなる感じで自然に終結する。そこからさらに北へ45cmの所に径20cm・深さ20cmの円形ピットがある。覆土に炭化物粒が認められた点や、煙道部との位置関係からしても煙出し部としてもよいのではないと思われる。本例ではカマドのみならずその周辺の遺物の保存状態が非常に良好であったのが特に目立つ。

床面上には貯蔵穴その他の施設は認められない。ここで生活時の床面上に多く認められ、本例が焼失家屋ではないかと推定せしめた炭化材について記す。これらは結果的に既述の一旦掘り込んでおいて埋め戻した、ある意味では貼り床的なものの表面に位置している。それらの配置は、東西壁の側に、それぞれが東西方向に併行するものである。東側に7箇所・西側にも7

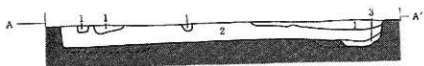


4. 暗褐色層直上、やや硬質でもろい、黄褐色シムト質が小塊状に混入
5. 淡褐色層直上、4に混るがより軟弱
6. 深褐色、軟弱で粘性強
7. 淡褐色層直上、軟弱で粘性強し、炭化後、硬く脆くなる
8. 淡褐色層直上、4に混る
9. 黄褐色シムト質上、硬くもろい、炭化体含有
10. 深褐色層直上、やや硬く、粘性あり、炭化体混入
11. 褐色シムト質上、軟弱で粘性強し、炭化体含有が約10%に及ぶ
12. 硬質
13. 11に似るが硬土層が減少



- 遺物番号
- ① 土器片
  - ② 灰P.
  - ③ 炭P.
  - ④ 炭P.
  - ⑤ 炭P.
  - ⑥ 炭P.
  - ⑦ 高塚P.
  - ⑧ 炭P.
  - ⑨ 灰P.
  - ⑩ 土器片
  - ⑪ 炭化体
  - ⑫ 炭化体

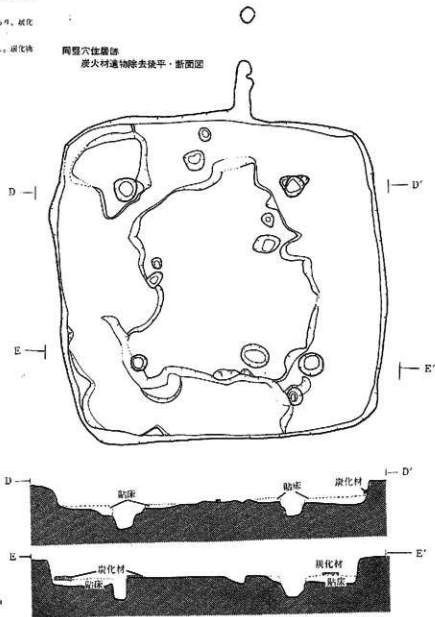
遺物・炭化材料除去前



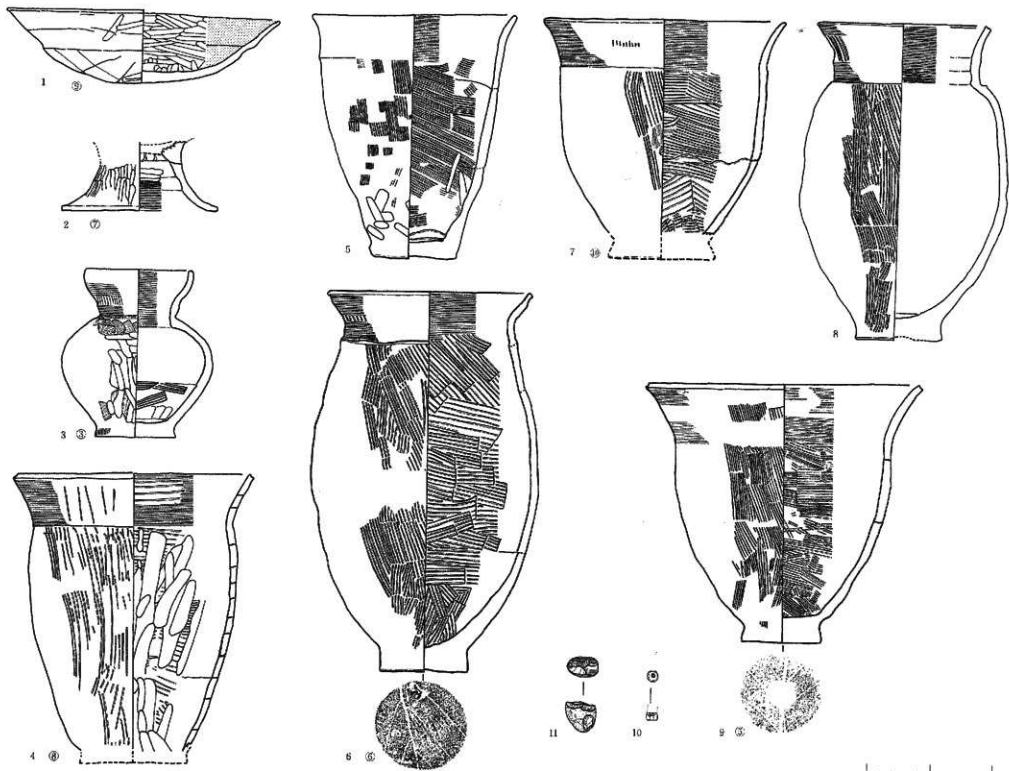
1. 深褐色シムト質土 硬質、全層に白色炭粒が混入、少々砂っぽい、黄褐色シムト質土層直上層、炭化物粒子等混入
2. 黄褐色シムト質土 2.2m程度、白色炭粒が混入、硬質や中硬質
3. 淡褐色層直上 軟質、粘性強、黄褐色シムト質土層に小塊状に混入、軟弱

0 1 2m

両壁穴住居跡  
炭火跡遺物除去後平・断面図



第16-1図 Bn09壁穴住居跡測図



第16—2图 Bn09整穴住居跡出土遺物実測図

箇所あったと考えられる（東南隅付近のものは調査時の不手際から削平してしまった）。中央部には遺存が見られない点が特異に感ぜられる。これらはいずれも端部が床面に直立ないし埋め込まれているものは存在せず床面上に横たわるもののみである。したがって少なくとも柱ないし壁材関連のものではないといつてよいと思われる。となれば残る可能性は屋根材となるであろう。屋根材とくに「垂木」様のものと見做し得ると思われる。さらにこれらの配置が、放射状をなすいわば求心的なものではなく、南北壁に併行するものである点をとれば、その上屋は所謂「切妻」的なものになるかとも推定される。ただし、東南隅・カマド焚口部等に、あるいは放射状になるかとも思われる材があるのが気になるが、なお入念に調査したが、壁部には板材の配置などは認められなかった。

年代推定の資料としては、カマド中やカマド周辺の北壁直下、一列にならんで豊富に見えられた各種の土師類がある。

(遺物)

I 土師器 (第16-2図・1~9) 第11表

分類	土器 平面 図上 の 番号	実 測 図 番 号	型								器 高	口 径	底 径	備 考
			口 縁 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部					
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面				
甕		5	横ナテ	横ナテ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	ヘラズリ ヘラナテ	ナテツケ カキトリ	ヘラツズリ	19.5	16.4	6.8	
	⑤	6	横ナテ	刷毛目のち 横ナテ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目 ヘラツズリ	刷毛目	木葉状	30.3	16.5	7.0	
	⑥	4	横ナテ	刷毛目のち 横ナテ	刷毛目のち ヘラツズリ	刷毛目	刷毛目のち ヘラツズリ	刷毛目	欠 欠	欠 欠	22.1	15.8-19	8.3	
	⑦	7	横ナテ	刷毛目のち 横ナテ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	欠 欠	欠 欠	17.1	19-20	9.5	
	⑧	9	刷毛目のち ヨコナテ	刷毛目のち 横ナテ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目のち ヘラツズリ	刷毛目	木葉状	20.6	21.4	6.3	
		8	横ナテ	刷毛目のち 横ナテ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	木葉状	25.2	13.9	6.9	
				刷毛目	刷毛目のち 横ナテ	刷毛目	刷毛目			木葉状				
					刷毛目	刷毛目								
壺	③	3	横ナテ	刷毛目のち 横ナテ	刷毛目のち ヘラツズリ	ヘラツズリ	刷毛目	刷毛目のち ヘラツズリ	刷毛目 ナテツケ	ヘラツズリ	13.3	8.3	6.4	
杯	④	1	ヘラツズリ	ヘラツズリ	ヘラツズリ	ヘラツズリ	ヘラツズリ	ヘラツズリ	ヘラツズリ	ヘラツズリ	5.8	21.7		内黒
				ヘラツズリ	ヘラツズリ				ヘラツズリ	ヘラツズリ				
					ヘラツズリ	ヘラツズリ				ヘラツズリ				
						ヘラツズリ	ヘラツズリ							
						横ナテ								
高杯	⑦	2	欠 欠	欠 欠	欠 欠	欠 欠	欠 欠	欠 欠	ヘラツズリ 刷毛目?	ヘラツズリ	4.6		12.5	胴径 7.4
瓶			横ナテ	横ナテ	刷毛目のち ヘラツズリ	刷毛目	刷毛目のち ヘラツズリ	刷毛目のち ヘラツズリ			13.1	15.5	7.4	

II 裝飾品 (同10)；破片ではあるが球形はなすず管状をなすものと推定できる。土製。遺存の状況が不良なので詳細は不明であるが、焼かれており、彩色などは認められない。床面出土。

III 石 器

**黒曜石片** (同11)：他の例と同様に覆土からの出土であるが、参考までに掲げる。黒曜石原石の円礫を半割し、その断面を刃部同様に剥離している。そこに使用痕らしい細かい破砕部があり、もしも使用したとすれば搔器ないし彫器的な機能を推定してよいのであろうか。

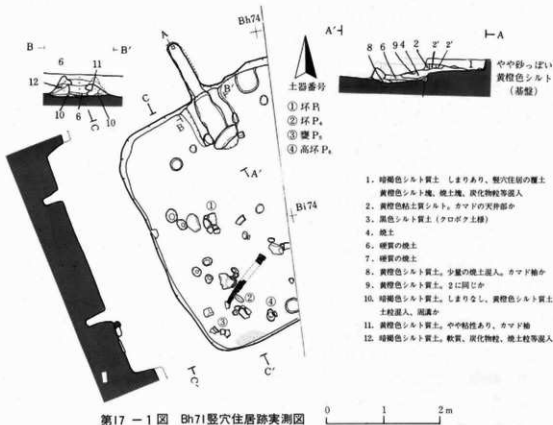
**Bh71竪穴住居跡** (第17図・第12表)

遺跡敷地東縁中央やや南寄りて既述のBg62の東隣りに検出。その東半は道路敷地外にわたったため、その部分は未調査である。

他の遺構との重複関係と増改築の事実は、少なくとも調査分の範囲内には認められない。

遺構の平面形は未調査分があるために未詳としかいいようがないが、後述のカマドが北壁のほぼ中央に位置すると仮定すると、大略長方形となり、その規模東西3.5m(推定)×南北3.9m、床面積13.65m<sup>2</sup>(推定)程にもなるのであろうか。住居中軸線方向(これもしいて推定して、カマド中心部と推定される南壁の midpoint を結ぶ線、ちなみにそれは煙道の東西二等分線の延長にほぼ一致する)は、磁北から約29°西に振れる。

遺構内に堆積した土層はほぼ一層である。実測図にはよく表われていないが、暗褐色シルト



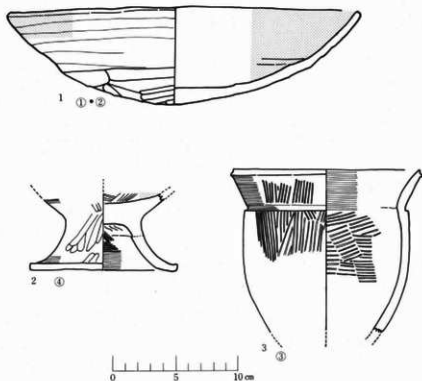


質土層。しまりがあって粘性はあまり無く乾燥すると大きくクラックが入る。黄橙色シルト質土塊・焼土粒子・炭化物粒子等が混入する。

床面には傾斜や激しい凹凸はみられずほぼ平坦である。壁の遺存状況もよく、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約50cm程である。ただし掲げた実測図では30cm程になっているが、これは遺構検出に苦労した結果、かなり掘り下げ過ぎたために生じたものである。床面上には9個のピット・掘り込み類と、数個の礫、焼土の集積部等がみられる。

それらのうち、少なくとも主柱穴と見做しうるものは、ほぼ対角線上にのる位置にあり、円形をなす4個であろう。平均径20cm・平均深さ30~35cmである。掘り方と柱あたりの区別はつけられなかった。尚西南隅の1個の縁に礫が位置していたが、これはあるいは柱関連の機能をもつものかもしれない。

カマドは北壁につくられている。実調査部分があるために不明であるが、他の例からしてほぼ北壁の中央に近い部分に取りつけられたのであろう。カマド本体の構築法・燃焼部底の形状・焚口部の構築法などに他例に共通する特色がある。焚口部の「門」字状の礫の遺存状態は非常に良好である。本例には煙道部と煙出し部もみられる。燃焼部底が北壁と接続する部分が



第17-2図 Bh71竪穴住居跡出土遺物実測図

一段高くなり、それが煙道部底となり・そのままほぼ水平に北へ90cm延び、そこで垂直に立ち上がり終結する。末端部近くの底面上に土師器片が1個みられ、ここが煙出し部とされた可能性が高い。なお燃焼部底と北壁が接続する部分の北壁直下に細い溝状のものがあり、それはおそらく周溝の一部と考えられる。とするならば、本例においては住居の壁とその直下の周溝をほぼつくりあげてからカマドを構築したということになる。

床面上にみられるその他の施設としては、まず東北隅に円形の掘り込みがある。これはカマドとの位置関係からして貯蔵穴にうってつけのものであるが、5cmと非常に浅く、その点に多少踏踏させるものがある。次に礎の分布についてはそれ自体の配置に何らかの意図も読みとれず、またその周辺にも何らの異常も看取できないので、性格不明といわざるを得ない。ただし、それらの中にあるいは柱関連のものがあるかもしれないことについては既に述べたとおりである。最後に西南隅の壁直下に焼土の集積と、その近くに1本分の炭化材が見られるが、これらについても積極的な意味は読みとれなかった。少なくとも焼失家屋ではないのであろう。

年代推定の資料としては、床面出土の数点の土師器がある。

(遺物)

I 土師器 (第17-2図・1・2) 第12表

分類	上平器 器番号 上の号	実測器 番号	調								器 高	口 径	底 径	備考			
			口縁部		体部上半		体部下半		底部								
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面							
罍			刷毛目 刷ナデ	刷毛目 刷ナデ	刷毛目	刷毛目	欠	欠	欠	欠	欠	欠	32.8	17.5	7.0		
	③	3	刷毛目 刷ナデ	刷毛目 刷ナデ	刷毛目	刷毛目	欠	欠	欠	欠	欠	欠	16.6	10.3	6.4		
环	①②	1	へらこぎ	へらこぎ?	へらこぎ	へらこぎ	へらこぎ	へらこぎ	へらこぎ	へらこぎ	へらこぎ	へらこぎ	へらこぎ	へらこぎ	へらこぎ	へらこぎ	
高环	④	2	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	4.7	14.0			

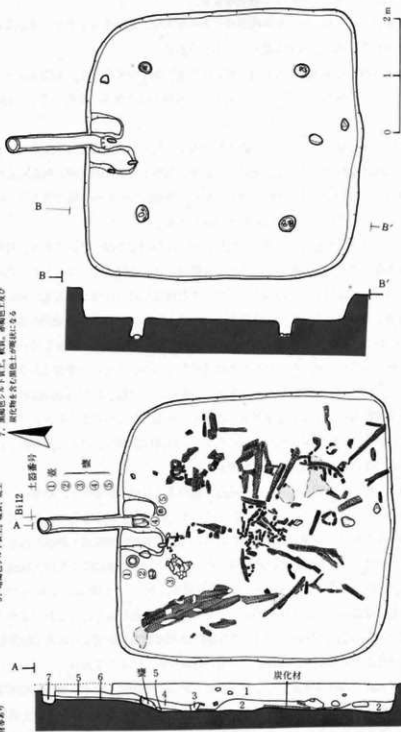
B115 竈穴住居跡 (第18図・第13表)

遺跡敷地中央部やや西寄りの地点で、既述の焼失家屋Bh09の左隣に検出した。後述のように本例も焼失家屋である。

他の遺構との重複関係も、遺構内での増改築の事実もともに認められず、単一の遺構である。床面上に大量の炭化材が遺存しているため、本住居は火災により廃絶を、その後も同一場所での復興・新築はなかったと見做しうる。そのために遺構・遺物の保存状態が一面ではかえって良好なものになっているといえる。

遺構の平面形は、四隅にやや丸味を帯びた長方形をなし、その規模は、東西4.2m×南北4.5m、床面積18.90㎡程になる。住居の中軸線(北壁の中央にあるカマドの中心と南壁の中点を結ぶ線)は磁北から約6°5'西に振れている。

1. 黄褐色シルト質土、硬く、しまりあり、黄褐色シルト質土層の小塊状に混入
2. 黄褐色シルト質土、1より軟質、黄褐色シルト質土層の混入は1より少量、炭化材等あり
3. 黄褐色シルト質土、軟質、硬土塊、炭化物混入
4. 黄褐色シルト質土、軟質、炭化物・灰、多量に混入
5. 黄褐色シルト質土、硬質、硬土、炭化物を含む黄褐色土の塊状になる
6. 黄褐色シルト質土、4より粘性强い、炭化物を含む黄褐色土、硬土塊の混入
7. 黄褐色シルト質土、軟質、黄褐色土及び炭化物を含む黄褐色土の塊状になる



B15竪穴住居跡、炭化材遺物除去後の平面図

第18-1図 B15竪穴住居跡実測図

黄褐色シルト質土 (基礎)

遺構内に堆積した土層は大別して二層からなる。

第1層 黒褐色シルト質土層。やや硬質でしまりがあり、乾燥するとクラックが入る。黄褐色シルト質土塊が小斑状に混入する覆土の大半を占める。

第2層 茶褐色乃至暗赤褐色シルト質土層。第1層に比しやや軟質で、黄褐色シルト質土塊の混入も密になる。炭化物・土器片等が混入する。床面・炭化材等に密着してその上層に堆積している。

床面の状況は傾斜も殆どみられず、ほぼ平坦である。炭化材・遺物等は床面上に密着して遺存している。床面は全体的にはあまり焼けておらず、部分的な焼土の集積が見られる程度である。壁の残存状況も良好で、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は40～45cm程度であろう。床面上には4個のピットと3個の礎の分布が見られるのみである。

4個のピットはほぼ円形をなし、その平均径20cm・平均の深さ25～30cmであり、対角線上に正確にのる位置関係にある。したがってこれら4個は支柱穴と見做してよいものと思われる。尚掘り方と柱あたりの区別はつけられなかった。また柱穴中には柱脚の残欠等は検出されず、黒褐色の有機質土のみが認められた。既述のBh09とともにこの点に多少の疑問が残る。それは柱脚が遺存しないことの解釈である。即ち自然に腐敗してしまったので遺存していないのか、あるいは火災後に人為的に抜き取られたために遺存しないのか、という問題である。調査時の観察によると支柱穴の周囲には特別な異常は認められなかったし、とくにBh09における整然とした炭化材の遺存配置などからすると前者の解釈がより妥当なものだとは思えるのであるが。最後にすべての柱穴底面に数個の礎がみられたが、これはBi24例におけると同様に、柱脚を支える一種の礎盤的な役割をになうものとも考えられる。

カマドは北壁の中央に構築される。その構造は他の多くの例に共通する点が多い。焚口部の礎は左袖部のものしか残存していないがやはりこれも「門の字」状をなしていたのであろう。焚口間口60cm・高さ30cm、本体部奥行90cm程にもなろう。本例は煙道部・煙出し部も備えている。今泉遺跡としては、比較的長めのそれらを有する。カマド燃焼部底が北壁と接続する部分が傾斜をもって一段高くなり、そのレベルが煙道部底面となる。そのままほぼ水平に北へ110cm程延び、末端部に径20cm・深さ30cmの円形ピットを穿ち、煙出し部としたものようである。後述のCb24に共通する構造である。カマド燃焼部には土師器裏が横倒しの状態で位置し、同じく燃焼部底には礎がうめ込まれ、支脚として用いられたものようである。

床面上にはその他の遺構は検出できなかったが、大量の炭化材と若干の焼土集積部分が遺存していた。炭化材の量の多大と焼土の存在から、本例を焼失家屋の可能性があると判断し、既にそのような説明を加えてきた。これらの炭化材はすべて床面上に単にのるだけの状態にあり、床面上・壁直下に直立していたことをうかがわせる証左は、何も存在しなかった。また壁に沿

って垂直に立った状態にあったことをうかがわせる資料も存在しなかった。したがってこれらは柱材や壁関連の材ではなく屋根関連の材と見做すべきと思われる。その遺存配置をみると、既述のBh09例に比し非常に乱雑で、火災後の人為的な攪乱をすら推定せしめるものがある。もしもそれが無かったと仮定した場合には、これらの配置の特徴は、住居の中心から放射状になっているとすることができよう。とすると、その屋根の構造はBh09において推定した「切妻」的なものとは大きく異なることになろう。調査結果から得た資料では以上の二様の解釈が可能になることだけを掲げておく。

遺構の年代推定の手掛りとなしうるものは、カマド中・カマド周辺出土の土師器類がある。

## (遺 物)

I 土師器 (第18-2・3図・1~7) 第13表

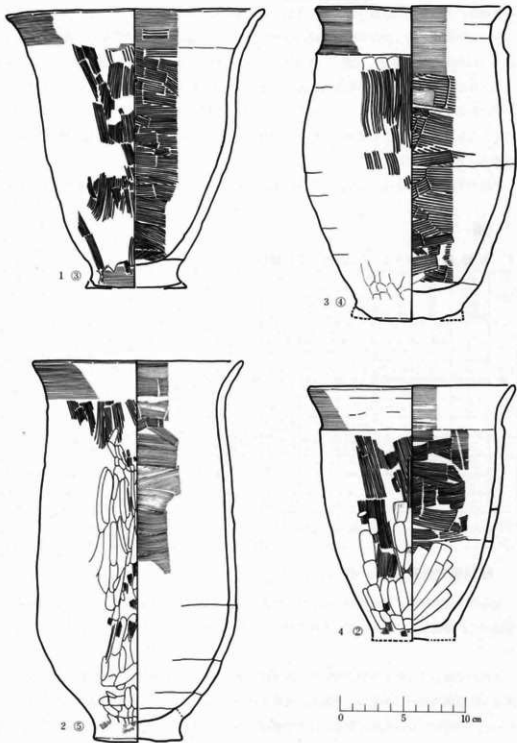
分類	土師器番号 土師器上 号の	実測区 番号	調 型								器 高	口 径	底 径	備 考			
			口 縁 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部								
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面							
甕	②	4	横ナテ	横ナテ	刷毛目	刷毛目	刷毛目のち ナテツク	ヘラズリ ヘラミガキ			刷毛目	20.3	16.2	6.6			
	③	1	横ナテ	横ナテ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	ミガキ	22.2	20.6	7.6			
	④	3	横ナテ	横ナテ	刷毛目	刷毛目 (のヘラズリ)	刷毛目	刷毛目	刷毛目 のち ナテツク	ナテツク	ミガキ or ナテ	25.1	15.6	8.6			
	⑤	2	ヘラナテ	横ナテ	ヘラナテ	ヘラミガキ	ヘラナテ		刷毛目のち ヘラミガキ	ヘラナテと ナテツク	ミガキ	30.5	17.5	7.2			
	6	横ナテ	横ナテ(?)	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目 ヘラズリ							13	15-16	7(?)			
壺	①	5	横ナテ	刷毛目のち 横ナテ	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目	刷毛目のち ヘラミガキ	ヘラミガキ	欠	欠	欠	欠	欠	欠	14.0		
坏					水洗痕												染色器
				ミガキ	横ナテ						ミガキ	ヘラミガキ(?)					
高坏							ヘラズリ 刷毛目 ナテか ミガキ(?)			ミガキ			6.2	8	6.4		小型鉢 又は碗
瓶								刷毛目	ヘラズリ								

Bi24 竪穴住居跡 (第19図・第14表)

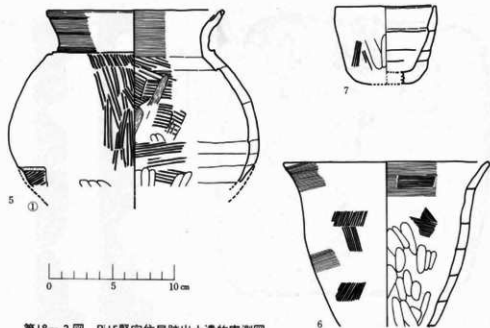
遺跡敷地西北縁部に検出した。段丘崖にほど近い平坦面である。他の遺構との重複関係も、遺構内での増改築もいずれも認められず単一の遺構である。遺構の保存状態は非常に良好である。

遺構の平面形は大略正方形に近いが、四隅に丸味をもち、また各壁の中央部が外方に張り出すように弧状のカーブをもつ。全体的に丸味が印象づけられる。その規模は東西4.3m×南北4.3m、床面積18.49㎡程度となる。住居中軸線方向(北壁中央のカマドの中心部と南壁の中心点とを結ぶ線)は、磁北から約20°西に振れている。

遺構内に堆積した土層は非常に単純であり大別して二層となる。



第18-2图 Bii5竖穴住居跡出土遺物実測図



第18-3図 B15竪穴住居跡出土遺物実測図

第1層 暗褐色シルト質土層・黒色味が強い。大型の黄橙色シルト質土塊が混入。覆土の大半を占める。

第2層 黄橙色シルト質土と褐色シルト質土の混土。床面に接して、部分的にみられるのみ。生活の何らかの痕跡であろうが、貼床ではない。

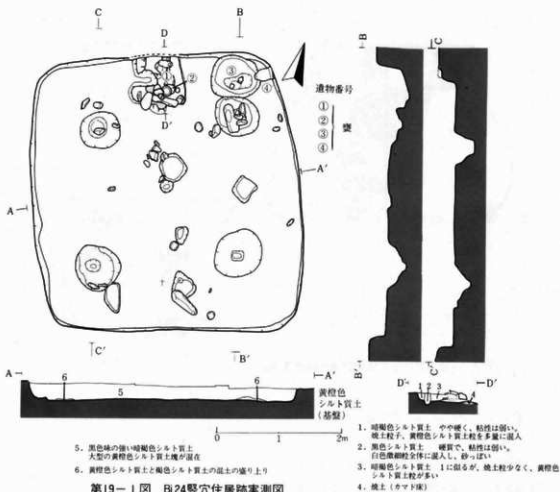
床面には傾斜もみられず、全体的にはほぼ平坦である。壁の遺存状態も良好で、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30cm前後である。床面上には大小10個のピット掘り込み類がある。

それらの中で、少なくとも主柱穴と見做しうるのは、正確に対角線上に位置する大形の4個であろう。これらは今泉遺跡中で最良の資料といえ、掘り方と柱あたり、さらにおそらくは柱穴に伴うと見做しうる礎の三者が、明白なセットをなしていることを看取できる。

掘り方はほぼ円形をなし、その径約60cm~70cm、柱あたりと思われるものは楕円形ないし長方形をなし、長径20cm・短径15cm・深さ30cm程度を測る。

東北隅の掘り方覆土に礎がみられるが、これらはおそらく柱を周囲から圧して固定するためのものと考えられる。また西北隅のもの柱あたり部の床面にも礎が見られるが、これには柱端部を支える礎板的な役割を想定しうると思われる。

主柱穴は以上であろうが、他に床面中央部にほぼ南北に一列にならぶピット列がみられる。これらはすべてが深いわけではないが、その配置からみて住居の構造に関連する何らかの意味をもつものかもしれない。



第19-1図 B24竈穴住居跡実測図

カマドは北壁に正確に中央に構築される。左袖部が破損するなど多少遺存状況が悪い部分もあるが、構造その他は他例に殆んど同一である。焚口部間口70cm・高さ27cm、本体部奥行80cm程度である。本例には土中にそれと認められるような煙道部・煙出し部は検出できなかった。

床面上のその他の施設としては、カマド右隣の西北隅に径75cm・深さ30cmの掘り込みが穿たれ、その上縁と内部に大小の土師器の壺が位置していた。これは貯蔵穴と見做してよいものであろう、これ以外の施設は認められない。

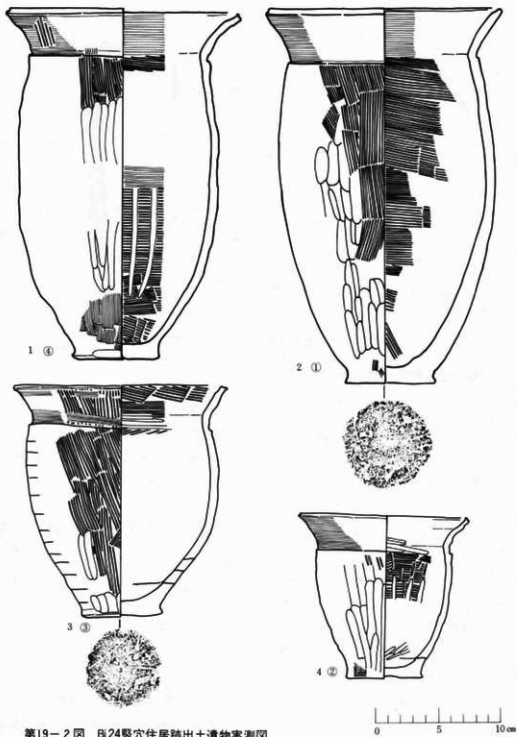
年代推定の資料としては、カマド中と貯蔵穴中から出土した土師器類があげられる。

### (遺物)

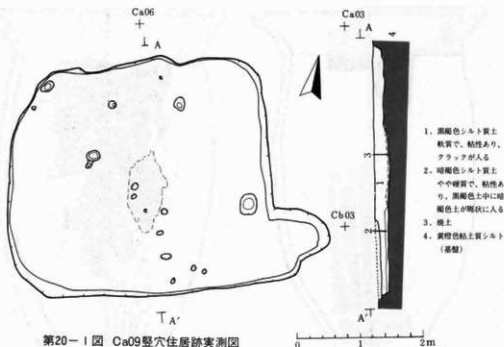
#### I 土師器 (第19-2図・1~4) 第14表

分類	土器番号	平面図上	番実測号	壺						器高	口径	底径	備考		
				口縁部		体部上半		体部下半						底部	
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面				
壺	①	2	壺ナナ	壺ナナ	壺ナナ	網毛目	網毛目	網毛目	網毛目	網毛目	網毛目	木葉肌			
	②	4	へらしガキ	網毛目 へらしガキ	網毛目 へらしガキ	網毛目 へらしガキ	網毛目 へらしガキ	網毛目 へらしガキ	網毛目 へらしガキ	網毛目 へらしガキ	網毛目 へらしガキ	木葉肌			
	③	1	壺ナナ	網毛目 壺ナナ	網毛目 壺ナナ	網毛目 へらしガキ	網毛目 へらしガキ	網毛目 へらしガキ	網毛目 へらしガキ	網毛目 へらしガキ	網毛目 へらしガキ	木葉肌			
	④	3	網毛目	網毛目 へらしガキ	網毛目 壺ナナ	網毛目	網毛目	網毛目	網毛目	網毛目	網毛目	木葉肌			





第19-2 図 B24 竖穴住居跡出土遺物実測図



第20-1図 Ca09竪穴住居跡実測図

#### Ca09竪穴住居跡様遺構 (第20図)

遺跡敷地中央部南端近くで、前述のBh09の南方に検出した。

東南隅で後世の掘り込みと重複しているが遺構内での増築の事実は認められない。

前記の後世の掘り込みの張り出し部を除いた遺構の平面形は、大略長方形に近く、その規模は東西4.1m(推定)×南北3.7m(推定)、床面積15.17㎡(推定)程となろう。

遺構内に堆積した土層は大別して二層からなる。

第1層 黒褐色シルト質土層。この種のものとしては珍らしく軟質で粘性もある。やはり乾燥すると大きくクラックが入る。覆土の大半を占める。

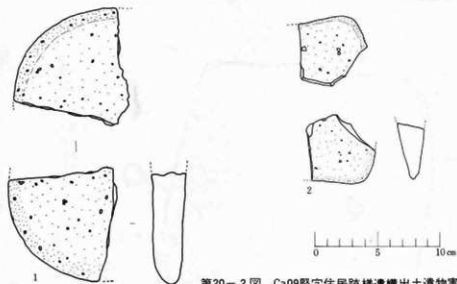
第2層 暗褐色シルト質土層。やや硬質となるが、粘性もややある。黒褐色土塊が小斑状に混入する。遺構北半の中央部にのみ部分的に分布する。

床面は傾斜もなくほぼ平坦である。壁の遺存状態は不良で、傾斜をもって立ち上がり、壁高は一応18~20cm程である。床面上には6個のピットと数個の礎、焼土が見られる。

それらのうち明らかに柱穴と見做しうるものは存在しない。

カマドと見做しうるものもやはり存在しないが、床面中央部に楕円形の焼土集積部分があり、あるいはこれが炉的な機能を果たしたのかもしれない。床面上の礎は性格不明であり、その他の施設は存在しない。

年代推定の資料となしうるものは床面上からは全く検出されなかった。わずかに覆土中から



第20-2図 Ca09竪穴住居跡様遺構出土遺物実測図

縄文式土器（晩期）の細片と、ロクロ成形と思われる土師器の細片を得たのみである。

以上のように、本遺構は積極的に竪穴住居跡と主張することは、少しく躊躇せざるを得ず、標記のような遺構名を冠した次第である。しいて年代を推定すれば、覆土中出土の遺物とA62の如きカマドをもたない遺構の年代とを勘案して少なくとも奈良時代までは遡らず、平安時代以降に属する可能性があるとのみしておく。

### （遺物）

打割された偏平礫（第20-2図1・2）：覆土出土であるが参考までに掲げた。他の例と同様に偏平な円礫の周縁と片面を研磨し、それぞれをうすくまたは平らにしたものを、半割ないし四分割したもの。したがって片面はフラット、片面はカーブすることとなる。用途、年代ともに不明である。

### Ca18竪穴住居跡（第21図・第15表）

遺跡敷地西南端近くで、既述の焼失家屋B115の南壁にはほぼ壁を接して検出した。

既述のとおりB115とは非常に近接はしているが重複はしておらず、また遺構内での増改築の事実も認められず、単一の遺構である。ただしその割には、カマド以外の遺構各部の遺存状態は良好とはいえない。

遺構の平面形は、南壁の中央付近を調査時にやや掘りすぎた点、さらに各壁が心もちカーブする点を除けば、大略正方形に近い。その規模は東西4.1m×南北4.15m、床面積17.015㎡程になる。住居中軸線方向（東壁のほぼ中央に取りつけられたカマドの中心と、西壁の中点とを結ぶ線）は、磁北から69°15′東へ振れている。これら今泉遺跡内で検出した竪穴住



し、西北隅・東南隅のそれぞれに多少その可能性があり、さらにひいき目にみれば、東南隅の長方形に近いものと、西南隅のやや大きめであるが不整形のものにもその可能性があらうか。いずれにせよ。本遺構では、他の多くの例におけるようなきちんとした配置をなすようなピットは存在しない。前記4個の平均径25cm・平均の深さ20cm程度にもなるであろうか。掘り方・柱あたりの区別はできなかった。

カマドが例外的に東壁中央に構築されたことについては既に述べた。構築位置は全く異なるが、しかしその他の構築法等の特徴は、共通性が強い。とくに焚口部の「門の字」状の礎の遺存状態は非常に良好で、最良の部類に属する。焚口部間口76cm・高さ20cm、本体部奥行70cm程となる。本例には煙道部も煙出し部も備わっている。燃焼部底が北壁と連結する部分が10cm程高くなり、そこから煙道部の底面となる。煙道部はそのまま北へ50cm延び、その先は径20cmの煙出し部となる。煙道部と煙出し部はトンネル状に連結している。これは今泉遺跡においては、それと明確に認められた唯一の例である。煙出し部の底面には、特別な施設は認められない。

床面上のその他の施設としては、まず東南隅の径50cm・深さ20cmの掘り込みがあげられる。これはカマドの右隣という位置関係からしても、貯蔵穴と見做されてよいものであろう。この他に床面上に礎が数個認められたが、これらにはその用途を推定させるに足る積極的証拠を見出し得なかった。

年代推定の資料としては、カマド中・カマド両側に検出した土師器群があげられる。

## (遺物)

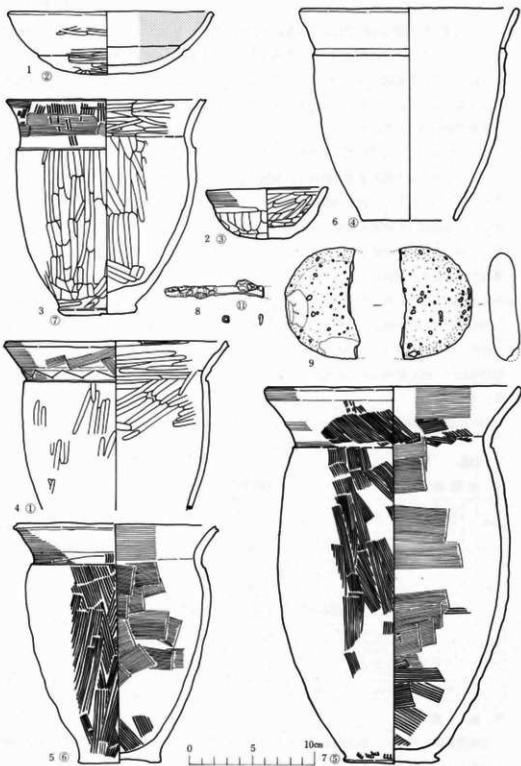
### I 土師器 (第21-2図・1~7) 第15表

分類	土師器 番号 上の	実測 図番号	調 整								器 高	口 径	底 径	備 考			
			口 縁 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部								
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面							
甕	①	4	へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	欠	欠	欠	欠	18.0		
	⑤	7	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ					30.1	20.5	7.7
	⑥	5	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	水置痕	水置痕	水置痕	水置痕	19.4	16.4	6.7
	⑦	3	へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	水置痕	水置痕	12.3	16.0	6.3
杯	②	1	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	5.1	16.5		(内蓋)
	③	2	へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	4.1	9.8	4.1	(フ)
瓶	④	6	へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	へらしガキ	17.0	17.6	7.6	
				刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ	刷毛目の中へらしガキ							

### II 鉄 器

刀子形製品 (同8) ; 覆土出土であるがおそらく刀子であろう。刃部と思われる部分の断面形は扁平で、柄にさし込むと思われる部分のそれは方形でかつ中空である。

III 打割された扁平礫 (同9) ; これも覆土出土である。特徴は既述のCa09のそれと同じである。



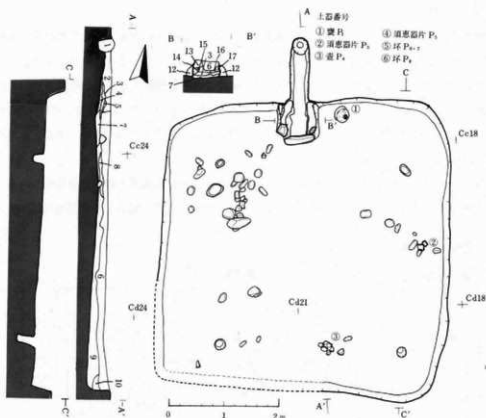
第21-2图 Ca18竖穴住居跡出土遺物実測図

**Cb24 竪穴住居跡** (第22図・第16表)

遺跡敷地西南端に検出した。

他の遺構との重複関係も、遺構内での増改築の事実もともに認められず、単一の遺構である。ただし、南壁と西壁の大部分が農業用水路のために破壊され、不明となってしまう。その他の遺構・遺物の遺存状態もあまり良好とはいえず、全体的に保存不良といわざるを得ない。

遺構の平面形は大略やや長方形がかった正方形をなし、その規模は東西5.2m(推定)×南北5.5m(推定)、床面積28.60m<sup>2</sup>(推定)程になろう。住居中軸線方向(北壁中央に取りつけられたカマドの中心と、推定される南壁の中点を結ぶ線)は、磁北から約90°西に振れる。



第22-1 図 Cb24 竪穴住居跡実測図

- |   |  |
|---|--|
| <p>1. 赤褐色シルト質土。やや硬質、粘性あり。焼土粒混入。一部に黄褐色シルト塊混入</p> <p>2. 赤褐色シルト質土。やや硬質、粘性あり。焼土、炭化物粒混入。1より暗い</p> <p>3. 焼土</p> <p>4. 暗褐色シルト質土。かたいがやや粘性あり。炭化物混入</p> <p>5. 黄褐色シルト質土。軟質で粘性あり</p> <p>6. 暗褐色シルト質土。やや硬いが、粘性もあり。黄褐色シルト塊混入</p> <p>7. 赤褐色シルト質土。軟質で粘性あり。焼土塊・炭化物粒混入</p> | <p>8. 黒褐色シルト質土。軟質、粘性あり</p> <p>9. 赤褐色シルト質土。12より粗く硬いが粘性もややあり</p> <p>10. 黒色粘土質土。軟く粘性あり</p> <p>11. 黄褐色粘土質シルト(基盤)</p> <p>12. 暗黄色粘土質シルト。カマド跡</p> <p>13. 褐色シルト質土。かたく、粘性無し。焼土粒混入</p> <p>14. 褐色シルト質土。13より黒味強し。かたく粘性無し。焼土粒混入</p> <p>15. 赤褐色シルト質土。硬いが、やや粘性あり</p> <p>16. 赤褐色シルト質土。15より黒っぽい。軟質で、粘性あり</p> <p>17. 褐色シルト質土。14に似る</p> |
|---|--|

遺構内に堆積した土層は大別して二層からなる。

第1層 暗褐色シルト質土層。やや硬質ではあるが粘性もややある。乾燥するとクラックが大きく入る。黄橙色シルト質土塊が混入。

第2層 黒褐色シルト質土層。しまりがあるが粘性もかなり出てくる。農業用水路等の影響かと思われる。

床面は中央部がやや高く、南方が低くなり多少の傾斜面をもつ。壁は残存部では垂直に近く立ち上がり、壁高は約40cmとなる。床面上に5個のピットと散在する礫群がみられる。

5個のピットのうち、大略対角線上にのる位置関係を保つ4個が、あるいは主柱穴と見做されてよいものかもしれない。それらの平均径20cm・平均の深さ32cm・掘り方と柱あたりの区別はなしであった。

カマドは北壁の中央に構築される。構築法その他は多くの例に共通する。焚口部も礫も残存する。焚口部開口60cm・高さ30cm、本体部奥行80～85cm程である。本例にはB115のようなやや長めの煙道部と煙出し部が備わっている。燃焼部底が北壁と接続する部分が傾斜をもって高くなり、そこからが煙道部底となり、それが徐々に浅くなりながら北へ1m延び、その端部に径20cm・深さ30cm程の円形ピットが穿たれ、そこが煙出し部となるもようである。煙出し部底面は煙道部底よりも深くなる。

床面上にはその他の特別な施設は認められない。床面上に散在する礫も性格不明である。

年代推定の資料としては、カマド周辺から出土した若干量の土師器と須恵器破片類がある。

## (遺物)

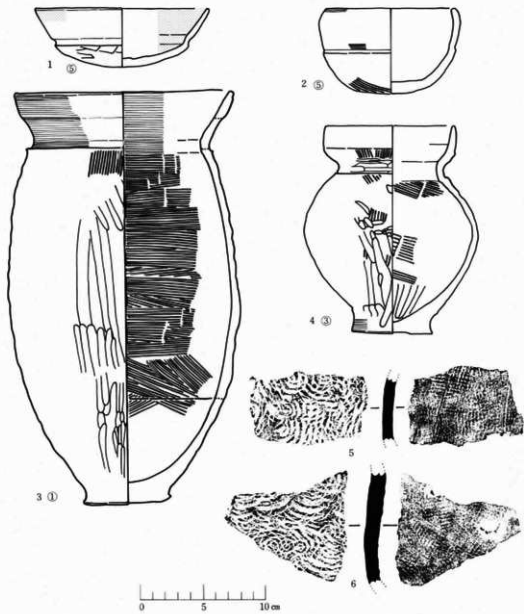
I 土師器 (第22-2図・1~4) 第16表

分類	土師器 図上 番号	実測 図番 号	調								部 高	口 径	底 径	備 考
			口縁部		体部上半		体部下半		底部					
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面				
甕	①	3	横ナア	横ナア	網毛目	へらミガキ 又はヘラナア	へらミガキ	へらミガキ 又はヘラナア	へらミガキ	本業煎				
甕	②	4	へらミガキ	網毛目のち へらミガキ	網毛目のち へらミガキ	網毛目のち へらミガキ	網毛目のち へらミガキ	網毛目のち へらミガキ	へらミガキ 又はヘラナア	本業煎				
坏	③	2	へらミガキ	網毛目のち 一部横ナア	へらミガキ	網毛目のち ヘラミガキ	へらミガキ	へらミガキ	へらミガキ	網毛目				
	④	1	へらミガキ	横ナアか へらミガキ	へらミガキ		へらミガキ	へらナズリ	へらミガキ	へらナズリ				

## II 須恵器

甕 (同5)：破片ではあるが床面出土。おそらく甕型であろう。外面に不鮮明ながら叩き目内面に所謂「青海波」文類似のものがみられる。外面には一部に施釉ともみえる灰緑色の部分がある。





第22-2 図 Cb24 竪穴住居跡出土遺物実測図

第17表 遺構一覽

遺構名	辺(壁)長 <sup>m</sup>		床面積 <sup>m<sup>2</sup></sup>	平面形	壁高 <sup>m</sup>	遺構中軸線	五の端北少 らの基札	柱穴 個数	左の配置	形・カットの 設定位置	構造	遺出しと 構造のつく りの区別	形跡の有無と その形状	左の 位置	その他	
	東西	南北														
Ai 65 竪	4.5	4.5	20.25	正方形	0.24	北壁と南壁の中心を結ぶ線	N 4° W	?	?	?	?	?	無	?		
* 田	?	?	?	?	?	?	*	?	?	?	?	?	無	/	無	
Ai 62	4.0	4.0	16.00	正 丸	0.10	北壁と南壁の中心を結ぶ線	N 11° W	4?	壁内 正方形	(伊)? 縁部中央	無?	無?	有	円形	縁部中央	
Bb 06	5.0	5.0	25.00	正 丸	0.20	*	N 50° W	1?	*	?	?	?	有	長円	縁部中央	
Bc 71 竪	3.5	3.5	12.25	正 角	0.14	*	N 25° W	?	?	?	?	?	?	?	?	
* 田	3.4	3.4	11.56	正 丸	0.14	*	N 5° W	?	北壁 中央	?	?	?	?	?	?	
Bc 53	5.0	5.0	25.00	正 角	0.20	*	N 40° W	1?	壁内	?	?	無?	有?	不明形	東北隅?	
Bd 12 竪	4.0	5.0	20.00	長方形	0.30	*	N 33° W	4?	壁内 正方形	?	?	無?	?	?	?	ロゴ成形
* 田	?	?	?	?	?	*	?	?	北壁?	?	?	?	?	?	?	
Bd 59	6.5	6.2	40.30	長 角	0.40	北壁と南壁の中心を結ぶ線	N 42° W	4	壁内 正方形	北壁 中央	無	有?	有	円形	カッパ石屋 (西)	
Bd 03	4.7	4.7	22.09	正 丸	0.35	*	N 22° W	4	*	?	有	有	有	長円	西北隅	
Bf 15	4.7	3.7	17.39	長 角	0.21	*	N 13° W	4	*	?	有	無	?	?	?	
Bf 09	4.1	3.9	15.99	長 丸	0.30	*	N 12° W	4	*	?	無	無	有	円形	西北隅	
Bf 53	4.8	4.9	23.52	正 角	0.30	*	N 30° W	4	*	?	有?	無	有	円形	?	
Bg 62 竪	6.4	7.3	46.72	長 角	0.35	*	N 14° W	4	*	?	有?	無	有	円形	カッパ石屋 (西)	
* 田	4.6	5.1	23.46	長 角	0.50	*	N 13° W	4	*	?	?	?	有?	長円	?	
Bh 09	4.3	4.3	18.49	正 丸	0.30	*	N 14° W	4	*	?	有	有	?	?	?	地味瓦屋
Bb 71	3.5	3.9	13.65	長 丸	0.50	*	N 30° W	4?	*	北壁 中央?	有	無	有?	円形?	カッパ石屋 (東)	
Bi 24	4.3	4.3	18.49	正 丸	0.30	*	N 20° W	4	*	北壁 中央	無	無	有	円形	*	
Bi 15	4.2	4.5	18.90	長 丸	0.40	*	N 60° W	4	*	?	有	有	?	?	?	地味瓦屋
Cx 09	4.1	3.7	15.17	長 丸	0.20	*	?	?	(伊)? 縁部中央	?	?	?	?	?	?	ロゴ成形?
Cx 18	4.1	4.1	16.81	正 角	0.24	東壁と西壁の中心を結ぶ線	N 60° E	4?	壁内 正方形	東壁 中央	有	有	有	円形	カッパ石屋 (東)	
Cb 24	5.2	5.5	28.60	長 丸	0.40	北壁と南壁の中心を結ぶ線	N 3° W	4	*	北壁 中央	有	有	?	?	?	?

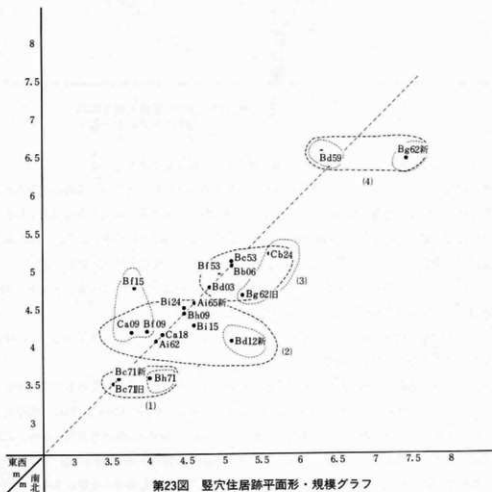
### III 考察とまとめ

#### 遺構要約

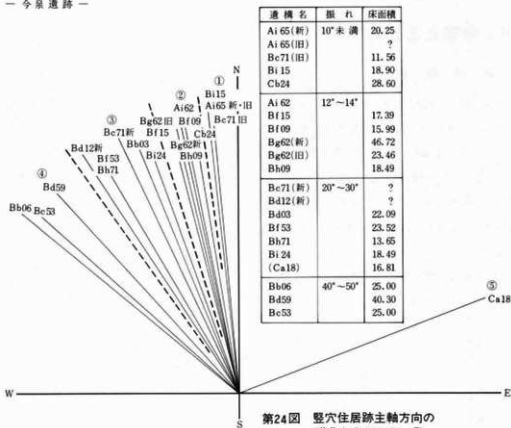
本遺跡出土の遺構（竪穴住居跡）をまとめると第17表のようになる。これをもとに若干の項目についてまとめておく。平安時代以外のものを中心として述べる。

(1) 規模と平面形—これらをグラフにすると第23図のようになる。即ち平面形態は、(1)南北に長い長方形、(2)東西に長い長方形、(3)正方形にそれぞれ近いものの3種があるが、前二者は変異の中に収まるものと考えられ、基本形は最後者である。規模は、①3.5m前後、②4～4.5m前後、③4.6～5.2m前④6m以上の4種があり、最後者は最も少数であり、他の三者が主体をなす。

(2) 住居主軸方向の磁北からの振れ—これをグラフにしたものが第24図である。これによると、①その振れが10°未満のもの5、②12°～14°未満のもの6、③20°～30°のもの7、④40°～50°



第23図 竪穴住居跡平面形・規模グラフ



第24図 竪穴住居跡主軸方向の磁北からのふれ一覧

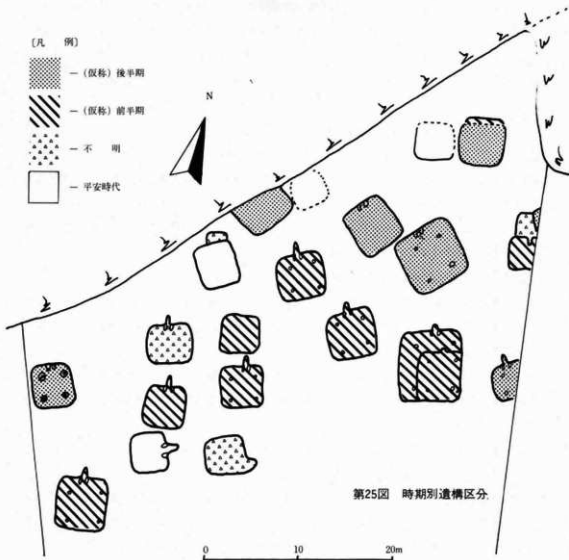
のもの3の形で存在する。これらは前二者対後二者と整理することもできよう。

(3) 柱穴に於ける柱あたりと掘り方の有無—良好な資料は少数であるが、明瞭に両者を区別できる例(Bi24住)も存在することからすると、その類例はより多く存在する可能性がある。また柱穴際に礎(人頭大以上)を配す例もある(Bi24)。更に別に触れてるように、掘り方に分割した板状礎をもたき込む例もあり、柱穴構築法については更に注意されてよい。

(4) 竪穴自体の掘り方。の存在—これも確認したのはBh09住のみであるが、そのような問題意識を持って調査すれば、更に類例は増えたことであろう。

(5) 上屋構造—Bh09住の炭化材の遺存状況からして、骨格をなす材(垂木的なもの)が助骨状をなすものが存在したことは確実である。

(6) 煙道の構築方法—現時点に於いて明白な痕跡を示すものと、そうでないものの二種がある。カマド本体の構築法に強い斉一性を看取できるのに比し、極めて対照的である。煙道構築法が確立・安定しない時期であるとも考えられる。ちなみにカマド自体は水沢市面塚遺跡に於いて既に6世紀代に出現し、煙道を有するカマドは同層性に於いて本土器群に先行すると思われる段階に於いて出現している。カマド他の構築法にはこの他にも各種の変遷がある。



(7) 遺構の時期区分—膳性遺跡に於ける知見を援用すると、遺構の時間差は“竖穴住居主軸方向の磁北からの振れ。に最も良く反映されるらしい。それは、より古期のもの程磁北に一致するが、ほぼ近いものも多く、新期のもの程西に振れる。というものである。もちろんそれはあくまでも“傾向性。であり、例外も少数存在するのは当然である。それと、別に触れた遺物の検討結果からすると、以下の二大別が可能である。(第25図)

(a) 仮称前半期 Ai65(旧)・Bc71・Bd03・Bf09・Bf53・Bg62・Bh09・Bi15・Cb24の各住居跡。

(b) 仮称後半期 Ai65(新)・Bb06・Bc53・Bd59・Bi24・Bh71・Ca18の各住居跡。

(a)が9棟、(b)が7棟となる。これを(1)で述べた規模の点からみると、両期ともに1棟の④と、それ以外の①-③との組み合わせからなることとなる。集落全体の発掘調査を行っていない現段階であり強弁は避けねばならないが、該期の集落の構成要素(竪穴住居の規模)に上記二者がある可能性のみは指摘しておく。規模の差が何を反映しているかは検討課題として残る。

尚、仮称両期とも現段丘崖から南へ幅30mの帯状の地帯に住居が営まれる。

(8) 遺構の種類—調査域内には竪穴住居跡のみを検出し、その他のものはない。これは集落内の場の使い分け(居住域と墓域など)が存在した可能性のあることの反映とともに、時代性の反映をも想定すべきである。水沢地方に於いては平安時代から集落の構成要素が複雑化(大溝・井戸・掘立柱建物などが加わる)する。

(9) 遺構の配置—既述の仮称二期相互の重複はみられない点が特徴的である。慎重に避けた占地ともとれる現象である。その背景は不明である。

仮称二期内の遺構分布に顕著な特徴は看取できない。

(10) 本遺跡は奈良時代以前(7世紀-8世紀初)に集落が営まれ、その後かなりの時間をおいた平安時代に再度利用されている。より古い段階についていうと、後掲の編年試案のVI群期早期の集落といえる。

水沢市周辺の集落遺跡の存続期間・状況にはいくつかの類型がある(第18表)。調査範囲その他の種々の制約は承知の上で、あえて類型化を試みる。平安時代以前に利用が開始された集落で、

(a) 早期もしくは一定の中断期間をおき再度集落が営まれるもの。

(b) 複数期間にわたり継続的に営まれるもの。

前者の類例は水沢市玉貫・今泉・膳性・高山・西大畑・面塚・金ヶ崎町上餅田であり、後者のそれは東大畑・石田などである。この現象の背景のメカニズムは現状では不明であるが、農業生産力の発展状況などが一つのモメントとして利用していた可能性もあろうし、"母村・分村。的な側面も考慮する必要がある。立地論的には、(a)に掲げた諸遺跡(古墳時代-奈良時代まで)が共通した立地を示している点に留意すべきであろう。更には、古墳時代集落の立地は、弥生時代のそれに共通する事実もある。何れにしても今後の重要な検討課題である。

尚、仮称VII群期(あるいは痕跡的なあり方を示るものも含めるとVII-b群期の末)から造営が開始される集落の数が極めて多い。この背景には律令政府の直接的支配権の進出という政治的要素が作用したことは想像に難くないが、そのような変化のきざしが既にVII-b群期に発する点にも留意したい。それは既に触れた如くに、占地の変化の開始期が、胆沢扇状地に於いてはVII群期、和賀川流域に於いてはVII-b群期になる、という点にも現われている。



## 出土遺物とその考察

### 〔1〕 土器について

#### 〔1〕 各器種の分類と特徴

1. 縄文式土器 表土や遺構覆土中より、大洞A'式類似の土器片少量を得た。何れも遺構と本来的な共存関係を示すものではない。本遺跡周辺に同期の遺跡が存在した可能性を示すものではあろう。その点から、縄文時代晩期末葉の遺跡と古代の遺跡が同一の占地をすることもあった一資料となり、立地論的観点からする主題への一資料には成し得よう。

2. 土師器 土師器は各遺構より豊富に出土しており、本遺跡出土遺物の主体をなす。器種には甕・甔・壺・坏・高坏・片口型・鉢型の7種類がある。何れの器種も通常使用されている概念を基準として分類したが、甕の一部には従来「壺」といわれることもあった体部球形のものも含ませ、坏にはかなり大型で浅いもの、深いもの（皿や椀といわれるものか）も一括させてある。

以下に各器種毎の分類を行なうが、各遺構出土のものを一括して扱い、その後に遺構毎の組成を検討し、最後に編年の位置を検討したい。それらの際に使用する器面調整の技法の用語は、宮城県岩切鴻ノ巣遺跡の調査報告のそれを使用する。

〔註1〕 岩切鴻ノ巣遺跡 宮城県文化財調査報告書35集 東北新幹線関係遺跡調査報告書1

**甕** 甕は53点出土している。それらは、成形に於けるロクロの使用・不使用、口縁・肩部の器形上の特徴から次の3類に大別できる。







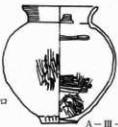




- A類 ロクロ不使用。口縁は外反し、肩部に顕著な段乃至稜を有するもの。
- B類 ロクロ不使用。口縁は外反し、肩部に段乃至稜を持たないもの。
- C類 ロクロ使用。口縁が強く屈曲するもの。

以上の3類は、その他の特徴（最大径部位・体部形状・器体の大小・器面調整の技法上の特徴等）からさらに細分でき、大略第19表のようになる。但しC類については、出土例も少なくかなり均一な特徴を示すので、これ以上の細分は行なわない。

**甕A類** 成形にロクロを使用しない。口縁は外反し、肩部に強い段を形成する。器体の大きさ（器高）には以下の6種がある。

- a. 15cm以下
- b. 16～20cm
- c. 21～24cm
- d. 25cm周辺



ロクロ・肩部		器 形	大 き さ	調 整	実 測 図			
A	ロクロ不使用	I 肩部有段	a	イ				
			15以下					刷 毛 目 + ヘラ削り
			b					
			16-20	イ				
			c					口
			21-24	刷 毛 目				
		d	イ					
		最大径		口				
		↓			刷 毛 目			
		e	イ					
		口 縁		口				
		26-30			イ			
		f	口					
		30以上		イ				
II 口縁外反 長 刷 形	イ							
d			イ					
最大径	口	イ		イ				
↓			口					
e	イ							
f		口						
III 口縁外反 球 刷 形	イ							
d		イ						
e					口			
f	イ							
B		ロクロ不使用	肩部無段	a		イ		
口縁外反				イ				
b	口							
長 刷 形			イ					
c	口							
最大径			イ					
↓	口							
d			イ					
口 縁	口							
e		イ						
f	口							
C		ロクロ使用	口縁屈曲					

第19表 變 分 類 基 準

e. 26~30cm

f. 30cm以上

体部形状には、最大径の部位をも加味すると3種ある。

- I. 長胴形で、最大径が口縁のもの。
- II. 長胴形で、最大径が体部中央のもの。
- III. 球形をなし、最大径体部のもの。

器面調整の技法には2種ある。

- イ. 刷毛目調整の後に、内外両面乃至その何れかに篋削り・篋ミガキ・篋ナデ等を加えるもの。(口縁は横ナデ)
- ロ. 口縁は内外両面とも横ナデ調整、体部には刷毛目調整(外面縦・斜位、内面横位が原則)のみが施されるもの。

襷B類 これもロクロ不使用。肩部に段あるいは稜を持たず、口縁と肩部(体部上端)の区別は器面調整技法により(口縁部は横ナデ調整)なされる。器形は口縁外反の長胴形で、最大径部位は口縁に一致。器体の大きさには前記のd・eの2種があり、器面調整の技法には前記のイ・ロがある。

尚、A・B類ともに底部はかなり突出した印象を与え、体部との区別は非常に明確に成し得る。また、底部外面に木葉痕のあるものが多い。

襷C類 成形にロクロ使用。恐らく長胴形をなし、口縁部は強く屈曲する。体部上半にはロクロ成形痕が、下半には縦方向の篋削り調整痕が顕著にみられる。底部は欠失しているが、恐らくはあまり突出した感を与えない、A・B両類に比しやや大きめの平底となるであろう。

Ⅲ 9点出土している。その器形を窺い得るものはすべて無底式のものであるが、多孔式のものの破片も極く少数出土している。口縁・肩部の器形上の特徴から以下の2類に分類できる。

A類 口縁外反し、肩部に顕著な段乃至稜を形成するもの。

B類 口縁外反し、肩部に段・稜を持たないもの。

以上は、器高により2類に分類される。

I. 比較的小型(15~17cm)

II. 比較的大型(20cm以上)

更に、体部下端の細孔の有無により2種類に分かれ、これらをまとめると第20表ようになる。

これらの器面調整の技法は、口縁には内外面とも横ナデ調整が施され、体部には刷毛目調整の後内面に主に篋ナデ調整を加えて仕上げられる。

Ⅳ 7点出土している。口縁(口頸)部の器形上の特徴から2種に大別できる。

I類 口縁(口頸)部が外反し、肩部に軽い段を持ち、球形の体部を有するもの。細頸壺的

	器形	大きさ(cm)	細孔	実測図
A	口縁外反 肩部有段	I 15 ~ 17	a 有	
		II 20 以上	b 無	
B	口縁外反 肩部無段	I	a	
		II	b	

第20表 甌分類基準

	頸部の特徴	頸部立ち上がり	体部形	実測図
I	細頸壺的	長い	球形	
II				広口壺的
	b 短い	球形		
	c 短い	球形 大型		

第21表 壺分類基準

	大きさ	口縁形状	脚部	足高 脚高	実測図
I	比較的大型 口径 16 cm	a 直口 内湾気味	イ 有段	あ 1.3 1	
III	口径 13 cm 前後	外縁	無段	0.95 1	

第22表 高杯分類基準

印象を与える。器面調整の技法には、器外面は刷毛目調整後篋ミガキを加え、内面では口縁（口頭）部横ナデ調整、体部篋ナデ調整などがある。

Ⅱ類 口縁下半（口頭というべきか）が直立気味に立ち上がり、その上方が一旦外傾した後再び直立気味になるもの。広口壺的な印象が強い。器体はほぼ球形をなすが、やや歪で、横長の楕円形的なものが多い。

この類は口縁（口頭）部の細部の形状・器体の大小により、更に次の3種類に分類できる。これらをまとめると第21表のようになる。

- a. 前記の最後に立ち上がる部分が比較的長く、器体が小型のもの。
- b. 同じ部分が短く、器体が小型のもの。
- c. 器高20cm以上の大型品。

器面調整の技法は、体部外面では刷毛目調整後に篋ミガキが加えられ、口縁（口頭）部には横ナデ調整が加えられる。内面もほぼ同様であり、刷毛目調整痕をそのまま残すものは少ない。

坏 19点出土している。坏は大別して2類になる。

A類 成形にロクロを使用しないもの。

B類 成形にロクロを使用するもの。

以上は、体部の器形上の特徴等から更に細分できる（第23表）。尚、A類については、その底部は例外的な一例を除いてすべて所謂「丸底風」であり、器内面には篋ミガキ・黒色処理が施されている。また器外面の体部と底部の境界にはすべて段があり、その部位は器体のほぼ中央かそれよりやや下位に限定されるのが通例で、下方に偏するものは一例だけである。更に、器外面の段に対応する内面に軽いくびれがみられるのも通例である。従ってこれらは特徴としてはいちいち言及しない。

A類のⅠ 体部が直口乃至内湾気味に立ち上がるもの。直上する度合いが強いものと弱いものとがあるが一括した。








器面調整の技法には3種の組み合わせがある。

- a. 体部横ナデ調整、底部篋削り調整
- b. 体部横ナデ調整、底部篋ミガキ調整。
- c. 体・底部とも篋ミガキ調整。

A類のⅡ 体部外反するもの。器外面の段の部位は前述の通り器中央からやや下位の所にあるが、一例のみが下端に近い部分にある。

器面調整の技法には、次の組み合わせがある。

- a. 体部横ナデ調整、底部篋削り調整。

ロ ク ロ	体 部 特 徴	調 整 ・ 特 徴	実 測 図	
A	I 直 口 内 湾 気 味	a 体部ヨコナデ 底部ヘラ削り		A-I-c
		b 体部ヨコナデ 底部ヘラミガキ		
		c 体 部 } 底 部 }ヘラミガキ		
	II 外 反 気 味	a 体部ヨコナデ 底部ヘラ削り		A-II-a
		b 体 部 } 底 部 }ヘラミガキ		
	III 外 傾 気 味	a 体部ヨコナデ 底部ヘラ削り		A-III-a
		b 体部ヘラミガキ 底部ヘラ削り		A-III-b
		c 体 部 } 底 部 }ヘラミガキ		A-III-c
	B	I 外 反 気 味	a 内面黒色処理 回転糸切	
II 内 湾 気 味			b 黒色処理無し 回転糸切	
			B-II-a	B-I-b

第23表 环 分 類 基 準

- b. 体・底部ともに筥ミガキ調整。

A類のⅢ 体部に湾曲がなく、直線的に外傾するもの。器外面の段の部位は器中央からやや下位である。口径は、小は10cmから大は27cmまでと非常に変化に富む。

器面調整の技法には、以下の4類の組み合わせがある。

- a. 体部横ナデ調整、底部筥削り調整。

- b. 体部筥ミガキ調整、底部筥削り調整。

- c. 体・底部ともに筥ミガキ調整。

- d. (覆土出土でしかも例外的な一例であるが) 外傾する体部と平底風の底部を持ち、器中央からやや下位に段を有し、その段から底部に至るまでの部分に沈線によって斜格子目状の施文を行なっているものである。つまりこの土器にあっては、口縁部・体部・底部の3部位を指摘できることになる。器面調整技法には、口縁・底部ともに筥ミガキが施される。尚、他の坏に比し、胎土が精良で焼成も良好で硬いという特徴もある。

B類 4点出土。成形にロクロ使用。器形上の特徴は体部外反であるが、その度合の強いものと弱いものがある。

技法との関連では、前者は回転糸切無調整、後者には回転糸切後の何らかの調整と内面黒色処理が指摘できる。

高坏 脚部のみのものも含めて11点出土。これらは器体の大小、坏部体部の器形上の特徴から3類に大別できる。(P97第22表)

尚、脚のみのものを除いたすべての例に於いて、坏部内面には筥ミガキと黒色処理が施され、坏部外面中央には段が形成されるが、これもいちいち言及することは避ける。

I類 比較的大型(口径16cm前後、器高14cm前後)で、ほぼ直上するかあるいはやや内湾気味に直上する体部を有する。坏部外面の段に対応する部位にくびれを形成する。脚部上半は強くは開かず、裾部に至って急激に外方に開き、ほぼ平坦に近くなる。

器面調整技法は、坏部外面上半には横ナデ調整後筥ミガキが、下半では刷毛目調整乃至筥ナデ様の調整を施した後に筥ミガキが行なわれる。脚部は、縦方向の筥ミガキや、筥ミガキと同時に多少粘土を掻き取ったかのような調整が行なわれたらしく、縦方向の併行する細長い凹みがみられる。裾部には横ナデ調整がみられる。尚、一例のみだが、坏部外面全体と脚部外面に赤色の塗彩を施したものがある。

Ⅱ類 I類と同様に口径20cmを越える比較的大型のもので、体部が外傾し大きく直線的に開く。I類と同様に、器外面の段に対応する器内面のくびれを有する。脚部の形状はI類とは異なり、脚上部に段を有し、I類よりも低い脚高を示し(4cm)、脚部中央から裾広がり開く。

器面調整としては、坏部口縁部筥ミガキ調整、坏部体部横ナデ調整後筥ミガキ調整、脚部上部（段まで）は筥ミガキ調整、段以下も筥ミガキ調整、裾部は横ナデ調整後筥ミガキ調整等がみられる。

Ⅲ類 口径13cm前後と比較的小型のもの。坏体部はⅡ類よりも更に直線的に外傾し開く。脚部上半は円筒状を呈し、中央よりやや下位に段を持ち、段以下が裾状に開く。尚脚上半の円筒状の部分は大半に粘土が充填されており、Ⅰ・Ⅱ類の脚部が中空をなすのに対し著しい相違を示している。また、脚の段部は同時に裾部との接合部位でもある。

器面調整の技法としては、坏部器外面が口縁・体部ともに筥ミガキ調整が施されるが、段部に沿って横ナデ調整の痕跡が残っているので、筥ミガキ調整の前に横ナデ調整が施された可能性がある。

脚部上半は筥削り調整の後に筥ミガキ調整が施され、段以下の裾部には横ナデ調整が施される。脚部内面は、裾部には外面と同様横ナデ調整が施され、それより上方の天井部ともいうべき部分には、刷毛目調整の後に筥ミガキ調整や筥による強いナデツケの調整が加えられる。

**片口型** 片口型の土師器は3点出土している。2棟の竈穴住居跡からの出土しかみておらず、あるいはあまり普遍的な存在を示すものではないかもしれない。器形上の特徴から2類に大別できる。

Ⅰ類 球形に近い比較的高い器高を示し(13cm前後)、やや内湾気味に直上する口縁を有する鉢型土器の口縁の一部を外方に圧して片口（注口）部分を作り出したもの。口縁部と体部は、その境界の段乃至稜によって区別し得る。底部形状は、甕のそれと同様にやや突出した感じの平底であろうが、二例ともに剥落しており、詳細はわからない。但しその剥落の状況は、両者ともにやや上方に向かってドーム状になっており（揚げ底風）、製作時の何らかの特別な技法を示すものかもしれない。

器面調整の技法としては、器外面に於いては口縁部横ナデ調整後一部筥ナデ調整、体部に縦方向の刷毛目調整後一部筥ナデ調整を実施しているものと、刷毛目調整後縦方向の筥ミガキ調整を加えるもの等がある。器内面では、口縁部は外面同様横ナデ調整、体～底部には横方向の刷毛目調整後横方向の筥ナデ調整が加えられる。

Ⅱ類 器高3cm、口径8cm前後の浅い坏様の土器の口縁の一部をⅠと同様に圧して片口（注口）部分を作り出したもの。

器面調整の技法は、器外面では風化のため体部のその判定は不可能であるが、底面には筥ミガキ調整が加えられている。器内面では、横方向の刷毛目調整が器壁に沿って一段施される。

**鉢型** 1点のみの出土。適当な名称を知らないで、一応鉢型と呼称しておく。（揚げた実測図は破片からの図上復元であるので、体部の外傾の度合は必ずしも正確ではないであろう。

もっと開いて器高が低くなるとしたならば、瓶型の一部のものに類似してくるであろうが、一応鉢型としておく。底部は欠失して不明であるが、あまり大きくはならないと思われる。

器面調整の技法としては、器外面では全面に縦・斜方向の刷毛目調整が施され、その後には口唇直下だけに幅の狭い横ナデ調整が加えられている。器内面は、全面に横位の刷毛目調整が実施される。

**3. 須恵器** 須恵器は、竪穴住居跡から若干量が出土しているにすぎないので、本遺跡の遺物の主体を構成するとは言い難い。しかし、少量ではあるがその出土状況は、ロクロ不使用段階での土師器の中に於けるやや特異な存在として出土したり、あるいはロクロ使用が定着した段階のセットの1つとして出土したりしているので、その持つ意義は大きい。

出土した器種は因襲と甕、器種不明のもの3種である。

**大甕** 口縁部の破片1個体分である。図上復元による推定口径は40cm前後、器厚は約1cmである。外反する口縁の端部が肥厚し、そこが二段の段状に作り出されるが、その稜線はあまり鋭角的ではなく丸味を有している。ロクロ成形時の条線の他には特に目立った調整痕は残していない。

**甕** Bb06竪穴住居跡の床面より出土したもの。1点のみ。比較的小型ではあるが、胎土の質・焼成ともに非常に良好で、緻密で硬い。色調は濃い灰色。口頸部は欠失しているが、恐らくはあまり高く（長く）はならないであろう。丸底。

肩部にはロクロ成形痕たる細条線を留めるのみ。肩部直下から体部中央までに文様帯が区画される。文様帯の上・下限は、その両側を沈線状に凹めることによって強調されている隆線状のものによって区切られる。従って、上・下限ともに隆線状のもの両側には、工具でナデた痕跡が顕著に残存している。文様帯内部には、櫛描波状文が施文されている。また上限の隆線はそのまま注口周縁の隆帯へと連続する。体部下半から底部にかけては篋削り調整が入念に施され、丸底に仕上げられる。

**器種不明のもの** 底部小破片であるので器種は判然としないが、恐らく、壺乃至それに類したのものになると思われる。Bg62竪穴住居跡の床面よりの出土。体部中央に沈線が繞られ、その下にロクロ成形痕がみられ、体部下半には篋削りの痕跡が顕著にみられる。底面中央はへそ状に凹んでいる。沈線に接続する部分が屈曲しているので、恐らくその部分が肩部となるのであろう。

(注2) 瓶の胎土には、色調が黄色で焼成が良好にもかかわらず比較的にもろいという共通性があり、またその表面の剝離の状況にも共通性がみられることから、あるいは瓶用の特別な業地粘土の選択・使用が行なわれた可能性がある。

(注3) 本類のII-Cとしたものと、甕のA-IIIとしたものの器形が類似するが、両者の区別は、甕A-III



類の口縁形態が所謂「外反」であるのに対し、Ⅱ-C類のそれが前述したものであるところからつけた。Ⅱ類は肩部に段を形成するが、丸底風のものはない。

(註4) 壺には器表面が襷状の剥離を示すものがあり、あるいは壺型土器の成形には、縄文式土器のそれにもみられるような一種の化粧粘土(Slip)の使用乃至、特別な素地粘土の選択・使用が行なわれたのかも知れない。

(註5) これらの調整は、調整を示すものとして言及されることの多い「回転篋削り」「手持ち篋削り」等のものとはかなり違っているように思われる。軽いナデといった感が強い。

尚、本類土器を土師器の何れに所属せしめるべきかについては、種々問題があるが、ここでは器面・須恵器の色調が所謂「くすべ色」をしておらず肌色がかった褐色をしていること、器内面に黒色処理・篋ミガキ等が施されていることをもって、一応土師器として取り扱った。

## (2) 遺構に於ける各類土器の共伴関係

以上(1)に於いては今泉遺跡出土の土器を器種毎に分類し、その特徴を説明したが、次にこれらの土器群が各遺構内でいかなる共伴関係を示すかを検討し、分類された土器がいかなる組み合わせ・まとまりを持つかをみて行きたい。

今泉遺跡に於ける遺構は、その殆んどすべてを竪穴住居跡が占めることは既に述べたところである。従って本遺跡出土の土器群は、殆んどすべて竪穴住居跡出土のものということになる。しかもその出土状況には、覆土からよりも床面上から出土したものが圧倒的に多いという特徴がある。更に、床面上出土のもの多くが復元可能土器乃至完全土器であるという現象も顕著である。つまり、それらはその本来的な位置に近い状態で発見されたと解し得る可能性が大きい。極端な例では、甕がカマド中に据えられたまま検出されたり、甕の中へ瓶が嵌め込まれたまま検出されたりしている。寧ろ甕にあっては、カマド中に据えられるか、あるいはカマド際に置かれた状態で検出されるのが普通であったといえよう。その他の器種についても、大略カマド周辺に集中して検出されることが多かった。但し、高坏や小型壺にあっては、カマドと反対側の壁(今泉遺跡にあっては大部分南壁)の中央部に発見される例があったことを挙げておく。これは要するに、今泉遺跡の竪穴住居跡出土の土器群相互は本来的な共伴関係を有すると見做してよい根拠に成し得るのである。

第24表は、今泉遺跡の各竪穴住居跡出土土器の各器種毎の個体数と各遺構内に於けるそれぞれの組成比率の一覧である。分類規準は(1)で述べたものである。尚、当然のことながら、組成比率については出土個体の絶対数がある程度以上なければその意味はないのであり、その点からはBd59とBg62の両竪穴住居跡の例が最も良好な資料といえ、Bh09・Ca18・Bf53・Bi15の各竪穴住居跡の例はそれに次ぐものといえよう。

以上の観点から第24表の結果を累積グラフ化したものが第26図である。前述の理由からBg62・Bd59・Bh09・Bf53の各住居跡の結果のみを掲げ、また成形にロクロを使用している土器を主に出土する例の代表として、少量の出土ではあるがBd12竪穴住居跡の結果をも掲げた。

以下にBg62・Bd59両住居跡の結果をやや詳しく検討する。Bg62住居跡の器種毎組成比率は、甕50%・甔15%・壺5%・環15%・高環5%・片口型5%・鉢型なし・須恵器（一個体と見做して）5%である。高環の比率がやや低い感があるが、その他についてはまずは妥当な線を示しているのではないかと思われる。

次にBd59住居跡のそれを示すと、甕50.3%・甔11.2%・壺なし・環5.6%・高環27.8%・片口型5.6%・鉢型と須恵器なしである。壺と環がかなり少ない点と甔の中型のものが不足している点が異常に思われるが、その他は妥当な比率を示しているのではないかと思われる。

それにもかかわらず、この両者の組成比率（即ちグラフの線）にはかなりの類似性を感じさせるものがある。そこで次にはその相異点を中心に、やや詳しく両者を比較して行きたい。

甕に於いては、Bg62住居跡（以下住居跡は省略し略号のみで表記する）では、すべて肩部有段で無段のものは皆無、しかも器体の大きさがa-fまで万遍なく揃うのに対し、Bd59では僅かながらも肩部無段のものが入ってくることなどが挙げられる。

甔に於いては、器形・大小・器面調整の技法ともに非常によく類似するが、Bg62出土のすべてが体下端部の細孔を有するのに対し、Bd59ではそれらが皆無の点に相異がある。

壺は両者とも非常に貧弱であり、Bg62に小型丸底風のものが一例あるにすぎない。あるいは壺が貧弱であるという事実は何らかの意味があるのかもしれない。

甕以上の大きな相異は、環に於いてみられる。Bg62例ではA-I-a類、A-II-a類がみられるのに対し、Bd59に於いてはA-III-c類のみである。換言すると、前者に於いては体部がやや内湾気味になるかあるいは外反する器形を有し、体部横ナデ・底部篋削りの調整が行なわれるのに対し、後者に於いては外傾する体部を持ち、体・底部ともに篋ミガキが施されることになる。

高環については、Bg62ではIII類のみがみられ、Bd59ではI・III類が共伴する。しかし、これはもともと高環は絶対数の少ない器種とも考えられるので、前者にI類が欠落していることが直ちに本来的意味を持つかどうかは即断できないであろう。

片口型と鉢型については、両者ともに普遍性を欠く傾向があるので、前者がBd59に、後者がBg62に出土した事実のみを挙げておく。

以上が両者の近似点・相異点のあらましである。これらからすると、両者は非常に近似した関係（生産活動的な側面）にあるが、環・甕等に見られる微妙な相異点から、やや時間的な相異を内包するとしてよいのではないかと思われる。このことは、遺構配置の面からも頷けよう。つまり、この両堅穴住居跡は今泉遺跡に於いては最大級に属するものの2つであるが、空間的にはほぼ南北に隣接している。従って、このような大規模な住居が2個同時に存在することは、その他の堅穴住居跡との関係をも考慮するとかなり考えにくいと言えよう。





次に土師器と須恵器の相伴関係についてみると、Bb06・Bg62・Cb24・Bd12・Ai62に於いてそれらがみられる。但し、前三者と後二者では、その相伴関係の意味は根本的に異なる。それは前三者に於いては須恵器通・壺(?)・破片)・甕(破片)等が例外的な存在としてロクロ不使用の土師器に相伴するのに対して、後二者では須恵器の器種・量が増加し、しかも土師器にもロクロが使用されているのである。よって、前三者と後三者とは、その歴史的段階を明らかに異にすると見做し得るのである。

- (註6) 如上の器種による遺構内での分布の相異が何を示すのかは、十分に検討されてよい課題であろう。そのような意味で、各遺構平面図中に土器の出土位置をも示しておいた。また、本遺跡に於ける土器の出土状況がそのプライマリーなものを示すことが多そうであるという現象の持つ意味は何か、という問題についても十分に検討されるべき事項であろう。
- (註7) 但し、この点については後者の例の中に体下端部を一部欠失しているものがあるので、絶対的な相異と見做せない可能性もあるにはある。
- (註8) 但し、壺的な機能(一般に貯蔵といわれる)を果たす他の容器(例えば須恵器甕・壺等)を欠く事実を考えると、あるいは甕A-Ⅲ類としたものにその機能を求められるかもしれない。(甕A-Ⅲ類を壺としなかった理由は既に述べた)

### (3) 土器の器面調整技法の検討

以上の分類は器形上の特徴に、よりウェイトを置いたものであった。以下には土器の部位毎に器面調整技法を観察し、前述の組成の分析結果との関連性を検討してみる。この場合、少なくともBd12(Ⅱ)とAi62の両者とそれ以外の堅穴住居跡との間には技術上決定的な違いがあることは既述の通りであるので、以下の観察はロクロ不使用の遺物(特に土師器)を主体的に出土する遺構にのみ限定して行なう。従って須恵器が出土するが、Bb06・Bg62・Cb24も当然その対象となる。

第25表がその一覧であるが、先と同様器種毎に検討する。

**甕** 肩部の有無の状況は、遺構によってまちまちである。有段のみ、有段・無段混在の例がある。

最大径部位は口縁に一致するものが基本であるが、体部中央にあるもの・球形の体部をなすものと相伴する例が多い。つまり、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲはセットをなすと考えられるのではないだろうか。

器体の大小は①～⑥まで揃うのが基本形と考えられる。

器面調整技法は、口縁は内外ともに刷毛目調整の後横ナデ調整が行なわれる。例外としては、口縁下半から段に至るまでの部分に鋸歯状の沈線文を施したものが一例ある。従って、口縁の技法の項目は設けなかった。体部調整技法では、刷毛目調整のみのもの・刷毛目プラス篋ミガ

壺	口頸部				技法			
	口頸部	肩部	底部	大小(口径)	口頸部	肩部	体部	底部
① 外反	① 有段	① 平底	① 10cm前後	① ナデ	① ナデ	① ナデ	① ナデ	① ナデ
② 直口~内溝	② 無・段	② 丸底風	② 15cm以上	② ミガキ	② ミガキ	② ミガキ	② ミガキ	② ミガキ
				③ ケズリ	③ ケズリ	③ ケズリ	③ ケズリ	③ ケズリ
				④ 刷毛目	④ 刷毛目	④ 刷毛目	④ 刷毛目	④ 刷毛目
								⑤ 木製
								⑥ 木製
高 環	環部			脚部			備考	
	口縁	口・体部境界	内面くびれ	中央部	脚高/環高			
① 外傾	① 有段	① 有	① 有段	① 1.5	内面黒色処理はすべてにみられる。破片は無視。			
② 直口	② 無段	② 無	② 無	② 1.3				
				③ 1.4				
尖・瓶	口縁	肩部	最大径部位	大小(器高)cm	技法	細孔		
	① 外反	① 有段	① 口縁	① 15以下	④ 刷毛目+ミガキ+ケズリ	① 有	細孔の有無は瓶についてのみ。	
② 直口	② 無段	② 体部	② 16-20					
		③ 体部(球形)	③ 21-24					
			④ 25					
			⑤ 26-30					
			⑥ 30以下	⑥ 刷毛目主体	② 無			
環	口縁	口・体部境界	境界の部位	内面くびれ	大小(口径)cm	技法		備考
	① 外傾	① 有段	① 中央	① 有	① 10前後	① ナデ	① ナデ	※ 稀に黒色処理のないものが存在するので設定した。
② 外反	② 無段	② 中央よりやや下位	② 無	② 14-16	② ミガキ	② ミガキ		
③ 直口~内	③ 無段	③ 下位		③ 18-20	③ ケズリ	③ ケズリ		
				④ 20-22	④ 刷毛目	④ 刷毛目		
				⑤ 24前後				
				⑥ 27以上				

第25-1表 器面調整技法一覧表分類基準

キ・筥削り・筥ナデ調整のものが併存するのが常態らしい。

その他、特に顔料使用の事例などは皆無である。

瓶 肩部有段のものと無段のものがあり、器体の比較的大きなものと小さなものがセットをなすようである。器形・器面調整技法等共通点が多い。そのうちで顕著な相異は、一部疑問があるが、体下端部の細孔の有無であろう。

壺 出土量が少ないので限界がみえるが、遺構により器体の大小に相異があると考えることができよう。

器面調整の技法は、基本的には口縁(口頸)部横ナデ、肩部以下は刷毛目後筥ミガキの各調整である。

環 比較的相異点が多い。体部形態は①のみ、②のみ、①+②、①+③の組み合わせ、③のみがある。②と③の組み合わせがないのが注目される。

体・底部境界の段の部位は、器体中央よりやや下位になるのが原則であり、例外は下か中央方に偏した一例のみ。器体の大小は、一遺構内ではあまりばらつきがみられず、比較的類似した大きさのものになるといい。

器面調整の技法は、体部と底部のそれを組み合わせて考える。技法の組み合わせとしては、

- ① 体部横ナデ、底部筥削り
- ② 体部横ナデ、底部筥ミガキ
- ③ 体部横ナデ 底部刷毛目



④ 体部篋ミガキ、底部篋ミガキ

⑤ 体部篋ミガキ、底部篋削り

の5種がある。これらの遺構内に於ける組み合わせには、

㉑ ①のみ

㉒ ①+② (①>②)

㉓ ③+① (③=①)

㉔ ④のみ

㉕ ④+① (④=①)

① ⑤のみ

の6種類がある。これらから、各遺構を㉑・㉒を主にするものと、㉔・㉕・①的なものにまとめることができそうである。

その他の技法、特に器内面の篋ミガキ・黒色処理は施されるのが原則であるし、くびれについても同様である。

文様は特に施されないのが原則であるが、斜格子目状の沈線文が施される一例が存在することには既に触れた。

**高坏** 器面調整の点からあらためて触れるべきことは特にないので、組み合わせについてのみ再述しておく。

① I・III類共伴

② III類のみ

③ II類のみ

であるが、①の例が存在することは重要であろう。

片口型と鉢型のものについては、他の土師器とセットをなす一器種であることを指摘するに留める。

#### 須 意 器

**甗** Bb06の床面から、壺II-C・坏A-III-C類に共伴した。

**壺(?)** Bg62の床面出土。破片のため正確な器種は不明。

**甗(?)** Cb24の床面出土。破片のため正確な器種は不明だが、内面に所謂「青海波」文があり、甗か坏A-I-a・A-III-a類に共伴。

以上が技法の特徴の概略である。これらからみた限り、今泉遺跡の各竪穴住居出土の遺物は、それぞれの器種に於いてよく似た内容を示しているといえよう。特に、意図的に採用してきた「異技法の共伴関係の重視」という観点を組み入れると、それらの間の相異はますます小さくみえてくる。従って既に指摘した通り、各竪穴住居は非常に近似した時間の枠内におさまると



の解釈も可能になる。とはいっても、これだけの数が同時に存在することは不可能なのであって、以下には坏を手掛りとしてこれらを編年的に考察していきたい。その他の器種についてはその結果を敷衍していきたい。

#### (4) 土器の編年的考察

本遺跡出土土器は大略以上のようなものである。これらはすべて遺構内からの出土であり、それぞれがセットの主体乃至セットの一部をなすと見做されてよいものであることは既に触れた。次に、これらの土器群なかんずく土師器がいかなる編年的位置を占めるかについて、従来の型式標準やその他類似遺跡に於ける土師器のあり方を参考にしながら考察していきたい。

東北地方古代の土器のうち、まず土師器の編年研究については、その南部に於いては氏家と典氏の業績が、その北部については桜井清彦・草間俊一両氏の業績が古くより知られ、その大綱がたてられたといえる。

その後前記氏家氏の一連の研究、及び小笠原好彦・阿部義平、桑原滋郎氏などの研究によって、あるいはまた東北各県に於ける古代城柵・官衙址研究の進展によりて、その詳細化といえそうの内づけが行なわれてきたといえる。

一方、須恵器の特に坏については、岡田茂弘・桑原滋郎両氏の研究によりかなり詳細な編年体系がたてられ、また須恵器と土師器を組み合わせとして一体視する視点の確立などによって今後いっそうの進展が期待される。

これらを踏まえて今泉遺跡出土土器を整理したものが第26表である。これをもとにして今泉遺跡出土の土器を編年的に説明し、併わせて問題点をも指摘したい。尚、視覚的に示した方がわかりやすいので、第25表を配列換えしたものを第26表とした。

##### 1. 土師器の編年上の位置について

既に触れてきた通り、本遺跡出土のロクロ不使用土師器群を主体とする土器群は非常に強い類似性を持ち、存続期間の幅があまり広くないものと見做し得る。これらのまとまりを有する土器群は、従来の型式観・編年観を採用すると、栗閉式に最も類似するものである。従って本群土器の編年上の位置を以上の時期と考えておく。絶対年代も従来の見解の通り7世紀代を中心とする時期を想定しておく。

但し、若干詳細に遺物を検討し、更に東隣の膳性遺跡に於ける遺構変遷上の知見を採用すると、本遺跡の遺構・遺物は二分することも可能のようである。遺構変遷上の知見については別に触れたので、遺物についてそれを述べる。二大別を遺構で示す。

前半期……Ai 650 <sup>甲</sup> ・Bc71・Bd03・Bf09・Bf53・Bg62・Bh09・Bi15・Cb24	計9棟
後半期……Ai650 <sup>乙</sup> ・Bb06・Bc53・Bd59・Bi24・Bh71・Ca18	計7棟



両者の相異は、甕型に於いて最も顕著である。即ち、前者には肩部無段で胴部最大径が胴部中央から下半にくるものを含み、後者は肩部有段が大半を占め、胴部最大径は肩部に一致し底部も明確に突出する。従来の型式観の住社式より近いものをも含むものが前者ということになる。

環に於いてはその数が少ないが、体部上半のナデ調整が前者により多く存在するともみれる。しかし、ミガキ技法も存在することは既に何度も触れてきた通りである。

以上二大別は可能であるが、この両者を異型式とすべきか否かは現状では不明である。該期の土器群は今後細分可能とのみ述べるに留めておく。膳性遺跡にその種の良好な資料がある。

- (註9) 氏家和典 東北土師器の型式分類とその編年 歴史14輯  
 (註10) 桜井清彦他 東北地方北部の土師器と竪穴に関する諸問題 館址所収 1958年  
 (註11) 草間俊一 盛岡市史先史期 盛岡市史第一分冊所収 1958年  
 (註12) 氏家和典 陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって 一奈良・平安期の土師器の諸問題—  
 (註13) 小笠原好彦・阿部義平 宮城県新田遺跡の土師器 考古学雑誌54-2 日本考古学会 昭和43年  
 (註14) 宮城県文化財調査報告書35集 東北新幹線関係遺跡調査報告書I  
 同24集 東北自動車道関係遺跡発掘調査概報 一刈田郡歳王町地区—  
 (註15) 岡田茂弘・桑原滋郎 多賀城周辺における古代杯形土器の変遷 研究紀要I. 多賀城神特集  
 宮城県多賀城跡調査研究所 1974年3月  
 (註16) 工藤雅樹・桑原滋郎 東北地方における古代土器生産の展開 考古学雑誌第57巻第3号  
 昭和47年2月

## 2. 須恵器(甗)の編年上の位置について

この資料は口頸部以上を欠失するので若干の疑義は残るが、東北地方に於ける須恵器在地生産開始期にはほぼ近い編年上の位置を占めると思われる。類似した器形を持つ資料は、仙台市大蓮寺窯跡・福島市稲荷塚古墳・福島県下入ノ内遺跡1号住居跡等にみられる。これらの絶対年代は5世紀後半～6世紀前半代と想定されている。尚、本県に於ける同期の可能性ある資料としては、金ヶ崎町高野原出土の高環がある。

前記の下入ノ内遺跡は5世紀中葉末と想定され、かつ共伴土師器は南小泉式である。それに対して本遺跡の共伴土師器は明らかに栗園式類似のものであり、須恵器と土師器の年代間に大きなギャップがある。この現象の背景の究明は、“伝世”の可能性をも含めて今後慎重に行なわれなければならないが、奈良時代以前に於ける集落出土の“特異な遺物”のあり方の類例を蓄積すること、それらと古墳副葬品とを比較することなどがまず行なわれるべき必要の手続きであろう。

— 今泉遺跡 —

- (註17) 本資料については林謙作・渡辺泰伸・中村浩・伊藤博幸・宮城県文化財保護課・同多賀城跡調査研究所・東北歴史資料館・仙台市教育委員会の諸氏・諸機関から多大の御教示を受けた。感謝する。
- (註18) 渡辺泰伸 東北古墳時代須恵器の様相と編年—須恵器編年試論— 考古学雑誌第65巻第4号  
昭和55年3月 下入ノ内遺跡 福島県文化財調査報告書第82集 伊達西部地区遺跡発掘調査報告  
福島県教育委員会 昭和55年

## 〔2〕 鉄器・装飾品について

本遺跡出土の鉄器・装飾品類は第27・28表の通りである。以下には、これらに関連した若干の問題を指摘しておく。

(1) 出土頻度が他遺跡に比し高いと思われる。特定の遺構への集中出土の現象はみられず、ほぼ半数程度の遺構から出土している。(但し装飾品はBd03竪穴住居跡から若干多く出土しているかのようであるが、絶対数が少ないのでその判定は差し控える。)それは一応想定した新・古の两段階に於いて言える。同様のことは東隣の膳性遺跡に於いてもみられるとのことである。

一方、北隣の上餅田遺跡・猫谷地遺跡の同期の住居跡からは極めて稀な出土しかみられない。従って、本遺跡の豊富な鉄器出土例はやや特異に属するものと思われる。

(2) 末期古墳副葬品に共通する要素も併わせ持つものが存在する。本県内の末期古墳の副葬品をみると、玉類(勾玉・切子玉・白玉・小玉・丸玉・管玉・緒占玉・土玉)、装身具その他(腕輪・耳環・袴帯金具)、金属器(直刀・兼手刀・鎌・靱尻金具・刀子・斧・鋤・釣針・釵・刺突具・鋏鋤先・鎌・櫛・鏡・環・鉄状・釘・その他不明)、鏡鑑類、袋貨類、紡錘車、土師器、須恵器(甕?・提瓶・その他)などが挙げられる。副葬品の豊富な器種に比し、集落内出土の貧弱さは当時の政治的・社会的状況の正確な反映であろうが、ここではそれには触れない。貧弱さの中に、副葬品に共通するものが存在する点に留意したい。それは東隣の膳性遺跡に於いては、圭頭太刀の一部や水晶製と思われる切子玉なども出土しており、その傾向はいっそう顕著である。また本遺跡に於ける甕、膳性に於ける高坏・短頸壺・高台付坏などのやや特異な器種からなる須恵器などのあり方も同様である。

以上のことから、本遺跡を含む地域の該期の集落に他地域とはやや異なる性格を想定することができよう。既に述べたBb06竪穴住居跡の年代の異なる須恵器の共伴現象も、この延長上で理解すべきかとも思われる。今後の資料の蓄積が、更に必要であろう。

(註1) 鉄器の定着自体は、既に塩釜式期(高山遺跡)に完了していたと思われる。本遺跡の時期に於ける鉄器の“流通性”の具体相については、今後解明すべき問題であるが、前記の副葬品と集落出土例の比較もその一助にはなろう。恐らく、製品の形での“流通”ではあったろう。

(註2) 奈良時代以前の集落跡出土に於ける鉄器の種別の中には、明白な斧・鋤先などは殆んどみられない。それらが顕著になるのは平安時代以降である。

第27表 鉄器 一 覧 表

番号	遺構名	名 称	長さmm	幅 mm	厚さmm	出土層位	完・破	実測図	備 考
1	Bc 53	刀 子	65	15	6	覆土	破片	○	新
2	"	刀 子	55	15	3	覆土	破片	○	
3	"	不 明	42	30	20	床 面	破片		
4	Cb 24	刀 子	53	9	2	覆土	破片		古
5	Bf 09	鎌	170	30	4	床 面	完全	○	古
6	"	刀 子	115	12	4	床 面	破片	○	
7	"	刀 子	95	12	5	覆土	破片		
8	Bd 12	刀 子	90	13	5	床 面	破片	○	新
9	"	刀 子	61	8	4	床 面	破片	○	
10	"	鋼	13	7	2	床 面	破片	○	
11	"	釘 状	147	6	6	床 面	破片	○	
12	Ca 18	刀 子	78	9	2	覆土	破片	○	新
13	Bf 53	不 明	26	10	3	覆土	破片		古
14	"	不 明	40	30	1	覆土	破片		
15	Bd 03	刀 子	48	12	3	覆土	破片		古
16	"	不 明	35	28	6	覆土	破片		
17	"	刀 子	115	10	3	床 面	破片	○	
18	Bb 06	不 明	35	25	10	床 面	破片		新
19	Bd 59	釘	40		6	覆土	破片		新
20	"	針	45		径25	床 面	破片	○	
21	Bg 62	刀 子	100	15	15	覆土	完全	○	古
22	"	鋼	35	7	2	覆土	破片	○	
23	"	針	52		径3	覆土	完全	○	
24	"	板 状	35	26	5	覆土	破片		
25	Ai 65	釣 針	42	4	2	覆土	破片	○	新
26	"	刀 子	59	12	15	覆土	破片	○	

第28表 装 飾 品 一 覧 表

番号	遺構名	名 称	長さmm	径 mm	重さg	材 質	出土層位	実測図
1	Bd 03	管 玉 状	31	7	2.6	土 製	床 面	○
2	Bd 03	トンボ玉状	12	15	3	土 製	覆 土	○
3	Bd 03	花 弁 形	厚さ4	15	1	石 製	覆 土	○*
4	Bh 09	トンボ玉状	6	8	0.5	土 製	床 面	○
5	Bb 06	管 玉 状	19	9	2.0	土 製	床 面	○

\*石質……淡緑色細粒凝灰岩

### 〔3〕 石器類について

出土した石器類は第29表にまとめた。縄文時代石器の混入と思われるものは除外した。奈良時代以前のものは、砥石類のみである。Bb06竪穴住居跡のものは鎌に類似するが、同様に砥石であろう。

### 〔4〕 土製品類について

紡錘車1とカマド支脚1である。紡錘車は奈良時代以前に通用の形状を有する。本県に於ける該期の出土例は極めて多く、かつ、県南・県北に於ける差異も殆んどない。該期に於ける繊維関係の労働のあり方を反映するものといえ、興味深い。

### 〔5〕 黒曜石について

覆土層中より18点を得た。その背景は不明であるが、埋土中に限定される点はその廃棄の時期を縄文時代以外に求めさせるものであり、若干興味深い点である。表を残す母岩に近いものと、フレイク・チップに近いものがある。

第29表 石器 一 覧 表

番号	遺構名	名 称	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	出土層位	実測図
1	Bc 53	砥 石	65	60	29		床 面	○ a
2	Ca 18	磨 製 石 斧	31	30	18		覆 土	
3	Bb 06	石 鎌	55	23	径25	51.5	覆 土	○ b
4	"	鎌	33	11	4		覆 土	c
5	Bg 62	砥 石	130	25	25		床 面	○ d
6	Bd 59	フ レ イ ク	62	40	18		覆 土	○
7	"	縄 形 石 匙	61	16	5		覆 土	

(質) a……流紋岩質凝灰岩      b……流紋岩質細粒凝灰岩      c……珪質泥岩  
 d……凝灰岩質凝灰岩 (柱状している)

第30表 土 製 品 一 覧 表

番号	遺構名	名 称	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	出土層位	実測図
1	Bd 03	紡 錘 車	上径32	下径46	18	46	床 面	○
2	Bd 59	カ マ ド 支 脚	114		径46	173	床 面	○

本遺跡の周辺に於ける原産地には、国鉄折居駅西方の段丘崖がある。

古墳時代～奈良時代の遺跡に於ける黒曜石出土には、江別式などの所謂北方的要素を強く有する土器群の相伴現象が多く認められるが、本遺跡に於いてはその例にあたる土器類は未検出である。逆に、水沢市石田遺跡出土の江別式土器には黒曜石製石器は相伴しない。

(註1) 高橋文夫氏の教示により実在・確認・採集している。その他には以下の箇所が挙げられる。

第31表 黒曜石一覧表

番号	遺構名	①	②	計	番号	遺構名	①	②	計
		① 表皮を残すもの .....18 うち大型で母岩に近いもの..... 5					すべて覆土出土		
		② フレイクとチップ .....13							
1	Cb 24	3	2	5	6	Bb 06	1	0	1
2	Bd 03	4	0	4	7	Bh 09	1	0	1
3	Bg 62	5	3	8	8	Bi 15	1	0	1
4	Bc 53	2	3	5	9	Ca 18	3	0	3
5	Bd 59	2	0	2	10	Bi 24	0	1	1

Ca 09					Ca 18						
番号	重さg	たてcm	よこcm	厚さcm	備考	番号	重さg	たてcm	よこcm	厚さcm	備考
1	130	7	4.5	3		20	330	7.5	6.5	3.6	
2	300	8.5	7	2.8		21	105	6	4.4	2.0	
3	230	8	8	3		22	110	5.5	5	2.0	
4	75	7	4.5	2		23	175	7.2	5.2	2.0	
5	190	7.5	6	3		24	130	7.5	4.6	1.9	
6	300	9	8	3		25	125	7	4.5	2.1	
7	220	8.5	6	2.7		26	140	6	4.6	2.8	
8	240	8.5	7	2		27	25	4.7	3.3	1.2	
9	315	13.5	5	3.5	完全。凹み石?	28	160	8.7	5	2.3	
10	130	6.5	4.5	2.7		29	25	5	5	1.2	
11	215	11	5	2.2		30	100	6.7	5	2	
12	220	7.5	5.5	3.2		31	95	6.5	4.5	2.2	
13	30	5	3.4	1.5		32	70	8	4.2	1.6	
14	250	9.5	8	2.2		33	180	7.5	7	2.7	
15	90	8.5	4.5	1.5	完全						
16	80	6.5	4.7	1.7							
17	100	9.5	2.7	2.7							
18	75	5.7	4.3	2.2							
19	75	5.5	5	2.3							

第32表  
破砕曜一覧表





- (註2) 花泉町飯倉地区の滝沢層の露頭・国鉄東北線「清水原」駅付近の五反田地内の段丘礫層中。…熊谷常正氏の教示による。また同氏は東北地方の黒曜石出土遺跡の集成を行なっている。
- (註3) 和賀郡湯田町川尻の田土畑鉦山付近。…八重樫良宏氏の教示による。
- (註4) 宇石町橋場の小赤沢地内の段丘礫層中。…高橋与右衛門氏の教示による。さらに佐藤二郎氏の教示によれば、岩手郡宇石町周辺の橋場層(新第三紀中新統最上部)は石英安山岩質凝灰岩と一部熔結凝灰岩などがあるが、その北部においてはその間に黒曜岩・松脂岩等の破片を混在することである。したがって前記の小赤沢地内以外にも産出地が存在する可能性は大である。

## 〔6〕 破砕礫について

適当な名称を知らないで仮にこう呼ぶ。恐らくは楕円形に近い形状を有する板状礫を、二分割～四分分割したものである。竪穴住居跡2箇所の覆土中から出土している。性格等は不明である。

類例は東隣の膳性遺跡にあり、竪穴住居跡の柱穴の掘り方中に集中して検出されている。柱材の押え役的な機能が想定されているらしい。相互の接合資料もあり、この想定は肯定されるべきものであろう。但し、同様の措置が取られる例は殆んどみられず、一種特異な構築法ではあろう。ちなみに膳性遺跡に於ける例(D-8住居跡)は、遺跡内に於ける最大規模のものである。これが単に建物の大小にのみ関係する措置か否かも、今後検討されねばならない。

- (註) 御岩手県埋蔵文化財センター調査の「膳性遺跡D-8住居跡」。同センター鈴木忠治氏の教示を受けた。深謝する。

## 結 語

- (1) 本遺跡は、奈良時代初期まで(7世紀～8世紀初まで)と、平安時代の集落跡であり、前者の遺構が主体をなす。
- (2) 両期ともに竪穴住居跡のみからなる。
- (3) 前者の同時存在竪穴住居数は10棟以内と思われる。
- (4) 前者の伴伴土器群は、従来の栗園式(そのやや古い部分と思われるものを含む)に最もよく類似する。
- (5) 集落は比較的短期間でいったん営なまれなくなり、若干の時間の経過ののちに再度占地される。
- (6) 東隣の膳性・玉貫の両遺跡と一体化して評価されるべきものと思われる。

## (参 考)

### 集落構成の要素と予察

集落規模の完全な復元は困難である。ここでは集落を構成する諸遺構類を概観し、その変化の一端を見るに留める。具体的な図版については巻末参考資料を参照されたい。

(1) 第Ⅰ～Ⅴ群期 確認された限りでは竪穴住居跡のみからなる。相互にやや距離をおいた2～4棟からなる。正方形プランと長方形の二種がある。

(2) 第Ⅵ群期 7～12・13棟前後の竪穴住居跡のみからなる。正方形プランで大中小の三種の組み合わせになる。前代より規模が拡大したと言える。

(3) 第Ⅶ群期 前代にはほぼ共通するが、20棟前後と規模がさらに拡大する例も出てくる。集落内に“支群。的なグループを持つ例もある。住居跡に加え“大溝。も出現する(尻引)。これらは単なる排水路とは考えられない。

(4) 第Ⅷ群期 遺構の種類が増加する。沖積面上の自然堤防上(宮地)や、低位段丘上の微高地上(林前)に立地する集落に“井戸。が伴う。宮地においては井戸をはさんでその南北に住居を営む形式をとり続けており、集落内の井戸使用の実態・その所有形態に関しての示唆に富む。井戸枠の構造にも変遷がある。

立地にかかわらず“掘立柱建物。が加わる(膳性・西大畑・石田・林前・森山工業団地・北に偏するが紫波町上平沢新田)。そのあり方に二種ある。

(A) 竪穴住居跡と隣接し併存するもの。

(B) 竪穴住居跡と異なる地点に存在する(林前・B<sub>1</sub>)、それとは併存しないもの(西大畑・B<sub>2</sub>)。

前代と同様の“大溝。を有する(石田・宮地)。

(5) 第Ⅸ群期以降については、大規模調査例は窯業関連のもののみであり、一般集落の様相は必ずしも明らかではない。あえて言えば、遺跡数は増加するが、遺跡個々は小規模化する傾向にあると言えよう。

### 要 約

(1) 古墳時代～奈良時代の集落は基本的には住居跡のみからなる。奈良時代半ば～末にかけて大溝が伴い始める。

(2) 平安時代初～前半にかけては、住居跡・大溝・井戸・掘立柱建物などで構成される。

集落の構成要素については他に語るべき項目も多い(例えば墓域)が、省略する。

(註1) 1棟前後の若干大規模なものを中心とし、その周囲に中小規模のものが配される形をとるものが多

い。これが末期古墳の配置に共通するという意見には従うべきであろう。

林・伊藤他、角塚古墳調査報告 胆沢町教育委員会 1976年

(註2) それは“筒状。のものから、板材を組んだ”井桁状。へと変化している。

(註3) 第Ⅰ～Ⅴ群期における両者の関係は未詳である。第Ⅵ・Ⅶ群期については、水糸で区切られた各地域毎に集落が存在し、それに近接して墓域も造営される形をとる。墓域は一定期間以上それとして意識され続ける。第Ⅷ群期以降については不明である。“方形あるいは円形周溝状遺構。と呼称されているものが墳墓の周溝である可能性は高いと思われるが、詳細は未詳である。なお9世紀とされる見分森古墳は方形である。

なお相去遺跡群において“長方形の土壇。とされたものが墓域であるならば、10～11世紀前半に別種の葬制も行なわれていたことになる。

相去遺跡—古代集落の発掘—(現地説明会資料) 岩手県教育委員会・北上市教育委員会 1973年

## 集落に関する予察

1. 古代において、集落様相に数期的な変化期がある。それは①古墳時代前期、②古墳時代末期～奈良時代初期、③奈良時代半ば以降末期、④平安時代前半期の4期である。変化は各分野にわたるが、時期により性格に多少の相違がある。例えば④には須恵器の窯など“政治的。色彩の強いものが顕著に伴う。①にも高い“政治性。が当然想定されるが、資料不足であり未詳としておく。②・③にも外的要因の作用は当然存在するが、それは④的なものは無く、その意味で“自主的・主体的。な動向下に基本的にはあったと言える。

以上の諸変化期は従来常識的に想定されてきたそれとほぼ合致しよう。いうまでもなく④と胆沢城(そして志和城他)の設置は無関係ではないであろう。④の多方面にわたる“政治的。色彩の濃い変化は、律令政府進出の反映と見做されるべきである。

2. 集落の形態に類型があり、それは時代差をある程度反映する。類型は以下の如くである。  
〔A〕 明白な計画性を持たない“自然村落。というべきもの。少なくとも奈良時代の集落の大半が該当し、基本的には竪穴住居跡からなる。大型のものに中小が組み合わせになり、末期古墳の配置に通ずる。一定期間で造営が中断される傾向がある。在地・土着集団の集落と思われる。各種の発展傾向、他地域との交流が見られる。奈良時代末期には、次代に顕著になる諸変化の部分的兆しが数分野に現われ始める。

〔B〕 遺構の配置・集落の造営状況に一定の計画性を窺わせる“計画村落。ともいうべきもの。平安時代初期～前半代の集落の大半が該当する。“計画性。は竪穴住居跡・掘立柱建物・井戸・大溝・竈等の遺構種類の増加、それら相互の配置、立地面を含めた造営状況、その地域的限定性等々の諸側面に現われている。さらに数類型がある。

1. 前代との連続性を示す(少数)もの。

(I a) 竪穴住居跡・掘立柱建物・その他が組み合わせになるもの。

(I b) 若干規模の大きな掘立柱建物のみからなるもの。

II. 前代との連続性を殆んど示さないもので、Iより多数。

(II a) 竪穴住居跡・掘立柱建物・井戸等が組み合わせり、(I a)に共通するあり方を示すもの。出土鉄器に農具的なものが目立つ。

(II b) 遺構・遺物両面にやや特異と見做し得る要素を持つもの。それらは①須恵器窯(見分森)、②鉄滓・フイゴ羽口等を多く出土する(力石他の江刺地方の諸遺跡)、③多量の鉄製武器の出土(同前)、④木簡(落合II)、⑤石帯(力石II)、⑥硯(同前)、⑦墨(上平沢新田)などである。これらは従来“識字層の存在。を示す、とりわけ一定の“政治性。を示すとされてきたものの多くを含む。それを採って、この類型には“政治性。を想定しておく。その地理的位置が所謂城柵・官衙遺跡、建部される諸郡の位置と密接に関連すると思われる等の特徴も指摘できる。これを制度史上の概念といかに対応させ得るかは、今後の検討を要しよう。

以上のA・B類型の性格について、短絡的ではあるが推定を試みる。即ち、奈良時代までのA類型には、在地の支配原理の貫徹する“自然村落。的性格、B類型に律令制的支配原理に立つ“政治村落(律令村落)。的性格を想定できる。B類型の中には、Aが律令制的に再編されたもの(Ia)他地域よりの“移民。集団により新規造営されたもの(IIa)、種々の次元と、“軍事的。なものを含む“官衙。的なもの(I b・II b)が存在する可能性が強い。“移民。云々については、遺構・遺物の特徴の把握とその系統の検討から、ある程度明らかにしえよう。

B類型村落の明確な存在は、全般的には衰退期に向かいつつあった律令制が、辺境において模範的・理念型的に行なわれた可能性をも示唆するものである。

3. 掘立柱建物の性格に複数があり得る。

岩手県南一県中央にかけて、平安時代に属すると思われる掘立柱建物を伴う集落跡は5例ある。可能性の高い森山工業団地も加えると6例になる。その何れもかVIII群期に関連することは既に述べた。したがって岩手県地方の古代集落内の掘立柱建物の初期は大略確定したと言える。

その主屋規模は3間×2間、4間×2間、5間×2間などの諸類型からなる。大部分は中抜き(注2)の形式をとるが、竪性例のみが総柱である。

集落内のあり方には、A・B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>の三種あることは既に触れた。そのうちAたる石田の6棟、B<sub>2</sub>の西大畑の4棟が複数(ただしすべてが同時存在ではない)存在、他は1棟の単独存在である。これらを踏まえ、その性格想定を試みる。

(I) Aのうち単独存在には、少なくとも“倉庫。的なものが含まれよう。複数存在のもの

一部にもそれがあろう。しかし後者のうちの石田・西大畑のあり方は、掘立柱建物自体に“居住施設。的なものも含まれる可能性をも示唆する。石田の西面前のある”主屋。を中心とし、その周囲に“倉庫。的ものを配す遺構配置と、それと軌を一にする溝類の配置は、さらに進んで、特定集団の所有する一括建物群の存在を示唆するものとも考えられる。しかもそれに竪穴住居跡をも伴う可能性がある。

西大畑例は、遺構周辺に遺物散布が集中する傾向が顕著に見られる。

何れにせよ現状での時期の細かい特定は出来ないが、少なくとも平安時代前半期に掘立柱建物の中に“居住施設。的のものが存在した可能性は大である。ただし西大畑例は梁行5間のものを含むなど、他例より明らかに大規模なもののみで構成される。しかもB<sub>2</sub>類型でもあることからすると、西大畑例に通常集落以外の、何らかの意味での“官衙。的ものを想定すべきかとも思う。

(2) AとB<sub>1</sub>のあり方の異同を竪穴住居跡との対応関係からみることも出来る。即ち、相互に直近の位置関係にあるものに対応関係を想定出来るAと、“いくつかの小単位である竪穴小群の共有関係にある。とも見做し得るB<sub>1</sub>である。

掘立柱建物と竪穴住居の対応関係の復元については、個々の遺構の位置の特定、厳密な同時存在遺構の確定などの基礎的操作が必要である。

#### 4. 遺跡内の遺構集合(支群)について

遺跡内に“支群。ともいうべきものが存在することは既に触れた。それは時代・遺跡の性格の異同にかかわらず、何らかの形で存在したらしい。それらの具体的認定は今後の一大課題である。

その中の特に顕著な現象“規模の異なる竪穴住居跡の組み合わせとしての存在。は、種々の問題を提起する。例えば、

(1) AがB-I-aに“再編。されるにあたり、前代の共同体組織がある程度利用された可能性。

(2) B-II-bの“政治性。の強いと思われる集落にもそれが見られることは、一種“人為的。な集落造営の際にも、移住前のあり方を踏襲・擬制した可能性。

等の諸点である。これらの観点も、遺構の機能の観点に加えて設けられるべきであろう。何れにせよ“支群。的ものの認定・設定は各種共同体の具体相の復元に必要不可欠の前提であり、今後も継続追求されるべきである。 (文責) 相原康二 (昭和54年末稿了)

(註1) 膳性・西大畑・石田・林前・上平沢新田

## 一 今泉遺跡一

(注2) 他に調査者により第Ⅵ群期に属する可能性ありとする1棟が西大畑にある。梁間・桁行が3間×1間の規模で、振り方は円形、柱あたりは細く、他例とは明白に異なる。

### (注3) 林前遺跡S B63建物跡

林前遺跡一区画整理に伴う範囲確認調査一 岩手県水沢市文化財報告書第3集 岩手県水沢市教育委員会 1979年

(注4) 吉田努氏によると、太田方八丁遺跡外郭築地内の住居跡群にもその傾向があるとのことである。また真城ヶ丘団地も同様である。

伊藤博幸 奈良・平安時代の村落構造とその特質 考古学研究会岩手支部3月例会報告レジュメ 1979年

## <sup>14</sup>C測定結果

ここで住居跡の年代に関わる<sup>14</sup>C測定結果について触れておく。

焼失家屋と推察されるBh09竪穴住居跡内出土の炭化材が測定試料である。材質はケヤキの一部とされ、床面からの出土によるものである。当然、家屋構造に関わる材と思われる。

日本アイソトープ協会による測定結果は、 $1460 \pm 60$ yB.P. ( $1420 \pm 60$ yB.P.)と計算されている。換算年代は年代誤差を2倍にして換算すると370-610年代となり、奈良時代以前の時期に相当するものである。

Bh09竪穴住居跡に於ける出土遺物の編年上の位置については、先にも記した通り7世紀代を中心とする時期に想定している。当遺構は、特に二大別したうちの前半期ということで、換算年代の下限にも求められるのであろうか。出土遺物のみに関していえば、須恵器甕や黒曜石のあり方からみれば古い要素のあることも事実であるが、遺跡そのものの年代観と直接的に関わりを持つとするのはまた別問題であろう。従って、ここでは既述の事実と予察の一端を記すに留める。

(注) 年代は<sup>14</sup>Cの半減期5730年(カッコ内はLibbyの値5568年)にもとづいて計算され、西暦1950年より遡る年数(year B.P.)として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計算管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、<sup>14</sup>C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に上げますと確率は約95%となります。なお<sup>14</sup>C年代は必ずしも真の年代と等しくない事に御注意下さい。

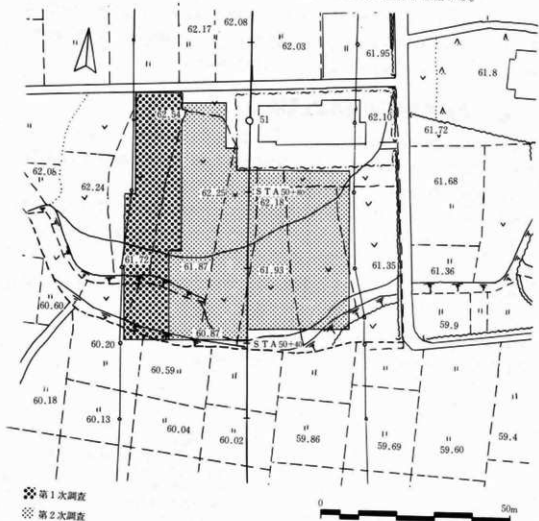
# 西大畑遺跡

1. 遺跡所在地 水沢市佐倉河字西大畑
2. 調査期間 第1次昭和49年10月30日～12月7日  
第2次昭和50年7月28日～9月30日
3. 調査面積 約2970㎡
4. 発掘面積 約2970㎡
5. 遺跡記号 NOH74・NOH75



## I 遺跡の位置と立地 (第1図)

当遺跡は水沢市佐倉河字西大畑にあり、水沢駅の北西約3kmに位置する。遺跡は胆沢扇状地の北西部にて、低位の水沢段丘上に立地する。水沢段丘は東流する小河川に開析され、その中に東西方向に広がる低湿地の沖積地をかかえ、段丘と沖積地は崖面をもって画される。北側崖面を境とする北の段丘縁部と南の沖積地は比高差約1mである。北の段丘が南にゆるく傾斜して沖積地をのぞむ段丘縁部に遺跡は立地する。南側沖積地には水田が広がり、北側も削平されて水田地帯となっており、その間にはさまれた微高地の畑地で標高約62mの場所にある。尚、沖積地を中に挟んだ北及び南の東西に延びる段丘縁部には多数の遺跡が存在する。



第1図 遺跡地形図

## Ⅱ 調査の経過 (第3図)

調査は2次にわたって行なわれた。第1次は昭和49年10月30日から12月7日までで西側約720㎡、第2次は昭和50年7月28日から9月30日までで残りの東側約2250㎡の全面発掘を行なった。報告は第1次・第2次における調査の成果を一括して扱う。

当遺跡は段丘縁部にあつて東西に広がるものであるが、道路敷となる遺跡の範囲は東西約60m、南北約65mにあたる。調査は路線中心杭STA50+40と50+80を結ぶ線を基準とし、3m間隔でこれに平行及び直交する線を設けて3mグリッドを組んだ。STA50+80地点をCa50グリッドとし、東西南北に夫々延長してグリッド名を付した。

段丘縁部はやや微高地的な地形を示し、地表面から地山上面まで約15cm程の耕作土一層で遺物を含む。耕作土である表土除去後、種々の遺構が検出される。南端崖面からは多量の遺物が出土したが、新しい溝が1条東西に走るだけで、遺構は検出されなかった。

## Ⅲ 遺跡立地面の基本的層序 (第2図)

層序の調査は発掘区東端のBi74地点から東2mの間で、深さ1.5mについて行なった。

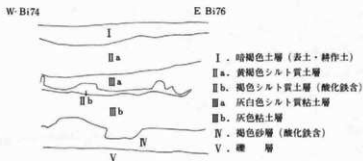
第Ⅰ層：調査区東半は暗褐色土層で、西半は黒褐色土層である。表土の畑地耕作土で、遺物包含層である。層厚約15cmである。

第Ⅱa層：黄褐色シルト質土層。この層から下は地山であり、層の上面が遺構検出面である。層厚約35cm程で水平に堆積している。所によってはⅠ層との間に漸移層が薄く入る所もある。遺構はこの層の中位まで掘り込まれている。

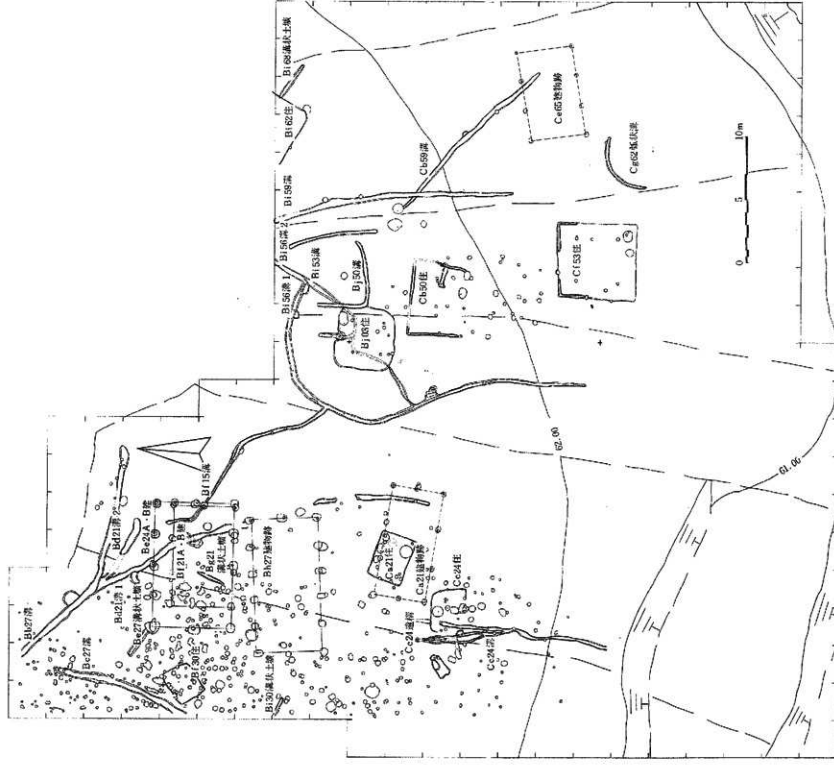
第Ⅱb層：褐色シルト質土層、層厚5cm程の薄い層で、酸化鉄を含む。Ⅲa層とⅢb層の間に起伏をもつて入り込む。

第Ⅲa層：灰白色シルト質粘土層。層厚約20cm前後で、やや褐色がかる。

第Ⅲb層：灰白色粘土層。層厚約35cm程で、比較的厚い層である。



第2図 遺跡の基本層位 縮尺1/4



第3回 西大田遺跡、グリッド・透視配置図

第Ⅳ層：褐色砂層、層厚約20cm前後で酸化鉄を含む。層下面は比較的水平である。

第Ⅴ層：礫層で、水沢段丘構成層の縮木礫層である。

## Ⅳ 検出遺構と出土遺物

### 1. 溝状土壌 (第4図)

検出された溝状土壌は4基で、細長い溝状を呈するものである。この土壌の名称については種々に仮称されているが、ここではその形態から溝状土壌とする。4基の溝状土壌の分布地区は発掘区の北側微高地にあり、北西部に3基、北東部に1基である。調査範囲も限られ、発見数が少なくまばらな分布なので、分布状態や配置関係等は不明である。遺構検出面は表土下の地山・黄褐色シルト質土層上面である。

溝状土壌の上縁は細長い溝状で、横底は更に狭小の溝状を呈する。長軸断面は両壁共に垂直な立ち上がりを示す。短軸断面は上方に向かって外開きする「U」字状や「V」字状を呈す。土壌内覆土は自然堆積で、横底に汚れた土、中間に壁部崩落土、上部に流れ込んだ土が夫々堆積する。土壌内出土遺物は、Bi30溝状土壌覆土から石鏝1点(220)が出土しただけで他は皆無である。横底部は平坦で、何ら施設を設けた跡は見当たらない。

Bi30溝状土壌はその一部西側が調査範囲外にかかり、全体の形状を明らかにすることができなかった。Bi68溝状土壌は、古墳末期から奈良時代の遺構・Bi62住居跡によって西端を切られている。Be27溝状土壌はBe24A・B建物跡の柱掘り方によって南東部を切られている。

以上4基の溝状土壌の規模等は次の表の如くである。

第1表 溝状土壌一覽

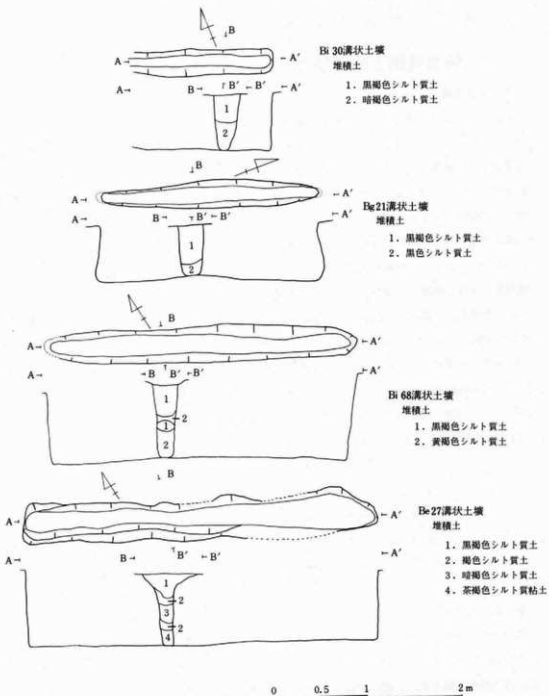
溝状土壌名	上縁 長軸×短軸 cm	横底 長軸×短軸 cm	深さ cm	長軸方向	出土遺物
Bi30溝状土壌	(150)×27	(150)×11	60	N-69°-W	石鏝1
Bg21溝状土壌	230×30	240×17	55	N-20°-E	
Bi68溝状土壌	330×39	317×18	82	N-57°-W	
Be27溝状土壌	375×43	370×14	78	N-59°-W	

### 2. 溝 (第3図)

南緩傾斜の地形で、北から南へ走る溝が多数ある。上流の北方グリッド名を溝名とした。これらの溝は自然にできたものであるが、中には人為的に排水用に掘られたと思われるものもある。溝の長さは種々あり、幅は40cm前後、深さ17cm前後の断面皿状の浅いものである。覆土は自然堆積土がほとんどであるが、人為埋土と考えられるものもあり、覆土に遺物が混入する。

Be27溝：南西方向に走る溝で、Bf30グリッドから更に南西へ延びる。

Bb27溝：南方へ走っていた溝が、Bd21グリッド内で東方Be9グリッドへ走る溝に変わっている。



第4図 溝状土平面図・断面図

Bd21溝<sup>1</sup>：本来はBb27溝の南方であったものが、Bd21グリッド内で切られている。この溝は南方のCc15グリッドまで延びる長いものであるが、浅いため途中部分的に切れている。Be24A・B建物、Bf21A・B建物、Bh27建物の柱掘り方により部分的に切られている。Ca21建物とも重複しているが前後関係は不明である。

Bd21溝<sup>2</sup>：当初はBb27溝がBd21グリッド内で二方向に分かれ、南東へ走るBd21溝<sup>2</sup>と南へ走る溝<sup>1</sup>であったものである。この溝はBe15グリッドまでの短いもので途中部分的に切れる。

Cc24溝：Cc24遺構の煙道に始まり、Ch27グリッドまで南走する溝で、南端に土師器長胴甕の口縁部(第22図84)を埋め込み、その中を水が流れるようにしてあり、人工の溝と考えられる。

Bf15溝：遺跡中央を蛇行しながら南のCg6グリッドまで走る最も長い溝である。Bf21A・B建物柱掘り方により溝の一部が切られている。覆土内出土遺物も非常に多い。

Bi53溝：Bi56溝が南西へ走っていた時の一部であったものがBi53グリッド内で切られてBj3住居煙道に始まる溝との接点までは人為的に埋め込まれ、その南東は黒褐色腐植土が堆積する。Cb6グリッドでBf15溝に接続する。Bj50L形溝に切られる。

Bi56溝<sup>1</sup>：北東から西南へ走る溝であったが、Bi53グリッド内で南東を埋め込み、Bj3住居北側を迂回して西方へ走る溝である。Bj6グリッドでBf15溝に接続する。出土遺物は多量。(32～39)

Bj50L形溝：ほぼ東西・南北方向にL字形に走る溝。Bi53溝、Bj3住居を切る。出土遺物なし。

Bi56溝<sup>2</sup>：非常に短かく南北に走る溝で、Ca56グリッドで終わる。溝西端は浅くなり消える。

第2表 溝 一 覧

溝名	方向	長さ m	上幅 cm	底幅 cm	深さ cm	堆積土	出土遺物 (数字は破片数)
Be27溝	北東-南西	11.0	70	30	18	黒褐色腐植土	土師器甕片少量
Bb27溝	北西-南東	19.4	65	48	17	黒褐色腐植土	
Bd21溝 <sup>1</sup>	北-南	27.5	56	50	6	黒褐色腐植土	
Bd21溝 <sup>2</sup>	北西-南東	5.5	60	43	8	黒褐色腐植土	
Cc24溝	北-南	15.0	45	30	23	暗褐色シルト質粘土	土師器甕口縁部
Bf15溝	北-南	40.0	35	25	15	黒褐色腐植土	石器1 縄文6 赤塗灰2 複合口縁1 銅台部1 内黒灰6 土師器甕207 須恵壺1
Bi53溝	北東-南西	14.0	45	30	23	黒褐色腐植土	石器1 土師器甕31
Bi56溝 <sup>1</sup>	東-西	14.2	50	32	25	黒褐色腐植土	石器1 手掘れ土器1 非ロクロ内黒灰24 土師器甕98
Bj50L形溝	東西-南北	9.5	28	18	7	暗褐色シルト質粘土	
Bi56溝 <sup>2</sup>	北-南	7.3	27	17	20	暗褐色シルト質粘土	土師器甕10
Bi59溝	北-南	19.5	41	32	10	暗褐色シルト質粘土	非ロクロ内黒灰1 土師器甕22 ロクロ灰1 須恵壺4
Cb59溝	北西-南東	15.3	38	29	30	黒褐色腐植土	土師器甕73
Cg62孤状溝	北東-南西	6.0	29	20	20	黒褐色腐植土	土師器甕31 ロクロ灰2

Bi59溝：南北に走る長めの溝で、Ce59グリッドで浅くなり消える。Cb59溝を切る。

Cb59溝：北西から南東のCe71グリッドまで走り浅くなって消える。Bi59溝に切られる。Ce65建物と重複するが、新旧関係は不明である。

Cg62弧状溝：溝底部の高さは全て同じで、溝両端部上縁の高さが低くなる為溝が浅くなり消えたもので、円形の周溝であったと思われる。南東部は削平された可能性が高い。

### 3. 竪穴住居跡

#### Cf53住居跡（第5図）

（遺構の確認）調査区南東部の南緩斜面のCf53グリッド周辺で表土を除去した結果、地山の黄褐色シルト質土に達し、方形の黒味がかった暗褐色シルト質粘土の落ち込みを確認した。

（重複・増改築）認められない。

（平面形・方向）南北6.2m、東西6.0mで多少歪んではいるが、正方形に近い平面形である。床面積は約35㎡である。方向は南—北。

（堆積土）住居内の堆積層は薄く、一層である。黒味がかった暗褐色シルト質粘土層で、黒褐色土、焼土、炭化物等が混入し、住居内全域に分布する。

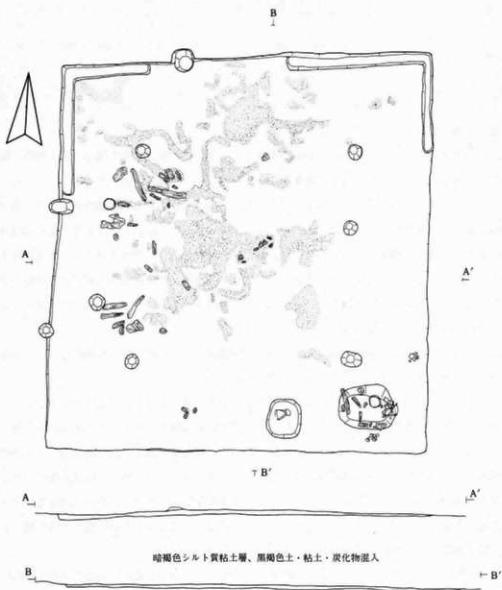
（床面）床面は多少の凸凹はあるがほぼ平坦で、あまり固い面をなしていない。床面全域に炭化材や焼土が分布しており、焼失家屋の跡と考えられる。壁は床面から垂直気味に立ち上がる。北東及び北西の隅に周溝がめぐる。灰は検出されなかった。貯蔵穴状ピットや柱穴と考えられるピットが検出された。床面下は地山の黄褐色シルト質土で、掘り方埋土は検出されなかった。

（柱穴）床面で確認されたピットは9個、竪穴の壁を切つてあるものが3個の合計11個のピットがある。この中で、柱痕と掘り方が識別できたものはなかった。竪穴の対角線上にのる形の方形に配置されたピットがP<sub>3</sub>～P<sub>6</sub>の4個であり、支柱穴と考えられる。ピットの直径は22cm位、深さは53cm位でほぼ垂直である。西壁中央付近の壁を切つて2個のピットP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>があり、直径22cm、深さ28cm程で垂直であり、出入口の柱と考えられる。

（貯蔵穴）住居の南東隅に隅丸長方形のP<sub>10</sub>・P<sub>11</sub>がある。大きさはP<sub>10</sub>が62×54cm、深さ28cm、P<sub>11</sub>は90×68cm、深さ19cmである。P<sub>10</sub>の内部には土師器球胴形の甕(第15図12)、砥石(第16図17)が入っており、P<sub>11</sub>には土師器環(第15図4・5)、土師器壺(第15図8)、土師器甕(第15図10・11)、土師器甕形無底式甗(第16図16)が入っていた。ピットの堆積土は暗褐色シルト質土で、炭化材や焼土が多量に入っていた。

（その他の施設）北東及び北西隅周辺で壁に沿って幅18cm、深さ7cm程の周溝がめぐる。

（年代決定資料）床面及び貯蔵穴状ピットから多量の遺物が出土している。(第15・16図1～18)これ等の遺物はその上に炭化材が覆つてあったもので、一括土器として住居の年代決定上重要な資料である。



第5図 Cf53竪穴住居跡

0 0.5 1 2m



第3表 Cf 53 住居跡ピット一覧表

PitNo.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>
深さ(cm)	26	30	52	56	53	51	29	39	20	28	19	
土色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色
土性	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土
備考						炭化物 多量混入				炭化材土器 貯蔵穴	炭化材土器 貯蔵穴	

## 遺物 (第15・16図1～18、第27表)

住居に伴って出土した遺物は土師器の丸底坏7個体、壺1個体、甕7個体、瓶1個体、砥石1点、管玉1である。土器は全て破片であり、火熱を受けて器面がボロボロになっている。

1～7：1・2は丸底小形の坏で口縁が直立する。口縁は両面横ナデ、体部外面にハケメ痕が残る。3・4は内外面朱塗りの丸底坏で、4は口縁がわずかにくびれて外反する。4の口縁外面に横ナデ、体部に横位のナデ跡が見られる。5・6は比較的深い丸底坏である。5は体部上半から口縁部にかけての内面にハケメ痕が見られる。6は両面共に横位のナデによる調整がされている。7は丸底坏の底部破片のみで、両面共に朱塗りの大形のものである。内面は寛ミガキ、外面は寛ケズリされている。

8：小形の壺で、体部下半と底部を欠いている。内面は口縁部が寛ミガキ後朱塗りされ、体部は巻き上げ痕が残る。外面は寛ミガキ後朱塗りされている。

9～16：9は小形の長胴形甕で体部底部を欠失している。体部上端から頸部でややすぼまり、短い口縁が外反する。段或いは陵はつかない。口縁部外面に横ナデ痕が残る。16は長胴形甕の底部を欠いた形の無底式の甕で口縁部を欠失している。器面は両面共に部分的に寛ミガキの跡が残る。10～15はやや大形の球胴甕の破片で、短い口縁が外反する。10は口縁部両面横ナデ、体部は内面ハケメ、外面が寛ミガキされている。11は体部内面へラナデ、外面は口縁部横ナデ体部寛ミガキされる。12は器面風化磨滅著しく不明である。13は体部内面に寛ナデ痕が見られる。貯蔵穴状ピットP<sub>10</sub>出土が12、同じくP<sub>11</sub>出土が10・11・16である。

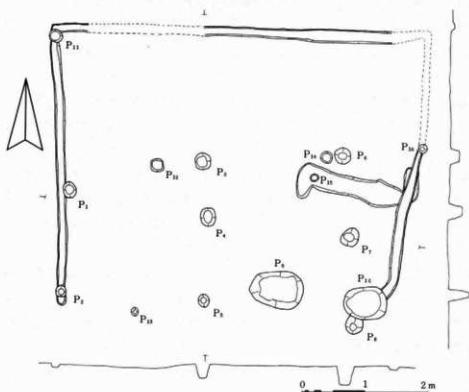
17：扁平楕円形の自然石の上下二面を砥磨面として使用した痕跡が残る。石材は細粒石質凝灰岩で、貯蔵穴状ピットP<sub>11</sub>出土である。

18：蛇文岩製の小形の管玉で、長さ5mm、太さ(径)4.5mm、貫通孔径1.8mm、重量0.44gで、床面からの出土である。

## Cb50住居跡 (第6図)

(遺構の確認) 調査区中央の南緩斜面Cbグリッド周辺の表土除去をすると地山の黄褐色シルト質土層に達し、方形周溝状の掘り込みとピットにより確認される。

(重複・増改築) 不明



第6図 Cb50竪穴住居跡

第4表 Cb50 竪穴住居跡ピット一覽

PitNo.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>
深さ (cm)	24	29	16	22	33	27	29	24
土色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色
土性	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト
備考								

PitNo.	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>	P <sub>16</sub>
深さ (cm)	24	28	16	48	11	12	37	12
土色	黒褐色	黒褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色
土性	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト
備考	土師器燹細片 3片			炭化物含む				

(平面形・方形) 東側と南側が削平されているため、正確な平面形は不明である。しかし北側及び西側に残存する溝とピットの配列から、1辺約6mの正方形に近い形と推定される。方向はほぼ南—北で、東西長は6m程、南北長は現存部分で4.5mある。現存する床面積は24.5㎡(推定32㎡)である。

(堆積土) 住居跡の南側は削平されて周溝が消えており、北側も周溝が残るだけで住居内外の高さが同じになっている。そのため住居内堆積土は不明であるが、周溝内は暗褐色シルト質土が堆積している。

(床面) 方形をした周溝内外の高さは同一になっており、床面は削平され、遺構検出面が床面より下がっていると思われる。炉は確認されない。方形周溝は部分的に残っている。保存のよい所で幅15cm、深さ6cm程である。他の住居跡と比較すると明らかに住居に伴う周溝と思われる。ピットは16個検出された。

(柱穴) 16個のピットの中で柱痕と掘り方の識別できるものはなかったが、配置関係に規則性を見出せるのはP<sub>3</sub>~P<sub>6</sub>であり、この3対6個のピットが支柱穴であつたらうと推定される。西側溝を切つてP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の2個のピットがあり、他の住居跡の例から出入口の柱穴と思われる。

(貯蔵穴) 住居の南東部に楕円形状のP<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>がある。大きさはP<sub>9</sub>が85×60cm、深さ25cm、P<sub>10</sub>が68×52cm、深さ30cmで、土師器甕体部の破片が数片出土している。埋土は周溝と同じ暗褐色シルト質土である。

(年代決定資料) 出土した遺物は貯蔵穴状ピットP<sub>3</sub>からの土師器甕の細片だけで、遺構年代を決める上で適当な資料は少ない。

## 遺物

貯蔵穴状ピットP<sub>10</sub>から頸部に段のつかない土師器球胴甕の破片が少量出土した。

### Ca21住居跡 (第7区)

(遺構の確認) 発掘区西側中央Ca21グリッド周辺で長方形の黒褐色土の落ち込みを発見した。遺構確認は表土下の黄褐色シルト質土層上面である。

(重複・増改築) 床面北部がCa21建物跡の柱掘り方P<sub>2</sub>により切られており、更に南西隅床面が後世の掘り込みによって切られている。

(平面形・方向) 平面形は東西に長軸をもつ長方形で、長軸長は3.8m、短軸長は2.85mである。床面積は10.5㎡である。

(堆積土) 壁穴内堆積土は基本的に1層である。黒褐色シルト質粘土層で、黄褐色シルト小ブロックが混入し、又炭化物・焼土・土師器細片も少量混入する。住居内全域に分布する。

(床面) 比較的平坦な床面で、固くしまっている。壁高は最も保存のよい西壁で5cm程であり、南壁・東壁は共に1cm位しかない。床面東側の北寄りに焼けた部分があり、炉と思われる。確

認められたピットは13個である。竪穴掘り方埋土は見られず、床面下は地山の黄褐色シルト質土層である。

(柱穴) 床面確認のピットは13個である。この中でP<sub>3</sub>はCa21建物の柱掘り方であり、P<sub>13</sub>は後世の掘り込みである。P<sub>6</sub>・P<sub>12</sub>は非常に浅い凹み程度のもと思われる。深さや配列関係に規則性の認められるのはP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>であり、この3個が主柱穴をなすものと思われる。南東の主柱穴はP<sub>3</sub>により破壊されたものであろう。西壁際のP<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>の2個のピットは出入口の柱穴かもしれない。

(炉) 床面東側に45×40cmの範囲に焼土が広がる。掘り込みや石組は見られないが、土師器丸底坏が焼土中から出土しており、地床炉と考えられる。

(貯蔵穴) 床面北側に楕円形状のP<sub>10</sub>がある。大きさは40×35cm、深さは22cmで土師器の球胴形變約1/2個体が入っており、貯蔵穴状ピットと考えられる。

(その他の施設) 検出されなかった。

(年代決定資料) 出土遺物は非常に少ない。この中で炉跡と思われる焼土中出土の土師器丸底坏(第16図19)と貯蔵穴状ピットP<sub>10</sub>出土の土師器球胴變(第16図21)が住居の年代を決定する上で最も有効な資料と思われる。

第5表 Ca21 竪穴住居跡ピット一覧

PitNo.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>
深さ(cm)	40-	24	58	12	27	8	23	35
土色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	暗褐色	黒褐色	黒褐色
土性	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土
備考				土師器變片				ロクロ坏 土師器破片

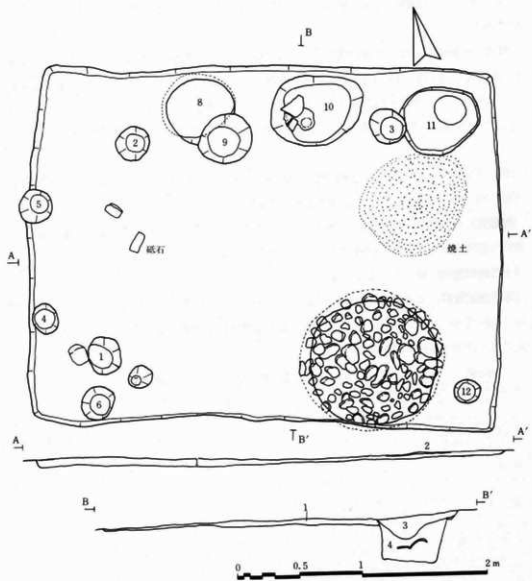
PitNo.	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>
深さ(cm)	38	33	45	5	75
土色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	暗褐色	塵凡土
土性	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質粘土
備考	Ca21建物柱 掘り方	土師器球胴變	柱掘り方		後世の 掘り込み

遺物 (第16図19～21, 第27表)

19: 炉と考えられる焼土中とその周辺床面より破片状態で出土したものである。丸底・丸味を帯びた体部で口縁部が「く」の字状にくびれて外反する坏である。

20: 床面南西部P<sub>3</sub>西隣の床面出土の砥石で、板状の直方体の自然石上下二面を砥磨面とする。

21: 貯蔵穴状ピットP<sub>10</sub>から約1/2個体分が出土したものだが、口縁部を欠いている。土師器球胴形變で、小さな底部がいく分か突出している。同一個体であるが接合不能な頸部の細片があり段は形成されていない。



1. 黒褐色土と黄色シルトの混土層 (含炭化物・焼土・土師細片)
2. 焼土層 (含炭化物)
3. 黒褐色土層 (黄色シルトブロック混り、含炭化物・土師細片)
4. 黒褐色土層 (黄色シルトブロック少量混る。含炭化物・土師細片)

第7図 Ca21 竪穴跡

**Bf30住居跡 (第8図)**

(遺構の確認) 調査区北西部の比較的平坦なBf30グリッド周辺で、長方形をした黒褐色土の落ち込みを確認した。遺構確認面は表土下の地山黄褐色シルト質土層上面である。

(重複・増改築) この周辺には多数のピットが分布する地域であり、竪穴の壁高も非常に低い事もあって、これ等多数のピットと重複し合っているが、前後関係はほとんど不明である。

(平面形・方向) 平面形は長方形を呈し、長軸は北東—南西方向で、長さは約2.9mである。短軸長は2.45mで、床面積は約6.44㎡である。

(堆積土) 竪穴内堆積土は基本的には1層である。黒褐色腐植土層で、黄色シルト質土の小ブロックや、炭化物、土師細片が少量混入している。竪穴内全域に分布し、攪乱を受けている。

(床面) 多少の凹凸はあるが平坦な床面である。床面や壁を切って多数のピットがあり、またその他の攪乱も受けて床面の保存状態はよくない。北壁は多数のピットにより壊され、明確なものではない。壁の高さは最も保存のよい南壁で6cm程である。壁沿いの施設は検出されなかった。22個のピットが確認されたが、炉は発見されなかった。床面の下が地山の黄褐色シルト質土層である。

(柱穴) 発見されたピットは22個であるが、柱痕と掘り方の区別のつくものはない。P<sub>1</sub>は2個のピットの切り合いであるが、新旧の区別はできなかった。埋土の中にロクロ使用の坏破片が入っていたが、これは竪穴以後の新しいピットに伴うものと思われる。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は配列関係にやや規則性が認められ、深さも22cm前後で支柱穴と思われる。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は東壁際に並び、深さも約33cm位で他の住居跡にも見られ、出入口の柱であったと考えられる。以上P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の6個のピットがこの竪穴に伴うピットと推定される。

(炉) 検出されなかった。

(貯蔵穴) 床面の北壁際にやや楕円形をしたP<sub>17</sub>がある。大きさは40×35cmで、床面からの深さが22cmである。遺物は出土していないが、位置の形態等から貯蔵穴状ピットと思われる。

(その他の施設) 検出されなかった。

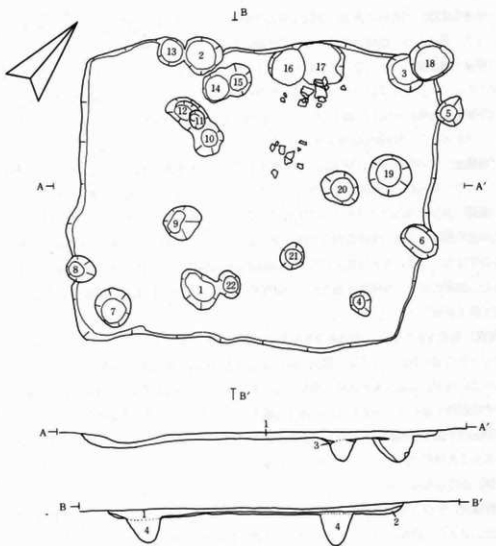
(年代決定資料) 遺物で実測図に書けたものは4点で、坏(第21図59)土師器甕(同60～62)と少ない。他に細片として非ロクロ内黒坏・高台坏等の破片も出土しているがこの竪穴に伴うものか不明である。床面・貯蔵穴状ピット出土の遺物はなく、住居の年代決定が困難である。

**遺物 (第21図59～62, 第27表)**

59: 竪穴内北東部堆積土中出土のロクロ成形坏である。体部下端と回転糸切痕を有する底部からなる破片がある。浅黄橙色の硬質な坏で、胎土は緻密である。

60: 竪穴内北東部表土下の土師器小形甕で、頸部と体部境に段を形成する。

61: 竪穴内北東部堆積土中出土の土師器甕の底部が突出している。



1. 黒褐色土層 (黄色シルト混り)
2. 黒褐色土と黄色シルトの混土層
3. 黄色シルト層 (黒褐色シルト混り)
4. 黒褐色土層 (含炭化物)



第 8 図 Bf30 竪穴跡

62：竪穴内北東部表土下出土の土師器甕の体部下半から底部の破片である。底部は突出し、下面に木葉痕が見られる。

その他：堆積土やピット中から出土した土器細片は非ロクロ内黒坏片、ロクロ内黒坏片、ロクロ坏片、土師器甕片、須恵器壺片、高台坏片等種々である。

第6表 Bf30 住居跡ピット一覧

PitNo.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>
深さ(cm)	22	22	24	21	33	34	22	18	11	21	21
備考	綜合土師器 壺ロクロ坏					土師器甕片					

PitNo.	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>	P <sub>16</sub>	P <sub>17</sub>	P <sub>18</sub>	P <sub>19</sub>	P <sub>20</sub>	P <sub>21</sub>	P <sub>22</sub>	
深さ(cm)	16	21	25	22	34	22	65	17	23	31	34	
備考					土師器甕 ロクロ坏	貯蔵穴	土師器甕 ロクロ坏	土師器甕 ロクロ坏 高台坏				土師器甕

### Bj3住居跡 (第9図)

(遺構の確認) 調査区中央やや北よりのBj3グリッド周辺の表土を除去し、地山の黄褐色シルト質土層に達したところ方形をした黒褐色土の落ち込みを確認した。

(重複・増改築) 北東より南西へ走る溝を切って住居を構築しており、その住居を新しい溝が切っている。

(平面形・方向) 平面形は隅丸方形で、方向(カマドの方向を基準)は南北である。大きさは5.0×4.6mで、床面積は21.8㎡である。

(堆積土) 住居内の堆積土は基本的には3層である。

第1層：黄褐色シルト質粘土層で、黒褐色土が混じる。カマド関係を除き竪穴全域に分布する初期的な堆積層である。

第2層：黒褐色土層で、褐色シルトブロックが混じる。煙道北部から煙出し部の上部堆積層である。

第3層：混土層で、黒褐色土、褐色土、焼土、炭化物等の混じり合った層で、煙道から煙出しまで続く。煙道部天井の崩落土その他の混合層と考えられる。

(床面) 東壁北半の床面及び壁が溝により切られている。他は平坦である。あまり固い面をなしていない。壁は床面から急角度で立ち上がる。保存のよい西壁、北壁では14～15cmの壁高である。北壁中央にはカマドが、その東側に貯蔵穴状ピットがある。この地区は緩傾斜で南へ下る地形をしており、北東から南西方向へ走る溝の北東部を埋め込んで床面としている。南西部の溝は煙道南半から南流する溝と接続し、埋土は黒褐色腐植土である。住居内排水用の溝と考えられる。その他の床面は地山の黄褐色シルト質土層である。13個のピットがある。

(柱穴) 床面で確認できたピットは9個である。この中でP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4個のピットは竪穴の各辺



に平行な方形に配置されており、支柱穴と考えられる。この柱穴ピットは直径16~20cmで、深さは34~45cmでほぼ垂直である。柱痕だけで、掘り方はなく、打ち込み式の柱穴と考えられる。

(カマド) カマドは北壁中央を掘り込んでつくられている。カマドの袖の一部が残存している。この袖は竪穴構築の際に予め掘り残して袖にしたもので地山の黄褐色シルト質土からなる。右袖は長さ22cm、幅25cm、高さ12cm、左袖は長さ35cm、幅14cm、高さ15cmである。煙道南半より燃焼部を通して南流する溝があり、溝の上を2個体の土師器甕の破片で覆って夫々床面としている。燃焼部は楕円形で浅い皿状を呈し、側壁が焼けて赤変し、甕がつぶれた形で残っていた。煙道は水平に北へ1m程延び、深く掘り下げられた煙出しへと続く。

(貯蔵穴) カマドの東側に楕円形の皿状をしたピットがある。大きさは100×60cmで、深さ27cmである。内部には土師器甕破片が少量あり、暗褐色土が詰まっていた。

(年代決定資料) 煙道から燃焼部にかけて溝の上を覆っていた土師器甕2個体(23・24)、燃焼部出土の長胴変形無底式甕1個体(25)、床面出土の内黒丸底坏(22)がある。

遺物 (第17図22~25, 第27表)

22: 非ロクロ内黒丸底坏で、西南部床面出土である。底部内面は放射状に寛ミガキ後黒色処理されている。底部外面は風化により不明。

23~24: 土師器の非ロクロ長胴変形で、体部中央がやや膨らみ、頸部に段をもち、口縁部が外反する。煙道と燃焼部の溝を覆っていたもので、火熱を受けて赤変している。

25: 長胴変形の無底式の甕で、頸部に段を有する。燃焼部出土。

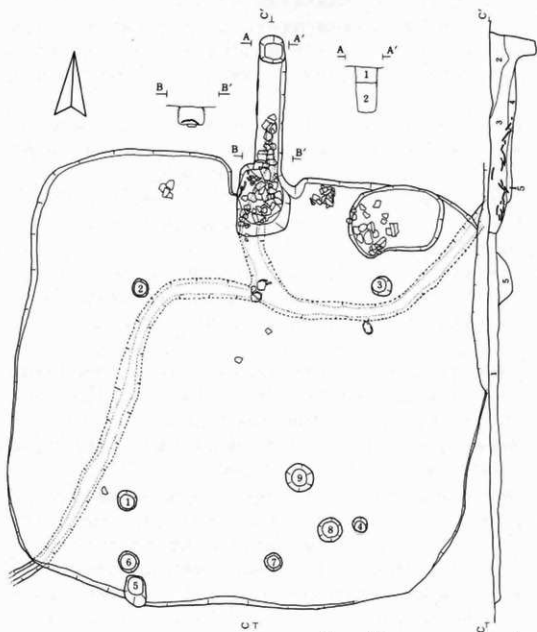
第7表 Bj3 住居跡ピット一覧

Pit No.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>
深さ(cm)	38	34	43	45	10	19	12	10	13
土色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	暗褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色
土性	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土
備考					炭化物焼土	土師器破片			

Bj56溝1 (Bj3住居跡北側溝, 第3図)

北東から南西方向へ走る溝の上にBj3住居を構築し、住居北東部溝で人為的に埋めて北側を西方で迂回させて掘り込んだ溝と考えられる。溝の幅は約50cm、深さ25cmである。この溝に廃棄されたものと推定される多量の完形に近い土師器が出土した。(第18図32~39)

32~35: ロクロを使用していない坏である。32は平底風の丸底内黒坏で、体部から口縁部へと内彎気味にたち上がる。内面寛ミガキ後黒色化し、外面底部は寛ケズリ後寛ミガキがされている。33・34は平底坏で、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。両面共に入念な寛ミガキ後黒色化されている。35は丸底の底部から内彎する体部・口縁部へと続くもので、小形の皿状



1. 黄褐色シルト質粘土層 (黒褐色土が混じる)
2. 黒褐色土層 (褐色シルトブロック混じる)
3. 混土層 (焼土・黒褐色土・褐色土・炭化物)
4. 暗褐色土層 (褐色シルト小ブロック混じる)
5. 黒褐色土層

第9図 Bj03住居跡

である。内面寛ミガキ、外面底部は寛ケズリ後寛ミガキされる。

36～37：体部が球形で、体部と頸部境に段を有する土師器の甕がある。36は非常に小形で、口縁部横ナデ、体部内面ハケメ、外面はハケメ後部分的に寛ミガキされる。37は大形のもので、口縁部、底部共に欠失している。器面風化著しく調整不明である。体部内面に粘土接合痕が見られる。

38：土師器長胴形の甕である。底部は突出し、体部が上方に向かって開き、頸部境で段をなし外反する口縁部へと続く。内面、外面共に風化磨滅が著しい。口縁部横ナデ、体部は外面ナデ内面寛ミガキ痕が部分的に残る。両面共に巻き上げ接合痕が見られる。

39：土師器無底式の甕で、長胴形甕の底部を欠いた形を呈する。口縁部欠失。内面横位のハケメ、外面縦位のハケメ痕が部分的に残るが、器面の風化磨滅が著しい。

#### Cc24住居跡（第10図）

（遺構の確認）調査区西側中央付近にて、Ca21住居跡の南西隣のCc24グリッド周辺にて方形をした黒褐色土の落ち込みを確認した。遺構検出面は表土下の黄褐色シルト質土層上面である。

（重複・増改築）住居の西側を南流する溝によって切られている。又床面が数個のビットにより切られている。

（平面形・方向）住居跡の西側及び南側がかなり削平されている。このため全体の形は明確でないが、残存している部分から隅丸方形と推定される。方向（カマドの方向を基準）はほぼ南北で、大きさは3.50×2.80mである。床面積は9.18㎡位と推定される。

（堆積層）住居内堆積土は非常に薄く1層である。黒色に近い暗褐色シルト質粘土で広く分布する。住居廃絶後に掘られたビット類の埋土は黒色腐植土である。

（床面）床面の南西部分は削平されてほとんど残っていない。保存のよい北側は多少の凹凸はあるが平坦でしまっている。壁は床面から急角度で立ち上がる。比較的保存状態のよい北壁や東壁では12～13cmの壁高であるが、南壁・西壁共にほとんど残存しない。北壁の西寄りにカマドが構築されたものと思われ、その東側に貯蔵穴状ビットが検出された。床面はシルトと黒色腐植土の混土層が0.5cm位の厚さで部分的に残存しており、その下は地山の黄褐色シルト質土層である。掘り方埋土はない。

（柱穴）住居内には13個のビットがある。この内P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>11</sub>は非常に浅く単なる凹み程度のもので考えられる。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>10</sub>・P<sub>12</sub>・P<sub>13</sub>は竪穴堆積土上から確認されたもので、住居廃絶後のビットと考えられる。P<sub>8</sub>は貯蔵穴状ビットであり、P<sub>11</sub>はカマドに付属するものである。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>は配置の上で柱穴と考えられるが、これらと組み合うビットがないので柱穴に関しては不明な点が多い。

（カマド）カマドと考えられるのは北壁西寄り部分であるが、燃焼部の痕跡は全くなく、P<sub>8</sub>に

焼土が入っていた。壁外北方向に煙道部の底が長さ130cm、幅27cmで残っており、その先端に煙出しのピットP<sub>11</sub>がある。P<sub>11</sub>の深さは7cm程で底部が火熱を受けて3cm程の厚さで焼けており、その下は煙出し部の掘り方埋土がある。

(貯蔵穴) 北壁中央寄りに円形のP<sub>6</sub>がある。大きさは直径85cm位で深さ35cmである。内部には焼土と土師器甕の細片1点が入っていた。

(年代決定資料) 遺物は床面やピット内からかなり出土している。住居廃絶後のピットも多数あり、混入等も考えられる。P<sub>10</sub>(第19図40)、P<sub>6</sub>(同43)、P<sub>11</sub>(同45)出土の遺物が住居の使用された年代を考える上で有効な資料と考えられる。

遺物 (第19図40～49, 第27表)

40・41: 40は新しいピットP<sub>10</sub>の埋土出土で、非クロロ内黒平底の坏。内外両面共に寛ミガキされている破片がある。41は床面出土の底部回転糸切の坏細片で、胎土は緻密であるが、赤橙色の軟質な焼成で、混入と考えられる。

42: 床面出土土師器の球形形甕の体部下半から底部にかけての破片である。体部が大きく膨らみ、底部がわずかに突出している。

43～49: 土師器で頸部に段を有する長胴形の甕である。43・44は小形のもので、P<sub>6</sub>・P<sub>10</sub>の出土で、43底部には木葉痕が残る。45は煙出しのP<sub>11</sub>、46はP<sub>6</sub>出土で胴張りのする大形のもので、口縁部は大きく外反する。47～49は床面出土の底部破片である。

第8表 Cc24 住居跡ピット一覧

PitNo.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>
深さ (cm)	25	27	7	14	5	25	15	25	8	44	7	1	7
土色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	暗褐色	暗褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色
土性	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土
備考								貯蔵穴 土師器甕	焼土 土師器甕	内黒坏	土師器甕		

Cc24遺構 (第10図)

(遺構の確認) Cc24住居跡の西側に隣接して、同じCc24グリッドに黒褐色土の落ち込みを確認した。確認面は表土下の黄褐色シルト質土層上面である。

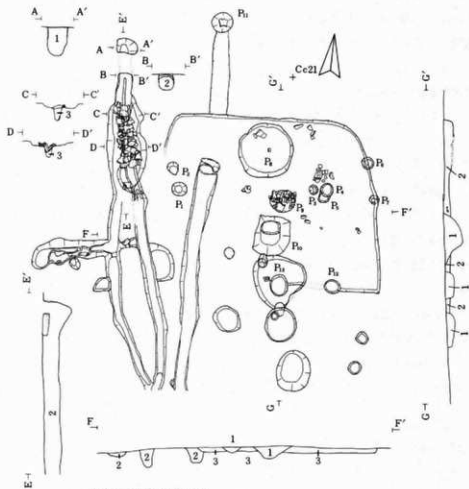
(重複・増改築) 不明である。

(平面形・方向) 南北方向の煙道と煙出しを残して他は失なわれている。竪穴住居のカマドに伴う煙道と煙出しと考えられるが、その他は全て不明である。

(堆積土) 不明

(床面) 不明

(柱穴) 不明



Cc24住居跡堆積層 (F, G)

1. ビット埋土 黒褐色シルト質土
2. 溝埋土 暗褐色シルト質土
3. 住居跡堆積層 暗褐色シルト質土

0 0.5 1 2 m

Cc24遺構堆積層 (A~E)

1. 煙出し 黒褐色シルト質土
2. 煙道 暗褐色シルト質土
3. 溝 褐色粘土質シルト 焼土混り

第10図 Cc24遺構Cc24住居跡

(カマド) 南北に水平に延びる煙道と北端の煙出しだけが残る。煙道の南半は掘り込みによるものと思われ、底に溝を掘り、その上を土師器甕の破片で覆って煙道の底部としている。溝には焼土が堆積している。煙道の北半は地山の黄褐色シルト質土層をくり抜いて煙出しに続く。煙出しは一段下がって深いピットとなり、焼土が堆積している。煙道・煙出し共に火熱を受けた痕跡が観察される。尚この煙道底部の溝はゆるく傾斜して南へ延びていく。煙道・住居内の排水を意図しての構築と考えられ、Bj 3住居跡とよく似ている。

(貯蔵穴) 不明

(年代決定資料) 遺物がまとまって出土したのは煙道部からである。(第19・20・21図50～58) このうち51の回転糸切坯細片は混入と考えられる。その他は人為的に溝の上部覆いに使用された土師器で、住居の使用された年代を考える上で最も有効な資料と考えられる。

遺物 (第19・20・21図50～58, 第27表)

50・51: 50は煙道出土の非クロコ内黒丸底坯の底部だけの破片である。器面は全て篋ミガキされている。51は煙道南寄りの出土糸切り底坯底部1/4の破片で、胎土は緻密で橙色の軟質な焼成である。これは細片1片だけの出土で混入と考えられる。

52～58: 体部頸部境有段の土師器長胴甕で、煙道溝の覆いに使用されたものである。52は煙道中央付近、53は煙道の北部出土で、底部より口縁部に向かって開いていく深鉢様の小形の甕である。54は煙道北部、55は中央付近、56～58は南部付近出土で胴部中央が膨らみ、頸部がややすぼまって段を形成する長楕円形状の大形の甕である。これらの甕は縦割りにした破片を溝の上に横位に据置かれていたものである。

B i 62住居跡 (第11図)

(遺構の確認) 調査区北東部Bi65グリッド周辺で表土を除去、黄褐色シルト質土の地山に達したところ三角形をした黒褐色土の落ち込みを確認した。

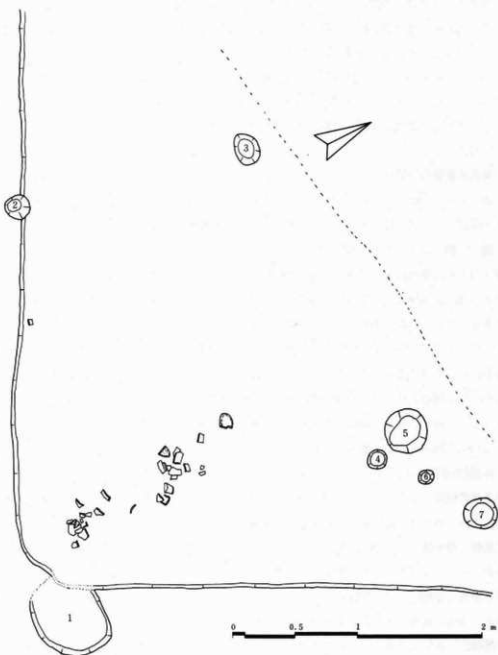
(重複・増改築) Bi68溝状土壇の北端を切って構築されている。現在の民家により北部が破壊されており、残存部もかなり攪乱を受けている。

(平面形・方向) 北部が破壊されて、南部が直角三角形形状に4.5×3.8mの長さで残り、方形である。方向は北東—南西を示すものと推定される。

(堆積土) 堆積土は薄く、一層だけである。暗褐色シルト質粘土層で、竪穴残在部の全域に分布している。

(床面) 床面は平坦な面であるが、あまり固くない。床面から壁へは急角度で立ち上がり、壁高は10cm前後である。大小7個のピットが検出された。貯蔵穴状ピットやがないしカマドは確認できなかった。床面と住居掘り方埋土の関係も不明である。

(柱穴) ピットは竪穴内外合わせて7個検出された。床面全面が検出されていないので、配列



第11圖 B62住居跡

関係は検討する事が不可能で、柱穴に関しては明らかにする事ができなかった。

(その他の施設) 確認されなかった。

(年代決定資料) 床面南西部より土師器坏類が出土しているが、種々なものが混在しているように見受けられる。(第17図26～29)土師器甕(第17・18図30～31)等も出土している。

#### 遺物 (第17・18図26～31)

26～29: 床面出土の土師器丸底坏4個体である。26は彩色されない坏で、丸底から内彎する体部へ続き、口縁部が「く」の字状に外反する。器面は両面共に磨滅著しい。27は丸底坏の底部破片で、内面にはハケメ痕が、外面はケズリやハケメ後に寛ミガキして、朱塗りをする。28は内黒丸底の坏底部破片で、体部から口縁部にかけて大きく外反し、丸味をもった底部との境に段を形成する。外面は体部寛ミガキ、底部寛ケズリ、内面は丹念な寛ミガキ後黒色処理している。29は内黒丸底坏の底部破片で、外面寛ケズリ、内面寛ミガキ後黒色処理している。

30: 床面出土土師器長胴甕破片である。体部下半から底部は欠く。胴部中央がやや膨らみ、頸部との境に段を有し、口縁部が大きく外反する。大形である。口縁部は両面横ナデ後内面を寛ミガキする。体部上半は両面ハケメ調整される。

31: 体部が大きく球形に膨らみ、頸部ですぼまり段を形成する大形の土師器甕である。両面共に入念な寛ミガキがなされる。

第9表 Bi 62 住居跡ピット一覧

PitNo	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>
深さ(cm)	20.5	30	10	5	14	5	20.5
土色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色
土性	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土
備考	土師器片 炭化物	土師器片					土師器片 炭化物

#### 4. 掘立柱建物跡 (第12・13図, 第10表～第14表)

発見された掘立柱建物跡は7棟である。4棟はほぼ同位置に重複し、建物の振れも同じであるが、規模においては2棟ずつが夫々近似するものと思われる。他の3棟は建物規模、振れ共に異なる。6棟は梁行と桁行が直角であるが、他の1棟は歪んで平行四辺形に近い。

##### Be24A・B建物跡 (第11表)

調査区北西部にある東西棟2間×4間の掘立柱建物であり、新旧2時期のものがほぼ同位置同規模に重複している。更にこの位置に規模は異なるがBi21A・B建物跡が重複している。

Be24A建物跡は最も古い建物跡である。掘方の平面形は一辺約74cmの方形で、現存する深さは46cm程である。壁はほぼ垂直に近く掘り方の埋土は黒褐色土に黄褐色シルトブロックが混じったもので、埋土中から土器片が出土している。次に建てられたBe24B建物の掘り方によって



かなり破壊されており、柱位置のわかるものがなく、柱間寸法は不明である。しかしBe24B建物の全ての掘り方がBe24Aの掘り方に含まれた状態で重複していることから、Be24B建物の規模に近似するものと推測される。

Be24B建物跡はBe24A建物跡を切る。又南側柱列東から3個の掘り方はBf21A・B建物によって切られる。東西棟2間×4間の建物で、東妻柱列の方向北で磁北より西へ4°5′振れている。柱間寸法は梁行で6.3m＝3.15m×2、桁行は10m＝2.5m×4であり、0.30m強を1尺とする10.4尺等間(梁行)、8.2尺等間(桁行)の建物と推定される。掘り方はBe24Aのそれよりやや小さく、1辺57cm程の方形で、深さは約57cmとBe24Aよりやや深くなっている。掘り方底部の高さは殆んど不揃いである。柱あたりは直径25cm程である。掘り方埋土はBe24Aとほぼ似ているが、黄褐色シルトブロックが小さくなり汚れている。掘り方埋土内からは非常に多量の土器片が出土しており、特に土師器甕、ロクロ坏、ロクロ内黒坏が多い。

#### Bf21A・B建物跡 (第12表)

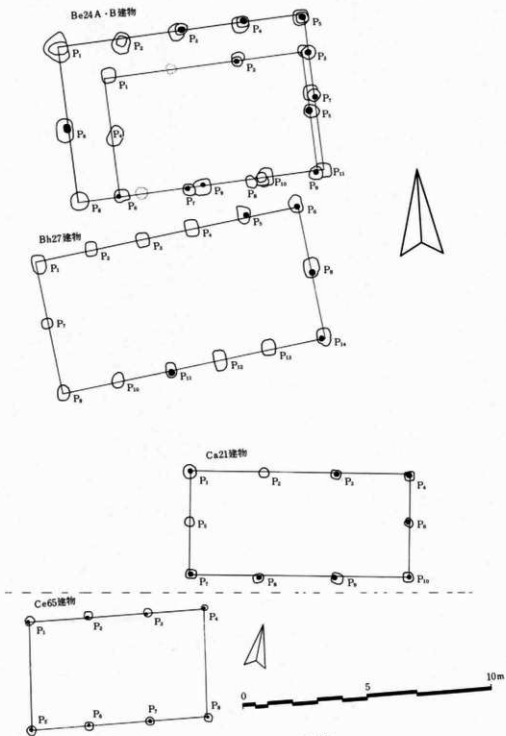
Bf21A・B建物はBe24A・B建物を切り、その中に入るやや規模の小さい掘立柱建物跡である。建物方向の振れはBe24Bと全く同じで、南側柱列の柱筋はBe24A・Bとすっきり重なる。東西棟2間×3間で、新旧2時期のものがほぼ同位置に重複している。

Bf21A建物跡はその古い建物跡である。柱の掘り方はBf21B建物の掘り方により殆んど壊されており、平面形は直径約48cm位の垂んだ円形状である。現存する深さは22cm程である。埋土は黒褐色土の中に黄褐色シルトの小ブロックが混入し、土器片も出土している。柱位置のわかるものがなく、柱間寸法も不明であるが、Bf21Bの全ての掘り方がBf21Aのそれに含まれた状態で重複していることから、Bf21Bの規模に近似するものと思われる。

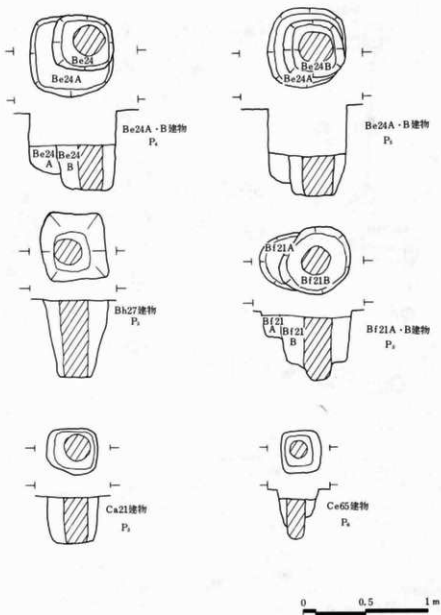
Bf21B建物はこの4棟の中では最も新しいもので、東西棟2間×3間の建物である。柱間寸法は梁行で4.8m＝2.4m×2、桁行では7.99m＝2.66m×3であり、0.30m強を1尺とする7.9尺等間(梁行)、8.8尺等間(桁行)の建物と推定される。掘り方は一辺57cm程の方法のものと直径52cm程の円形のものがあり、深さは48cmとBf21Aより深く、埋土は黒褐色土に黄褐色シルトブロックの混淆したものをういている。柱穴は直径21.5cm程の円形である。掘り方埋土は土師器甕片、ロクロ内黒坏、ロクロ坏片が多量に入っていた。

#### Bh27建物跡 (第13表)

Be24建物、Bf21建物の南約1.4mにある東西棟2間×5間の掘立柱建物跡で、東妻方向で磁北に対し、北で約7°5′西へ振れている。柱間寸法は梁行で5.4m＝2.7m×2、桁行で10.8m＝2.16m×5であり、0.30m強を1尺とする8.9尺等間(梁行)、7.1尺等間(桁行)であったろうと推定される。掘り方は一辺約61cmの方形で、深さは47cmである。掘り方底面高は大体同じである。柱穴は直径22cm程の円形である。掘り方埋土は黒褐色土に黄褐色シルトの小ブロックが混



第12図 掘立柱建物跡



第13図 掘立柱建物跡、掘方・柱穴

清したものをを用いている。埋土内出土遺物は土師器甕、ロクロ内黒環、ロクロ外環、高台環等の破片で、西妻及び北側柱列に特に多量に混入していた。

#### Ca21建物跡 (第14表)

Bh27建物跡の南4.3m程にある東西棟2間×3間の掘立柱建物で、東妻方向で磁北に対し、北で約5°5'東へ振れている。Ca21竪穴住居跡を切って建てられている。柱間寸法は梁行で4.15m=2.075m×2、桁行で8.85m=2.95m×3であり、0.30m強を1尺とする6.8尺等間(梁行)、9.7尺等間(桁行)であったものと推定される。柱掘り方は一辺40cm程の方形のものと直径43cm程の内形のものがあり、深さは31cm程現存する。掘り方底面高は大体同じである。柱穴は直径21cm程の円形である。掘り方埋土は黒褐色土に黄褐色シルトブロックが混淆したものである。掘り方埋土内出土遺物は非常に少なく、土師器甕、須恵器環の破片で、北側柱列より出土している。

#### Ce65建物跡 (第10表)

調査区東端のやや南寄りにある東西棟1間×3間の掘立柱建物跡で、東妻方向で磁北に対し、北で約13°5'西へ偏している。この建物は梁行と桁行が直角でなくやや歪み、平行四辺形の形状である。柱間寸法は梁行は1間で4.4m(14.5尺)、桁行7m=2.33m×3であり、0.30cm強を1尺とする7.6尺等間(桁行)の建物と推定される。柱掘り方は一辺33cm程の方形のものと直径35cm程の円形のものがあり、深さは40cm位現存する。掘り方底面高は種々である。柱穴は直径14cm位の円形で非常に小さい。掘り方埋土には暗褐色土に黄褐色シルトブロックの混淆したものが入っており、出土遺物は皆無である。建物跡の柱掘り方に囲まれた内側から土師器長胴甕4個体分(頸部有段、底部木葉痕、器面ハケメ・寛ミガキ)と球胴甕1個体分(器面ハケメ)が出土した。

第10表 Ce65掘立柱建物跡柱掘り方一覽

PitNo.	上端標高 (m)	下端標高 (m)	深さ (cm)	柱掘り方 平面形	一辺・直径 (cm)	掘り方埋土	柱あたり 径 (cm)	掘り方埋土混入物 (数字は破片数)
P <sub>1</sub>	61.76	61.28	48	方形	40	暗褐色土・黄褐色土 の混淆土	14	
P <sub>2</sub>	61.71	61.21	50	方形	34	暗褐色土・黄褐色土 の混淆土	14	
P <sub>3</sub>	61.65	61.14	51	円形	35	暗褐色土・黄褐色土 の混淆土	13	
P <sub>4</sub>	61.55	61.09	46	方形	21	暗褐色土・黄褐色土 の混淆土	13	
P <sub>5</sub>	61.56	61.22	34	円形	37	暗褐色土・黄褐色土 の混淆土	14	炭化物少量
P <sub>6</sub>	61.49	61.06	43	方形	33	暗褐色土・黄褐色土 の混淆土	14	炭化物少量
P <sub>7</sub>	61.41	61.08	33	円形	34	暗褐色土・黄褐色土 の混淆土	14	
P <sub>8</sub>	61.30	61.09	21	方形	34	暗褐色土・黄褐色土 の混淆土	14	

第II表 Be24A,B掘立柱建物跡柱掘り方一覧

(A-旧、B-新、空白は不明)

Pit.No	上端標高 (m)	下端標高 (m)	深さ (cm)	平面形	辺・径 (cm)	埋 土	柱当り 径(cm)	埋土混入土器 (数字は破片数)		
P1 A	62.21	61.62	59	方形	105	黒褐色土質 褐色土混流		土師器2 3、ロクロ内黒環 2、須恵器環 1		
P1 B	62.21	61.48	73	方形	65	#		土師器2 3、ロクロ内黒環 2、須恵器環 1		
P2 A	62.24	61.56	68	方形	84	#				
P2 B	62.24	61.51	73	方形	43	#		土師器2 12、ロクロ内黒環 1、土師管4		
P3 A	62.17	61.81	36	方形	70	#		土師器2 ロクロ内黒環 1	ロクロ使用 内黒環 3 須恵系赤地環 2 土師器環 1 須恵器環 1	
A3 B	62.17	61.56	61	方形	49	#	31	土師器2	土師器環 1 須恵器環 1	
P4 A	62.10	61.60	50	方形	67	#		土師器1	ロクロ使用 内黒環 1	
P4 B	62.10	61.48	62	方形	44	#	25	土師器環 1 土師器環 4	土師器環 4	
P5 A	62.10	61.50	60	方形	64	#		土師器環 7 須恵器環 1		
P5 B	62.10	61.40	70	方形	45	#	25			
P6 A								織文片 1	赤ロクロ 内黒環 1 土師器環 8	ロクロ 内黒環 3 須恵系赤地環 4 須恵器環 1
P6 B	62.20	61.66	54	方形	92	#	33			
P7 A	62.14	61.89	25	方形	62	#		小形手掘ね 1 土師器環 6 須恵器環 4	赤ロクロ 織文片 3 小形手掘ね 1 土師器環 46	ロクロ使用 内黒環 8 須恵器環 1
P7 B	62.14	61.66	48	方形	47	#	20	赤ロクロ 内黒環 2 土師器環 6	ロクロ使用 土師管環 1 須恵器環 2	内黒環 2 土師器環 46
P8 A										
P8 B	62.20	61.61	59	方形	70	#		赤ロクロ 土師器環 2 土師器環 58	ロクロ使用 内黒環 55 須恵器環 6	須恵系赤地環 55 須恵器環 4
P9 A										
P9 B	62.25	61.78	47	方形	70	#	20	赤ロクロ 土師器環 22	ロクロ使用 内黒環 9	
P10A	62.20	61.92	28	方形	71	#		赤ロクロ 土師器環 2	田21建物内18と混合 赤ロクロ 内黒環 2 土師器環 2 土師器環 18 土師管高台環 2	ロクロ使用 内黒環 12 土師器環 9 土師器環 18 土師管高台環 1 須恵器環 2
P10B	62.20	61.74	46	方形	46	#		赤ロクロ 土師器環 3	ロクロ使用 須恵系赤地環 1	
P11A									田21建物P9と混合 赤ロクロ 赤地環 1 内黒環 40 土師器環 1 土師管環 11	ロクロ使用 内黒環 1 土師管環 11
P11B	62.24	61.91	33	方形	58	#		赤ロクロ 内黒環 2 土師器環 5	ロクロ使用 須恵器環 1	

第12表 Bf2I AB掘立柱建物跡柱掘り方一覧

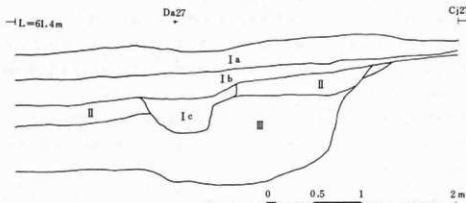
(A—旧、B—新、空白は不明)

Pit No	上端標高 (m)	下端標高 (m)	深さ (cm)	平面形	辺・径 (cm)	埋土	柱当り 径(cm)	埋土混入土器 (数字は破片数)	
P <sub>1</sub> A									
P <sub>1</sub> B	62.22	61.60	62	方形	62	黒褐色土質 褐色土混濁		赤ロクロ 土師器 2	ロクロ使用 内黒環 3 須恵系赤焼環 3
P <sub>2</sub> A	62.25	62.00	25	円形	48	※		赤ロクロ 内黒環 1 土師器 3	ロクロ使用 内黒環 1 須恵系赤焼環 1 土師器 1
P <sub>2</sub> B	62.25	61.83	42	円形	42	※	22		
P <sub>3</sub> A	62.24	62.04	20	円形				ロクロ使用 内黒環 1 土師器 1	赤ロクロ 土師器 1 土師器 7
P <sub>3</sub> B	62.24	61.82	42	円形	50	※	21	ロクロ使用 土師器 1	ロクロ使用 内黒環 4 須恵系赤焼環 1 土師器 7
P <sub>4</sub> A	62.22			円形				赤ロクロ 土師器 1 内黒環 1 土師器 8	ロクロ使用 内黒環 12 須恵系赤焼環 10
P <sub>4</sub> B	62.22	61.78	44	方形	58	※			
P <sub>5</sub> A									
P <sub>5</sub> B	62.17	61.81	36	円形	64	※	22	赤ロクロ 内黒環 1 土師器 9	ロクロ使用 須恵系赤焼環 4
P <sub>6</sub> A									
P <sub>6</sub> B	62.20	61.47	73	方形	60	※	18	赤ロクロ 土師器 13	ロクロ使用 内黒環 14 須恵系赤焼環 3 土師器 9
P <sub>7</sub> A									
P <sub>7</sub> B	62.26	61.79	47	方形	48	※	21	赤ロクロ 赤土環 1 内黒環 1 土師器 6	ロクロ使用 内黒環 10 土師器 8
P <sub>8</sub> A									
P <sub>8</sub> B	62.24	61.81	43	円形	50	※	27	Be24建物跡P10と混合	
P <sub>9</sub> A									
P <sub>9</sub> B	62.25	61.80	45	円形	55	※	20	赤ロクロ 土師器 9	ロクロ使用 内黒環 3 須恵系赤焼環 1
								Be24建物跡P11と混合	

表	PitNo.	上端標高 (m)	下端標高 (m)	深さ (cm)	平面形	辺・径 (cm)	埋土	柱当り 径(cm)	埋土混入土器 (数字は破片数)	
第13表 Bh27掘立柱建物跡柱掘り方一覽表 (空白は不明)	P <sub>1</sub>	62.19	61.79	40	方形	75	黒褐色土質 褐色土混濁		赤ロクロ 土師器 3	ロクロ使用 土師器 3 内黒環 2
	P <sub>2</sub>	62.13	61.79	34	方形	56	#		赤ロクロ 土師器 16	ロクロ使用 須恵器 8
	P <sub>3</sub>	62.19	61.55	64	方形	55	#	22	赤ロクロ 朱塗環 1 土師器 23	ロクロ使用 内黒環 2
	P <sub>4</sub>	62.22	61.61	61	方形	65	#		赤ロクロ 内黒環 1 土師器 18 朱塗環 1	
	P <sub>5</sub>	62.23	61.75	48	方形	62	#	23	赤ロクロ 土師器 10	ロクロ使用 土師器 10 須恵器 1 高台環 1
	P <sub>6</sub>	62.24	61.73	51	方形	58	#	22	赤ロクロ 土師器 1 内黒環 1 土師器 2	
	P <sub>7</sub>	62.19	61.70	49	円形	47	#		赤ロクロ 赤土文 内黒環 4 土師器 15	ロクロ使用 内黒環 3 土師器 63 高台環 4
	P <sub>8</sub>	62.15	61.72	43	方形	60	#	26	赤ロクロ 土師器 8	
	P <sub>9</sub>	62.18	61.84	34	方形	58	#	16	赤ロクロ 土師器 9	ロクロ使用 内黒環 4 土師器 2 須恵器 1
	P <sub>10</sub>	62.21	61.81	40	方形	60	#			
	P <sub>11</sub>	62.25	61.62	63	方形	60	#	25	フレイク 1 土師器 7 縄文 2	
	P <sub>12</sub>	62.20	61.75	45	方形	83	#			
	P <sub>13</sub>	62.24	61.77	47	方形	62	#		赤ロクロ 内黒環 1 朱塗環 1 土師器 23	ロクロ使用 土師器 3
	P <sub>14</sub>	62.24	61.79	45	方形	60	#	22	赤ロクロ 土師器 5	ロクロ使用 須恵器 1
第14表 Ca21掘立柱建物跡柱掘り方一覽表 (空白は不明)	P <sub>1</sub>	62.26	61.80	46	円形	52	黒褐色土質 褐色土混濁	19		
	P <sub>2</sub>	62.15	61.77	38	円形	44	#		赤ロクロ 朱塗環 1 土師器 2	
	P <sub>3</sub>	62.23	61.88	35	方形	41	#	22		
	P <sub>4</sub>	62.02	61.72	30	方形	40	#	27	赤ロクロ 土師器	ロクロ使用 須恵器 1
	P <sub>5</sub>	62.24	61.94	30	円形	36	#			
	P <sub>6</sub>	61.98	61.80	18	方形	32	#	20		
	P <sub>7</sub>	62.22	61.78	44	方形	43	#	23		
	P <sub>8</sub>	62.10	61.90	20	円形	42	#	21		
	P <sub>9</sub>	62.13	61.89	24	方形	42	#	23		
	P <sub>10</sub>	61.93	61.59	34	方形	42	#	20		

第15表 南西部遺物包含地出土遺物一覧表 (数字は破片数)

各層	割片石器	縄文・弥生	非ロクロ内黒環	非ロクロ内黒環	土製紡錘車	非ロクロ土器器変	須恵器・壺・長頸瓶	ロクロ高台環	ロクロ内黒環 B I類	ロクロ環 B II類	計
Ia		1		1		60	19	1		17	99 9%
I				1		63	6			2	72 7%
Ib						30	23	1	7	14	75 7%
IIU		4		5	1	150	38	21	30	125	374 33%
II	1	2		5		268	20	6	40	122	464 41%
II L	1		3	2		21	7		1	3	38 3%
計	2 0.2%	7 1%	3 0.3%	14 1%	1 0.1%	592 54%	113 10%	29 3%	78 7%	283 25%	1122 100%



第14図

層位	土色	土性	備考
Ia (耕作土)	灰褐色	砂質土	粘性なし
Ib	灰褐色	砂質土	よくしまり固い
Ic (溝)	灰褐色	粘土質土	よくしまる
II	暗褐色	粘土質土	
III (地山)	褐色	粘土質土	

第14図 南西部遺物包含地層位図 (南北断面図)



### 5. 南西部遺物包含地 (第14図・第15表)

南西部遺物包含地はCj33Da33~Cj27Da27グリッドの約50m<sup>2</sup>の範囲で、更に西方へ延びる。この地区は北の崖面を境にして北方の遺構構築面がある段丘縁部より1m程下がった沖積地の平坦地で、その南が更に崖となり一段下がる。新しい溝が東西に走るほかは遺構は皆無で、遺物だけが分布する。遺物包含層は第Ⅰ層から第Ⅱ層までで、第Ⅲ層は地山である。第Ⅰ層はIa・Ibの2つの層に細分される。Ia層は灰褐色砂質土の表土で、耕作を受けており、遺跡全体に分布している層である。Ib層はIa層と似ており、固くしまっているが基本的にはIa層と同一層である。Ic層は灰褐色粘土質土で新しい溝の堆積土である。Ⅱ層は暗褐色粘土質土である。Ib層・Ⅱ層はこの地区にのみ、南にゆるく傾斜して堆積している。

各層よりの出土遺物は第16表の如くで、縄文時代の遺物から平安時代のもまで総破片数にして1,122片である。第16表各層欄のⅠ層はIa層とIb層の中位を意味する。ⅡUはⅡ層の上位、ⅡLはⅡ層の下位を、Ⅱはその中間を意味する。

Ia層出土は縄文からロクロ使用の坏まで99片で、全体の9%とごく少量である。この中では土師器の変類の破片が60片で大半を占め、次に須恵器壺・長頸瓶19片、ロクロ坏17片である。I層出土は非ロクロ内黒坏からロクロ坏まで72片で、全体の約7%と少量であり、土師器壺が63片を占める。Ib層出土は土師器壺30片からロクロ坏まで75片で7%と非常に少ない。Ia・I・Ib層と合わせると246片出土で全体の約22%である。

Ⅱ層上位のⅡU層出土は374片(33%)と多量で、土師器壺150片、ロクロ坏125片、等である。中位のⅡ層出土は464片(41%)で、土師器壺が268片と約6割を占める。Ⅱ層下位のⅡL層出土は38片(3%)と最も少なくなり、この中でも土師器壺が21片を占める。尚ⅡU・Ⅱ・ⅡL層全体では876片で80%である。

遺物包含地出土遺物1,122片の中で、最も多いのは土師器壺592片(54%)で半数以上を占め、次がロクロ坏283片(25%)である。その他多量に出土しているものはロクロ使用による土器類である。

## V 遺物包含地その他の出土遺物

### 1. 縄文・弥生土器片 (第27図228~233, 第16表)

調査区出土の縄文・弥生土器片は47片である。出土地は南西部遺物包含地7片、Bf15溝6片、Cc24住居内1片、Bf30住居内2片、北西部ピット群26片、表土5片である。遺構に直接伴うものはなく、器面・断面共に風化磨滅した体部細片である。この中から比較的磨滅の少ない6片の拓影図をとり上げる。218は縄文の節が大きく、胎土に植物繊維が多量に含まれ、早期末から前期初頭頃のものと思われる。その他は地文に縄文が1点、撚糸文が3点である。228は口

縁部破片で、寛ミガキ後二条の平行沈線による連弧文を上段に、下段には半単位ずらして相対する形の連弧文を、頸部に二条の平行沈線がめぐり、佐倉河常盤遺跡出土のものに類似する。

① 伊藤信雄「岩手県佐倉河村発見の弥生式遺跡」(古代学第3巻第2号 昭29)

第16表 縄文・弥生土器片観察表 (第27図228~233)

図版	出土地	部位	外面	内面	胎土	焼成	色調	備考
228	Bfg30 I	口縁部	二条平行沈線連弧文	ミガキ	緻密砂粒少量混入	やや硬質	にぶい褐色	弥生
229	Cg27Da27 II U	体部	無文(R)縦走	不明	粗砂粒混入	やや軟質	灰色	
230	Bh24 I	体部	無文(R)縦走	ミガキ	砂粒少量混入	やや硬質	にぶい褐色	
231	Bf15溝	体部下半	無文(R)斜走	不明	砂粒少量混入	やや硬質	にぶい褐色	
232	不明	体部	単節縄文LR	不明	緻密砂粒少量混入	やや硬質	褐色	
233	Cc24住床	体部	単節縄文LR	不明	緻密含砂粒混入	やや硬質	褐色	縄文

2. 剥片石器 (第27図217~227, 第17~19表)

当遺跡出土の石器は剥片石器で11点である。調査区西半に稀薄に分布しているもので、溝状土壌埋土中より石鏃1点、溝より4点、その他6点等である。Bj3住居跡北西部の溝よりは3点の出土である。石器の種類は、石鏃4点、石錐1点、不定形石器6点等である。217~219は二等辺三角形の無茎石鏃で、220は柳葉形のものである。222~227は形態の特徴を捉えにくく、一括して不定形石器とした。222は先端に刃部としたもので石鏃状石器に類似する。223・224は円形で多辺に刃部を有するもの、225・226は中軸で直交する縁辺に刃部を有するもの、227は下半を欠失した剥片石器である。223~227は削器や搔器に相当するものと思われる。

第17表 石鏃観察表 (第27図217~220)

図版	出土地	基部 えぐり度	実頭部ふくらみ度			実頭部 先端角	大きさ (長さ×幅) (mm)	長幅指数	重量 (g)	石材
			R	L	平均					
217	Bg27Ca27 II	-12	7	14	10.5	44°	18×13	138	0.8	鉄石英
218	Cg27Da27 II L	12	2	2	2	33°	32×19	168	1.5	硬質凝灰質泥岩
219	Cb3溝	7	6	5	5.5	20°	48×20	240	3.9	硬質凝灰質泥岩
220	B30溝状土壌		3	3	3	23°	48×10	480	2.0	硬質頁岩

第18表 不定形石器観察表 (第27図222~227)

図版	出土地	打面調整	a面調整	b面調整	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	石材	備考
222	Cc24溝	打面除去	全体調整	一辺調整	58	34	28.5	硬質凝灰質泥岩	
223	Bj6溝	打面残	全体調整	無調整	23	23	4.4	黒曜石	
224	Cg33Da33 II	打面残	一辺調整	一辺調整	36	29	5.9	泥質凝灰岩	
225	表採	打面除去	一辺調整	一辺調整	26	35	9.2	黒曜石	
226	Bg27Ca27 I	打面残	一辺調整	無調整	36	41	9.1	硬質凝灰質泥岩	周縁部分的破損
227	Bh6 I	打面残	一辺調整	一辺調整	(35)	(35)	(10.9)	硬質頁岩	下半欠損

第19表

石 鐘 観 察 表

図版	出土地	鐘部断面形	鐘部角度	鐘部長(mm)	長さ(mm)	幅 (mm)	重量(g)	石材	備考
221	B13溝	菱形	80°	6	35	26	12.3	黒曜石	

### 3. 土器器内黒双耳環 (第21図72・73)

内黒双耳環の耳部に坏体部の一部が付着した破片が2点出土している。遺物包含地のCj33グリッドⅡ層(72)とDa30グリッドⅡ層下位(73)からの出土で、隣接グリッドの同じ層からの出土である事から同一個体のものかもしれない。72の耳部は長さ2.3cm、幅2.5cm、厚さ0.9cm、73の耳部は長さ2.4cm、幅2.4cm、厚さ0.7cm、共に胎土は精良で砂粒少量混入し、やや硬質の焼成であり、色調は72が淡赤橙色、73が淡黄橙色である。坏体部内面は寛ミガキ後に黒色処理されているが、外面は不明である。耳部はハケメの痕跡が部分的に見られるが、磨滅により他は不明である。坏部と耳部の接合痕も観察される。

### 4. 土製紡錘車 (第26図213)

南西部遺物包含地Cj30Da30グリッドⅡ層上位より1個出土している。器面がかなり破損磨滅しているが、ていねいに寛ミガキされた痕跡が部分的に残っている。形は円錐台形で、上径3.1cm、下径5cm、厚さ1.8cm、貫通孔は直径0.6cm程である。胎土は少量の砂粒が混じるが緻密でやや硬質な焼成であり、淡橙色をしている。

### 5. 直 刀 (第26図215・216)

刀は2点の出土である。215は刀身部分の破片で、Bg27グリッド表土下よりの出土である。現存長は5.4cm、刃より棟までの長さ2.7cm、棟の厚さ3.5mmである。棟は角棟で、鑄が観察されないで平造りの直刀であったものと推定される。216は刀身と茎からなるもので、Bf30グリッドの表土下よりの出土である。刀身は鋒寄り部分が欠損し、現存長8.9cm、刃先より棟までの長さ2.2cm、棟の厚さ4mmである。215と同じく角棟で、鑄のない平造りの直刀である。茎は普通形で9cmあり、木質部が部分的に残っており、目釘穴(径5.5mm)も観察される。棟と茎の境に段のある棟区が観察できるが、刃区は錆のため不明である。

### 6. 古 銭 (第26図214)

古銭は永楽銭(銅銭)1枚がBブロック表土から出土した。表裏共に緑青が付着し、「通」字部分が欠損している。大きさは直径2.5cm、厚さ1.5mm、縁の幅1.5mm、郭幅0.5mm、穿は1辺5.5mmである。表面に他の古銭の破片が少量付着していた。

### 7. 坏とその分類

坏は成形、器形、調整、色調、硬度等の相違を特徴としてとらえ分類する。坏A類は成形・調整等にロクロを使用せず、底部は平底や丸底のものである。器面調整は仕上げに寛ミガキを行ない、その他に朱塗りや黒色処理されるものもある。軟質な焼成で淡黄橙色のものが多い。

環B類はロクロ成形の環で、BI類はロクロ成形内面寛ミガキ後黒色処理の行なわれるものである。環A類BI類は硬度・色調共に土師器の焼成である。環BII類はロクロ成形非内黒の環であり、硬度・色調等において種々であるので土師器・須恵器という表現を用いない。

A<sub>1</sub>: 丸底で、丸味をもった体部が口縁部まで立ち上がるものや、口縁部がくびれてやや外反する環。調整にはハケメやナデが施され、寛ミガキ仕上げのものや朱塗りのものもある。

A<sub>2</sub>: 丸底で、口縁が大きく開き、口縁部と体部境には稜線(段)がある。内面は寛ミガキ後黒色化される。外面は体部横ナデ後寛ミガキし、底部は寛ケズリされる。

A<sub>3</sub>: 丸底から体部口縁部まで丸味をもって立ち上がり、体部に沈線のめぐるものもある。内面寛ミガキ後黒色処理され、外面も寛ミガキで仕上げている。

A<sub>4</sub>: 平底で、体部から口縁部までが直線的に外傾する。器面は両面共寛ミガキされ、内面又は両面黒色化される。

A<sub>5</sub>: 小形の手捏ね土器であるが、ここに一括して入れた。底部は丸底風で、器形は鉢形である。口縁部に横ナデの痕跡が部分的に見られ、他は指頭でおさえながら器面を整えている。

BIIa: ロクロ成形、内面寛ミガキ後黒色処理の環で、底部下面が手持ち寛ケズリされる。

BIIb: ロクロ成形、内面寛ミガキ後黒色処理し、底部回転糸切り無調整の環。

BIIa: ロクロ成形、非内黒の環で、色調は灰色や灰白色を呈し、硬質な焼成である。底面は寛切と糸切りのものがある。

BIIb: BIIaの中で、軟質なものであり、寛切りと糸切りのものがある。

BIIc: ロクロ成形、非内黒の環で、にぶい橙色や淡橙色の硬質なものである。底面は手持ち寛ケズリ、寛切り、糸切り等のものがある。

BIId: BIIcの中で軟質な焼成のもので、全て糸切りである。

BIIe: ロクロ成形、非内黒の環で、焼成は浅黄橙色の軟質なもので、全て糸切りである。

#### 遺物包含地その他出土A類環 (第21図63~71)

非ロクロの環で住居跡外出土の9点である。65は内黒高環であるが1点だけなのでここに入れた。この高環は溝埋土中出土で、体部に軽い段を有し、脚部の襷を欠いている。63は小形手捏ねの土器であり、64は両面朱塗りの丸底環で接合により完形に近いものである。66~71は内黒丸底環で、体部に段や沈線状の稜を有するもの。器面調整は種々であるが、大半は両面寛ミガキ仕上げである。65の高環を除く他の8点は調査区西寄りからの出土で、遺物包含地から3点出土する。64を除くと全て破片であり、反転復元実測したものである。

#### 遺物包含地その他出土BI類環 (第23図110~119)

ロクロ使用、内面黒色処理の環で、実測図に書けたものは10点である。いずれも破損品で、住居跡出土のものは皆無である。口縁部から底部まで実測できたもの3点、他の7点は口縁部

或いは底部欠損のものである。出土地区別に見ると7点が遺物包含地出土で、器面・断面共に磨滅、黒色の脱色等があり、廃棄後幾度も動かされたものと思われる。3点は北西部ピット群中のピット内出土である。これ等の坏の器高は4.6~4.8cm、口径は12~13.5cm、底径は4.8~6.9cmの範囲内にある。底部下面は手持ち寛ケズリ4点、糸切り3点であり、他は不明。

**遺物包含地その他出土BⅡ類坏** (第24・25図120~196)

ロクロ成形、非内黒坏類で破片が大半を占め、77点の実測図を製作。住居跡に伴う出土は皆無である。南西の遺物包含地より62点(81%)が集中して出土し、各層よりの出土はIa層3点、Ib層4点、Ⅱ層上位35点、Ⅱ層中位12点、Ⅱ層下位8点である。Ⅱ層全体出土は55点である。北西地域のピット群中より14点(19%)が出土、この内訳は表土3点、ピット埋土中11点である。これ等の坏は全てロクロ右廻しによる成形であり、底部切り離し技法は回転糸切り66点(86%)回転寛切り8点(10%)で、手持ち寛削りにより不明2点(3%)磨滅により不明1点(1%)である。

第20表 BⅡ類坏図版説明集計表

類	出土点数	底部下面	底径(cm)
BⅡa	12点(118~129) 15%	回転寛切り 1点 回転糸切り 11点	6.0~6.8
BⅡb	12点(130~141) 15%	回転寛切り 3点 回転糸切り 9点	4.8~7.4 (5.9~6.8に集中)
BⅡc	17点(142~158) 23%	手持ち寛削り 1点 回転寛切り 5点 回転糸切り 11点	4.4~7.2
BⅡd	13点(159~171) 17%	回転糸切り 12点 不明 1点	4.6~7.0 (4.6~6.0に集中)
BⅡe	23点(172~194) 30%	回転糸切り 23点	4.0~6.4 (4.0~5.0に集中)

第21表 遺物包含地坏B類各層出土状況(実測図に書けたもの)

各層	坏BⅠ (ロクロ成形内黒) 凸(70%)	坏BⅡa (ロクロ成形内黒) 凸(75%)	坏BⅡb (ロクロ成形内黒) 凸(100%)	坏BⅡc (ロクロ成形内黒) 凸(71%)	坏BⅡd (ロクロ成形内黒) 凸(54%)	坏BⅡe (ロクロ成形内黒) 凸(96%)
Ia		回転糸切り 2				回転糸切り 1
I						
Ib	手持ち寛削り 1 不明 1		回転糸切り 1		回転糸切り 1	回転糸切り 2
ⅡU	手持ち寛削り 1 回転糸切り 1 不明 1	回転糸切り 2	回転寛切り 2 回転糸切り 5	回転寛切り 1 回転糸切り 4	回転糸切り 4	回転糸切り 17
Ⅱ	回転糸切り 2	回転寛切り 1 回転糸切り 3	回転糸切り 1	手持ち寛削り 2 回転寛削り 1	回転糸切り 2	回転糸切り 2
ⅢL		回転寛切り 1 回転糸切り 1	回転寛切り 1 回転糸切り 2	回転寛削り 1 回転糸切り 2		

第22表 遺物包含地・その他出土環類、環B1類図説説明

出土地	集団 番号	写真 番号	分類 記号	口縁部				体部上半				体部下半				底		器高 cm	口径 cm	底径 cm	付記
				内面		外面		内面		外面		内面		外面		上	下				
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	上	下				
表 採	63	49	A5	横ナ字	横ナ字	不	明	不	明	不	明	不	明	不	明	船頭オヤエ	3.4	9.0	丸底	小彩手抱ね	
Cc 9 地山四み	64	50	A1	横ナ字 横ナ字後 ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナ字後 ヘラミガキ	6.1	15.8	丸底	画面朱塗	
C162 溝	65	51	A2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	指頭オヤエ	7.0	11.5	(4.6)	内黒絶不		
C133Da33H	66		A2	ナ字後 ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ		(4.3)	15.0	丸底	内 黒		
Bed271	67		A2													(4.7)		丸底	内 黒		
Cle241	68	52	A2													(2.1)		丸底	画面黒色化		
C133Da33H	69	53	A2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不	明	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナ字後 ヘラミガキ	2.9	12.0	9.4	内 黒	
C133Da33H	70	54	A3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナ字後 ヘラミガキ	(4.3)	15.0	(丸底)	内 黒	
C1g301	71		A3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不	明	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナ字後 ヘラミガキ	(2.9)	9.4	(丸底)	内 黒	
C127Da271b	110	93	B1a																	内 黒	
Be18P	111	94	B1a	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナ字後 ヘラミガキ	4.8	13.0	5.8	内黒・Be24 建物柱廻り方	
Be21P	112	95	B1a	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナ字後 ヘラミガキ	(2.1)		5.0	内 黒	
C1300a301U	113	96	B1a	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナ字後 ヘラミガキ	(2.1)		5.8	内 黒	
C127C130H	114	97	B1b	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナ字後 ヘラミガキ	(1.2)		5.0	内 黒	
C1300a301U	115	98	B1b														(3.0)		6.9	内 黒	
C133Da33H	116	99	B1b														(1.8)		6.6	内 黒	
Be18P	117	100	B1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナ字後 ヘラミガキ	(3.5)	12.0		内黒B121建物 柱廻り方	
Da33HU	118	101	B1	不	明	明	明	明	明	明	明	明	明	明	明		4.6	13.5	5.2	内 黒	
C127Da271b	119	102	B1														(2.7)		6.8	内 黒	

( ) は現存部分計測値、空白は欠損部

第23表 1 遺物包含地・その他出土環BII類図版説明 1

出土地	実測図 番号	写真 番号	分類 記号	型				器高 cm	口径 cm	底径 cm	胎土	硬度	色調
				口縁部		底部							
				内面	外面	上面	下面						
Cj27Da27II	120	103	BIIa	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁へう型リ	(2.5)	6.3	6.3	砂粒少量混入	硬質	灰白色
Ch12P <sub>1</sub>	121	104	BIIa	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁糸切り	(0.8)	6.0	6.0	砂粒少量混入	硬質	灰白
Cj30Da30II	122		BIIa	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁糸切り	(1.2)	6.0	6.0	砂粒少量混入	硬質	灰白色
Cj30Da30IU	123		BIIa	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁糸切り	(1.4)	6.2	6.2	砂粒少量混入	硬質	灰白色
Da30HL	124	105	BIIa	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁糸切り	4.3	12.1	6.2	砂粒少量混入	硬質	灰白色
Cj30Da30II	125		BIIa	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁糸切り	(2.3)	6.4	6.4	緻	硬質	灰白色
Cj30Da30Ia	126		BIIa	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁糸切り	(1.6)	6.5	6.5	砂粒少量混入	硬質	灰白色
Cj27Da27II	127	106	BIIa	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁糸切り	(1.8)	6.6	6.6	砂粒少量混入	硬質	灰白色
Bj15P <sub>2</sub>	128		BIIa	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁糸切り	(2.4)	6.6	6.6	砂粒少量混入	硬質	灰白色
Cj30Da30 <sup>1b</sup> IU	129	107	BIIa	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁糸切り	(2.8)	6.6	6.6	石英粒多し	硬質	灰白色
Bgl5P <sub>2</sub>	130		BIIa	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁糸切り	(0.9)	6.8	6.8	砂粒少量混入	硬質	灰褐色
Cj27Da27Ia	131		BIIa	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁糸切り	(1.5)	6.8	6.8	緻	硬質	灰白色
Cj30IU	132	108	BIIb	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁へう型リ	3.9	13.6	6.4	砂粒少量混入	軟質	灰白色
Da30HL	133		BIIb	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁へう型リ	(2.7)	6.6	6.6	緻	軟質	明褐色
Cj30IU Cj33Da33II	134	109	BIIb	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁へう型リ	4.1	13.5	7.4	砂粒少量混入	軟質	明褐色
Cj33Da33II	135	110	BIIb	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁糸切り	4.1	13.6	4.8	緻	やや軟質	浅黄褐色
Cj33IU	136	111	BIIb	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁糸切り	(1.8)	5.2	5.2	砂粒少量混入	軟質	淡黄色
Da33IU	137	112	BIIb	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁糸切り	(1.7)	5.9	5.9	砂粒少量混入	軟質	灰白色
Cj30IU	138	113	BIIb	口ノ口	口ノ口	口ノ口	凹縁糸切り	3.8	12.4	6.0	砂粒少量混入	軟質	灰白色

( ) は現在部分計測値、空白は大目録

第23表 2 遺物包含地・その他出土土器BII類図版説明2

出土地	美國國 番 号	写真 番 号	分類 記 号	調 査				器 高 cm	口 径 cm	底 径 cm	胎 土	硬 度	色 調
				口 縁 部 体 部		底 部							
				内 面	外 面	上 面	下 面						
Da33HU	139	B114	B11b	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	1.4	6.0	砂粒少量混入	軟	浅黄褐色	
Da30HL	140	B115	B11b	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	3.7	12.4	砂粒少量混入	軟	灰白色	
Cj30Da30IU	141	B116	B11b	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	1.3	6.4	シルト質土	やや軟質	灰白色	
Cj30Da30Ib	142	B117	B11b	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	1.8	6.6	砂粒少量混入	やや軟質	浅黄褐色	
Cj30Da30HL	143	B118	B11b	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	3.4	12.5	緻密	軟	灰白色	
Cj33Da33II	144	B119	B11c	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	4.8	16.2	砂粒少量混入	硬	淡褐色	
Cj30Da30Ia IU	145	B120	B11c	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	3.7	12.7	シルト質土	硬	にぶい褐色	
Da30HL	146	B121	B11c	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	3.9	14.0	緻密	硬	淡褐色	
Cj30Da30HL	147		B11c	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	1.6	6.8	緻密	硬	淡褐色	
Cj27Cj30II	148		B11c	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	0.8	7.0	緻密	硬	淡褐色	
Cj30Cj33II Cj33Da33II	149	B122	B11c	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	4.7	15.0	砂粒混入	硬	にぶい褐色	
Cj30Da30IU	150	B123	B11c	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	3.4	4.4	緻密	硬	にぶい褐色	
D6c33HL Cj33Da33HL	151	B124	B11c	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	3.6	12.8	緻密	硬	緻(内部未)	
C421Pa	152	B125	B11c	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	3.0	5.0	砂粒少量混入	硬	浅黄褐色	
Fg21I	153	B126	B11c	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	1.6	5.0	緻密	やや軟質	緻	
B4e21I B121Pa	154	B127	B11c	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	1.5	5.0	砂粒少量混入	硬	にぶい褐色	
B430Pa Bf27・30I	155	B128	B11c	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	1.5	5.0	砂粒少量混入	硬	黄褐色	
Cj33Da33IIU II	156	B129	B11c	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	4.4	12.5	砂粒混入	やや軟質	淡褐色	
Cj30Da30HL	157		B11c	口内面 口外縁	口外縁	口内面 口外縁	口内面 口外縁	4.2	13.0	砂粒少量混入	硬	にぶい褐色	

( ) は残存部分計測値、空白は欠損部



第23表3 遺物包含地・その他出土坑BII類図版説明3

( ) は現在部分計測値、空白は大目取

出土地	実測図 番号	写真 番号	分類 記号	調				器高 cm	口径 cm	底径 cm	胎土	硬度	色
				口縁部		底部							
				内面	外面	上面	下面						
Bf15P	158		BHe	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	(2.1)	6.6	織	密	質	にぶい橙
Cj30HU Cj30Da301b	159	130	BHe	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	4.3	12.6	シルト	質	質	にぶい橙
Da30HU Da33HU	160	131	BHe	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	5.6	16.0	シルト	質	質	にぶい橙
Cj33Da33H	161		BHd	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	(1.0)	4.6	織	密	軟	浅黄橙
Bfg30I	162		BHd	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	(1.8)	4.6	砂粒少量混入	やや軟質	質	浅黄橙
Bfg27Ps	163		BHd	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	(1.8)	4.6	砂粒少量混入	やや軟質	質	浅黄橙
Cj30Da30HU	164	132	BHd	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	(2.0)	4.7	砂粒少量混入	やや軟質	質	浅黄橙
不明	165	133	BHd	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	(1.0)	5.0	砂粒少量混入	軟質	質	浅黄橙
Cj27Cj30H	166	134	BHd	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	(1.7)	5.2	砂粒混入	軟質	質	橙
Cj30Da30HU	167		BHd	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	(1.2)	5.4	砂粒混入	軟質	質	橙
Cj33Da33HU	168	135	BHd	ワロ嵌	ワロ嵌	不明	不明	(1.7)	5.6	シルト質	軟質	質	にぶい橙
Bfg27Ps	169	136	BHd	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	4.7	15.0	織	密	軟	浅黄橙
Cj27Da271b	170		BHd	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	(2.0)	5.8	織	密	軟	浅黄橙
Bda301a	171	137	BHd	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	4.4	12.4	砂粒混入	軟質	質	浅黄橙
C421Ps	172	138	BHd	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	4.0	13.2	砂粒少量混入	やや軟質	質	浅黄橙
Da27HU	173	139	BHd	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	(2.1)	7.0	織	密	軟	浅黄橙
Da33HU	174		BHe	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	(1.0)	4.0	砂粒混入	軟質	質	浅黄橙
Cj30Da301b	175		BHe	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	(1.0)	4.0	砂粒混入	軟質	質	浅黄橙
Da30HU	176		BHe	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	ワロ嵌	(1.0)	4.0	砂粒混入	軟質	質	浅黄橙

第23表4 遺物包含地・その他出土BII類図版説明4

( ) は現物部分計測値、空白は欠損部

出土地	実測図 番号	写真 番号	分類 記号	調				器底 cm	口径 cm	底径 cm	胎土	硬度	色調
				口縁部		底							
				内面	外面	上面	下面						
Da30HU	177		BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(0.9)		4.2	砂粒混入	軟	浅黄橙
Da33HU	178		BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(1.7)		4.3	砂粒混入	軟	浅黄橙
Da30HU	179		BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(1.2)		4.4	砂粒混入	軟	浅黄橙
Cj33Da331a	180		BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(0.8)		4.4	砂粒混入	軟	浅黄橙
Da33HU	181		BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(0.8)		4.4	砂粒混入	軟	浅黄橙
Da33HU	182		BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(1.2)		4.4	砂粒混入	軟	浅黄橙
Da33HU	183	140	BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	2.6	10.0	4.5	砂粒混入	軟	浅黄橙
Da33HU	184		BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(1.2)		4.6	砂粒混入	軟	浅黄橙
Cj21P	185		BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(1.0)		4.8	砂粒混入	軟	浅黄橙
Cj33H	186		BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(1.3)		5.0	砂粒混入	軟	浅黄橙
CjDa33HU	187		BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(1.4)		5.3	織	密	浅黄橙
Da33HU	188		BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(1.0)		5.4	砂粒混入	軟	浅黄橙
Da30HU	189		BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(1.4)		5.5	織	密	浅黄橙
Da33HU	190	141	BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	2.0	9.7	5.7	砂粒混入	軟	浅黄橙
Cj30Da30HU	191		BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(1.8)		6.0	砂粒混入	軟	浅黄橙
Da33HU	192		BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(2.0)		6.0	砂粒混入	軟	浅黄橙
Cj30Da30HU	193	142	BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(2.4)		6.2	織	密	浅黄橙
Da33HU	194	143	BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(1.5)		4.8	織	密	浅黄橙
Dac331b	195	144	BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	(2.4)		5.6	シルト質	軟	灰白色
Da27HU	196	145	BIIe	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	ワロ砥	4.5	13.0	6.4	織	密	浅黄橙

## 8. 土師器壺・甕・甗とその分類

壺の口縁部及び体部の器形によりA・Bの2類に分類する。全てロクロは使用していない。

壺A：口縁部が粘土貼付により折り返し状の段がつき、外面に稜がめぐる複合口縁のもの、口縁部は外傾し、頸部は外傾気味かやや直立する。体部以下は接合資料がなく不明であるが、頸部のすばまり方から球形と推定される。口縁部に横ナデの痕跡が残る。

壺B：単純口縁で短い口縁部が「く」字状に屈曲して外傾する。体部は球形であるが、体部下半を欠く。外面と口縁部内面は入念な寛ミガキの後塗りされている。

甕は器形上の特徴からA～Cの3類に大別される。頸部の段・大きさ・最大径の位置・器面調整等により細分される。全てロクロは使用していない。

甕A：台付甕で1点だけの出土。脚台の部分のみで他は欠失している。内面に指頭ナデ痕。

甕B：口縁部外反し、体部球胴形の甕。大小・頸部段の有無により細分する。

B<sub>1</sub>：頸部に段のない大形の甕。口縁部横ナデ、体部寛ミガキされる。

B<sub>2</sub>：頸部に段のある大形の甕。口縁部横ナデ、体部寛ミガキされる。

B<sub>3</sub>：頸部に段のある小形の甕。口縁部横ナデ、体部ハケメ後横ナデされる。

甕C：口縁部外反し、体部が長胴形の甕。頸部段の有無、最大径の位置により細分する。

C<sub>1</sub>：頸部に段がなく、頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反する小形な甕。

C<sub>2</sub>：頸部に段を有し、最大径が口縁部にある大形小形の甕。口縁部横ナデ、体部寛ミガキ。

C<sub>3</sub>：頸部に段を有し、最大径が体部中央にある大形の甕。口縁部横ナデ、体部寛ミガキ。

甗は長胴形大形甕の底部を欠いた形の無底式のもので、ハケメ調整のものと寛ミガキ調整のものがある。

### 溝その他出土土師器壺・甕（第22図74～88）

これら15個体の土器は調査区北西部よりの出土で、全て破片であり、器面・断面の風化磨滅が著しい。出土地は溝埋土中より7個体、表土より4個体、Pit中3個体その他1個体で、溝埋土中出土が約半数を占める。壺A類は当遺跡内から3個体(74～76)だけの出土で、複合に縁をもつものであるが、74は甗かもしれない。77は台付甕の脚台部だけで上部は不明であるが、74～77の4点はBj 3住居跡の北西部溝とその付近出土であり、胎土・焼成・色調共に似ている。78は内湾気味の口縁部と体部上端からなる破片で、比較的硬質なものである。79～82は底部と外方に開く体部下端からなる破片で球胴形の甕である。81の底部下面には木葉痕が残る。83～88は長胴形の甕である。83は直立気味の口縁と胴膨みの体部上半からなる破片で、84は大きく外反する口縁と膨んでいく体部上半からなる破片で、共に頸部体部境に段を有する。85～88は長胴形甕の体部下半と底部破片で、器面はナデやハケメ後に部分的に寛ミガキされている。85と88の底部下面に木葉痕が見られる。

第24表 溝・その他出土土師器・壺・甕図版説明一覽表

出土地	実測図 番号	写真 番号	分類 記号	調						型				口径 cm	頸径 cm	胴径 cm	底径 cm		
				口縁部		体部上半		体部下半		成		器高 cm	口径 cm					頸径 cm	胴径 cm
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	上面	下面								
Ca 9 I	74	57	壺 A	不	明ハケメ									(2.8)	16.0				
Ca6-Ca9溝	75	58	壺 A	横ハケメ	不	明								(5.4)	16.7	10.3			
Bi 6 I	76	59	壺 A	不	明	横ナ子								(4.0)	17.8				
Ca 9 溝	77	60	壺 A											(4.6)		接合部 径4.7	脚台底 8.8		
Bi12溝	78	61	壺 B <sub>1</sub>	横ナ子	タテハケメ後 横ナ子	横ナ子	タテハケメ							(6.4)	12.0	10.0	(14.4)		
Bi 15 P <sub>1</sub>	79	62	壺 B					不	明	ケズリ	ケズリ			(4.5)			(12.6)	6.6	
Be30P <sub>1</sub>	80	63	壺 B					横ナ子後 ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			(8.8)			(19.3)	6.8	
Bi15P <sub>1</sub>	81	64	壺 B					不	明	ヘラミガキ	ヘラミガキ			(2.1)			(10.8)	8.9	
Cfg24I	82	65	壺 B					ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			(1.8)			(13.8)	9.4	
Bi12溝	83	66	壺 C <sub>1</sub>	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子			(12.5)	14.8	14.2	16.6		
Ca27溝	84	67	壺 C <sub>1</sub>	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	不	明					(9.0)	16.0	14.4	(17.0)		
Ca62I	85	68	壺 C					不	明	明	明			(5.3)			(12.3)	9.0	
Bi12溝	86	69	壺 C					ヨコハケメ	横ナ子後 ヘラミガキ	横ナ子後 ヘラミガキ	横ナ子後 ヘラミガキ			(5.0)			(9.8)	7.0	
Bi630I	87	70	壺 C					ナ	ナ	ナ	ナ			(3.3)			(8.6)	6.0	
Bi 6 溝	88	71	壺 C					ナ	ナ	ナ	ナ			(4.5)			(11.6)	7.2	

( ) は現存部分の計測値、空白は欠損部

### 9. 高台坏と分類 (第23図89~109)

ロクロ成形で付高台であるが、焼成は軟質で灰白色や浅黄橙色の色調の土師質のものである。胎土は石英粒・砂粒等若干含むが一般に緻密である。軟質なため残存状態は非常に悪く、器面断面共に磨滅しており、坏底部と高台部の残存するものが大部分で実測図に書けたものは21個体分である。北西部ピット群中のピット内から5点(24%)、南西部遺物包含地のDaグリッド付近から16点(76%)の出土である。遺物包含地出土状態はIa層1点、II層上位12点、II層中位3点、凡そ高台坏はII層の上層部出土と考えられる。高台の高さは0.7cm~2.5cmの範囲内にあるが、0.7~1.6cmの範囲のものが多い。高台底径は4.3~9.2cmの範囲にあるが、5.0~6.2cmの範囲に集中する。高台端部及び色調、硬度等を特徴として分類する。遺構伴出は皆無である。

Ia: 高台端部が丸味を帯び、色調は灰白色や浅黄橙色、軟質な焼成である。(89~100)

Ib: 高台端部はIaと同じであるが、色調はにぶい橙色で、焼成不良のやや軟質なもの。(101)

IIa: 高台端部が肥厚して面をなし、色調は浅黄橙で焼成不良の軟質である。(102~103)

IIb: 高台端部はIIaと同じで、色調は橙色であるが朱塗りされ、やや硬質な焼成。(104)

IIIa: 高台端部欠損不明のもので、灰白色や浅黄橙色で焼成不良の軟質なもの。(105~107)

IIIb: 高台端部欠損不明のもので、橙色や浅黄橙色でやや硬質な焼成である。(108~109)

### 10. 須恵器壺・鉢・長頸瓶 (第26図197~212)

調査区出土の須恵器壺・鉢・長頸瓶は16個体分であるが、全て破片である。遺構に直接伴う出土は皆無であり、包含層出土だけである。最も多いのは南西部遺物包含地のII層の上位出土で12個体分(75%)であり、他は北西部包含層出土である。

これ等の須恵器の胎土は砂粒少量混入するが緻密である。208は灰白色で焼成不良の軟質なものであるが、他は灰色12点、にぶい橙色3点で全て硬質である。

口縁部破片から反転復元実測したもので、器種・口縁等は全て推定である。口縁端部の形状により分類する。

壺Ⅰ: 口縁が外反し、口縁端部が上下に挽き出されているもの。(197~201)

壺Ⅱ: やや直立気味の頸部から外傾する口縁部へ続き、口縁端部が丸味を帯びて下方に挽き出されているもの。(202)

その他: 口縁部欠損し、楕円形状の体部と底部からなり、ロクロ調整後に部分的に種々の調整がなされ、外面に緑灰色の自然釉がかかる。(203)

鉢: 浅鉢状の鉢と推定されるもので、体部上半から口縁部へと外傾し、口縁部外面に粘土貼付により、一条の稜帯がめぐらる。(204)

長頸瓶Ⅰ: 口縁部が外反し、口縁端部が上下に挽き出されているもの。(205~209)

長頸瓶Ⅱ: 口縁部が外反し、口縁端部が丸味を帯びて上方に挽き出される。(210~212)

第25表

遺物包含地その他出土高台坏図版説明一覧

( )は現存部分の計測値 空白は欠損部

出土地	実測図 番号	写真 番号	分類 記号	器面 調整	器高 (cm)	口径 (cm)	高台高 (cm)	高台径 (cm)	胎土	硬度	色調	付記
Da33ⅡU	89	72	I a	ロクロ痕	(1.4)		0.7	4.4	精良・石英粒・ 砂粒少量混入	軟質	灰白色	
Da33ⅡU	90	73	I a	ロクロ痕	(2.2)		1.1	5.0	精良・石英粒・ 砂粒少量混入	軟質	浅黄橙	坏底部下面 回転未切痕
Da33Ⅱ	91	74	I a	ロクロ痕	(2.4)		1.8	5.0	精良・石英粒少 量混入	軟質	灰白色	
Da33ⅡU	92	75	I a	ロクロ痕	(2.2)		1.5	5.2	精良・石英粒少 量混入	軟質	灰白色	
Da33ⅡU	93	76	I a	ロクロ痕	(2.3)		1.6	5.3	精良・石英粒少 量混入	軟質	灰白色	
Cj30Da30Ⅰa	94	77	I a	ロクロ痕	(1.7)		0.8	5.6	精良・石英粒少 量混入	軟質	浅黄橙	
Da33ⅡU	95	78	I a	ロクロ痕	(2.7)		1.5	5.6	精良・石英粒少 量混入	軟質	灰白色	坏底部下面 回転未切痕
Da33ⅡU	96	79	I a	ロクロ痕	(2.1)		1.5	6.2	精良・石英粒少 量混入	軟質	浅黄橙	
Be27Ⅰ	97	80	I a	ロクロ痕	(2.4)		1.1	7.6	良・石英粒・砂 粒混入	やや軟質	灰白色	
Be27P <sub>2</sub>	98	81	I a	ロクロ痕	(1.5)		1.0	8.0	精良・石英粒少 量混入	軟質	浅黄橙	
Da33ⅡU	99	82	I a	ロクロ痕	(1.8)		1.2	8.2	精良・石英粒少 量混入	軟質	浅黄橙	
Da33Ⅱ	100	83	I a	ロクロ痕	(2.2)		2.2	8.2	精良・石英粒少 量混入	軟質	浅黄橙	
Da30ⅡU	101	84	I b	ロクロ痕	(3.8)		2.4	9.2	精良・石英粒少 量混入	やや軟質	にぶい橙	
Da33ⅡU	102	85	Ⅱa	ロクロ痕	(2.3)		1.1	5.6	精良・石英粒・ 砂粒混入	硬質	浅黄橙	
Bf27P <sub>2</sub>	103	86	Ⅱa	ロクロ痕	(1.5)		1.5	7.0	精良・砂粒少量 混入	軟質	浅黄橙	
Bg21P <sub>2</sub>	104	87	Ⅱb	ロクロ痕	(2.6)		1.0	7.6	精良・石英粒・ 砂粒少量混入	硬質	橙	坏外面・高台 部両面未達
Da33ⅡU	105	88	Ⅲa	ロクロ痕	(1.2)		(0.6)	4.3	精良・石英粒少 量混入	軟質	灰白色	
Bh27P <sub>2</sub>	106	89	Ⅲa	ロクロ痕	(2.1)		(1.0)	(5.3)	精良・石英粒・ 砂粒少量混入	軟質	浅黄橙	
Cj33Da33Ⅱ	107	90	Ⅲa	ロクロ痕	(2.1)		(0.6)	(6.2)	精良・石英粒少 量混入	やや軟質	浅黄橙	坏底部下面 回転未切痕
Da33ⅡU	108	91	Ⅲb	ロクロ痕	(4.1)	17.5	(0.7)	(6.1)	精良・石英粒・ 砂粒少量混入	やや軟質	橙	
Da33ⅡU	109	92	Ⅲb	ロクロ痕	(6.0)	17.2	(0.7)	(8.0)	精良・石英粒少 量混入	やや軟質	浅黄橙	

第26表 遺物包含地その他出土須臾器・鉢・長頸図版説明一覽

( ) は現存部分の計測値 空白は欠損部

出土地	実測図 番号	写真 番号	器種	口 縁 部						頸 部						口徑 (cm)	頸部 (cm)	胴部 (cm)	底徑 (cm)
				内 面		外 面		内 面		外 面		内 面		外 面					
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面				
C127Da271b Da271U	197	146	壺Ⅰ	口クロ損 口クロ損	口クロ損 口クロ損	口クロ損 口クロ損	口クロ損 口クロ損	口クロ損 口クロ損	口クロ損 口クロ損	口クロ損 口クロ損	口クロ損 口クロ損	口クロ損 口クロ損	口クロ損 口クロ損	(12.8)	22.4	18.5 (37.6)			
C133Da331U	198	147	壺Ⅰ	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	(2.8)	20.0				
C1331U	199	148	壺Ⅰ	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	(2.5)	17.0				
C130Da301b	200	149	壺Ⅰ	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	(1.5)	15.0				
Ca301	201	150	壺Ⅰ	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	(5.3)					
C127Da271b	202	151	壺Ⅱ	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	(3.4)					
C130Da301b 1U・1L	203	152	壺					口クロ損後 ナ	口クロ損後 ナ	口クロ損後 ナ	口クロ損後 ナ	口クロ損後 ナ	口クロ損後 ナ	(24.3)		24.4	12.2		
Cc24E10鉢 床面P11	204	153	鉢	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	(3.5)	20.0				
C133Da331U C133Da331a	205	154	長頸Ⅰ	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	(9.0)	10.6	6.0			
C127C1301	206	155	長頸Ⅰ	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	(1.9)	12.4				
C133Da331a	207	156	長頸Ⅰ	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	(1.5)	11.3				
C127C1301	208	157	長頸Ⅰ	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	(2.0)					
C133Da331U	209	158	長頸Ⅰ	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	(2.5)					
Ca9溝	210	159	長頸Ⅱ	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	(1.7)	14.0				
不 明	211	160	長頸Ⅱ	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	(2.1)					
不 明	212	161	長頸Ⅱ	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	口クロ損	(4.4)					





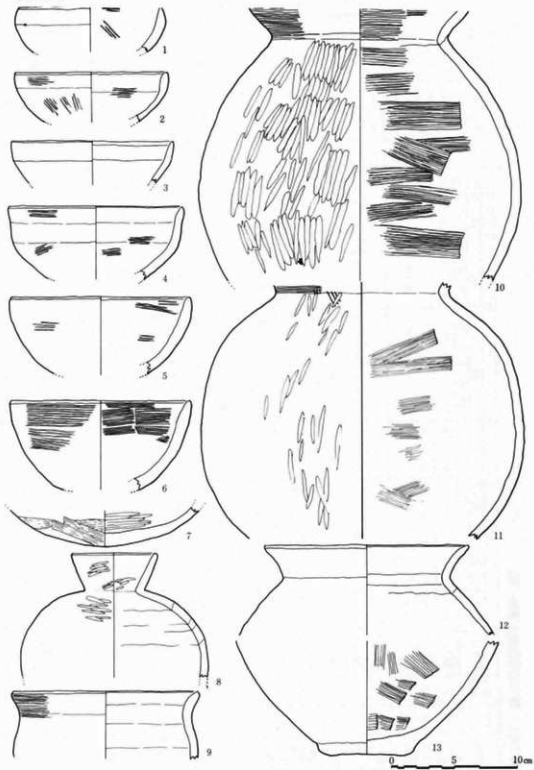


第27表3 竪穴住居跡出土遺物一覧

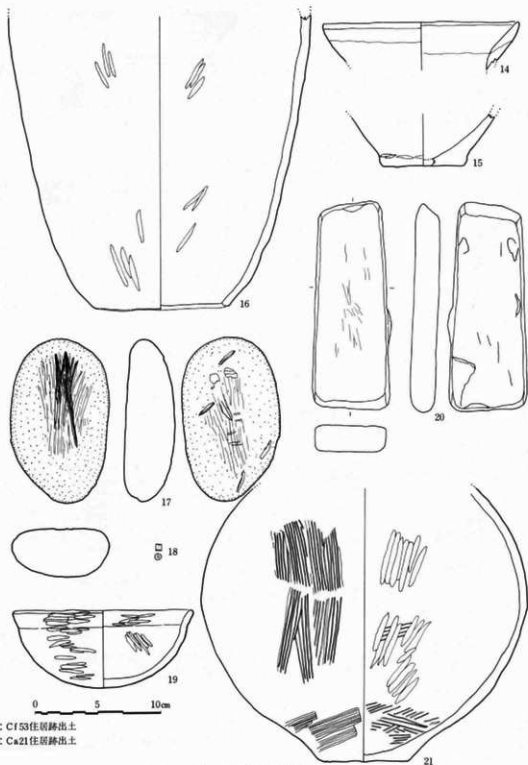
( ) は現存部分の計測値 空白は欠損部

出土地	表層 番号	写真 番号	器種	胴部						底		器高 (cm)	口径 (cm)	胴径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	備考
				口面		外面		内面		上面	下面						
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	上面	下面						
Ce24E床 P <sub>1</sub>	43	32	甕C <sub>1</sub>	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
Ce24E床 P <sub>2</sub>	44	33	甕C <sub>2</sub>	ハケメ	ハケメ	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
Ce24E床 出	45	34	甕C <sub>3</sub>	ハケメ ヨコナデ	ハケメ ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ
Ce24E床	46	35	甕C <sub>2</sub>	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ
Ce24E床	47	36	甕C														
Ce24E	48		甕C														
Ce24E床	49	37	甕C														
Ce24遺構 埋没	50	38	16A														
Ce24遺構 埋没	51		16B														
Ce24遺構 埋没	52	39	甕C <sub>1</sub>	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ
Ce24遺構 埋没	53	40	甕C <sub>2</sub>	不明	ハケメ	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
Ce24遺構 埋没	54	41	甕C <sub>3</sub>	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ
Ce24遺構 埋没	55	42	甕C <sub>1</sub>	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ
Ce24遺構 埋没	56	43	甕C <sub>2</sub>	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ
Ce24遺構 埋没	57	44	甕C <sub>3</sub>	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ
Ce24遺構 埋没	58	45	甕C <sub>1</sub>	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ	ハケメ ハケメ
Bf30E埋 土	59		Bf30E埋 土														
Bf30E埋 土	60	46	甕C <sub>1</sub>	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ
Bf30E埋 土	61	47	甕C														
Bf30E高 土	62	48	甕C														

— 西大畑遺跡 —

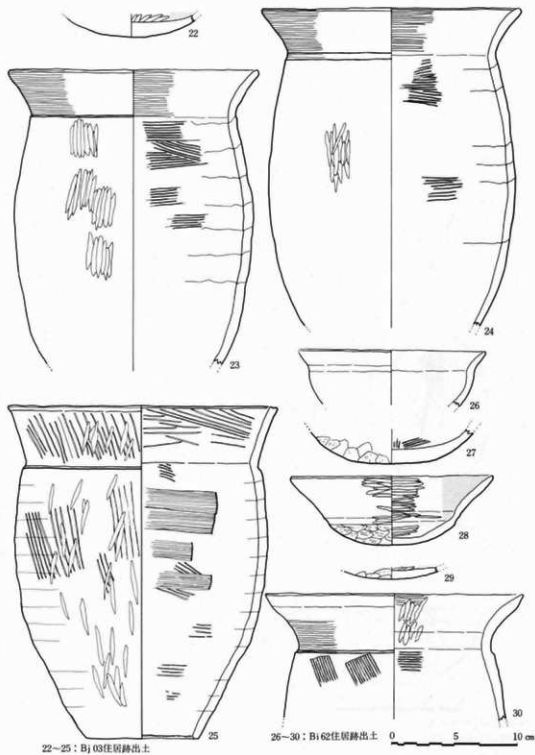


第15圖 C153壺穴住居跡出土遺物

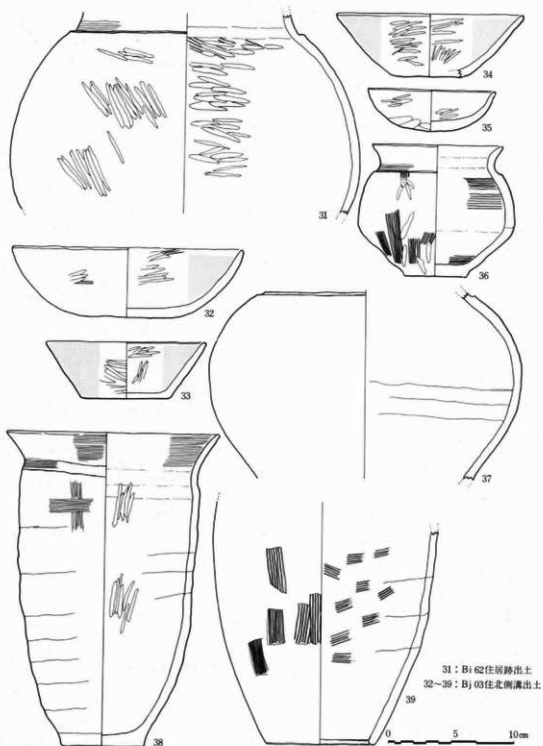


14~18 : C153住居跡出土  
19~21 : Ca21住居跡出土

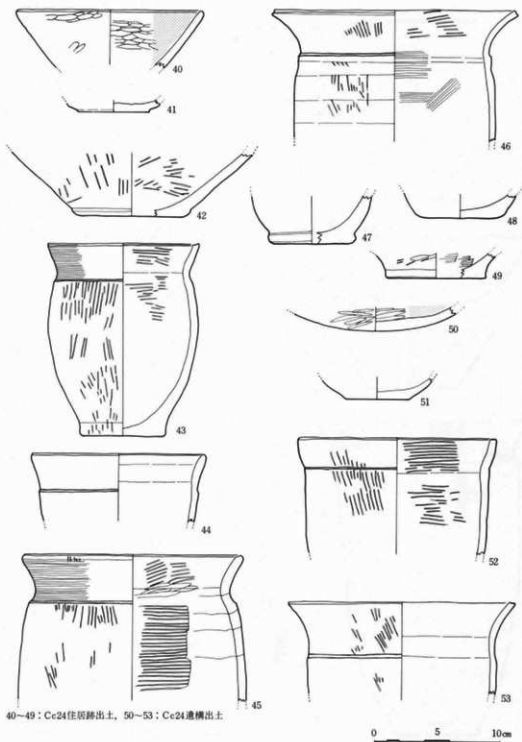
第16図 C153住・Ca21住出土遺物



第17図 B103住・B162住出土遺物



第18圖 B162住, B103住北側溝出土遺物



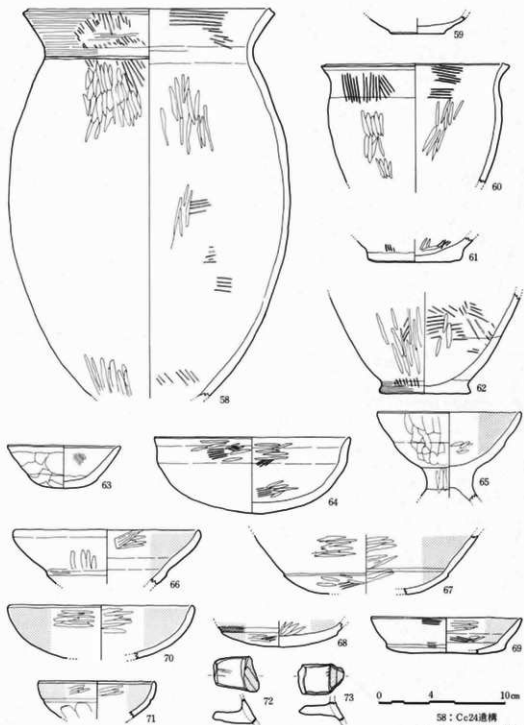
40~49 : Cc24住居跡出土, 50~53 : Cc24遺構出土

第19図 Cc24住・Cc24遺構出土遺物



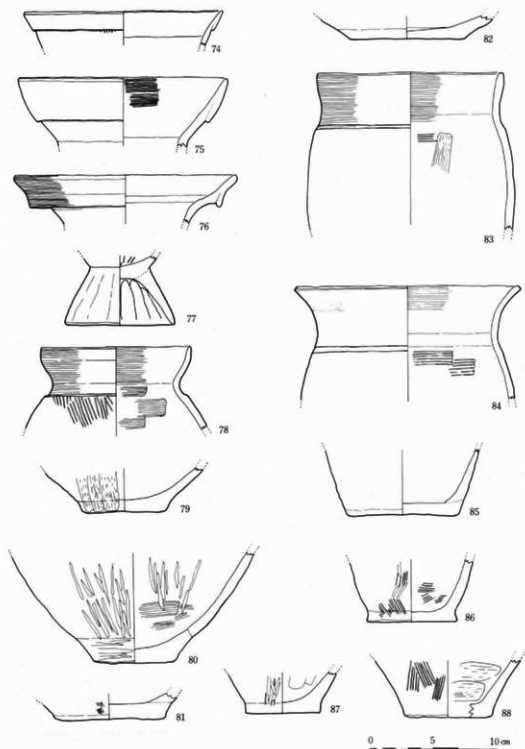
第20図 Cc24遺構出土遺物



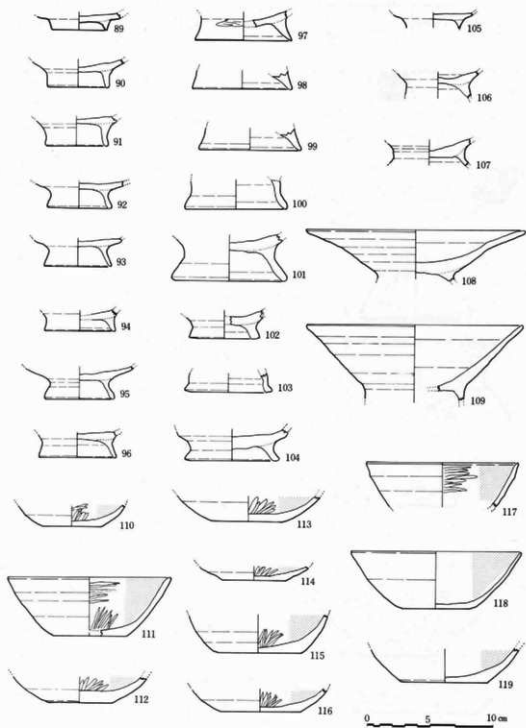


58 : Cc24遺構  
 59-62 : Bf30住居跡出土  
 63-73 : 溝、その他出土

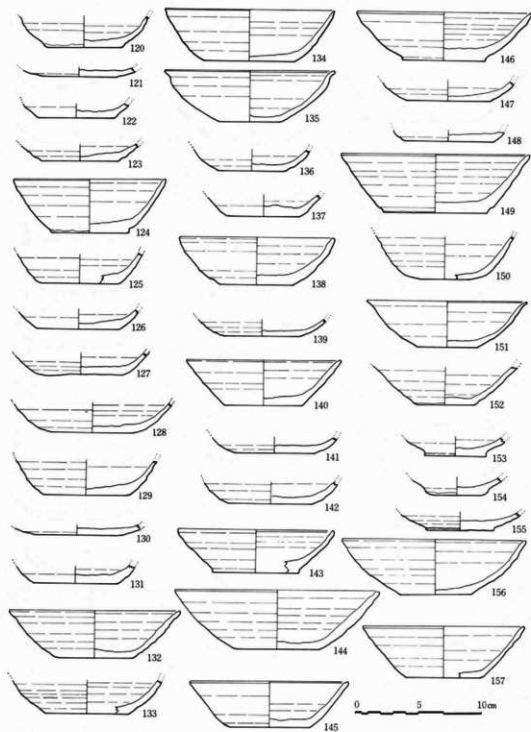
第21図 Cc24遺構・Bf30住居跡・溝その他出土遺物



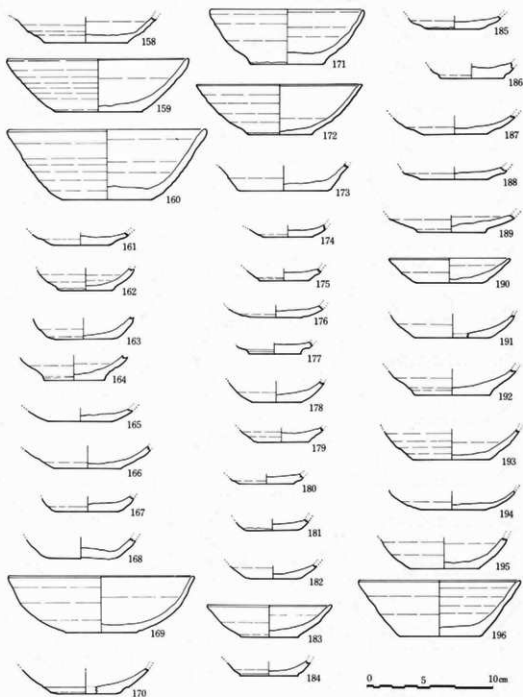
第22図 溝その他出土遺物



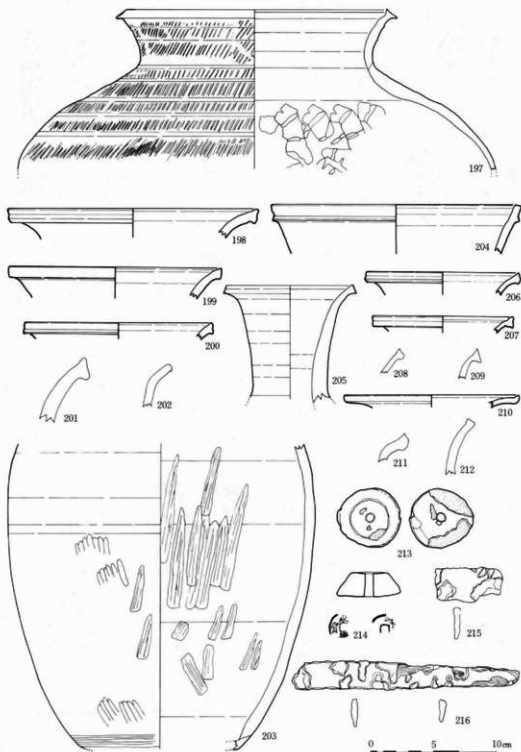
第23図 遺物包含地その他の遺物



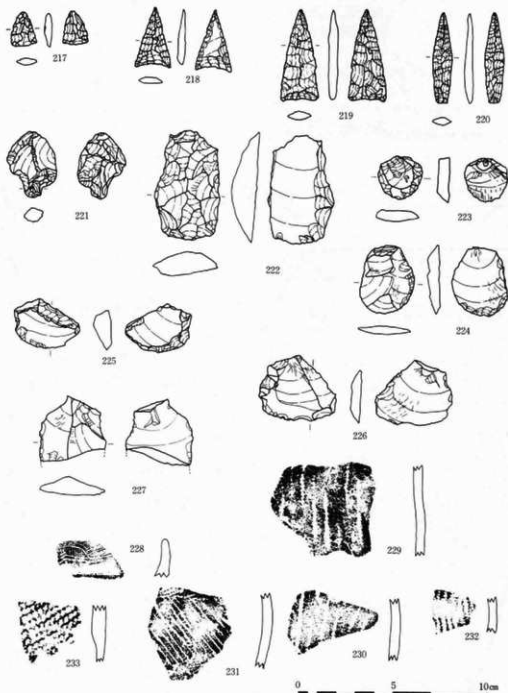
第24図 遺物包含地その他の遺物



第25図 遺物包含地その他の遺物



第26図 遺物包含地その他の遺物



第27図 遺物包含地その他出土遺物

## VI 考察とまとめ

### 溝状土壌

段丘縁部微高地のやや平坦地に構築され、広範囲にまばらに分散して分布する。分布状態や配置の規則性等については限られた範囲の調査であり、4基だけの検出なので不明である。規模において多少の相違はあるが、いずれも同じ形態である。即ち開口部は狭小の溝状、底部は更に狭小の溝状を呈し、下に行く程せばまる。土壌内埋土は自然堆積であり、石礫1点だけの出土である。周辺には多量の土師器・須恵器等の破片が分布するが、土壌内への混入は皆無であり、土器分布以前に埋没したと思われる。竪穴住居跡や掘立柱建物跡により一部が切られている。形態や占地・出土遺物等より、縄文時代に構築された、けもの捕獲のための落とし穴と思われる。

この土壌の名称は種々に仮称されており、又性格についても種々な説があるが、ここではその形態から溝状土構と仮称し、平面形・断面形・堆積土等から落とし穴と思われる。県内各所より検出されており、都南村湯沢遺跡<sup>(1)</sup>では「陥し穴状遺構」と呼称し、縄文中期末～後期初頭に位置づけている。久慈市三崎(Ⅲ)遺跡<sup>(2)</sup>では「楕円形土壌」とし、伴出した炭化材の年代測定値結果によれば縄文後期末～晩期初頭に属するものようである。

### 出土土器

当遺跡調査区内出土の土器を各器種の分類や出土状況等により、従来の土器型式等との比較検討をする。

- ① 複合口縁の壺Aや台付の甕A等はBj3住居跡西方の溝とその周辺出土で、器面はかなり磨滅し調整は不明な点が多いが、器形上の特徴から古墳時代前期の土師器壺釜式期のものに近似する。尚この段丘縁部が続く西方400m程に古墳時代前期の高山遺跡<sup>(4)</sup>がある。
- ② 非ロクロ非内黒丸底の坏A<sub>1</sub>類、単純口縁で体部球形の小形壺B、体部球形形で頸部に段を形成しない甕B<sub>1</sub>、頸部に段のない長胴の甕C<sub>1</sub>等は各住居跡で共伴し、その器形・器面調整等の特徴から古墳時代中期の南小泉式の土師器に類似するものと思われる。
- ③ 非ロクロ内黒の丸底或いは平底の坏A<sub>2</sub>～A<sub>4</sub>、体部が球形形で頸部に段を形成する甕B<sub>2</sub>B<sub>3</sub>、長胴形で頸部に段を形成する甕C<sub>2</sub>C<sub>3</sub>の一部は夫々各住居跡から共伴して出土し、その特徴から古墳時代末期から奈良時代前半の栗園式の土師器に類似するものである。
- ④ 掘立柱建物跡や南西部遺物包含地に集中して多量に分布する遺物は共伴関係にある可能性が強いものと思われ、次のようなものがある。非ロクロ土師器で、頸部有段の長胴甕C<sub>2</sub>C<sub>3</sub>・土師器ロクロ内黒の坏で、底部外面にケズリ調整のあるBIa、糸切無調整のBIb等は従来表杉ノ入式といわれるもので、9世紀中頃から11世紀中葉頃までと推定されている。ロクロ非内黒の坏には、灰色・灰白色・にぶい橙色・淡橙色等の色調で、硬質・軟質があり、寛切り・



糸切り・ケズリ調整等のあるBIIa～BIIcで須恵器といわれているものである。9世紀～11世紀初頭と推定される。又、坏BIIId～BIIeにはぶい橙色や淡橙色・浅黄橙色の軟質なもので、全て糸切り無調整で底部が小さい。これは須恵系土器や土師質土器に相当するものと思われる、11世紀～12世紀末頃と言われている。高台坏は坏BIIeと胎土・焼成・色調等が類似し、遺物包含地でも坏BIIeと混在して出土している。この高台坏も須恵系土器や土師質土器に相当するもので、この中には器形的には高台皿に相当するものも一括した。須恵器壺・鉢・長頸瓶も全て破片であり、口縁部破片からの推定で壺7個体、鉢1個体、長頸瓶8個体の出土で、遺物包含地ではII層の上位出土である。尚口クロ内黒坏、口クロ坏、高台坏、須恵器壺・鉢・長頸瓶は伊沢城出土のもの<sup>(5)</sup>と近似するものようである。これら口クロ成形・調整の土器は平安時代に属するもので、非口クロ土師器もこれらに共伴するものと思われる。

#### 竪穴住居跡 (第28・29表)

竪穴住居跡は8棟の検出で、調査区の段丘縁部全域に分布する。竪穴の構造・伴出遺物等の特徴から大きく2つに分けられる。

第1類：竪穴平面形が方形で、カマドをもたないもの。これには平面形がやや正方形に近い大形のもので、各辺が夫々東西・南北方向に沿い、壁際に部分的に周溝がめぐるCf53住居跡、Cb50住居跡と平面形が長方形をした小形のもので、方向がばらばらなCa21住居跡・Bf30住居跡がある。4個の主柱穴と壁際に2個の柱穴を有する。Ca21住居跡ではがが確認されたが、他は削平や擾乱等により不明である。

伴出土器は全て非口クロ土師器で、須恵器を伴わない。坏は非口クロ非内黒丸底の坏A<sub>1</sub>類で、ハケメやミガキ等の調整痕があり、朱塗りのももある。甕は球胴形頸部無段の甕B<sub>1</sub>類と長胴形頸部無段の甕C<sub>1</sub>類で、ハケメやミガキが施される。甗は長胴形甕の底部を欠いた形の無底式で、ミガキが加えられる。その他小形壺や砥石が伴出する。これらの特徴は南小泉式の土器に類似すると思われ、古墳時代中期頃の竪穴住居跡と推定される。

第2類：平面形が隅丸方形で、カマドを有する竪穴。Bj3住居跡、Cc24住居跡、Cc24遺構等は方向がほぼ南北で、北壁にカマドを有し、煙道から南流する溝をもつ。Bi62住居跡はこれ等3棟とは方向が異なり、全掘していないので規模やカマド等不明であるが、伴出土器が共通するのでここに入れた。竪穴第2類の伴出土器は全て非口クロで、須恵器を伴わない。坏は非口クロ内黒坏A<sub>2</sub>～A<sub>4</sub>類である。甕は頸部有段の球胴甕B<sub>2</sub>類や長胴甕C<sub>2</sub>C<sub>3</sub>類である。坏や甕の特徴は栗園式に類似するものであり、カマドが普遍的にある事から末期古墳から奈良時代初期にかけての竪穴住居跡と思われる。

#### 掘立柱建物跡 (第30表)

北西部微高地に6棟の掘立柱建物跡がある。北の4棟は柱掘り方の重複関係から、Be24A・

Be24B・Bf21A・Bf21Bの順に建てられたものであり、各建物の磁北に対する振れが同じで、南側柱列が重なる事から建て替えが行なわれたものと思われる。柱掘り方混入土器や周辺分布土器で多量なのは非ロクロ土師器甕、須恵器壺・鉢・長頸瓶、ロクロ内黒環、ロクロ環、高台環等で破片であり、建物内で使用されたものと考えられる。

Bh27建物跡は前記4棟の南に隣接し、柱筋で最も接近している所では1.4m、建物の磁北に対する振れも異なり、同時存在とは考えられない。Be24A・B、Bf21A・B建物跡に接近している北側柱列の柱掘り方に土器片が多く混入しており、北の4棟より後に建てられたものであろう。建物周辺にも土器片が多く分布し、この建物内では使用されたものと思われる。

Bh27建物跡の南4.3m程にCa21建物跡がある。建物の磁北に対する振れが異なる。東妻北柱掘り方にロクロ環、非ロクロ土師器甕の破片が各1点ずつ混入しており、北からの流れ込みと考えられ、6棟の中では最も新しいかもしれない。建物周辺には多量の土器片が分布するが、柱掘り方に入っておらず、この事はこの建物内でこれ等の土器が使用されたものと思われる。

以上6棟の掘立柱建物跡は、占地・規模・使用されたと思われる土器類に共通するものがあり、前後はあるが、ある限られた期間に継続して建てられたものと思われる。これら建物の伴出土器と考えられるものの内、ロクロ内黒環、ロクロ環、高台環、須恵器壺・鉢・長頸瓶等は明らかに平安時代に属するものである。限られた範囲内の調査ではあるが、この時期の竪穴住居跡は検出されず、掘立柱建物跡だけの検出であり、伴出土器が胆沢城出土のものと同様の事等から、何か特殊な施設としての建物であった可能性も考えられる。

調査区南東のCe65建物跡は前期6棟とはかなり異なる点が多い。これらの建物とは離れた低地にあり、建物の磁北に対する振れが異なり、東西両妻中柱の掘り方がない。等間ではあるが、梁行と桁行が直角でなく、平行四辺形に近い形の建物と思われる。柱掘り方が小さく、埋土出土遺物は皆無であり、柱穴も14cmと小さい。周辺分布遺物は肩部有段、ハケメ後ミガキ痕のある土師器長胴甕4個体分、球胴甕1個体分だけであり、柱掘り方に1片も混入していないので、建物内で使用されたものかもしれない。これ等の甕は栗園式のものに近似すると思われ、7～8世紀の建物跡であるかもしれない。

#### 南西部遺物包含地

南西部遺物包含地は崖を境にして北の段丘縁部より1m程下がって低湿地の沖積地にあり、遺構は認められず、土器片が集中して分布している。多量に出土したのは非ロクロ土師器甕、ロクロ環、須恵器壺・鉢・長頸瓶、ロクロ内黒環、高台環等の破片で、これ等は掘立柱建物跡周辺分布の土器と同類のものである事から、掘立柱建物で使用された土器が人為的に廃棄されたものであり、廃棄場所であったものと思われる。土器廃棄が行なわれたのはⅡ層の下位がある程度堆積した頃で、掘立柱建物使用時期の平安時代と思われる。

以上の事からこの段丘縁部は縄文時代から種々に利用されてきた事がうかがえる。

縄文時代：竪穴住居跡は検出されなかったが、少量ではあるが土器片、石器等が分布する事から生活が営まれた可能性もある。遺構としては落し穴と思われる溝状土壇の検出があり、狩猟の場として利用されたものと思われる。

弥生時代：遺構は検出されなかったが、少量の土器片出土から生活が営まれたかもしれない。古墳時代～奈良時代前半：多量の出土遺物、竪穴住居跡の検出があり、集落が営まれていたものと思われる。

平安時代：多量の土器出土があり、掘立柱建物跡が検出されたが、竪穴住居跡は検出されない事から何か特殊な施設が置かれていたものかもしれない。

〔注 記〕

- (1) 岩手県埋蔵文化財センター「都南村湯沢遺跡」(1978)
- (2) 久慈市教育委員会「三崎(目)遺跡発掘調査報告書」(1978)
- (3) 氏家和典「東北土器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』(1957)  
園田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代埴形土器」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所 (1974)
- (4) 新田賢「高山遺跡」岩手県水沢市文化財報告書第1集 (1978)
- (5) 水沢市教育委員会「胆沢城」(1977)

竪穴住居跡一覽表

第28表

住居跡名	遺構確認面	平面形	大きさ (床面積)	方向	床面積	主柱穴の配置	伊またはカマド	貯蔵穴状ピット (大きき・深さ)
C153住居跡	表土下黄褐色 シルト質土	正方形	6.2×6.0m (35㎡)	南—北	床面下に張り方なし	竪穴内に規正しく 方形に4個配置	不	隅丸方形 (62×54×28cm) (90×68×19cm)
C656住居跡	表土下黄褐色 シルト質土	正方形 (確定)	5.7×(4.5)m (標高23.1m)	南—北	床面下に張り方なし	竪穴内に3対の配置	不	楕円形 (85×60×25cm) (68×52×30cm)
Ca21住居跡	表土下黄褐色 シルト質土	長方形	3.8×2.85m (10.5㎡)	東—西	床面下に張り方なし	竪穴内に方形に4個 配置	床面の東壁寄りが壊け ている。 (45×40cm)	楕円形 (78×58×33cm)
B130住居跡	表土下黄褐色 シルト質土	長方形	2.9×2.45m (6.44㎡)	北東—南西	床面下に張り方なし	竪穴内に方形に4個 配置	不	楕円形 (40×35×22cm)
B13住居跡	表土下黄褐色 シルト質土	隅丸方形	5.0×4.6m (21.8㎡)	南—北	床面下に張り方なし	竪穴内に規正しく 方形に4個配置	北壁中央にカマド設置。 煙道部、煙道部、煙出し部に分かれる。	不整形 (102×70×27cm)
Ce24住居跡	表土下黄褐色 シルト質土	隅丸方形 (確定)	3.5×2.8m (9.18㎡)	南—北	床面下に張り方なし	不	北壁西寄りにカマド、 煙道部、煙出し部残存	円形 (85×85×25cm)
B162住居跡	表土下黄褐色 シルト質土	方形 (確定)	(4.7)×(3.7)m (残存部8.32㎡)	北東—南西	床面下に張り方なし	不	不	不

第29表 竪穴住居跡出土遺物一覽

住居跡	器種	個体数	器形分類	(内は其測図番号)
Cf53住居跡	坏	7	坏A <sub>1</sub> 類(1・2・3・4・5・6)	坏A類(7)
	壺	1	壺B類(8)	
	甕	7	甕B <sub>1</sub> 類(10・11・12・13・14・15)	甕C <sub>1</sub> 類(9)
	甌	1	長胴甕形無底式(16)	
	碇石 管玉	1 1	(17) (18)	
Cb50住居跡	甕	1	甕B <sub>1</sub> 類	
Ca21住居跡	坏	1	坏A <sub>1</sub> 類(19)	
	甕	1	甕B <sub>1</sub> 類(21)	
	碇石	1	(20)	
Bf30住居跡	坏	1	坏B IIc類(59)	攪乱混入
	甕	3	甕C <sub>2</sub> 類(60) 甕C類(61・62)	
Bj3住居跡	坏	1	坏A類(22)	
	甕	2	甕C <sub>2</sub> 類(23・24)	
	甌	1	(25)	
Cc24住居跡	坏	2	坏A類(40) 坏B IIId類(41・混入)	
	甕	8	甕B類(42) 甕C <sub>2</sub> 類(43・44・46)	甕C類(45) 甕C類(47・48・49)
Cc24遺構	坏	2	坏A類(50) 坏B IIId類(51)	
	甕	7	甕C <sub>2</sub> 類(52・53・56) 甕C <sub>3</sub> 類(54・55・57・58)	
Bi62住居跡	坏	4	坏A <sub>1</sub> 類(26) 坏A <sub>2</sub> 類(28)	坏A類(27・29)
	甕	2	甕B <sub>2</sub> 類(31)	甕C <sub>2</sub> 類(30)

第30表 据立柱建物跡一覽表

建物名	棟方向	規模	奥行 m (内は尺)	桁行 m (内は尺)	柱間寸法		柱間の方		柱高 m (内は尺)	柱廻り方埋土内出土遺物			
					梁間m (内は尺)	桁間m (内は尺)	平面形 寸法 cm	深さ cm		各	種	各	種
Be24A	東西棟	2間×4間			方形 74		46		小形手押土器1 土師器 11	縄文土器 土師器 4 土師器 1 小形手押土器1 土師器内環状4 土師器 66	Be24B21混合	A・B棟混合	Be24B21混合
Be24B	東西棟	2間×4間	6.3 (20.8)	10.00 (33.0)	2.5 (8.2)	57	57	25	土師器 2 土師器内環状4 土師器 111	土師器未塗灰1 土師器 2 土師器内環状3 土師器 59	土師器内環状1 須惠器 4 土師器内環状67 須惠器 10 土師質土器片61 須惠器 4	土師器内環状15 須惠器 4 土師器 6 須惠器 1	土師器内環状52 土師質土器片20 須惠器 2
Bf21A	東西棟	2間×3間			方形 48		22		土師器 2 土師器内環状2	土師器内環状1 土師質土器片1	土師器内環状1 土師質土器片5		
Bf21B	東西棟	2間×3間	4.8 (15.8)	7.99 (26.4)	2.66 (8.8)	48	21.5		土師器未塗灰1 土師器内環状2 土師器 39	土師器内環状1 土師器 18	土師器内環状20 須惠器 3 土師質土器片33 土師質土器片26		
Bh27	東西棟	2間×5間	5.4 (17.8)	10.80 (35.5)	2.70 (8.9)	61	47	22	縄文土器 土師器 1 土師器 142	土師器未塗灰1 土師器内環状7 土師器 142	土師器内環状11 土師質土器片81 土師質高台片5		
Ca21	東西棟	2間×3間	4.15 (13.6)	8.85 (29.1)	2.95 (9.7)	41	31	21	土師器出函未塗灰1 土師器 3	須惠器片同転半切 1			
Ce65	東西棟	1間×3間	4.4 (14.5)	7.00 (23.0)	2.33 (7.6)	33	40	14		出土遺物なし			

# 南 矢 中 遺 跡

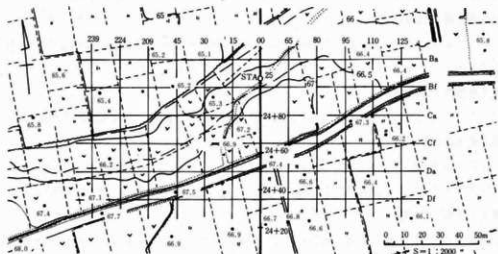
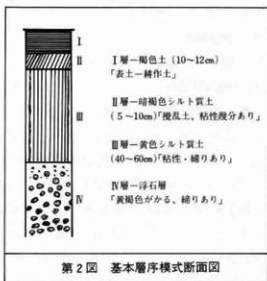
1. 遺 跡 名 南矢中遺跡 (MYN74・75)
2. 所 在 地 岩手県水沢市福原字南矢中
3. 調 査 主 体 岩手県教育委員会・日本道路公団
4. 調 査 担 当 岩手県教育委員会
5. 調 査 期 間 昭和49年10月29日～12月9日  
昭和50年6月9日～9月6日
6. 調 査 対 象 面 積 5800㎡
7. 発 掘 調 査 面 積 3820㎡

## I 位置と立地 (第1図、写真1図)

本遺跡は東北本線水沢駅西方約2.3kmの中位段丘最下段(胆沢段丘福原面)の北縁にあたり、東西に長く伸びる段丘平坦面及び緩斜面に遺跡が立地する。海拔約66mで原状は畑地、水田宅地であった。調査範囲は工事用道路分、本線分及び県道付替えのための用地分であるが遺跡範囲としては東西に更に延びると思われる。周辺の遺跡としては鶴田の古墳群が西方に、東方には駆上の遺跡、南方には本調査関連の前谷地、北東には梨畑遺跡がある。

## II 遺物包含層

I [基本層序] 段丘形成後、自然営力及び人為的作用により地形及び層序の変化があった。右記の模式断面図は現状におけるものであるがIV層は周辺火山の噴出物に由来する村崎野浮石層である。歴史時代に於ける火山噴出物については、秋田焼山や十和田火山に由来するものが周辺の遺跡に見られる様であるが、本遺跡にては、その存在を確認出来なかった。





2 〔遺物包含層〕 分布調査にて土師器片の表面採取が行なわれた。出土物全体から見ると何らかの形で遺構との関わりを持つものが多く、層単独にて出土している遺物は少ない。また時代毎に成層状態を示すものは無く、単一層である。時期及び種類等は、縄文早期土器片及び石器等があり、寛永通宝らしき古銭に及ぶ。包含部位は基本層序の第Ⅰ・Ⅱ層である。

### Ⅲ 検出された遺構と遺物 (第3図遺構配置図、写真1図)

本遺跡には縄文時代の陥し穴状遺構(楕円形状・溝状の二種)や平安時代の竪穴式住居跡及び方形の溝、小溝跡等があり、そのそれぞれの時代に応じる遺物が出土している。

#### 1 〔縄文時代〕

##### (陥し穴状遺構)

イ、楕円形状遺構(この形式のものは底面に柱穴状のものをもつ。1号より6号までである。)

##### 第1号土構(Bc71) (第16図、第1表)

平安期住居のカマドにて切られている。底面長軸方向に対してほぼ直角の東西に2柱穴が設けられている。この柱穴の深さは約30cm程である。堆積層は壁上部の崩落土を含み、自然流入を示している。断面形は長方形であったろうと思われる。

##### 第2号土構(Bh53) (第4図・第1表以下同)

平面形に比して、浅いのは表土の削平によるものと考えられる。底面の2柱穴は本土壌のほぼ長軸方向に配列している。それぞれは底面より北側55cm、南側42cmと深く落込んでいる。また2柱穴の断面は下部ほど細くなって居り、抗等を差し込んだものと考えられる。埋土の状況より本来の断面は方形を成したと思われる。埋土の最下底は踏込まれた感じの褐色土である。

##### 第3号土構(Cb18)

円筒形の落込みで底面に2柱穴が(東側)34.8cm、(西側)39.5cmの深さを持ち検出された。埋土の状況は不明であるが断面形は方形を成していたと思われる。

##### 第4号土構(Ci215)

平面形が楕円に近い。明確に施設を持たぬ性格不明のものである。方形溝の傍に位置する。

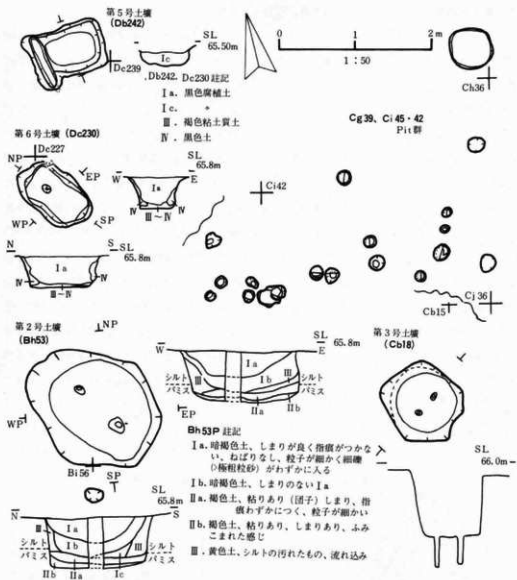
##### 第5号土構(Db242)

平面形は隅丸方形に近い。西端を第33号溝状土構にて切られている。底面に柱穴等見られない。検出埋土は一層で一気に埋没したものと思われる。他の土構と異なった機能が考えられる。

##### 第6号土構(Dc230)

底面形は隅丸の長方形である。北寄りに深さ約47cmの柱穴があるがこの断面形は下部程細くなる。埋土の状況よりは断面壁は直に立って居り、平面形も隅丸方形であったと思われる。





第4図 第2・3・4・5・6号土壇

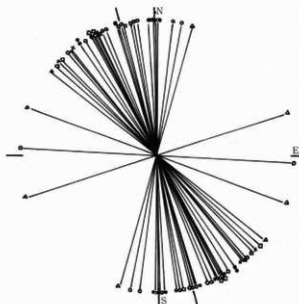
(圖1表)	図番号	図表番号	幅員(縦横)	底面積 (m <sup>2</sup> )	方位	出土平面形	出土断面形	その他	出土状況	出土遺物	地層横切の関連	備考
第1号土壇(Dc71)	16	13	1.40×1.25	0.9×1.0	1.05(N)	不整形	ヒコウ形	底面に2号土壇	4層自然堆積	なし	第1号型式位階跡	キツアにて築られる
2 "	(Bh53)	4	2-1	1.50×1.80	1.1×1.3	0.66	矩形	互形	3層	〃	なし	
3 "	(Cb18)	4	2-3	1.1×1.1	0.45×0.8	0.80	不整形	楕円形	〃	〃	なし	敷瓦等の記録なし
4 "	(C12)	3	2-1	1.8×1.3	1.4×1.0	0.52	不整形	〃	〃	〃	第11号(C122)互形遺物	敷瓦等の記録なし
5 "	(Dh5)	4	2-5	1.7×1.3	1.3×0.85	0.43	方形	半楕円形	中層をもつ	1層自然堆積	なし	第11号遺物に類する
6 "	(Dh2)	4	2-4	1.2×2.1	0.8×1.7	0.48	不整形	互形	底面に2号土壇	3層	〃	なし
(円形土壇)	(Gh2)	20	1.05×1.05	0.7×0.7	1.25	円形	長方形	底面に2号土壇	5層	〃	あり	南北の浅い1号土壇と隣り

□. 溝状土壌遺構 (第7~14図・第2表、写真3~6図)

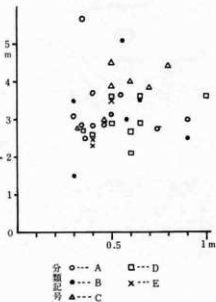
検出された総数は35基、その形状により5型式に区分して見た。それぞれについては遺構配置順に図示し、一覧表にては区分した型式毎にまとめた。型式区分の規準は…A—底部が直線的で上場より狭い、B—底部は直線的で一端が壁より中にもぐる、C—底部両端が壁より中にもぐり膨らむ、D—底部両端平面形開く、E—Dより両端平面形更に開く (A11基、B5基、C7基、D9基、E3基)の以上である。各型式と埋土の関係についてはそれぞれ断面図中に示してあるが、縦断面の記録は少い。大半のものは自然流入による堆積であるが第4号遺構 (Bf50) のみ人為的に投げ込まれた形跡がある。断面図及び埋土註記を欠くものはほぼ他例に順ずる。それぞれの型式についての共通点は以下の通りとなる。(掘り下げ到達層)基本層序Ⅳの浮石層。(平面形)軸方向の長短は見られるが復元形として隅丸の長方形である。(横断面形)検出形は下端の平らな楔状を呈する。(縦断面形)検出形は型式分類基準で示したごとく5形態の区分が出来る。(方位)下図に示すごとくN40°W付近への振れの集中が見られる。(配列)同一型式のものがまとまりを見せ平行に配置し、地形等高線にもほぼ平行である。(使用目的)陥し穴説を本遺跡にても採用する。<sup>(注1)</sup>この使用目的において形態の5型式がどのような意味を持つかについては今後の検討に待つ所であるが、その為の資料の一つとしては縦断面上層図が必要であろう。(遺構の年代等)年代を判定する資料遺物を伴出しないので決定出来ないが、ほぼ縄文時代後期までのものと考えられる。<sup>(注2)</sup>

(注1) 本調査関連報告書第1集 高屋敷、大久保、大塚、高柳遺跡文中

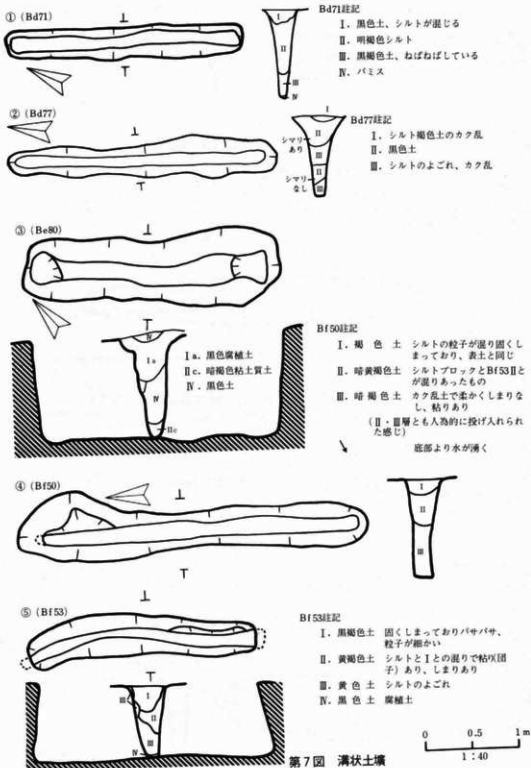
(注2) 岩手県(財)埋文センター調査報告書第2集 湯沢遺跡 (昭和52年度)



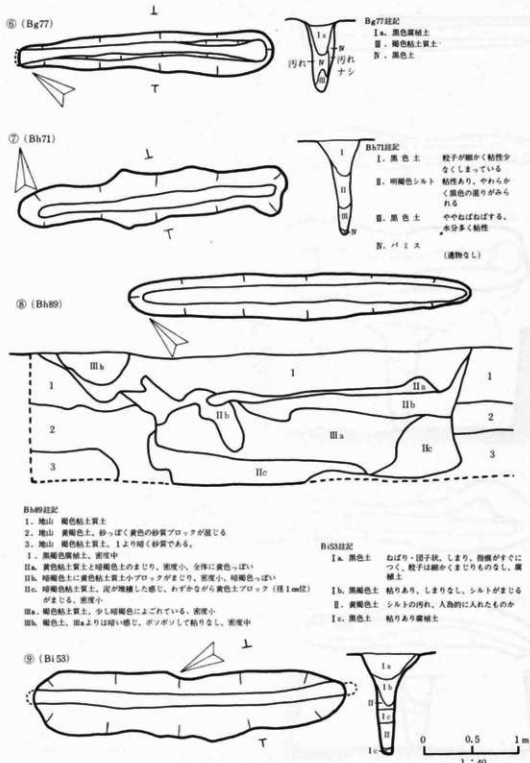
第5図 方位集積図



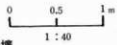
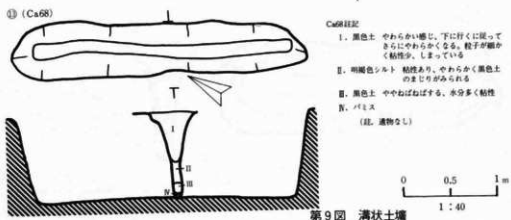
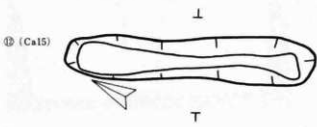
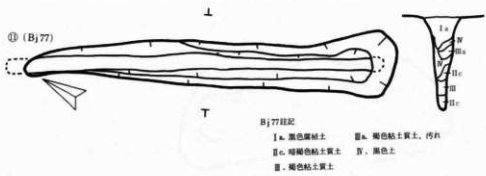
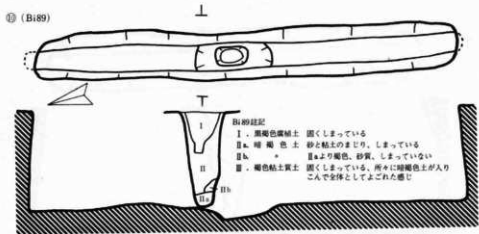
第6図 規模集積図



第7図 溝状土壌

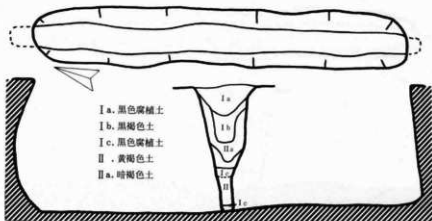


第8図 溝状土壌

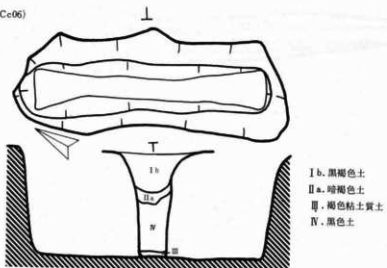


第9図 溝状土壌

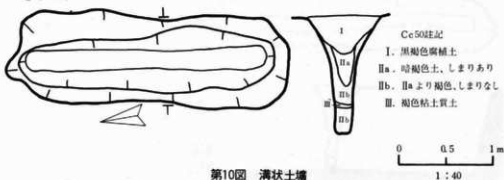
⑬ (Ce18)



⑭ (Ce06)

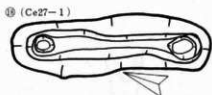
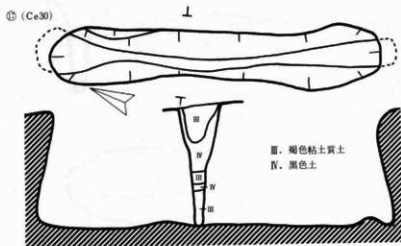


⑮ (Ce50)



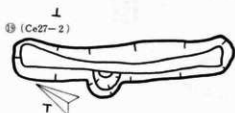
第10図 溝状土壌



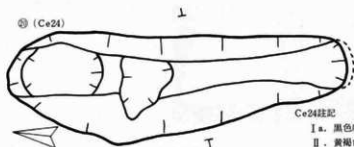


Ce27註記

- I a. 暗褐色で粘り少なくまじりものなし  
II c. 黒褐色土、シルトが多くまじり、やや黄色を呈す、しまりなく粘りあり  
III~IV. 黒色土（黄色を呈す）純粋の層ではなくシルトとのカク乱である。しまりなく、水分多く含み、粘りあり

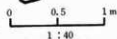


- III~IV. 黒色土（黄色を呈す）純粋の層ではなくシルトとのカク乱である。しまりなく、水分多く含み、粘りあり



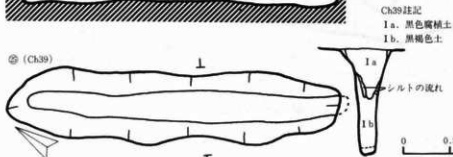
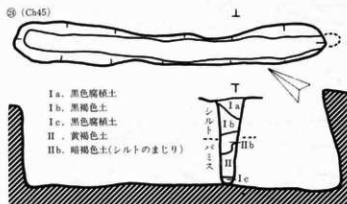
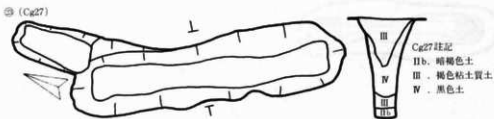
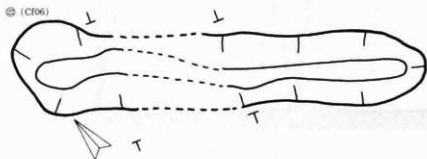
Ce24註記

- I a. 黒色腐植土  
II. 黄褐色土  
III. 褐色粘土質土



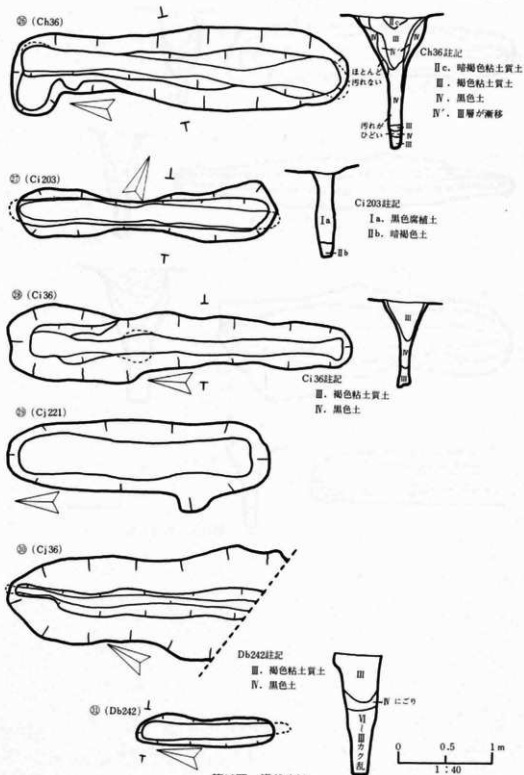
第11図 溝状土壌

— 南矢中遺跡 —

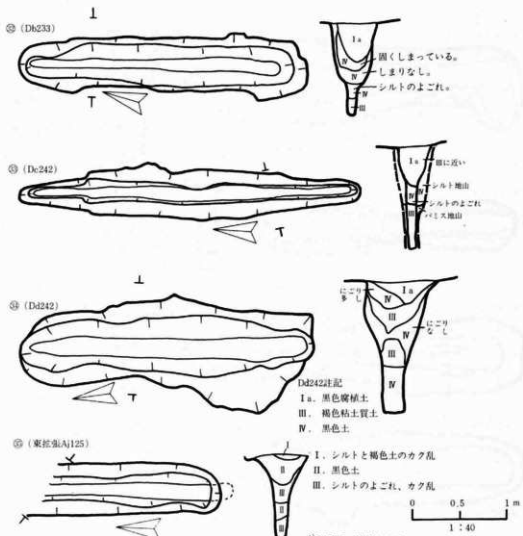


第12図 溝状土壌

0 0.5 1 m  
 1 : 40



第13図 溝状土壌



第14図 溝状土壌

(調査地)	2号B67	1号B61	4号B59	7号B67	13号C69	16号C50	21号C72	25号C20	32号C62	33号C20	34号C20	35号A25	Ce1-2	21号C61	25号C20	30号C20	31号D62	6号B69
経緯	7-2	7-1	7-4	8-7	9-13	10-16	11-21	11-25	14-32	14-33	14-34	14-35		12-24	12-25	13-30	13-31	8-8
寸法	11-11	11-11			4-1	5-1			6-1	6-2	6-4			5-4		5-6		
土層	2.80	2.50	3.70	2.86	3.14	3.00	3.65	2.79	2.85	3.65	3.10	13.01	5.11	3.50	3.50	2.50	1.50	2.00
砂質	0.34	0.36	0.40	0.43	0.50	1.30	0.25	0.74	0.40	0.33	0.30	0.56	0.56	0.30	0.45	0.30	0.30	0.45
泥	0.45	0.36	1.60	1.40	0.95	1.14	0.45		1.03	1.19	1.07	0.90	*	0.47	1.11	1.30	1.47	1.21
砂	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土	N27W	N27W	S67W	S67W	S40.5W	S67W	S37W	S11W	S27W	S17W	N17E	N37W	N17E	N27W	N37W	N27W	N17W	N27W
地	1層自然	4層自然	2層自然	1層自然	4層自然	1層自然	1層自然	4層自然	1層自然	4層自然	1層自然	4層自然	4層自然	1層自然	4層自然	4層自然	1層自然	1層自然
調査	1957/10	1957/10							1957/10	1957/10				1957/10	1957/10			
備	砂含	砂含							砂含					砂含	砂含			
注	30号B66	9号B53	11号B77	14号C16	22号C76	27号C30	31号B66	6号B67	12号C45	15号C90	19号C22	20号C24	21号C27	26号C20	29号C36	5号B73	12号C20	18号C25
経緯	8-10	8-8	8-11	10-14	11-22	13-17	7-3	8-6	9-12	10-15	11-19	11-20	11-23	13-26	13-28	7-5	11-17	11-18
寸法	3-5	3-4	3-6	3-9	4-8		3-1	3-3	3-8		4-3	4-2	5-3	5-3	5-7	3-2	4-6	4-4
土層	4.50	3.65	3.80	4.60	4.40	2.75	2.51	2.70	2.40	2.90	2.10	3.40	2.90	3.40	3.40	2.45	3.50	2.30
砂質	0.50	0.70	0.50	0.60	0.9	0.32	0.61	0.38	0.40	0.50	0.60	1.00	0.45	0.45	0.50	0.40	0.50	0.40
泥	0.60	1.00	1.02	1.26	0.72	1.11	0.87	0.67	1.26	1.06	1.24	1.07	1.34	1.23	0.94	0.75	1.26	0.96
砂	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土	S27W	S30E	N37W	N27W	S67W	N27E	S47W	N47W	N37W	N27W	S27W	N27W	N27W	N27W	N27W	N17W	N17E	N37W
地	1層自然	4層自然	1層自然	4層自然	1層自然	4層自然	1層自然	4層自然	1層自然	4層自然	1層自然	4層自然	4層自然	1層自然	4層自然	4層自然	1層自然	1層自然
調査	1957/10		なし	なし	なし	なし	1957/10	1957/10	なし	なし	なし	なし	1957/10	1957/10	なし	なし	1957/10	なし
備	砂含	砂含					砂含						砂含	砂含				

(遺物)

〔土器〕 図示破片資料5点 (15図1～5、第3表、写真第1図)

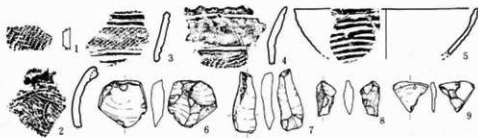
1) 図示の1片のみで遺物中一番古い。 2) 古代住居跡への流れ込みか重複関係かは明確でない。  
3) 粗砂も含み磨きは粗末である。口縁帯状地文部は沈線にて区画され頸部下に沈線による文様帯が続くと思われる。 4) 全体的に磨滅し地文も不鮮明であるが羽状施文である。胎土中の雲母も黒味を残している。 5) 口唇内面を周る隆帯が付されその表面は丁寧に磨かれている。内面等の黒変は内容物の浸み付きか廃棄後のものか不明である。一部に酸化鉄緑色調を示す物質が付着している。輪積痕が凸凹段の下部に認められる。 6) 粗雑な作りの感がある。含まれる雲母は上記5)より大きく比較的量も多い。以上縄文土器片は早期1)、中期2)3)、晚期5)6)と年代が推定出来る。

〔石器〕 (第15図6～7、第3'表、写真1図)

少量の出土で器種としても少い。 1) は支持面が自然面である。刃は最下端に付されその両端縁には使用による剥離が逆向きに生じている。 2) は一面に稜を残し不整形であるが2側縁には使用痕が認められる。先端部は対称形に調整が試みられている。上部側縁の抉りを行えば石匙の形態となる。 3) 意図的な調整の認められない割片である。巾の狭い端の使用痕は他端より幾分明確である。 4) 使用痕は極少部分である。淡桃色を呈し古代住居跡より出土しているが3)と同様伴出との判定は出来ない。

〔土器〕	図番号	写真番号	出土位置	形状	色調	土性	調整部(内面)	調整・施文部(外面)	備考
1	15-1	1-1	A66 口唇	鉢形	褐色	石灰質土	磨き	口唇内面(下唇)	縄文早期中心部(和)
2	-2	1-2	A49 口唇	鉢形	褐色	中硬土	磨滅	施文(上・下)付あり、口唇部付	口唇内面(上唇) 縄文中期(大66)
3	-3	1-3	C10 口唇	鉢形	褐色	胸内分心	磨滅(口)	口唇部(口唇付)	外面に施文部、裏面あり
4	-4	1-4	C30 口唇	平形	褐色	灰分分心	磨滅	施文(上)	灰分物付(不明)
5	-5	1-5	A66 口唇	鉢形	褐色	灰分分心	磨滅	施文(上・下)付あり、口唇部付	外面(口唇付)付、施文(口唇)あり
6	-6	1-6	*	片断	褐色	石灰質土	磨滅(口唇)	輪積痕あり、磨き	雲母あり、施文(口唇)あり(口唇付)

〔石器〕	図番号	写真番号	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	材質	備考
1 (不整形)	15-6	1-7	A66 口唇	5.1	5.1	1.4	27.3	砂質泥岩	(化石あり)
2 鎌	-7	1-8	東沢北遺跡	6.3	2.3	1.1	19.6	砂質泥岩	調整部は無し
3 割片	-8	1-9	東沢北遺跡(245号)	3.8	2.1	1.0	6.7	砂質泥岩	(内面に使用痕あり)
4 割片	-9	1-10	東沢北遺跡(1号)	3.4	2.8	0.5	5.5	泥岩	(受熱、一端に使用痕あり)



第15図 縄文土器等 S=1:4

## 〔2〕古代の遺構と遺物

### 1. 竪穴式住居跡

#### 第1号住居跡 (Bc71) (第16図、写真10～12図)

〔遺構〕〔確認面〕Ⅲ層上面にて行う。掘込面は耕作等による擾乱にて不明(以下同様)

〔保存状況〕残存部壁高15cm内外、それより上部は耕作等による擾乱を受く(以下同様)

〔平面形・規模・カマド方位〕隅丸方形を呈し、東西約5.8m、南北5.0mの広さである。N35°Wの方向にカマドは向く。

〔堆積土〕黒褐色土中に明褐色シルト質が粒状に入り、炭化物及び土器片も混入している。

〔壁〕部分的には深さ20cm程の残存部も有る。東側程残っている。

〔床面〕中心部が固められている。南東・南西隅にて溝状土壌を切っている。

〔柱穴〕P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>が柱穴と思われるが断定出来ない。P<sub>1</sub>径30cm、深さ35cm、P<sub>2</sub>径25cm、深さ35cm、炭化物土師片混入、P<sub>3</sub>径55cm、深さ18cm、混入物P<sub>2</sub>に同じ。これ等の埋土は黒褐色土である。

〔カマド〕北壁中央東寄りに壁を削り込み構築、燃焼部焼土は焼け締っている。北東部に焼土混在の落込み、南西部のものは土師器も出土する。第1号土壌(Bc71)を煙道等で切る。

〔出土遺物〕(須恵器坏7点、甕3点、土師器坏2点、甕12点、砥石2点)(第17図、第4表)

〔須恵器〕：坏(完形図上復元した物6点、破片1点)

回転斫切底が目につく。回転糸切底も斫による削りや撫で調整している。器面の凹凸目立つ。

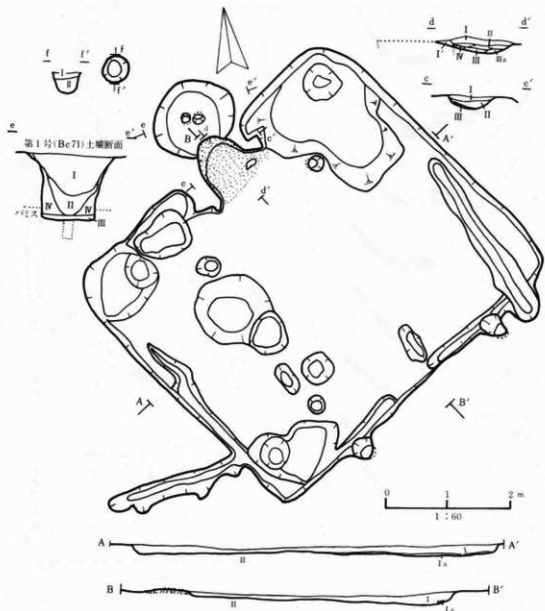
：甕(破片2点)(17図1、写真10図11～13) 1)には自然釉が垂れ、2)は表面に鈍い光沢を有する。破片断口部を砥石としているものは叩目を有する。

〔土師器〕：坏(17図9、写真10図6)回転斫削底と回転糸切底のそれぞれ1である。(1)の大き目の内黒処理したものは最後に横方向に磨いてある。

：甕(17図10～17、18図1～12、写真10～11図)大半が口縁部から胴部にかけてのものである。最大胴径については表中の底径の欄に( )にて示したものもある。床面出土のものは、図示したうちの3点である。焼土及び小土壌中より出土したものは埋設過程での変化の為か焼成胎土等不良である。

：その他の出土遺物(17図18～19、18図13～14)(砥石2、刀子1、石玉1)

砥石(凝灰岩を使用したものと前述の須恵片を利用したものであるが、前者は比較的大きく使用面も2面である。その1面はまだ平滑でなく刻線様の傷も有る。またこれは北西の小土壌より出土している。) 刀子(喫先より刀身の部分である。錆により形態等不明確である。)



A I . 黒色土 炭化物及び土師器片の混入がみられる。しまっているか特にQではやすの近くは固くなっている。

Ia . 黒色土 固くしまっている。

II . 明褐色土 固くためられている。

I' . 炭化物まじり(焼土も)明褐色土粘りあり

II' . シルトまじり明褐色土、オサオサ(土師器片混入)

e I . 黒色土に炭化物が混じる。

d I' . 黒色土、Iに比べてやややわらかい。

II . 焼土に明褐色土が若干混じる。土師器が混在。

III . 焼土に黄褐色土が混じる。固い。

IIIa . 焼土(赤)のみで固くしまっている。

IV . 明黄褐色土、非常に固くしまっている。

e I . 黒色土 しまり、ねばりあり、砂子が細かく上部にはBc71住のヤマト焼土の小アワキが入る。上部ほどしまる。

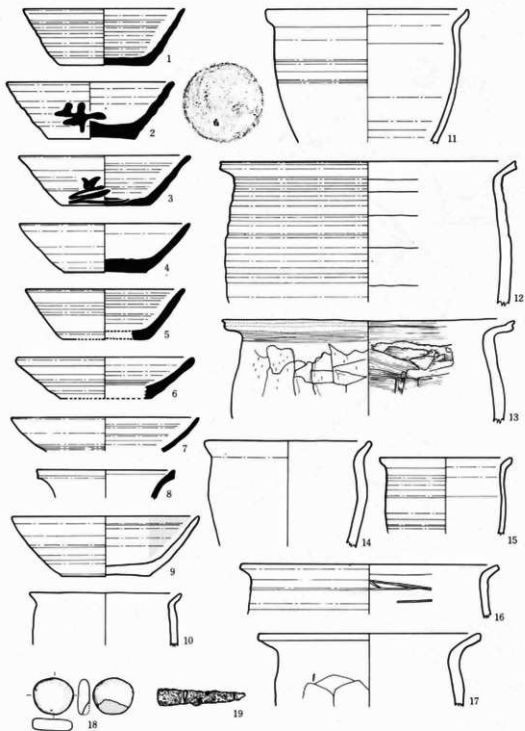
II . 明褐色土 黒色土とシルトの混在でしまりはない。粘りあり、炭化物等はみられない。

III . 明褐色土 しまりありつき固めた様な感じがある。砂子が細かくねばりあり、炭化物等は見られない。

IV . 明褐色土 シルトのほごり。

●柱穴の埋土は目録である。パリスを振り込んでいる。

第16図 第1号(Bc71)住居跡



第17図 第1号住・遺物 S=1:3





第2号住居跡 (Be104) (第20図、写真14図)

〔遺構〕〔保存状況〕残存部壁高20cm内外である。

〔平面形・規模・カマド方位〕隅丸の長方形を呈し長軸長5m、短軸長4.3mの広さである。長軸・カマドはほぼ北向きである。

〔堆積土〕上位の暗褐色土は幾分縮まり焼土ブロック炭化物等を少量含む。下位は黒褐色土であり、以上の2層に大別出来る。

〔壁〕西・南壁が多く残り、高さ約25cmである。後世の溝によって北西部が切られている。

〔床面〕下部堆積土程縮っていない。中央部に落込みがあり炭化物が極少量含まれる。北東部の落込み内部西側に焼土ブロックが多い。

〔柱穴〕床面上に検出出来ない。東壁外部に2つの柱穴様小土壌が認められる。この2小土壌の平面形は方形である。

〔カマド〕北壁中央寄りに新(西側)、旧(東側)の2つが検出された。古い方は壁面より更に地山を削り込み構築している。

〔遺物〕(須恵器坏1・甕1、土師器坏6・甕4) (第19図・写真14図・第5表)

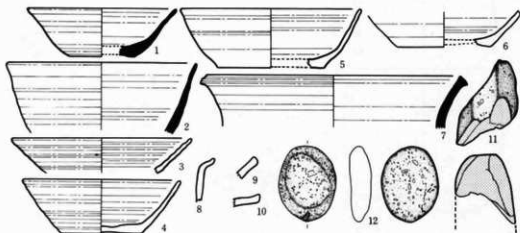
〔須恵器〕：坏 底部内面に沈線様の凹線が円形に周る。

：甕(同図7) 直口気味の口縁を有するものと思われる。

〔土師器〕：坏(19図3～6) 内黒様のものが大半でロクロ仕様である。2は須恵質である。

：甕(19図8～10) ロクロ調整で大半が複合口縁である。

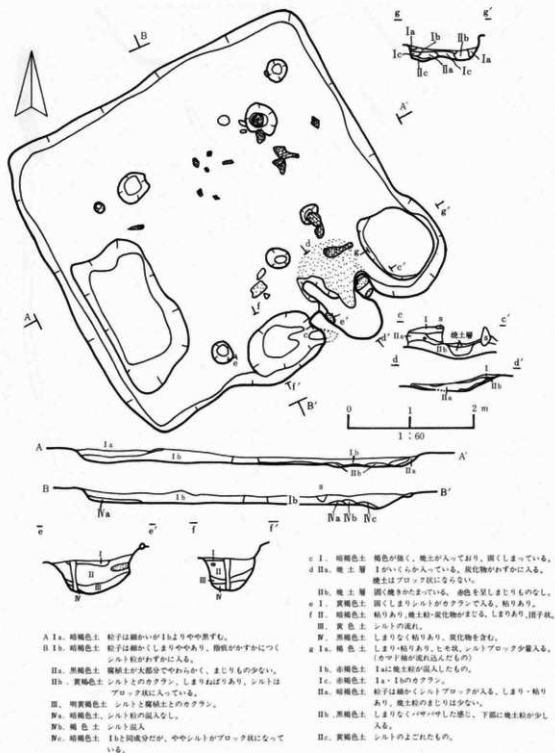
〔石製品〕：砥石(安山岩製欠損品) ；磨石(風化している。床面出土)



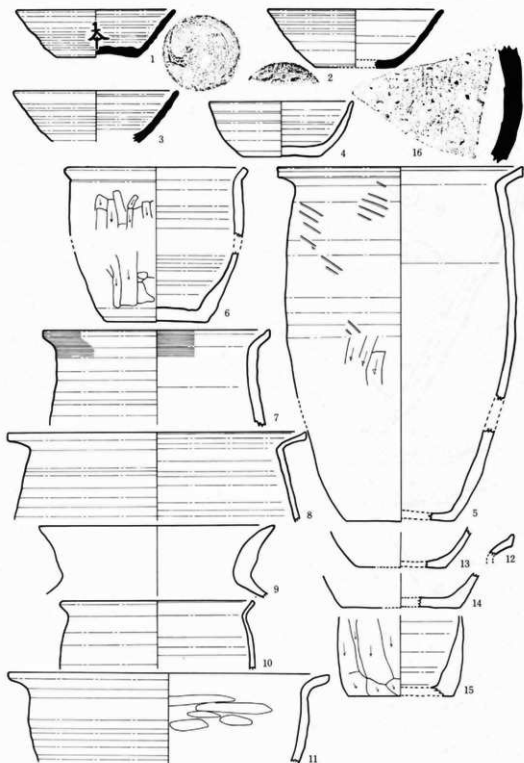
第19図 第2号住・遺物 S=1:3







第21図 第3号 (Bf56) 住居跡

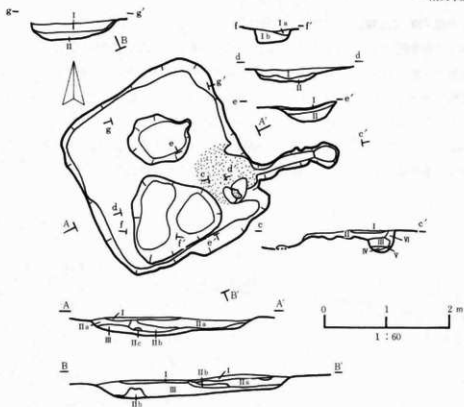


第22図 第3号住・遺物 S-1:3



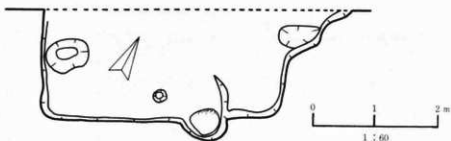






- A I. 暗褐色土 やや明るみをもちシルト粒が多く入っており、まじりがあるが粘りなし。  
 B IIa. 暗褐色土 やや暗くなる。  
 IIb. 黄褐色土 シルトがブロック状に入る。  
 IIc. 暗褐色土 しまりなくIIa層と同じである。  
 III. 黒褐色土 しまりなく粗らかい、シルト粒が少くなる。  
 (c) I. 黒褐色土 粘土ブロックなし。 Ⅳ. 黒褐色土 粘土ブロック層。  
 (e) II. 黒褐色土 粘土ブロックまじり。 V. 黒褐色土 粘土と炭化層。  
 III. 黒褐色土 粘土ブロックなし。 Ⅵ. 黒褐色土
- f I a. 粘土とシルトが混じり、やや粘りしまりあり。  
 I b. 粘土、バラバラしている。(赤褐色土)  
 g I. 黒褐色土 シルト上のカタラン。最上層は固くしまっている。粘りあり(団子)しまりゆるやか。シルトはブロック状に入っている。上部には粘土粒がまじる。上部が生活面と思われる。  
 II. 黄褐色土 シルトの流石込みと思われる。黒く汚れている。カマドに近くになると特にそうである。(遺物の出土は皆無。瓦面に粘土粒さえない)

第5号 (Bh06) 住居跡



第26図 第6号 (Cg42) 住居跡

第7号住居跡 (Da 224) (第27図、写真18図)

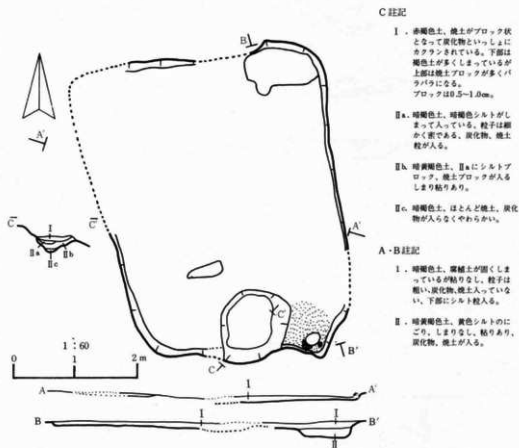
〔遺構〕〔確認面〕同前。掘込面は方形溝の構築に関する攪乱にて不明である。

〔保存状況・壁〕残存壁高17cm内外。南東より北西隅にかけ方形溝により切られている。

〔平面形・規模・カマド・方位〕隅丸の長方形で3.4×4.4m。長軸方向南東の隅に袖石らしきものと焼土が見られるのでこの方位とすればS12°Eを示す。

〔堆積土〕暗褐色土一層のみである。〔床面〕ほぼ水平である。南壁際に小土壌がある。

〔遺物〕〔須恵器〕坏 第8号住居跡埋土口縁片と接合した床面出土のものである。



第27図 第7号 (Da 224) 住居跡

第8号住居跡 (Df 245) (第29図、写真18図)

〔遺構〕〔保存状況・壁〕残存壁高15cm内外。ほぼ水平に残るが、壁は崩落している。

〔平面形・規模・カマド・方位〕隅丸方形一辺3.6mの広さ。両袖に土を用いたと思われるカマドの煙道が第5号住居跡の形状に似たものならば、焚口・煙出の関係も同様になろう。北向きの焚口付近には遺物が集中している。

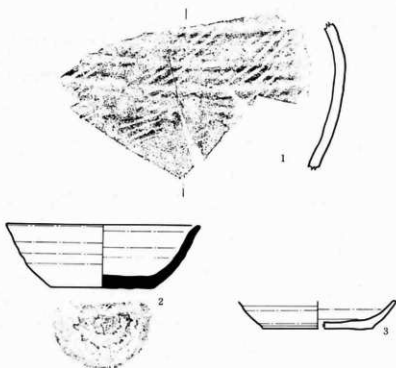
〔堆積土〕暗褐色土、黒褐色土であり自然流入である。

〔床面〕南側中央・カマド袖東側に小土壇がある。北東隅に落込みが見られる。

〔遺物〕(須恵器坏1点、土師器坏3点・甕13点) (第28・30・31図・写真18~20図・第9表)

〔須恵器〕：坏 第7号住居跡床面出土底部と接合した埋土口縁片である。

〔土師器〕：坏 ロクロ仕様で磨耗している。 ；甕 非ロクロとロクロ調整と半々である。篋削りと篋撫の調整技法が大半のものに見られるが、2点程体部に叩目痕を有する物もある。胎土は細礫等も含まれるが良好である。焼成状態は普通である。カマド附近に10点程集中して出土した。

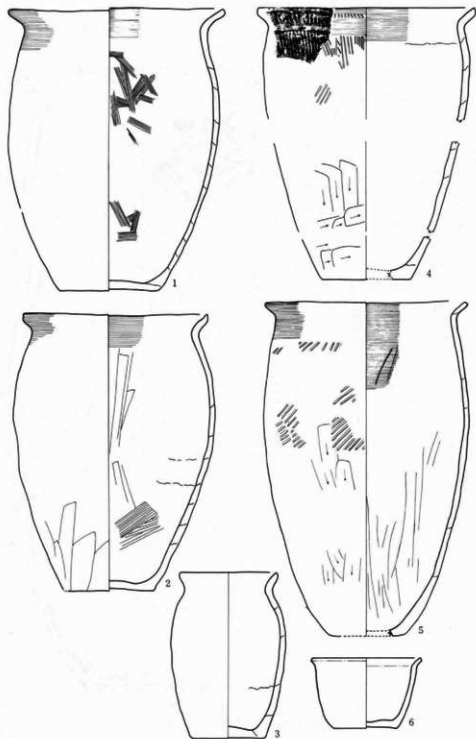


第28図 第8号住・遺物 S=1:3

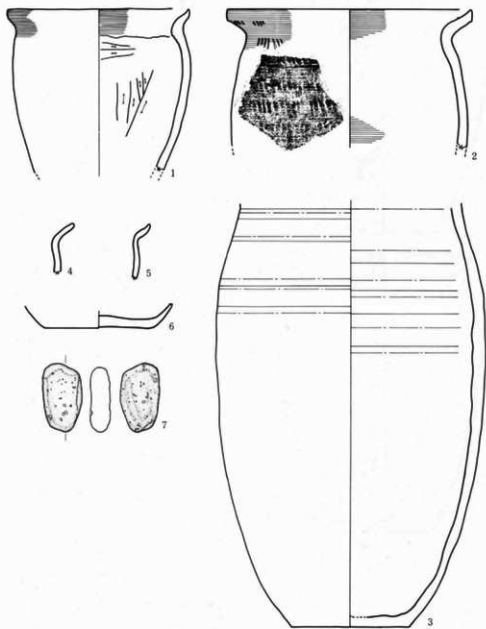


第29図 第8号 (D1245) 住居跡

第9表	図番号	写真番号	出土位置	寸法 cm		土質	土層	土質	土質	土質	土質	土質		備考	
				口径	高さ							内径	高さ		
第1号	1	20-1	焼土	4.0										丁次土	
	2	20-2	焼土	11.8										焼土	
	3	20-3	焼土											焼土	
	第2号	1	20-1	赤土	20.1	10.6	20.0	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土
		2	20-2	赤土	20.7	9.5	20.6	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土
		3	20-3	赤土	10.5	7.4	17.4	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土
		4	20-4	赤土	23.4	9.4	20.0	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土
		5	20-5	赤土	23.6	7.9	20.7	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土
		6	20-6	赤土	11.9	6.6	7.5	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土
		7	20-7	赤土	14.4	14.2		赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土
		8	20-8	赤土	19.6	18.0		赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土
		9	20-9	赤土		9.2	13.5	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土
		10	20-10	赤土				赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土
	11	20-11	赤土		17.2		赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	
12	20-12	赤土	21			赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土		
13	20-13	赤土		8.9		赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土		
14	20-14	赤土		7.5		赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土		



第30図 第8号住・遺物 S=1:4

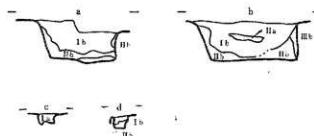


第31図 第8号住・遺物 S=1:3

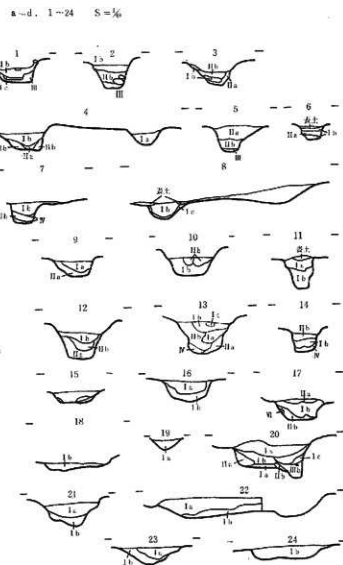
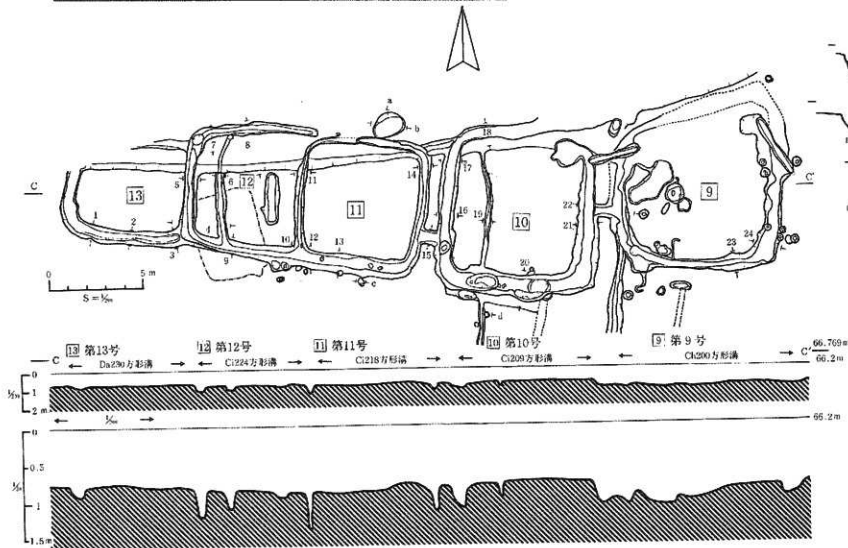


第10表

	第1号方形溝 平均値	第2号方形溝 平均値	第3号方形溝 平均値	第4号方形溝 平均値	第5号方形溝 平均値	第6号方形溝 平均値	第7号方形溝 平均値
東側市川	9.2	5.6	3.8	4.4	4.1	5.8	7.1
南側市川	11.0	5.1	6.9	7.7	7.6	7.2	7.2
溝中	1.2	0.5	0.4	1.0	0.9	0.5	0.6
溝深さ	0.33	0.22	0.44	0.45	0.53	0.57	0.19
写真番号	21-1	21-2	21-4	21-5	21-7	21-9	(22-2)



- I a. 暗褐色土 黄土、固くしまりシルト粒が少しまじる粘りなし。
- I b. 暗褐色土 しまり・粘りあり、乾燥すると大きに大きくクラックが  
入る、粘土は粗い。
- II a. 暗褐色土 色が濃く、固くしまり、粘りあり、シルト粒含まず。
- II b. 褐色土 粘土細く、粘りにクラックが入る。しまり粘りあり。
- III a. 黄褐色土 パミス混りの微晶土
- III b. 黄褐色土 パミスとシルトの層状土
- IV. 黄色シルト



第33図 第9号-13号方形溝



## 2 方形溝状遺構（第32・33図、第10表、写真21～26図）

検出された総数は13基、その内の第1号遺構は独立している。その他はそれぞれ東西に連なり、7基と5基の2つの連続遺構を作っている。

〔平面形・方位〕 第1号遺構より基本形として隅丸方形の溝が考えられ、2連続遺構もその発展形態として見る事が出来る。東側の7基連続した遺構は西より第8号・7号とあり第6～2号と延びる。第7～5号までと第4～2号では形状の違いが見られる。第7号と第6号ではほぼ方形の連続であるが追設と思われる第6号は幾分南北に長い方形である。この様に追設は正方形で行なわれず延長される様だが、第4号は台形状になされ第3号では正方形に近づいている。第2号については末調査部もあるが正方形に近い形であると思われ、第8号と第7号の様な連なり方と異なる事が考えられる。第9～13号の西側5基のうち、第9・10号は溝を共有せず繋ぎがあり第10と11号も同様である。第11～13号は西側に追設した形で延びている。第12号では更に小さい連続を有していた様であるが北部不明により断定出来ない。

〔規模〕 最大は第1号遺構の約9×9mで、最小は第8号の約6×4.5mである。

〔縦断面形〕 個々の溝断面はほぼ半長円形が検出されている。上部構造は削平を受けたものと思われる。第1号遺構の溝は東西方向にて東側底部が低くなっている。第2～8号では第6・5号・第5～4号のそれぞれの境の溝底が一番低くなっている。遺構図で示した通り第6と5号の境より南側に延びる溝があり前述した溝底の低さと関係を有すものと思われる。

〔溝堆積土〕 大半に於いて黒褐色土及び地山崩落土混土であるが、第7号の東溝及び第6号の南溝にては褐色土及び暗褐色土の卓越が見られる。この傾向は8号にても見られる。黒褐色土を欠く理由として、短期間の開口、または短期間内の埋設等が考えられる。

〔溝底表面〕 平滑ではなく凹凸があり、第1・9・10号の様独立した形のもの程、小土塊等が見られるが遺構に伴うものか否かについては不明である。

〔切合・新旧関係及び時代の推定〕 方形溝の追設という事で切り合い関係にないとも言えるが追設に関してまだ決定的な根拠を欠いている。一応追設と言う事で見れば、第7～2号では第2号が一番新しく追設された事になる。第11～13号では第13号が一番新しく追設された事になる。第7号と第8号にては追設は考えられず、新旧関係は不明である。第1号と2つの連続遺構の新旧も不明である。追設の新旧は各号の溝の同時存在を否定する材料とはならない。この事は断面形の項で述べた南側に伸びる溝との関係で同時存在の可能性も考えられるからである。また西側の第9～13号については、第9・10号及び11号間の溝が繋ぎとして機能していたとすればこれらも同時に存在した可能性もある。この事は北溝・南溝及び両端の東西の溝において一層強くなる。これらの時期については第12号方形溝が第7号住居跡を切っている事より考えられる事がある。第7号住居跡は出土遺物より平安時代前期（9C）以後とほぼ考えられるから

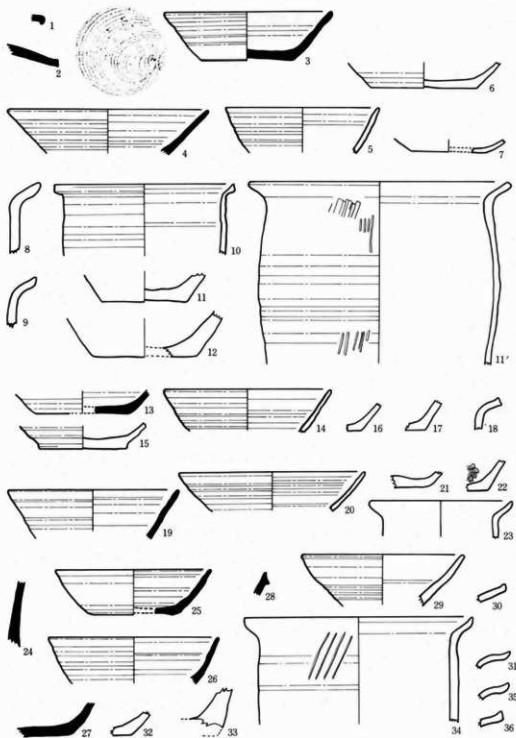
少くとも第11～13号方形溝はそれより新しい事になる。そして他の方形溝遺構も第11～13号方形溝と同時に存在していたならば同様に考えられる。第7号方形溝は遺物として、須恵器の坏で回転寛切調整有るもの、土師器坏で内黒・墨書のものを出土しているから、平安時代中期(10C)より新しい物である事を示す。第7号方形溝については第1号南北溝(Cd24)との切合関係もある。溝の機能の一要素としての水路の役割は新しく出来た南北溝により少くなり埋土層にも他との相異が生じた。南北溝とこれら方形溝の機能的共通性は少いようにも思える。

〔出土遺物〕遺構平場(削平平坦面)より出土のものに、第6号方形溝の須恵器甕片があるが、これは南西方向の第5号焼土遺構(Ch30)埋土出土や第2号住居跡カマド・第4号住居跡出土遺物と胎土技法等酷似しているのでそちらの所属とした。同遺構平場よりは須恵器坏3)が出土している。その他の出土物は溝埋土よりのものである。それら埋入された遺物の時代差はあろうがそれぞれの遺構の時期区分資料とは成し得なかった。第7号方形溝須恵器坏6)は第6号出土物と接合している。同7号遺構出土物で第3号住居跡、カマド焼土よりの土師器甕9)や床面出土の甕1)と接合している。

第9～13号方形溝出土遺物は関連として第7号住居跡及び円形土壇(第9号方形溝削平平場上にあり同時存在または方形に併う施設との判断も出来ないが)第2～4号焼土(Ch200)(同前)のもの等がある。第6号方形北溝埋土遺物の甕は胎土技法等酷似の(Ch30)遺構出土須恵器甕6)にまとめた。記録が方形溝の須恵器坏底部は第2号住居跡の口縁部と接合している。

時代差については須恵器坏の場合、第7号方形溝の3)のように底部寛撫で調整の物があるが他の大半は回転系切無調整である。土師器甕では、第5号方形溝3)・第7号方形溝1)の様なクロク調整でも目目を有する物があるが他はクロク調整が主である。

調査区画	調査年度	調査位置	調査内容	調査結果	土師器		須恵器		その他		備考
					種類	数量	種類	数量	種類	数量	
第1号	1978	11-13	第1号方形溝	埋土	須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
第2号	1978	11-13	第2号方形溝	埋土	須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
第3号	1978	11-13	第3号方形溝	埋土	須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏
					須恵器坏	1	須恵器坏	1	土師器坏	1	須恵器坏



第34図 方形溝等、遺物 S=1:3





不整形で深さは15cm程である。遺構北部は削平の為か境界は不明瞭である。一覧表に掲載の遺物は焼土より出土のものが多く、全体的には口縁部体部半々の出土である。焼土よりの出土物は磨耗片が多い。須恵器環にロクロ仕様・回転糸切無調整が確認されるものもある。須恵器・土師器環には墨書のものがあるが判読出来ない。土師器環3はCh200土壌出土物と接合する。

#### 第5号遺構 (Ch30) (第39図、第13・14表、写真7～9・26図)

調査地区Chi27線上の土壌を5-1号とし、西に5-2号、東に小土壌の集合した5-3号の集まりである。東西約2.4m、南北約1.5mの不整形円形状に広がる落込み中に前述の小土壌が検出された。他の遺構確認面と同面にて褐色土中に焼土粒を含む広がりがあり、その下には、焼土団塊をレンズ状に載せた黒色土層がある。この黒色土は下の焼土、シルト質土と更に下の黒色土とシルト質土の攪乱土がレンズ状に残存した上に載っている。

出土土器としては5-3号よりほぼ完形の土師器内環等3個体が出土している。その他にも多数の土器片が出土している。須恵器環には調整の痕跡が認められるものもある。土師器環の場合は、回転糸切り後篋削り調整した内黒処理のものが出土している。甕は須恵器・土師器とも出土し前述の方形溝状遺構や第2号住居跡出土物と接合するものもある。

他の遺物：小型石盤（直径17.0mm、厚さ5.5mm円形に近い隅丸方形、砂岩質で第1号住居跡にもこれより幾分大きい目の物が出土、用途その他未詳）<sup>(注1)</sup> 穂摘み具様鉄製品（長さ10.7cm、巾1.8cm、厚さ約3mm、目釘様残存部長7.0mm、目釘様残存部2心間8.6cm、反り身状に残存しているが刃部不明、目釘様残存部は錆蝕中にあり周りに炭化物の細片が残っていた。銹化面には木質部が貼付いた形で僅かに残存）<sup>(注1)</sup> 青森県教育委員会（碓ヶ岡村）古館遺跡（昭和54年度）他

#### 第6号遺構 (Ci33) (第39図、第12表、写真26図)

上端径45cm、中端を有し下端は窄み袋状を呈す6-1号は上部西部にて焼土を層状に挟んだ落込を有する。6-2号の平面形はほぼ円形で径は0.48m、断面形は鍋底状で深さは18cm程である。埋土は2層で下部は汚れた細粒土、その上部は黒褐色土である。出土遺物は少ない。土師器甕口縁部は頸部より上が窄まり複合部は内嚢の形になっている。

### 4. その他の遺構

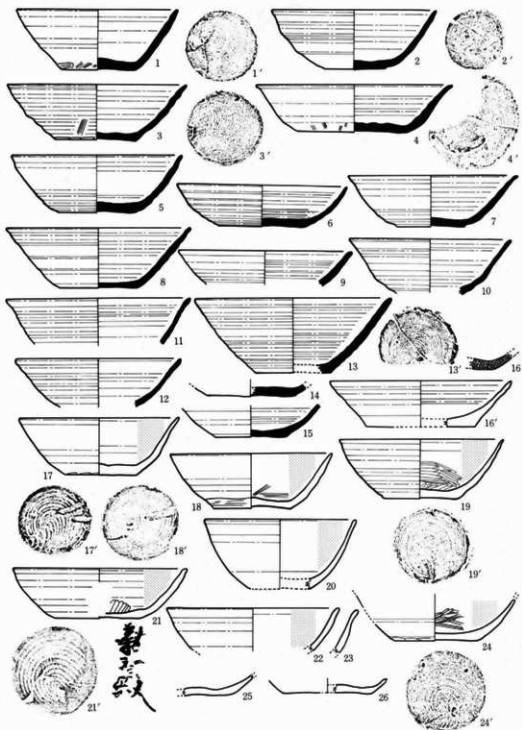
1) 溝遺構 (第3・32・33図、写真1図・21図・26図他)

#### 第1号溝 (Bc95)

調査地点B<sup>9</sup>/<sub>d</sub>96地点より南東方向B<sup>f</sup>/<sub>g</sub>107地区へ延び第2号住居跡の西壁及び南壁を切っている。埋土等の状況より近世のものと思われる。

#### 第2号溝 (Cd21)

調査地区Cb21より南のCh21に延びる溝で第7号方形溝を切っている。これらは時期差も大きくなく、同時存在とも考えられる。



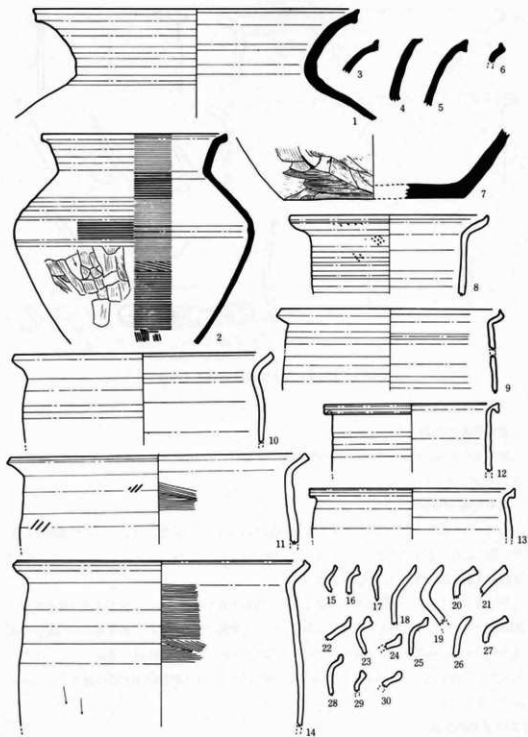
第36図 第5号 (Ch30) 焼土遺構関連遺物 S-1:3

— 南矢中遺跡 —

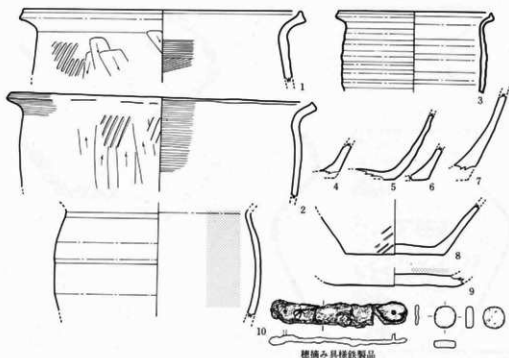
第13表	調査号	写本番号	出土地名	遺物番号	品名	材質	形状	用途	出所	出土	測定		備考		
											長さ	幅			
南	1	26-1	7-1	心骨	12.2	5.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	2	2-1	7-2	心骨	12.2	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	3	2-2	7-3	心骨	14.3	6.3	4.3	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	4	4-4	7-4	心骨	15.7	8.6	3.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	5	5-1	7-5	心骨	15.7	5.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	6	4-6	7-6	心骨	15.6	4.7	3.3	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	7	7-7	7-7	心骨	15.5	5.3	4.0	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	8	8-8	7-8	心骨	14.7	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	9	3-7	7-9	心骨	13.9	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	10	10-10	7-10	心骨	12.9	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	11	11-11	7-11	心骨	14.8	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	12	12-12	7-12	心骨	13.7	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	13	13-13	7-13	心骨	15.8	4.8	3.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	14	14-14	7-14	心骨	7.2	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	15	15-15	7-15	心骨	5.4	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
16	16-16	7-16	心骨	6.2	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨		
西	1	27-2	7-17	心骨	14.8	11.1	3.7	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	2	2-1	7-18	心骨	13.8	11.1	3.7	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	3	3-2	8-1	心骨	9.0	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	4	4-4	8-2	心骨	11.2	3.2	3.2	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	5	5-1	8-3	心骨	11.8	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	6	6-7	8-4	心骨	11.4	3.2	3.2	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	7	7-8	8-5	心骨	11.4	3.2	3.2	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	8	8-8	8-6	心骨	10.0	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	9	9-9	8-7	心骨	10.0	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	10	10-10	8-8	心骨	10.0	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	東	1	28-7	8-9	心骨	12.8	3.6	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨
		2	2-10	8-10	心骨	12.8	3.6	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨
		3	3-19	8-11	心骨	13.2	5.6	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨
		4	4-20	7-18	心骨	12.1	4.5	3.6	骨	短	中	中	中	骨	骨
		5	5-1	10-11	心骨	11.8	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨
6		6-12	心骨	13.7	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨		
7		7-13	心骨	14	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨		
8		28-24	8-12	心骨	8.3	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
9		9-15	心骨	5	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨		
10		10-16	心骨	5	3.2	3.2	骨	短	中	中	中	骨	骨		
北		1	27-19	8-13	心骨	20.8	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨
		2	2-17	8-14	心骨	20.3	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨
		3	3-15	8-15	心骨	18.0	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨
		4	4-12	8-16	心骨	18.0	5.2	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨
		5	5-18	8-17	心骨	13.0	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨
	6	6-13	8-18	心骨	16.4	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	7	7-14	8-19	心骨	15.7	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	8	8-17	8-20	心骨	16.4	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	9	9-11	8-21	心骨	23.0	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	10	10-17	8-22	心骨	18.6	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	11	11-19	8-23	心骨	2	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	12	12-19	8-24	心骨	22.7	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	13	13-15	8-25	心骨	3	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	14	14-22	8-26	心骨	15.0	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
	15	15-21	8-27	心骨	18.8	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨	
16	16-23	8-28	心骨	8	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨	骨		

第14表	調査号	写本番号	出土地名	遺物番号	品名	材質	形状	用途	出所	出土	測定		備考
											長さ	幅	
南	17	27-24	8-17	心骨	17.7	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨
	18	18-18	8-18	心骨	18.0	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨
	19	19-26	8-19	心骨	14.0	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨
	20	20-11	8-20	心骨	12.6	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨
	21	21-26	8-21	心骨	16.0	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨
	22	22-19	8-22	心骨	17.4	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨
	23	23-10	8-23	心骨	17.8	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨
	24	24-4	8-24	心骨	8.7	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨
	25	25-1	8-25	心骨	5.2	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨
	26	26-1	8-26	心骨	5.2	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨
	27	27-6	8-27	心骨	6.2	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨
	28	28-7	8-28	心骨	7.0	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨
	29	29-8	8-29	心骨	7.8	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨
	30	30-3	8-30	心骨	3.6	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨
	31	31-20	8-31	心骨	103.3	4.8	4.8	骨	短	中	中	中	骨





第37図 第5号 (Ch30) 焼土遺構出土遺物 S-1 : 3



第38図 第5号 (Ch30) 焼土遺構出土遺物 S-1:3

### 第3号溝 (Cd21-1)

調査地点 B<sub>4</sub>/e20付近より東北東のCa 59付近へ延び、Ce 07付近にて第1号方形溝と接するが、前後関係は不明である。

### 第4号溝 (Da 209)

第11号方形溝と切合い関係にある。北側は削平により不明、南側については方形溝底より高位に底がある。第2号溝と同機能のものか不明である。

### 2)円形土壇 (Ch 200) (第39図・第1表)

第9号方形溝平場上で既述の焼土遺構を切って構築されたものである。底部は幾分窄まるが、断面形は方形に近く、円筒状に掘込まれている。北東隅に水の浸出口があり井戸等の機能も考えられるが底中央の更に掘込まれた小穴との関係が不明にて可能性を述べるに止める。この小穴の深さは約40cmで、東側にも深さ約10cmの小穴がある。出土遺物に須恵器口縁片や、土師器両黒坏片等がある。

### [3]その他の遺構

#### 第1不定形土壇群 (Ba 128地区)

縄文晩期片出土土壇周辺である。形状は不整いで配列の規則性も不明確である。

東拉張不定形土塊群

+

Ba128

+

Ba134

+

Bc128

+

Bc134

第2土塊  
(Bi 86)

+

「Bj 83」

+

「Bj 89」

第5・6号焼土遺構

第5号

5-1

5-2

5-3

环出土 1個体

环出土 3個体

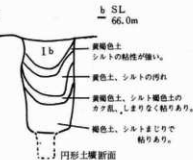
+

(Ci 30)

+

(Ci 24)

第6号  
No. 2, No. 1



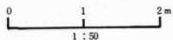
第2号 (Ch200 ②)  
焼土遺構

円形 (Ch200)  
土塊

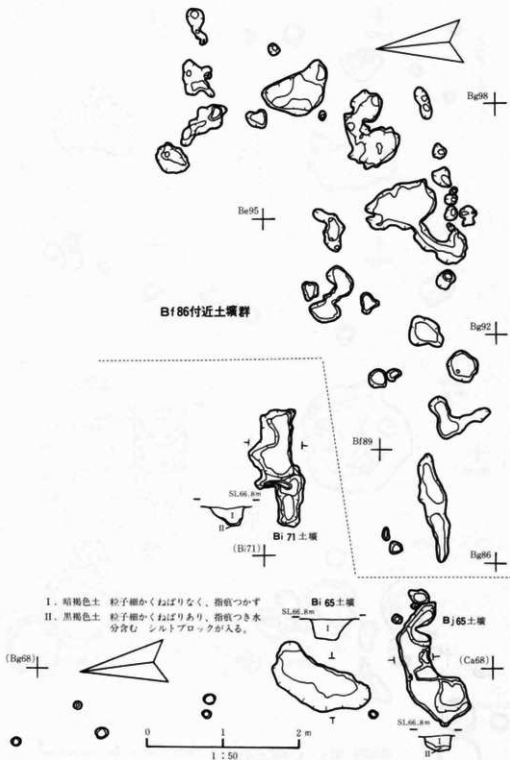
第3号 (Ch200 ①)  
焼土遺構

+

(Cj 48)



第39図 第5・6号焼土遺構等



Bi 86付近土壌群

- I. 暗褐色土 粒子細かくねばりなく、指痕つかず
- II. 黒褐色土 粒子細かくねばりあり、指痕つき水分含む シルトブロックが入る。

第40図 その他の土壌

**第2土壌 (Bh83)**

平面形は不整円で底面もほぼ相似である。深さは約47cm、底面に小穴が認められる。

**第3土壌 (Bi 65)**

北東方向に長い不整形の落込みで1.4×0.55m、深さ28cm、埋土は暗褐色細粒土である。

**第4土壌 (Bi 71)**

小土壌が1.5×0.5mの範囲で東西に3基連らなる。前後関係は不明である。断面(南北)の1例は片掘り状で底面に黒褐色土層が薄く存在する。深さは約22cmである。

**第5土壌 (Bj 65)**

東西に延びる1.8×0.4m、深さ0.2mの規模の不整形より小穴の連続等も考えられるが、性格等不明である。埋土は第4土壌よりⅡ層が厚い。

**第6土壌群 (Bf 86付近)**

調査地 Be95付近へ広がる浅い落込みを有する群であるが、それぞれの関連は不明である。出土遺物はない。

**IV まとめ及び今後の問題****1. 遺構とその出土遺物の年代について**

本調査地検出遺構の内、竪穴住居跡、方形溝遺構についてその概要とその年代を考察する。

**(1) 竪穴住居跡**

既述の8棟のおもな点について第15表にまとめた。

(第15表)	東西 m	南北 m	壁高 cm	キワトコ石	礎石等	柱石	階梯	出土遺物等
1号 Be 71a	5.0	5.0	15	N20°W	有り	4	有	磁石(北西内)、刀子(床前)、石製(壁)、竪穴跡(内側へテ目)様
2号 Be 98a	4.3	5.0	21	S	無	無	無	同定跡(内側)跡、土製(目)、磁石
3号 Bf 65a	5.2	5.0	15	S22°E	無	4	無	同定跡(東西)、土製跡(壁)、鉄製品
4号 Bg 98a	4.0	4.0	15	E	無	無	無	土製跡、石製跡(壁)、鉄製品
5号 Bh 83a	2.4	2.6	16	N45°W	有	無	無	同定跡(壁)、磁石、小石(内側)
6号 Cg 42a	3.6	不明	5	不明	不明	不明	無	土製跡のみ
7号 Da 224a	3.4	4.4	17	S12°E	有	無	無	同定跡、瓦片(床、第6号住居跡と関係)
8号 Df 245a	3.6	3.6	15	N15°W	有	1	無	土製、壁(土製跡キワトコ付)、磁石

〔遺構〕〔保存状況〕壁高15cm内外の残存にて遺構はもとより遺物の共存関係を明確にするにも困難点が多い。

〔平面形・規模・カマド方位〕方形溝遺構に切られている第7号住居跡を除いてほぼ隅丸の方形である。大きさは時期等を抜きにして第1号(Be71)・3号(Bf65)住居跡と第2号(Be107)・4号(Bg98)・6号(Cg42)・8号(Df245)住居跡と第5号(Bh06)住居跡の3群に分けられる。カマド方位は第1号(Be71)・2号(Be104)・8号(Df245)住居跡の北方向と第3号(Bf56)～7号(Da224)住居跡の東または南方向がある。

〔堆積土〕 焼土ブロックや炭化物粒を含む例もあるが大半は自然流入堆積土である。

〔壁〕 保存状況の項でも記した通り、上部以上の構造を知る手がかりは少ない。施設との関係で第2号～4号住居跡の様に外側へ幾分の張り出しをもつ物もある。

〔床面〕 第1号(Bc71)・第3号(Bf56)住居跡の様に中央部が固く締っているものはある。

〔柱穴〕 第1号・第3号住居跡に4本、他に第8号(Df245)住居跡の1本が認められる。第1号(Bc71)住居跡の場合は2本が南壁際に設けられてある。

〔カマド〕 石を使用して構築していると考えられる第3号(Bf56)・7号(Da224)・8号(Df245)住居跡がある。地山を削り出したと思われる第1号(Bc71)・第2号(Be104)住居跡があるが、第2号住居跡は2基のカマドを有する。

〔貯蔵穴等〕 カマド左右に設けられており、後述の遺物を伴出する。

〔重複切合い等〕 第1号(Bc71)住居跡か第1号(Bc71)円形土壇及び第2号(Bd77)溝状遺構を切っている。第2号(Be107)住居跡は第1号(Bc95)溝にて切られている。第6号(Da224)住居跡は方形溝遺構に切られている。

〔出土遺物〕 〔須恵器〕： 坏 甕切のものは第1号(Bc71)住居跡床面出土(胎土分析資料)、第3号(Bf56)住居跡小土壇出土、第7号(Da224)住居跡床面出土底(第8号(Df245)住居跡埋土出土口縁部と接合)等である。回転糸切離し無調整のものは第3号(Bf56)住居跡床面出土。赤焼き土器を含めると第5号(Bh06)住居跡床面出土である。

： 甕 口縁部は第1号(Bc71)・2号(Be104)・4号(Bg98)住居跡に出土している。第8号(Df245)住居跡には須恵片を欠く。

〔土師器〕： 坏 甕による整形・調整を受け内黒処理を施こされているものは第1号(Bc71)住居跡出土。内黒処理の認め難いもの第3号(Bf65)・4号(Bg98)・8号(Df245)住居跡である。

： 甕 ロクロ不使用のものは第1号(Bc71)住居跡焼土及びカマド出土・第3号(Bf65)住居跡床面小土壇出土・第8号(Df245)住居跡カマド出土である。叩きを有するもの第2号(Be104)住居跡焼土出土、3号(Bf56)住居跡床面出土、4号(Bg98)住居跡南小土壇出土、8号(Df245)住居跡カマド出土等である。

： その他 第5号(Bh06)住居跡小土壇より内外面黒色処理の土師器小壺(猫谷地1号墳中より高さ3.8cm、口径3.2cm、最大腹径4.5cmの類似物がある。)が出土している。第1号(Bc71)住居跡よりは刀子及び砥石・石玉、2号(Be104)住居跡に砥石、4号(Bg98)住居跡には石製紡錘車出土している。

【時期及び年代その他】遺構の形態及び出土遺物のその両者の組合せによる時期的特徴をまとめあげた編年資料は巻末に示す通りであるが、当遺跡の竪穴式住居跡に対応させて見た。(遺物同定の統一性に難が有り今後の課題ともなるが) 第1号(Bc71)住居跡、8号(Df245)住居跡はⅤ群(平安時代初期～前半)に相当する。第6号住居跡及び第7号(Da224)住居跡を除いた残りはⅥ群(平安時代前期～後期)に相当する。第5号(Bh06)住居跡は出土遺物の特異性をも考慮する必要がある。第7号(Da224)住居跡床面出土の須恵器坏は莚切無調でⅤ群相当のものであるが第8号(Df245)住居跡埋土出土口縁部と接合する事等より前記の結果の様になった。<sup>14</sup>C測定を行なった第3号住居跡出土の炭化材については(資料番号N-3860-13-13)(1290±60yBP(1250±60yBP))という結果を得ている。資料の流れ込み等は考慮する必要はないが、測定結果よりのAC660±60yはⅥ群10世紀代と約300～180年の差を示す。今後の類例を待ちたい。なお、材質はナラ及びクリで混合の形で測定を行った。

## (2) 方形溝遺構について

本遺構の類例、性格、時期等についてだけ記する。

紫波町上平沢新田遺跡、江刺市宮地遺跡、二戸市上里遺跡、紫波町宮手遺跡、都南村湯沢遺跡等に見られる。形態的には連続しているという点で前二者は良く似ている。上里遺跡の場合は独立したものでありこれも類似している。また上里遺跡は円形周溝との兼ねあいで墓址との性格が考えられようが上部構造を欠く事より墓址との断定はさけている。時期的な点では、これら5遺跡とも、平安時代とし、上平沢新田遺跡にては中期(9世紀中半以降～10世紀代)以降、宮地にては平安時代初期以降、上里遺跡では中期(9世紀～10世紀)としている。当遺跡において性格を明示する材料は類例と同様皆無と言ってよいが、西方段丘延長上に鶴田古墳、南西方向に見分森古墳(平安初期造営)があり、幾分なりとも墓址との関連の可能性が出て来る。方形周溝墓は古くは弥生時代に見られる。当遺跡の本方形溝遺構は、切合い関係等よりⅥ群相当(平安時代後半)期以降としたい。

## 2. 遺跡の年代等

本遺跡の年代については、縄文時代早期末前期初頭より平安時代まで、途中で長い空白を有しながらも時を経過して来た。遺構よりは平安時代が最大の生活空間を占めた事がわかれる。遺跡としては地形の延長方向への広がりと考えられ、東西に範囲は広がる。

本報告に関しては色々な未解決部分、分析不足の点があり、今後の類例研究の成果に期待したい。

《参考文献》

(自然科学関係)

- 中川 ほか 北上川中流沿岸の第四系及び地形(地史) 地質学雑誌第69巻812号 1963.5  
日本地質学会第80年総会見学旅行2資料 北上川低地帯の鮮新統第四系地形 1973
- 佐藤二郎 考古学のための地質学—岩手県文化課における講演資料— 1978.8
- 町田 洋 大山城 岩手県(財)埋蔵文化財センター主催講演会資料 1979.6  
考古学と自然科学 第1号—第10号
- 経済企画庁 土地分類基本調査 水沢(1:5万) 国土調査 1963
- 岩手県農政部北上山系開発室 北上山系開発地域土地分類基本調査 北上(1:5万) 国土調査 1978
- 北上市教育委員会 北上市教育センター理科講座資料
- (縄文時代関係)
- 今村啓爾 縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較 物質文化No.27
- 宮沢・今井 縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題—いわゆる落し穴について— 1976  
調査研究集録第1集 港北ニュータウン埋蔵文化財調査班
- 霧ヶ丘調査団 霧ヶ丘 1973
- 岩手県教委・日本道路公団 岩手県文化財調査報告書第31集 本調査関連報告書Ⅰ— 1979
- (財)埋文センター 岩手県(財)埋文センター報告書第2集 都南村湯沢遺跡 1977
- (古代関係)
- 水沢市教育委員会 岩手県水沢市佐倉河 胆沢城跡一昭和49～54年度発掘調査概報—
- 多賀城跡調査研究所 宮城県多賀城跡調査研究年報一昭和47～50年度発掘調査概報—
- 福島県考古学会 福島県の土師器編年(第18回福島県考古学大会シンポジウム資料) 1976
- 桑原・岡田 多賀城周辺における古代埴形土器の変遷 研究紀要Ⅰ 多賀城研究所
- 岩手ビルKK・都南村教育委員会 百日本遺跡発掘調査報告書(岩手県都南村) 1979
- 県教委・国鉄 岩手県文化財調査報告書第48集 東北新幹線関係報告書Ⅳ宮地遺跡 1980
- 県教委・日本道路公団 \* 第32集 本調査関連報告書Ⅱ 1979
- \* \* 第52集 \* Ⅲ「上平沢新田」 1980
- 渡辺泰伸 東北古墳時代須恵器の様相と編年(試論) 考古学雑誌 第65巻第4号 1980
- 青森県教育委員会 青森県埋蔵文化財調査報告書第52集 大平遺跡(東北自動車道関連) 1979
- \* \* 第54集 錠ヶ岡村古館遺跡(東北自動車道関連) 1980
- 県土木部・(財)埋文センター 岩手県(財)埋文センター報告書第8集 力石Ⅱ遺跡 1979
- \* \* 第9集 54年度略報 上里遺跡 1980
- \* \* 第13集 繁Ⅲ遺跡 建設省御所ダム事務所
- 水沢市史編纂委員会 「水沢市史Ⅰ 原始—古代」 水沢史刊行会 1974
- 本堂寿一 「梅堂寺伝座主坊跡緊急発掘調査報告書一付、寺院跡出土土器の再整理とその考察—北上市立博物館研究報告第3号 1980
- 草月・玉川 長沼古墳(岩手県和賀町) 和賀町教育委員会 1974
- 広島県教育委員会((財)埋文センター) 恵下遺跡 1980
- 神奈川県教育委員会 神奈川県埋蔵文化財調査報告17—新羽大竹遺跡— 1980
- 福島県教育委員会・(財)県文化センター 福島県文化財調査報告第84集 母畑地区Ⅳ 1980
- 石田茂作(監) 新版仏教考古学講座第7巻 墳墓 雄山閣 1975
- 斎藤 忠 墳墓(日本史小百科) 近藤出版社 1978



西 田 遺 跡

前 谷 地 遺 跡

## 西 田 遺 跡

1. 遺 跡 名 西田遺跡 (略号ND74)
2. 所 在 地 水沢市福原字西田
3. 調 査 主 体 岩手県教育委員会・日本道路公団
4. 調 査 担 当 岩手県教育委員会
5. 調 査 期 間 昭和50年6月26日～6月27日
6. 遺跡対象面積 2,500㎡
7. 発掘調査面積 2,450㎡
8. 調 査 概 要

本遺跡推定地は、福原段丘面に存在し、表面調査において土師器片を採集している。調査は表土剥ぎをブルをもって行なったが表土中より土師器細片が、数点出土したのみで、遺構の検出はできなかった。

## 前 谷 地 遺 跡

1. 遺 跡 名 前谷地遺跡 (略号MY74)
2. 所 在 地 水沢市福原字前谷地
3. 調 査 主 体 岩手県教育委員会・日本道路公団
4. 調 査 担 当 岩手県教育委員会
5. 調 査 期 間 昭和50年6月26日～6月27日
6. 遺跡対象面積 1,200㎡
7. 発掘調査面積 1,175㎡
8. 調 査 概 要

本遺跡推定地は、福原段丘に存在し、表面調査において土師器片を採集しておる。表土剥ぎをブルをもって行なったが遺構、遺物の検出は出来なかった。



# 袖谷地遺跡

1. 遺跡名 袖谷地遺跡 (略号SYT74)
2. 所在地 岩手県水沢市福原字袖谷地
3. 調査主体 岩手県教育委員会・日本道路公団
4. 調査担当 岩手県教育委員会
5. 調査期間 昭和49年10月9日～12月4日
6. 調査対象面積 4790㎡
7. 発掘調査面積 4200㎡

## I 位置と立地 (第1図)

本遺跡は東北本線水沢駅南西方約5.0kmの中位段丘最下段(胆沢段丘福原面)の南縁近くにあたり、東西に長く延びる段丘平坦面に立地している。標高は約68mで現状は宅地・畑・屋敷林であった。調査は段丘平坦面を南北に横断する形で行なわれた。周辺の遺跡としては、西に合野遺跡(縄文前・晩期)東に公園遺跡(縄文・中期)南西の方向では見分森遺跡等があり、古墳、縄文時代のものである。本調査に関連するものは北方に、西田、前谷地の遺跡がある。

## II 遺物包含層

1〔基本層序〕右記として、現状における土層断面の模式図を示した。詳細については第3図Bh77地点の深掘り断面図を参照されたい。Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層は火山噴出堆積物で、黒沢尻火山灰と村崎野浮石と呼ばれている。Ⅵ層は礫層である。歴史時代に於ける火山噴出物は秋田焼山や十和田火山に由来すると思われるものが遺構埋土中に若干見られる。供給源の特定は色々と試みられている。



第2図 基本層序模式図



第1図 袖谷地遺跡・地形図及びグリッド配置図

